EMA CASTLE SITE

江馬氏城館跡

―下館跡発掘調査報告書Ⅰ―

神岡町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1995年3月

巻首図版 1　江馬氏下館跡全景写真

巻首図版 2　西堀完掘写真（北から）

EMA CASTLE SITE

江馬氏城館跡

—下館跡発掘調査報告書Ⅰ—

神岡町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1995年3月

序

神岡町には市街地の東側に，殿，殿本町，江馬町という町名が，殿地区に井の下，馬場西，沖野，東町地区に城の内，城下などの土地名があります。このことからも，この広い地域全体が江馬氏代々が築いてきた城のしきりだったことが伺えます。

省みれば，昭和48年から53年にかけて遺構確認のための発掘調査が行なわれ，昭和54年３月に「江馬氏城館跡発掘調査概報」によって，その内容がほぼ明らかにされました。つまり，庭園遺構や建物跡など，館の内部構造を知ることのできる多くの事実が明らかになりました。その結果，中世の武士の館の構造を知る日本での屈指の例として学会で注目され，当時としては異例の早さで国の史跡指定となったのでした。

今回再び，江馬氏下館跡の保護及び整備についての気運が高まり，町起こしの見地からもと前向きに調査活動が進展してきたことは誠に喜ばしいことです。今回の調査では，地元の皆様のご理解をいただき文化庁，岐阜県教育委員会，富山大学考古学研究室をはじめ，関連する専門諸機関の先生方のご指導を得て，館の外側の堀跡の検出を中心に約1,600㎡の発掘調査と，その成果の報告を得るに到りました。何といっても特筆すべきことは，館の西側の堀が，中世館跡の中では日本最大級の「薬研堀」であったことです。

町では，今後も堀の周辺部など更に発掘調査する予定であり，この調査の成果を将来は，居館復元や史跡公園としての整備などによって，貴重な中世の史跡の保存と活用を考え町起こしにつなげて行く所存です。

歴史はあくまでも事実の物証を根拠に説明解明されねばなりません。出土遺物から，年代や周辺の遺跡との関連性などの追究により確かな中世の江馬氏とその周辺の実像が明らかにされてくることは嬉しいことです。

最後になりましたが，本調査とまとめに際し，終始格別なご尽力を賜わりました皆様に感謝すると共に，各種専門分野でお力添え賜りました方々のお陰で本報告書の刊行となりましたことを心から厚くお礼申し上げます。

平成７年３月　　神岡町教育長　堀本　昌義

例　　言

1　本書は，岐阜県神岡町教育委員会が平成６年度に国庫補助事業として実施した神岡町大字殿所在国指定史跡江馬氏城館跡下館跡発掘調査報告書である。

2　調査に際しては，文化庁記念物課，岐阜県教育委員会文化課，および後述する江馬氏城館跡調査整備委員会の指導協力を得て，神岡町が富山大学人文学部考古学研究室(代表：前川 要 助教授)に委託して調査を実施した。

3　遺物の復原・実測，図面の整理・製図は調査参加者全員が協力して行なった。

4　本文は前川 要(富山大学人文学部助教授)，長谷川幸志，新本真之(富山大学人文科学研究科学生)，中田書矢，大平愛子，大泰司　統，武田昌明，石内詩保，稲石純子，岩崎誉尋，内田亜紀子，大川　進，大平奈央子，景山和也，近藤美紀，匂坂友秋，塩田明弘，滝　寿美代，坪田聡子，古沢亜希子，堀内大介，三林健一，米出敬子，芳賀万里子(富山大学人文学部考古学研究室学生)が分担して執筆し，前川・中田・大平が記述内容の統一をはかった。また，地籍図から見た周辺の景観について小島道裕氏(国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授)，周辺城館の様相について千田嘉博氏(国立歴史民俗博物館考古研究部助手)，遺跡探査の成果について酒井英男氏(富山大学理学部助教授)，田中保士氏(田中地質コンサルタント社長)，花粉分析を含めた自然環境について辻　誠一郎氏(大阪市立大学理学部講師)にお願いした。なお，執筆分担は目次に記し，必要な場合は文末にも付した。

5　参考文献は本文末にまとめ，通し番号を付した。遺物番号は通し番号を付し，実測図・計測表と写真番号を統一した。

6　図版中の土層の色調については，『新版・標準土色帳』(農林水産技術会議事務局1976年)を使用した。

7　編集は前川要の指導のもとに中田書矢と大平愛子が協力して行い，大平奈央子，稲石純子，近藤，坪田，古沢がこれを助けた。

8　レーダー探査については，田中地質コンサルタントに，基準点測量については，大前測量に委託した。なお，位置の記載は平面直角座標系７による。記載した数値は，X，Y，ともm単位で水準はT.P.である。館跡の空中写真は，富山大学人文学部考古学研究室に委託した。

9　本書の作成に際して，坂井秀弥(文化庁記念物課)，小野正敏(国立歴史民俗博物館考古研究部助教授)，矢田俊文(新潟大学人文学部助教授)，大熊厚志(岐阜県教育委員会文化課主任)，中井　均(米原町教育委員会)，宮田進一(富山県埋蔵文化財センター)，藤

澤良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)，都竹清隆(神岡町社会福祉協議会事務局長)，佐伯哲也(富山の城を考える会)をはじめとする方々からご協力および貴重なご教示を得た。さらに，調査に際して，宮前　稔(大字殿区長)，田家幸夫(江馬遺跡保存会長)，堀　進，田中幸一，吉中公男，川上定義，沖野好夫，宮前　稔，保木　薫，清水邦宏，川上真人，新家康孝，新家久雄，中田康孝，沖野　寛，岩垣達蔵，伊勢米蔵(殿地区地権者)をはじめとする地元の方々にご協力戴いた。神岡鉱業株式会社から給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。

10　出土遺物・記録書類は，神岡町教育委員会で保管・公開している。

11　航空写真の掲載については，国土地理院より掲載許可を戴いた。記して厚く感謝申し上げる。

12　第4章第4節及び付章第1節は，1994年度文部省科学研究費補助金受給研究(総合研究A，重点領域研究，奨励研究A，研究代表者：前川　要)の成果の一部である。

13　遺構表示記号は奈良国立文化財研究所の用例にほぼ従い，以下の記号を用いた。
SB：建物，SD：溝，SK：土壙，SA：柵，SP：穴・柱穴，SX：不明遺構
また遺構・遺物図版中のスクリーントーンが示すものは次のとおりである。

遺構図版

地山1

地山2

館内部の整地土

攪乱

遺物図版

タール煤

鉄断面

目　　次

頁

第１章　調査の概要 …… 1
1　調査の目的 …… 前川　要 …… 1
2　事業の実施 …… 1
3　調査に至る経緯 …… 2
4　下館跡の現状 …… 3
5　調査日誌 …… 大平奈央子 …… 5

第２章　江馬氏下館の歴史的環境と立地 …… 大平愛子 …… 11
1　歴史的環境 …… 11
2　遺跡の立地 …… 14
3　周辺の属城跡 …… 17

第３章　江馬氏下館跡発掘調査の成果 …… 20
1　調査前の知見 …… 中田書矢 …… 20
2　調査の方法 …… 大川　進 …… 24
3　堀跡の発掘調査 …… 25
（ａ）基本層序 …… 中田書矢・米出敬子 …… 25
（ｂ）遺　構 …… 30
北堀地区 …… 三林健一・岩崎誉尋 …… 30
南堀地区 …… 大平奈央子 …… 31
西堀地区 …… 堀内大介・内田亜紀子 …… 36
（ｃ）遺　物 …… 39
北堀地区 …… 稲石純子 …… 39
南堀地区 …… 石内詩保・匂坂友秋
景山和也・近藤美紀 …… 41
西堀地区 …… 古沢亜希子 …… 52
4　館内部の発掘調査 …… 54
（ａ）基本層序 …… 塩田明弘・三林健一 …… 54
（ｂ）遺　構 …… 塩田明弘・芳賀万里子 …… 56
（ｃ）遺　物 …… 滝 寿美代・坪田聡子 …… 61

5　館外部の発掘調査 …… 米出敬子 …… 69
6　小　　結 …… 70
（a）遺　構 …… 大平愛子 …… 70
（b）遺　物 …… 72
縄　紋 …… 長谷川幸志・大泰司 統 …… 72
中　世 …… 中田書矢・石内詩保
滝 寿美代・近藤美紀 …… 75
近　世 …… 新本真之 …… 92

第4章　考　察 …… 93
1　出土遺物の様相 …… 中田書矢・近藤美紀 …… 93
2　地籍図及び絵図による検討 …… 小島道裕 …… 122
3　江馬氏の山城 …… 千田嘉博 …… 130
4　結　　語 …… 前川　要 …… 143

付　章　自然科学的調査の成果 …… 149
1　江馬氏下館における電磁気探査とレーダー探査
酒井英男・田中保士・武田昌明 …… 151
ABSTRACT …… 164
2　江馬氏下館の薬研堀内堆積物から得られた古環境資料
辻 誠一郎・植田弥生 …… 165

参考文献 …… 169

別　表 …… 175

ENGLISH　SUMMARY …… 186

図版目次

関連頁

巻首図版１　江馬氏下館跡全景写真 …… 1994年富山大学考古学研究室撮影 …… 70～72

巻首図版２　西堀完掘写真（北西から） …… 鈴木撮影 …… 36・37

図版１　調査地域航空写真１（1947年撮影） …… 11～19

図版２　調査地域航空写真２（1993年撮影） …… 11～19

図版３　江馬氏下館跡

１　神岡町遠景写真（北から） …… 20～24

２　調査地区遠景写真：78年度調査時（西から） …… 20～24

図版４　調査地区周辺の地形と発掘区位置図 …… 大川製図 …… 24・25

図版５　江馬氏下館跡78年度調査遺構(1)

１　調査地区全景写真（東から） …… 20～24

２　庭園遺構全景写真１（西から） …… 20～24

図版６　江馬氏下館跡78年度調査遺構(2)

１　庭園遺構全景写真２（南から） …… 20～24

２　南堀トレンチ完掘写真（南から） …… 20～24

図版７　江馬氏下館跡78年度調査遺構(3)

１　SB03完掘写真（西から） …… 20～24

２　SB04完掘写真（北から） …… 20～24

図版８　江馬氏下館跡78年度調査遺構(4)

１　SB06完掘写真（北から） …… 20～24

２　炉跡検出写真（西から） …… 20～24

図版９　江馬氏下館跡78年度調査遺構(5)

１　Ｄ地区石積み遺構検出写真（南から） …… 20～24

２　Ｃ地区竪穴住居跡完掘写真（東から） …… 20～24

図版10　江馬氏下館跡北堀地区遺構(1)

１　北堀地区全景写真１（北東から） …… 鈴木撮影 …… 30・31

２　北堀地区全景写真２（南西から） …… 鈴木撮影 …… 30・31

図版11　江馬氏下館跡北堀地区遺構(2)

１　北堀埋土A-A'断面層位写真（南西から） …… 鈴木撮影 …… 25

２　北堀堀形礎石流れ込み状況検出写真（南東から） …… 鈴木撮影 …… 31

図版12　江馬氏下館跡南堀地区遺構(1)
1　南堀地区全景写真１（南西から）…… 鈴木撮影 …… 31～35
図版13　江馬氏下館跡南堀地区遺構(2)
1　南堀地区全景写真２（北東から）…… 鈴木撮影 …… 31～35
2　南堀旧堀SFトレンチ完掘写真（南から）…… 鈴木撮影 …… 32
図版14　江馬氏下館跡南堀地区遺構(3)
1　南堀埋土B-B'断面層位写真（北東から）…… 鈴木撮影 …… 31
2　南堀埋土D-D'断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 31
図版15　江馬氏下館跡南堀地区遺構(4)
1　南堀埋土D-D'旧堀部分断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 26・31
2　南堀埋土D-D'新堀部分断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 26・31
図版16　江馬氏下館跡南堀地区遺構(5)
1　南堀埋土C-C'断面層位写真（北東から）…… 鈴木撮影 …… 31
2　南堀埋土G-G'断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 31
図版17　江馬氏下館跡南堀地区遺構(6)
1　SD01完掘状況写真（北西から）…… 鈴木撮影 …… 33
2　SD02完掘状況写真１（南西から）…… 鈴木撮影 …… 33
3　SD02完掘状況写真２（南西から）…… 鈴木撮影 …… 33
図版18　江馬氏下館跡南堀地区遺構(7)
1　SP28完掘状況写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 32
2　SK02・SP28断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 32
図版19　江馬氏下館跡南堀地区遺構(8)
1　SK02完掘状況写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 32
2　SK04完掘状況写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 34
図版20　江馬氏下館跡南堀地区遺構(9)
1　SK05完掘状況写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 34
2　SK05断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 34
図版21　江馬氏下館跡南堀地区遺構(10)
1　SK06完掘状況写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 34
2　SK06断面層位写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 34
図版22　江馬氏下館跡西堀地区遺構(1)
1　西堀地区全景写真１（南東から）…… 鈴木撮影 …… 36～39
2　西堀地区全景写真２（北西から）…… 鈴木撮影 …… 36～39

図版23　江馬氏下館跡西堀地区遺構(2)
1　土橋１検出写真１（南西から）…… 鈴木撮影 …… 38
2　土橋１検出写真２（南東から）…… 鈴木撮影 …… 38
図版24　江馬氏下館跡西堀地区遺構(3)
1　SX01検出写真１（西から）…… 鈴木撮影 …… 39
2　SX01検出写真２（北西から）…… 鈴木撮影 …… 39
図版25　江馬氏下館跡西堀地区遺構(4)
1　土橋２検出写真１（北から）…… 鈴木撮影 …… 39
2　土橋２検出写真２（北西から）…… 鈴木撮影 …… 39
図版26　江馬氏下館跡西堀地区遺構(5)
1　西堀埋土H-H'断面層位写真（北西から）…… 鈴木撮影 …… 36
2　西堀埋土I-I'断面層位写真（北西から）…… 鈴木撮影 …… 26・36
図版27　江馬氏下館跡西堀地区遺構(6)
1　西堀埋土J-J'断面層位写真（南東から）…… 鈴木撮影 …… 37
2　西堀堀底炭化杭出土状態写真（南東から）…… 鈴木撮影 …… 36
図版28　江馬氏下館跡西堀地区遺構(7)
1　西堀WAトレンチ完掘写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 38
2　西堀WAトレンチK-K'断面層位写真（南から）…… 鈴木撮影 …… 38
図版29　江馬氏下館跡西堀地区遺構(8)
1　西堀WBトレンチ完掘写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 38
2　西堀WBトレンチL-L'断面層位写真（南から）…… 鈴木撮影 …… 38
図版30　江馬氏下館跡館内部地区遺構(1)
1　遺構面検出状況写真１（北東から）…… 鈴木撮影 …… 54～58
2　遺構面検出状況写真２（北東から）…… 鈴木撮影 …… 54～58
図版31　江馬氏下館跡館内部地区遺構(2)
1　完掘全景写真１（北東から）…… 鈴木撮影 …… 54～58
2　完掘全景写真２（北東から）…… 鈴木撮影 …… 54～58
図版32　江馬氏下館跡館内部地区遺構(3)
1　SD01完掘状況写真（北西から）…… 鈴木撮影 …… 57
2　青磁碗出土状態写真（東から）…… 鈴木撮影 …… 67
図版33　江馬氏下館跡館内部地区遺構(4)
1　西壁層位写真１（X＝1.5付近，北東から）…… 鈴木撮影 …… 54
2　西壁層位写真２（X＝2.0付近，北東から）…… 鈴木撮影 …… 54

図版34　江馬氏下館跡館内部Ａトレンチ
1　館内部Ａトレンチ完掘写真（南西から）…… 鈴木撮影 …… 55
2　館内部Ａトレンチ層位写真１（南西から）…… 鈴木撮影 …… 55
図版35　江馬氏下館跡館内部Ａトレンチ・館外部Ｂトレンチ
1　館内部Ａトレンチ層位写真２（南西から）…… 鈴木撮影 …… 55
2　館外部Ｂトレンチ完掘写真（南東から）…… 鈴木撮影 …… 69
図版36　江馬氏下館跡遺構(1)
1　北堀土層断面図 …… 三林製図 …… 26・30
2　北堀堀形平面図 …… 三林製図 …… 30
図版37　江馬氏下館跡遺構(2)
1　南堀地区平面図１ …… 大平製図 …… 31～34
図版38　江馬氏下館跡遺構(3)
1　南堀地区平面図２ …… 大川製図 …… 31～34
図版39　江馬氏下館跡遺構(4)
1　南堀土層断面図 …… 大平製図 …… 26・31
図版40　江馬氏下館跡遺構(5)
1　西堀地区平面図 …… 塩田製図 …… 36～39
図版41　江馬氏下館跡遺構(6)
1　西堀土層断面図１ …… 堀内製図 …… 36
図版42　江馬氏下館跡遺構(7)
1　西堀土層断面図２ …… 堀内製図 …… 37
図版43　江馬氏下館跡遺構(8)
1　西堀地区土橋１平面図 …… 内田製図 …… 38
図版44　江馬氏下館跡遺構(9)
1　西堀地区WAトレンチ平面図・土層断面図 …… 内田製図 …… 38
図版45　江馬氏下館跡遺構(10)
1　館内部地区平面図・土層断面図 …… 塩田製図 54・56～58
図版46　江馬氏下館跡遺構(11)
1　館内部地区礎石建物・柵列実測図 …… 芳賀製図 …… 56～58
図版47　江馬氏下館跡遺構(12)
1　館内部Ａトレンチ土層断面図 …… 三林製図 …… 55
図版48　江馬氏下館跡遺構(13)
1　館外部Ｂトレンチ平面図・土層断面図 …… 米出製図 …… 69

図版49　江馬氏下館跡出土遺物実測図(1) …… 稲石製図 …… 39
図版50　江馬氏下館跡出土遺物実測図(2) …… 匂坂製図 …… 41
図版51　江馬氏下館跡出土遺物実測図(3) …… 匂坂製図 …… 43
図版52　江馬氏下館跡出土遺物実測図(4) …… 石内製図 …… 46
図版53　江馬氏下館跡出土遺物実測図(5) …… 景山製図 …… 48
図版54　江馬氏下館跡出土遺物実測図(6) …… 近藤製図 …… 49
図版55　江馬氏下館跡出土遺物実測図(7) …… 古沢製図 …… 51
図版56　江馬氏下館跡出土遺物実測図(8) …… 古沢製図 …… 52
図版57　江馬氏下館跡出土遺物実測図(9) …… 滝　製図 …… 61
図版58　江馬氏下館跡出土遺物実測図(10) …… 坪田製図 …… 63
図版59　江馬氏下館跡出土遺物実測図(11) …… 坪田製図 …… 67
図版60　江馬氏下館跡出土遺物写真(1) …… 前川撮影 …… 39
図版61　江馬氏下館跡出土遺物写真(2) …… 前川撮影 …… 41
図版62　江馬氏下館跡出土遺物写真(3) …… 前川撮影 …… 43
図版63　江馬氏下館跡出土遺物写真(4) …… 前川撮影 …… 46
図版64　江馬氏下館跡出土遺物写真(5) …… 前川撮影 …… 48
図版65　江馬氏下館跡出土遺物写真(6) …… 前川撮影 …… 49
図版66　江馬氏下館跡出土遺物写真(7) …… 前川撮影 …… 51
図版67　江馬氏下館跡出土遺物写真(8) …… 前川撮影 …… 49・52
図版68　江馬氏下館跡出土遺物写真(9) …… 前川撮影 …… 52
図版69　江馬氏下館跡出土遺物写真(10) …… 前川撮影 …… 61
図版70　江馬氏下館跡出土遺物写真(11) …… 前川撮影 …… 63
図版71　江馬氏下館跡出土遺物写真(12) …… 前川撮影 …… 54・67
図版72　江馬氏下館跡出土遺物写真(13) …… 前川撮影 …… 67

別　　表

頁

別表１　南堀地区土壙・柱穴計測表 …… 景山作成 …… 177
別表２　南堀地区溝計測表 …… 景山作成 …… 178
別表３　西堀地区柱穴計測表 …… 景山作成 …… 178
別表４　館内部地区土壙・柱穴計測表(1) …… 景山作成 …… 179
別表５　館内部地区土壙・柱穴計測表(2) …… 景山作成 …… 180
別表６　館内部地区溝計測表 …… 景山作成 …… 180
別表７　北堀地区出土遺物計測表 …… 稲石作成 …… 181
別表８　南堀地区出土遺物計測表(1) …… 景山作成 …… 182
別表９　南堀地区出土遺物計測表(2) …… 匂坂作成 …… 183
別表10　南堀地区出土遺物計測表(3) …… 匂坂作成 …… 184
別表11　西堀地区出土遺物計測表 …… 古沢作成 …… 185
別表12　館内部地区出土遺物計測表(1) …… 坪田作成 …… 186
別表13　館内部地区出土遺物計測表(2) …… 坪田作成 …… 187

挿図目次

第１図　トレンチ設定図 …… 大平作成 …… 6
第２図　西堀地区発掘作業風景 …… 中田撮影 …… 7
第３図　西堀掘削風景 …… 中田撮影 …… 7
第４図　西堀実測風景 …… 鈴木撮影 …… 9
第５図　館内部地区測量風景 …… 鈴木撮影 …… 9
第６図　調査参加者写真（南堀跡，東から） …… 鈴木撮影 …… 10
第７図　館内部地区作業風景（南から） …… 鈴木撮影 …… 10
第８図　江馬氏下館の位置と周辺の属城跡 …… 大平作成 …… 13
第９図　江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年） …… 景山作成 …… 15
第10図　江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年） …… 景山作成 …… 15
第11図　江馬氏下館跡付近絵図（江戸末～明治初年） …… 16
第12図　78年度調査遺構概略図 …… 塩田作成 …… 22
第13図　基本層序模式図 …… 米出作成 …… 27

第14図　南堀土層堆積図 …… 大平作成 …… 35
第15図　西堀土層堆積図 …… 大平作成 …… 37
第16図　館北東部における遺構変遷図 …… 芳賀作成 …… 60
第17図　堀の規模散布図 …… 大平作成 …… 71
第18図　堀・建物主軸方位図 …… 大平作成 …… 71
第19図　出土縄紋土器実測図 …… 長谷川作成 …… 73
第20図　土師器皿分類図 …… 中田作成 …… 76
第21図　土師器皿の分類別個体数 …… 中田・稲石作成 …… 79
第22図　遺構・地区別の土師器皿の分類別個体数 …… 中田・稲石作成 …… 79
第23図　遺構・地区別のタール煤付着土師器皿の比率 …… 中田・稲石作成 …… 79
第24図　分類別のタール煤付着土師器皿の比率 …… 中田・稲石作成 …… 80
第25図　土師器皿の法量別個体数 …… 中田・稲石作成 …… 80
第26図　瓦器分類図 …… 稲石作成 …… 88
第27図　堀跡出土の瀬戸美濃個体数 …… 近藤・塩田作成 …… 91
第28図　すり鉢の時期別出土量 …… 近藤・塩田作成 …… 95
第29図　瀬戸美濃製品の時期別出土量１（すり鉢・天目茶碗）‥ 近藤・塩田作成 …… 95
第30図　瀬戸美濃製品の時期別出土量２ …… 近藤・塩田作成 …… 96
第31図　江馬氏下館跡の時期別遺物出土量の変化 …… 近藤・古沢作成 …… 97
第32図　食膳具の種類別構成比 …… 近藤・古沢作成 …… 100
第33図　貯蔵具の種類別構成比 …… 近藤・古沢作成 …… 101
第34図　調理具の種類別構成比 …… 近藤・古沢作成 …… 101
第35図　江馬氏下館跡の遺構配置 …… 中田作成 …… 105
第36図　中世遺物の出土散布図（破片数） …… 稲石作成 …… 106
第37図　土師器皿の出土散布図（破片数） …… 稲石作成 …… 107
第38図　青磁碗の出土散布図（破片数） …… 中田作成 …… 108
第39図　瀬戸美濃天目茶碗の出土散布図（破片数） …… 中田作成 …… 108
第40図　瀬戸美濃 碗・皿の出土散布図（破片数） …… 中田作成 …… 109
第41図　珠洲 壺・甕の出土散布図（破片数） …… 中田作成 …… 110
第42図　珠洲すり鉢の出土散布図（破片数） …… 中田作成 …… 110
第43図　13世紀：遺物の出土散布図（破片数） …… 古沢作成 …… 111
第44図　14世紀：遺物の出土散布図（破片数） …… 古沢作成 …… 111
第45図　15世紀：遺物の出土散布図（破片数） …… 古沢作成 …… 112
第46図　16世紀：遺物の出土散布図（破片数） …… 古沢作成 …… 112

第47図　江馬氏下館跡における出土遺物群の変遷１ …… 中田・近藤作成 …… 115
第48図　江馬氏下館跡における出土遺物群の変遷２ …… 中田・近藤作成 …… 116
第49図　江馬氏下館跡付近地籍図 …… 小島作成 …… 125
第50図　江戸末～明治初年の江馬氏下館跡付近絵図 …… 小島作成 …… 126
第51図　東町城付近地形図 …… 127
第52図　東町城付近地籍図 …… 小島作成 …… 128
第53図　『飛州志』所収東町城跡図 …… 129
第54図　高原諏訪城要図 …… 千田作図 …… 132
第55図　東町城要図 …… 134
第56図　寺林城要図 …… 137
第57図　政元城要図 …… 138
第58図　洞城要図 …… 139
第59図　石神城(杏城)要図 …… 140
第60図　論田山城要図 …… 141
第61図　中地山城要図 …… 142
第62図　遺跡・遺構消長及び年代推定図 …… 前川作成 …… 143

表　目　次

第１表　中世陶磁器一覧表（79年度報告分） …… 稲石作成 …… 23
第２表　基本層序対照表（94年度調査分） …… 大平作成 …… 28
第３表　基本層序対照表（79年度報告分） …… 稲石作成 …… 29
第４表　堀跡計測表 …… 景山作成 …… 70
第５表　出土縄紋遺物観察表 …… 長谷川作成 …… 73
第６表　土師器皿計測表 …… 中田作成 …… 77
第７表　土師器皿分類対照表 …… 中田作成 …… 77
第８表　出土貿易陶磁一覧表 …… 石内作成 …… 85
第９表　出土珠洲一覧表 …… 近藤作成 …… 85
第10表　出土瀬戸美濃一覧表 …… 滝　作成 …… 86
第11表　出土瓦器一覧表 …… 近藤作成 …… 87
第12表　各堀跡における遺物群の時期別出土量 …… 近藤作成 …… 90

第13表　各堀跡における瀬戸美濃の時期別出土量 …… 近藤作成 …… 90
第14表　江馬氏下館跡の時期別遺物出土量 …… 近藤作成 …… 97
第15表　江馬氏下館跡出土の土器・陶磁器構成表（13～16世紀） …… 中田作成 …… 99
第16表　調査区毎の遺物出土量一覧表 …… 中田作成 …… 103
第17表　江馬氏下館跡出土食器の種類器種別組成表（2-a1期） …… 中田作成 …… 119
第18表　江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表（2-a1期） …… 中田作成 …… 120

付　　図

付図1　江馬氏下館跡遺構平面図 …… 岩崎・大川製図 …… 70～72

第1章　調査の概要

1　調査の目的

江馬氏城館跡は，中世の居館跡としては，全国的に見ても，非常に保存状況のよい遺跡である。神岡町教育委員会では，国民共有の文化遺産であるという認識のもとに，保護・保存は言うまでもなく，その歴史的資料性をさらに追及するための発掘調査を計画した。さらに，発掘成果に基づいた整備事業を実施して，広く一般に公開し，活用することも大切なことであると考えられる。

この整備事業は，史跡の公有化及び保護・保存を目的に行い，地元住民の意志を尊重しながら，科学的な調査研究結果に基づき，将来的には歴史公園として整備復元したいとしている。

2　事業の実施

本事業の実施にあたっては，神岡町教育委員会が事務を担当し，下記の発掘調査整備委員会の助言や文化庁・岐阜県文化課の指導を受けながら事業を推進することとした。

まず，発掘調査は神岡町教育委員会が主体となり，発掘調査整備委員会の指導に基づき保護・保全に必要な調査や整備のための発掘調査を計画的に実施している。

事業は，その基本構想を事業計画に基づいて実施していくが，その課程における発掘調査の指導や助言，そして整備方法の提言などをそれぞれの学識経験者から指導を受けるために委員会を下記の構成で事業期間中設置することとした。

江馬氏城館跡発掘調査整備委員会

委員長：	牛川喜幸	（考古学・庭園）	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長
委　員：	加藤允彦	（造　　園）	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター保存工学研究室長
委　員：	吉岡泰英	（建　　築）	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 主任文化財調査員
委　員：	前川　要	（考 古 学）	富山大学人文学部助教授
委　員：	田家幸夫	（地　　元）	江馬遺跡保存会長

委員会では，下記の実施計画が検討された。

〈基本計画〉

・史跡として活用でき，歴史学習が身近にできる環境づくり

・親しみやすく休息できる散策空間の整備

・文化遺産を保護・保全していくための整備を行なう

以上の計画のために以下の項目について今後検討していく。

⑴館跡は，史跡として活用できるので，調査結果に基づいて整備復元する。

⑵江馬氏城館跡全体を関連づけた施設を整備する。

⑶出土遺物を整理し展示するための施設を整備する。

⑷中世の歴史学習を親しみやすくするために，散策，休憩の場としての空間を整備する。

3　調査に至る経緯

次に，調査に至る経緯を年代順に記す。

1970年	カドミウム汚染農地として休耕となる。
1972年10月	この地区一帯の土地改良(基盤整備，客土)工事の実施計画決定。
1972年10月	館跡の一角(約4,000㎡)を町有地として買収(10月～12月)し，盛土をして史跡公園造成を計画。
1973年～1976年	町文化財審議委員会の答申により，試掘調査を実施したところ遺構の一部を検出。森蘊庭園文化研究所長に調査を依頼し，指導を受け発掘調査の継続を決定。
1977年	町有地に隣接する民有地の発掘調査により，東，西側の堀跡や建物跡の一部が検出された。庭園跡と思われる位置の北側部分の圃場からは，主要建物と推定される礎石を伴った建物跡を検出した。
1977年	6月24日岐阜県史跡「江馬館庭園」に指定。
1978年	国の埋蔵文化財緊急発掘調査費補助事業として本格的に調査を実施。(6月に調査開始，11月埋め戻し完了) この調査は遺構規模の確認と，館跡の規模を四方向から把握することを第一とし，さらに堀跡の外側に一族もしくは家臣団の屋敷跡が複合する形式か否かを知ることに目的をおき，主としてトレンチ発掘調査により実施。一部は平面発掘調査実施。トレンチの溝の読み，遺物の取り上げ等については，朝倉氏遺跡調査研究所の方式にならった。この調査のほか，町内に残されていた江馬氏の館跡，城砦跡は，実地調査によって一部の現状変更著しいものを除いて中世地方

豪族の遺構として歴史的に非常に価値有るものと判断され国の史跡申請に踏み切ることに決定した。

1979年１月　申請手続きを開始。

1979年３月　「史跡江馬氏城館跡発掘調査概報」を刊行。

1980年３月　国の史跡指定。（昭和55年３月21日付け 官報第15948号文部省告示第40号）
江馬氏城館跡（下館跡，高原諏訪城跡，土城跡，寺林城跡，政元城跡，洞城跡，石神城跡）

1981年３月　「史跡江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書」刊行。

1993年３月　神岡町議会定例会一般質問で地元議員より，江馬氏城館跡の保護及び整備について町長の所見を求められたのに対し，「前向きに調査研究を行いたい」旨の意向を示した。

1993年11月　文化庁記念物課を訪問。史跡江馬氏城館跡整備に伴う国の指導及び平成６年度からの事業化について要望。

1994年３月　史跡江馬氏城館跡整備に伴う平成６年度発掘調査事業費を当初予算に計上し，議決を得る。

1994年７月　７月18日より富山大学人文学部考古学研究室により発掘調査開始。
８月12日，現地における発掘調査及び埋め戻し作業終了。

1995年１月　神岡町役場において，調査及び整備に関する江馬氏城館跡発掘調査整備委員会を開催。

4　下館跡の現状

下館跡は，保存管理計画では全体を遺構保存地区として，公有化を計画している。面積は，およそ26,000㎡でそのうち約4,000㎡は公有化を終えているが，残りは道路水路以外すべて民有で，約19,000㎡（地目は主として農地，宅地）は，15人の地権者によって所有されている。なお，指定地内には4戸の住宅が建っているほか，倉庫など付属建築物や庭木などの樹木がある。館跡周辺は，大半が水田として利用されている。

また，指定地内の南側には，南北に史跡を分断するように町道が通っているほか中央部には同方向で農道が入っている。昭和48年から53年にかけて遺構確認のための発掘調査が行なわれ昭和54年３月発掘調査概報によってその内容が明らかになっている。

平成６年度において文化庁・岐阜県教育委員会の指導を得て，史跡整備を目的にした発掘調査を富山大学人文学部考古学研究室に委託して実施している。

（前川　要）

調　査　組　織

調　査　員　　前川　　要　（富山大学人文学部助教授）

調査補助員　　鈴木　和子，長谷川幸志，新本　真之
（富山大学大学院人文科学研究科学生）

調査作業員　　大野　淳也，大泰司　統，大高　政史，大平　愛子，尾野寺克実，
河合　　忍，佐藤　聖子，武田　昌明，中田　書矢，野中由希子，
福海　貴子，松原　和也，石内　詩保，稲石　純子，岩崎　誉尋，
内田亜紀子，大川　　進，大平奈央子，景山　和也，近藤　美紀，
匂坂　友秋，塩田　明弘，滝　寿美代，坪田　聡子，古沢亜希子，
堀内　大介，三林　健一，米出　敬子，芳賀万里子，石井　淳平，
井手口恵美，海道　雅子，小林　香織，田中慎太郎，田中　幸生，
中島　義人，中谷　正和，平井　晶子，藤田　良子，古屋　聡洋，
松本　　茂，宮崎順一郎，向井　裕知，本村　　徹，山崎　雅恵，
（富山大学人文学部考古学研究室学生）
中桐　幸子（奈良大学文学部文化財学科学生）

調査協力者　　浅野　良治，小野　　基，金成　淳一，小島あずさ，清水あゆみ，
宿野　隆史，鈴木　由紀，戸田真美子，栃谷　朋子，野水　晃子，
春名　理史，深田　亜紀，藤田　亮子，丸山　　浩，三浦　秀俊，
（富山大学人文学部国際文化学科学生）

事務局　　堀本　昌義　　神岡町教育委員会教育長
大畑　治一　　神岡町教育委員会教育課長
古宿　　稔　　神岡町教育委員会社会教育係長
大上　昭之　　神岡町教育委員会社会教育係主任主査

5　調査日誌

1994年

4・29　晴　調査地区の下見と調査予定区の電気探査を行った。

5・30　晴　発掘調査の打ち合わせを行った。

6・04　晴　周辺遺跡の見学を行った。

6・13　晴　調査予定区の電気探査を行った。

6・24　晴　富山大学に於いて発掘調査に関する全体の打ち合わせ会を行い，調査の方法・発掘の手順等について検討を加えた。

7・13　晴　富山大学において発掘資材の準備を行った。

7・14　晴　富山大学において発掘資材の準備を行った。

7・15　晴　富山大学において発掘資材の準備を行った。

7・18　曇　プレハブを設置して，資材の搬入を行った。各地区ともバックホウによる表土除去を開始した。南堀地区西半，館内部地区，館内部Ａトレンチから遺構面検出を開始した。

7・19　晴　表土除去作業終了。南堀地区西半，館内部地区で遺構面検出を行った。富山大学では遺物に関する打ち合せ会を行った。

7・20　晴　南堀地区では堀の掘削を開始した。館内部地区の遺構面検出を行った。また，館内部地区からグリット設定を開始した。

7・21　晴　グリット設定を続行。各地区とも遺構面検出を行った。

7・22　晴　グリット設定を続行。各地区とも遺構面検出を行った。

7・23　晴　グリット設定を終了。各地区とも遺構面検出を行った。北堀地区では，堀の掘削を開始した。

7・24　晴　北堀地区では堀の掘削作業を行う。南堀地区では堀形の上面の精査を行った。西堀地区では堀の掘削を開始した。

7・25　晴　北堀地区では堀の掘削作業を行う。南堀地区では堀形の上面の精査，新堀の掘削作業を行う。新旧堀埋土の堆積状況を確認するためSAトレンチを設定した。西堀地区では薬研堀，土橋２を検出した。

7・26　晴　北堀地区では堀の掘削作業を行い，東半では堀形の上面の精査を行った。南堀地区では新堀の掘削を行った。新旧堀埋土の堆積状況を確認するためSDトレンチを設定した。西堀地区では箱堀の掘削を行い，並行して土橋２上面の精査と土橋２上の遺構の半截を行った。

7・27　晴　北堀地区では堀の掘削作業を行った。南堀地区では新堀の掘削を行い，並行してSEトレンチを設定し，旧堀の堀底の確認を行った。西堀地区では堀の掘削を行

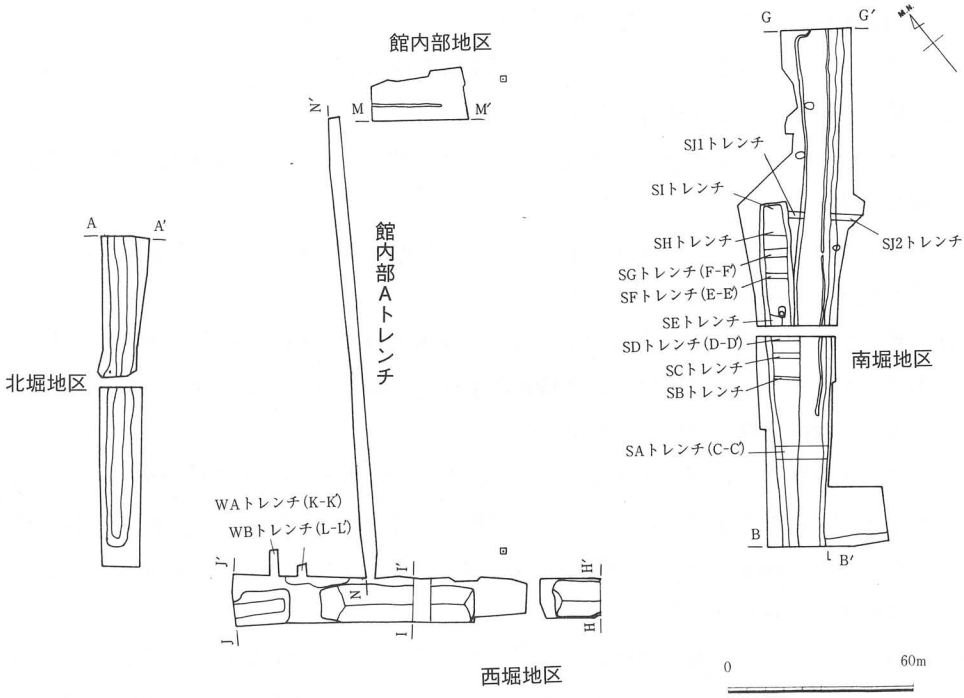
った。小島道裕氏来訪。

7・28　晴　北堀地区の東半では堀底を確認した。西半では堀の肩部で礎石を含む流れ込み層を検出した。南堀地区では堀の掘削を行った。西堀地区では薬研堀，箱堀の掘削を行った。

7・29　晴　北堀地区の東半では堀を完掘し，清掃を行い，A-A'セクションの写真撮影を行った。西半では堀の完掘の後，写真撮影を行い，平面図を完成させた。南堀地区では新堀，旧堀の堀底の精査を行った。旧堀の堀底の確認の為，SGトレンチを設定した。78年度調査のトレンチ跡にSJ２トレンチを設定した。西堀地区では箱堀のJ-J'セクションの写真撮影を行い，土層断面図を作成した。

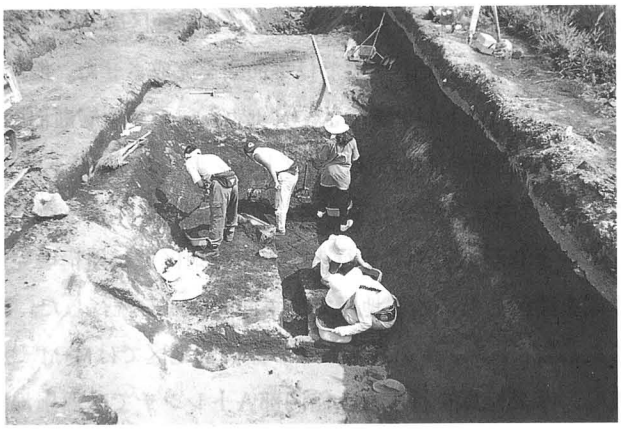
7・30　曇　北堀地区ではA-A'セクションの土層断面図と全体平面図の作成を行った。堀の肩部検出の礎石群の平面図を作成した。南堀地区では新堀・旧堀とも掘削を行った。西堀地区では薬研堀の掘削と，箱堀の肩部の精査を行った。

7・31　晴　北堀地区の東半では平面図を完成させ，調査終了。南堀地区では新堀，旧堀の掘削，B-B'セクションの写真撮影を行った。旧堀の堀底の確認の為，SIトレンチを設定した。また78年度調査のトレンチ跡にSJ１トレンチを設定した。西堀地区の北半では薬研堀を完掘し，I-I'セクションの写真撮影を行った。南半では土橋２上面の清掃を行い，薬研堀のH-H'セクション及び全体の写真撮影を行った。館内部地区



第１図　トレンチ設定図（縮尺 1/2000）

第２図　西堀地区発掘作業風景



第３図　西堀掘削風景

は遺構面の精査を行った。館内部Aトレンチは遺構面の精査を行った。

8·01　晴　現場中休み

8·02　晴　現場中休み。富山大学で出土遺物の検討を行った。

8·03　曇　南堀地区では新堀・旧堀周辺の遺構の精査を行った。旧堀についてはSBトレンチ，SCトレンチを設定し，部分的に堀底を確認した。西堀地区では北半では土橋1の検出を行った。南半では薬研堀のH-H'セクションの土層断面図及び平面図を作成した。館内部地区では遺構面の精査を行った。館内部Aトレンチでは壁面の清掃と遺構面の精査を行った。小野正敏氏，千田嘉博氏，中井均氏来訪。

8·04　晴　南堀地区では堀以外の遺構の半截を行った。D-D'セクション，G-G'セクションの写真撮影を行い，B-B'セクション，G-G'セクションの土層断面図を作成した。西堀地区の北半では遺構面の精査を行った。南半では平面図を作成した。館内部地区では遺構面清掃の後，写真撮影を行った。遺構の概略図を作成し，半截を開始した。館内部Aトレンチでは清掃，N-N'セクションの写真撮影を行った。小野正敏氏，千田嘉博氏，辻誠一郎氏来訪。

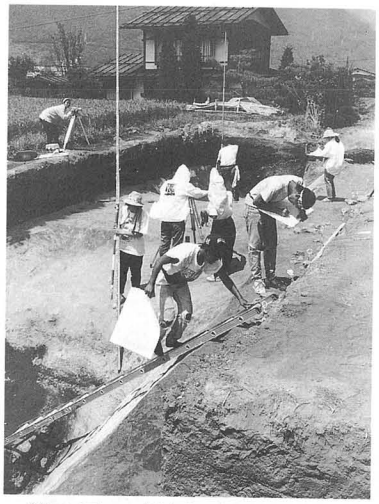
8·05　晴　南堀地区では堀以外の半截・完掘を行った。C-C'セクションの土層断面図を作成し，写真撮影を行った。西堀地区の北半では遺構面の精査及びSX01の検出を行い，箱堀の掘削を完了した。土橋1上の遺構を半截し，I-I'セクションの土層断面図を作成した。南半では平面図の作成を続行した。館内部地区では検出遺構の半截と完掘を行った。館内部AトレンチではN-N'セクションの写真撮影の続きと土層断面図を作成した。館外部Bトレンチでは，バックホウによる表土除去を行い，遺構面の検出を開始した。

8·06　晴　南堀地区ではD-D'セクションの土層断面図を作成し，遺構面の清掃、写真撮影を行った。堀以外の遺構の半截と完掘を行った。西堀地区の北半ではSX01の写真撮影を行い，平面図作成を開始した。南半では平面図を完成させた。館内部地区では遺構の完掘を行った。館内部AトレンチではN-N'セクションの土層断面図を作成した。館外部Bトレンチでは遺構面の清掃の後，サブトレンチによる掘り下げを行った。

8·07　晴　バルーン(空中写真撮影システム)及びクレーンによる調査区全景写真の撮影を行った。午後より現地説明会を行った。南堀地区では遺構の完掘を行い，調査区平面図の作成を開始した。西堀地区では平面図作成を続行した。東壁にSX01の範囲を確認するためWBトレンチを設定した。館内部地区ではM-M'セクションの土層断面図を作成し，写真撮影を行った。館内部Aトレンチでは西堀地区方向にトレンチの拡張を行った。館外部BトレンチではO-O'セクションの土層断面図を作成した。

8·08　晴　南堀地区では調査区平面図の作成を続行した。SP28，SK05，SK06の平面図

を作成し，写真撮影を行った。SD02の完掘写真の撮影を行った。西堀地区ではL-L'セクションの土層断面図，WBトレンチの平面図，調査区平面図を作成した。館内部Aトレンチの拡張部の清掃を行い，N-N'セクションの土層断面図と平面図を作成した。堀の内側に想定された土塁の確認のため調査区東壁にWAトレンチを設定した。館内部地区では調査区平面図を作成した。館内部Aトレンチでは調査区平面図を作成した。館外部BトレンチではO-O'セクション，全景の写真撮影を行った。平面図を完成させ調査終了。矢田俊文氏来訪。



第4図　西堀実測風景

第5図　館内部地区測量風景

8·09　雷雨　南堀地区では東半の全体と溝の完掘状況の写真撮影を行った。平面図作成を続行した。SK01の写真撮影を行った。SK02の完掘を行った。旧堀にSFトレンチ，SHトレンチを設定して，堀底を確認した。西堀地区ではWBトレンチの清掃と写真撮影を行い，WAトレンチの拡張を行った。館内部地区では平面図作成を続行した。SD01の写真撮影を行い，調査終了。館内部Aトレンチでは調査区平面図を完成させ調査終了。坂井秀弥氏来訪。

8·10　晴　南堀地区ではE-E'セクションの写真撮影及びE-E'セクション，F-F'セクションの土層断面図，SK02の平面図・土層断面図を作成し，調査終了。西堀地区ではWAトレンチの清掃をしてK-K'セクション及び全体の写真撮影を行い，K-K'セクションの土層断面図を作成した。WBトレンチのL-L'セクションの写真撮影を行い，調査終了。発掘調査終了。埋め戻し作業開始。埋め戻しに際しては，各地区ともに灰色の川砂を遺構面に敷いた後に旧土によって埋め戻した。夜，神岡町中央公民館で成果発表会を行った。

8·11　資材等の撤収作業。埋め戻し作業。

（大平奈央子）

第6図　調査参加者写真（南堀跡、東から）

第7図　館内部地区作業風景（南から）

第２章　江馬氏下館の歴史的環境と立地

１　歴史的環境

江馬氏は中世において飛騨の北部・吉城郡高原郷を治めた豪族である。江馬氏について一般に流布し，口伝されている概略には信憑性を欠くものが多い(註1)。その祖は輝経(江馬小四郎・修理太夫とも)とされ，平経盛の妾腹の子で，北条時政に養育され，兄義時と不仲になり飛騨へ流されたと伝えられている。しかし小四郎は北条義時の幼名であり，また修理太夫は義時の弟時房のことであり，これらの名を併せ持つことはあり得ないことである。また，江馬氏の飛騨入りの経緯についても諸説があり，はっきりしない(註2)。

江馬氏が史料上に現れるのは「山科家文書」(註3)，応安５年(1372年)の記事がその初見である。この記事に江馬但馬四郎の名がみられ，広瀬左近将監と共に飛騨国の江名子・松橋等の領家職を，守護の家人らの濫妨を停止して，遵行するよう命じられている。永徳元年(1381年)７月２日の伊勢因幡(貞長)入道宛足利将軍家御教書案にも，江馬但馬四郎の名がみられ，領家職遵行を命じられている。永徳３年７月５日の佐々木大膳太夫(京極高秀)宛足利将軍家御教書案では江馬能登三郎の名がみられるが，その記事は江馬能登三郎等の飛騨国江名子，松橋の領家職侵犯を停止させるように京極高秀に命じている。江馬但馬四郎，江馬能登三郎の出自，系譜共に不明で，同一人物であるのか別人であるのか，高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしこれらの記事から，大安５年から永徳３年の10年間に，江馬一族の一人が山科家の被官人としての領家職遵行者から侵犯者に変質していく様子が伺われる。

その後，文明３年(1471年)10月５日，室町幕府奉行人連署奉書が江馬左馬助に出されている。この奉書は，飛騨国大野郡岡本上下保，石浦郷及び江名子，松橋両郷が山科家領として返付されたので早く現地に赴き姉小路基綱らと合力して治めるように，というものである。また翌４年７月29日の細川勝元から姉小路左衛門佐に宛てた書状にも江馬左馬助の名がみられ，姉小路家から，以降永く忠節を尽くすように申し付けられている。江馬氏は応仁の乱の頃には，幕府内にも認められる武将の家柄となっていたようである。

また「梅花無尽蔵」には，延徳元年(1489年)５月６日，その作者である僧・万里集九が高原郷，荒城郷を訪れ，高原城下で江馬氏から饗応をうけ，９日安国寺を出立する際には人馬を供されたと記されている。当時，江馬氏が高原郷から荒城郷近辺，つまり高原川流域に留まらず，既に古川盆地にまでその勢力を拡大していたと考えられる。

戦国時代になると江馬氏もその動乱のなかで翻弄されることになる。この頃の江馬氏の

当主は左馬助時盛であった。弘治２年(1556年)から永禄７年(1564年)にかけて江馬氏は武田氏・上杉氏の勢力争いの狭間でその相方からの圧力をうけていたが，永禄８年頃には武田方についてその勢力を越中にまで伸ばしていたようである。しかし天正元年，武田信玄が没すると，かねてから上杉方に心を寄せていた常陸介輝盛が父時盛を殺害し，本城である高原諏訪城を支配する等(註4)，江馬氏にも内訌が起きていたようである。天正４年(1576年)には上杉方の軍勢が飛騨に攻め入り，輝盛は上杉方に降伏している。天正６年(1578年)上杉謙信が病没すると，南飛騨の三木自綱は織田信長を後盾とし，輝盛と対立するようになる。天正10年本能寺の変により信長が没すると，これまで武田・上杉・織田に従属しながら互いに牽制し合っていた飛騨の諸将は飛騨制圧，君臨の野望をもち，なかでも特に勢力の強かった北飛騨の江馬輝盛と，南飛騨の三木自綱が対立するようになった。

同10月27日，江馬輝盛は三木自綱と吉城郡荒城川を挟んで戦ったが破れ，輝盛は討死にし，一族郎党も壊滅状態に追込まれた。翌28日には高原諏訪城も三木軍に落とされ，以後江馬氏は衰亡の一途をたどることになったのである。

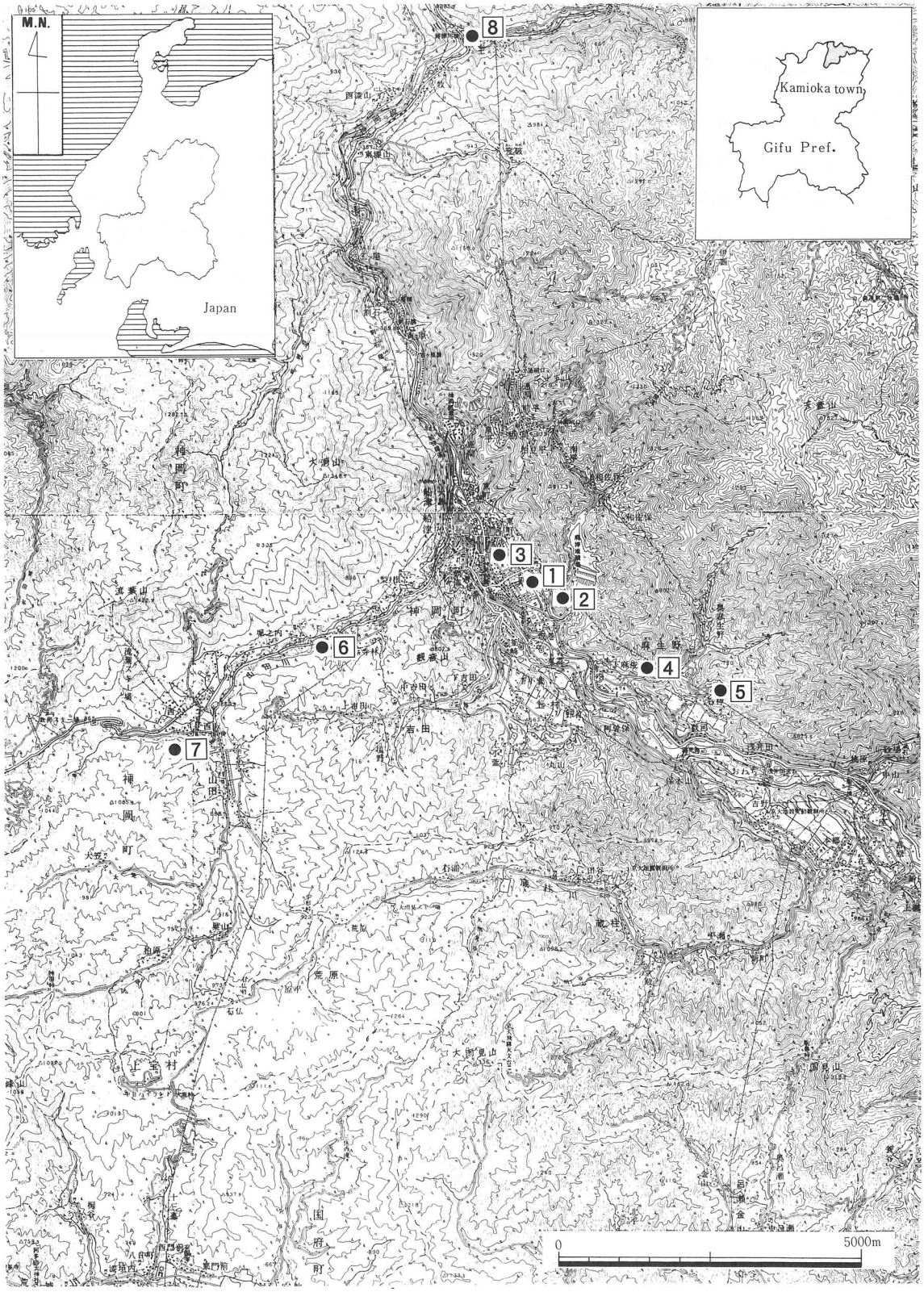
〈註〉

(註１)　『江馬家後鑑録』・『江馬記』・『江馬累代記』などによる。

(註２)　『通夜物語』　建久３年　(1192年)
『「川上氏系図由緒』　正治２年　(1200年)
『飛州史』　建永年中
『飛州軍乱記』・『千光寺記』・『高原旧事』
『飛騨軍鑑』・『江馬累代記』　建仁３年３月　(1203年)
『江馬家後鑑録』　承久３年９月　(1221年)
などがある。

(註３)　内閣文庫所蔵　『山科家古文書』　(『岐阜県史』　史料編　古代中世４　1969所収)

(註４)　天正６年説(『江馬後鑑録』)もあるが，武田氏と上杉氏の対立が背景にあるとすれば天正元年説(『円城寺過去帳』)が妥当であるとされている。(『岐阜県史』通史編　近世１　1968　岐阜県)



1．江馬氏下館跡　2．高原諏訪城跡　3．東町城跡　4．洞城跡　5．石神城跡　6．寺林城跡　7．政元城跡　8．土城跡

第8図　江馬氏下館の位置と周辺の属城跡(縮尺1/100,000)

2　遺跡の立地

(a)立　　地（第8図）

江馬氏下館跡は高原川中流域にある殿段丘の中央部，標高約406mに立地する。殿段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川，双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川(神通川水系右支)と，神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山(標高1,327m)および天蓋山(標高1,527m)付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって延びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり，尾根の南端頂および稜線延長には「高原諏訪城」がある。山麓頚部に湧水・谷水もありこの地域への水源となっている。

西側は段丘を南から北西に蛇行，分断する旧高原川の河川敷が自然の要害をなしている。対岸段丘は向野と呼ばれる。現在は鉱山社宅街・住宅地となっている。

南側は二十五山から延びる支脈が和佐保谷によって浸食，切断されて低位段丘を形成している。かつては耕地であったが，現在は工業団地や運動公園として開発されている。

北側の段丘野尻には東町城(『飛州志』には「江馬之御館」と記されている，現在の神岡城。)が位置している。またこの北側は段丘上で最大の広がりを持つ農耕地として利用されてきたが，戦後鉱山の社宅拡張や都市計画による住宅地化，学校建設等で著しく変貌した。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時代，舟津町村として発展し，現在も市街地が広がっている。

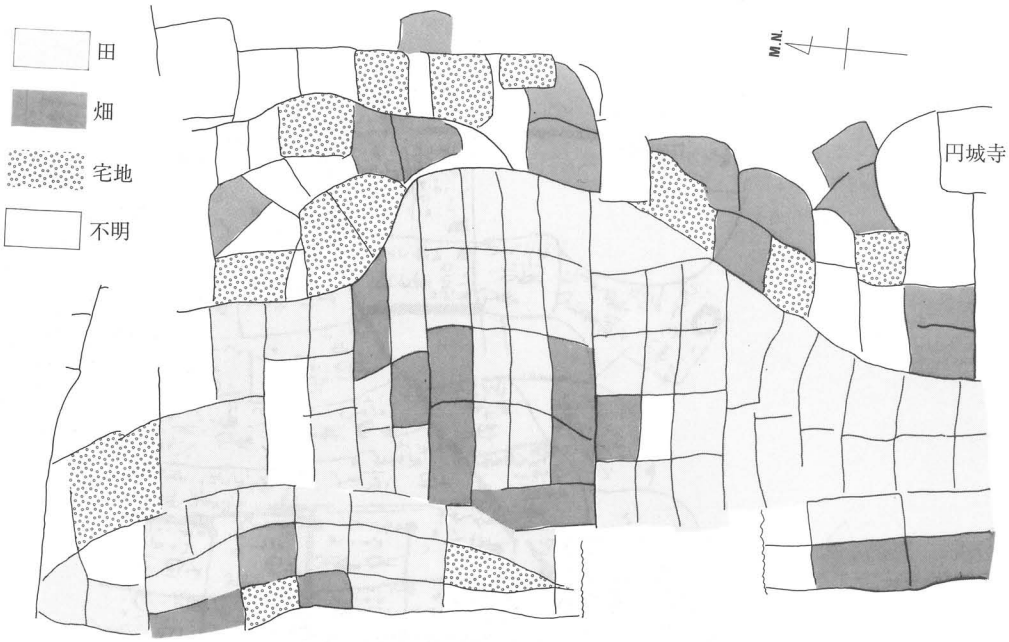
また，中世江馬氏が君臨したと伝えられる吉城郡高原郷(現在の神岡町，上宝村)の中心をなす集落はいずれも高原川およびその支流により形成された段丘上に位置している。江馬氏は江馬氏下館跡の東側背後にある高原諏訪城を中心に，高原郷に東町城(「江馬之御館」)・洞城・石神城・寺林城・政元城・土城，荒城郷に梨打城など多くの支城を築き支配地全体を要害として防備していた。

(b)古絵図・古文書から見た変遷（第9～11図）

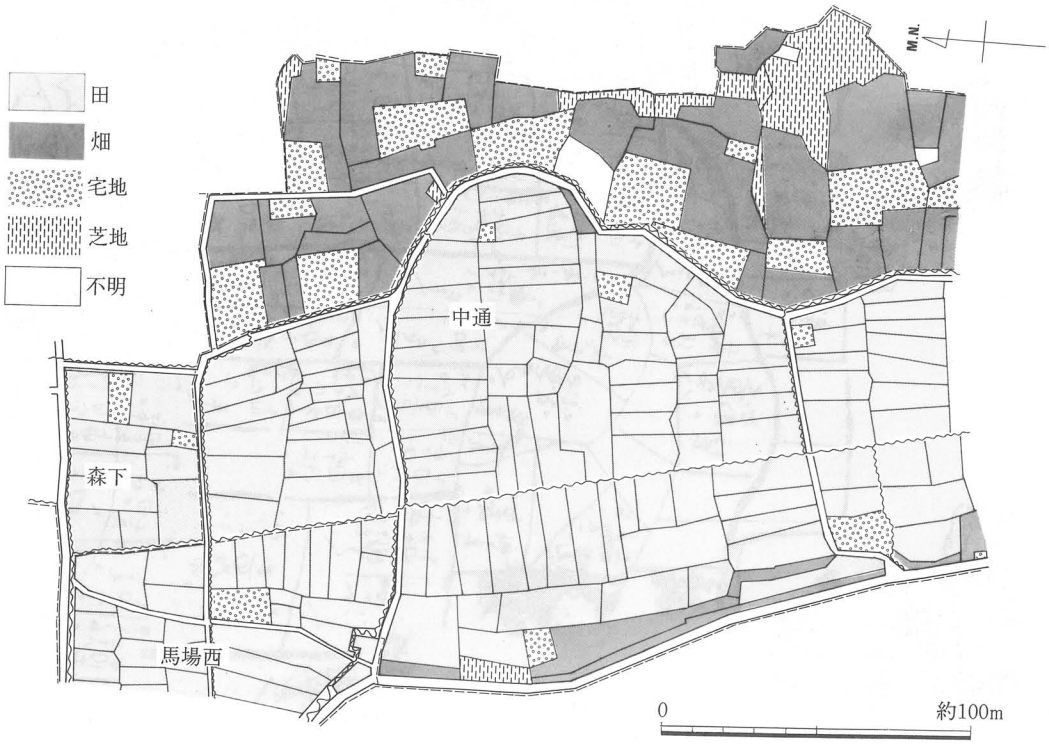
殿地区で現存する土地に関する最も古い記録としては元禄検地水帳(元禄7年)があげられる。しかし付随，もしくは同時期の絵図が発見できないため，水帳にあげられている孫字名の正確な位置を知ることはできない。

第9図は第11図をトレースしたもので，江戸時代末～明治初年の江馬氏下館付近の絵図である。第10図は明治21年の地籍図である。

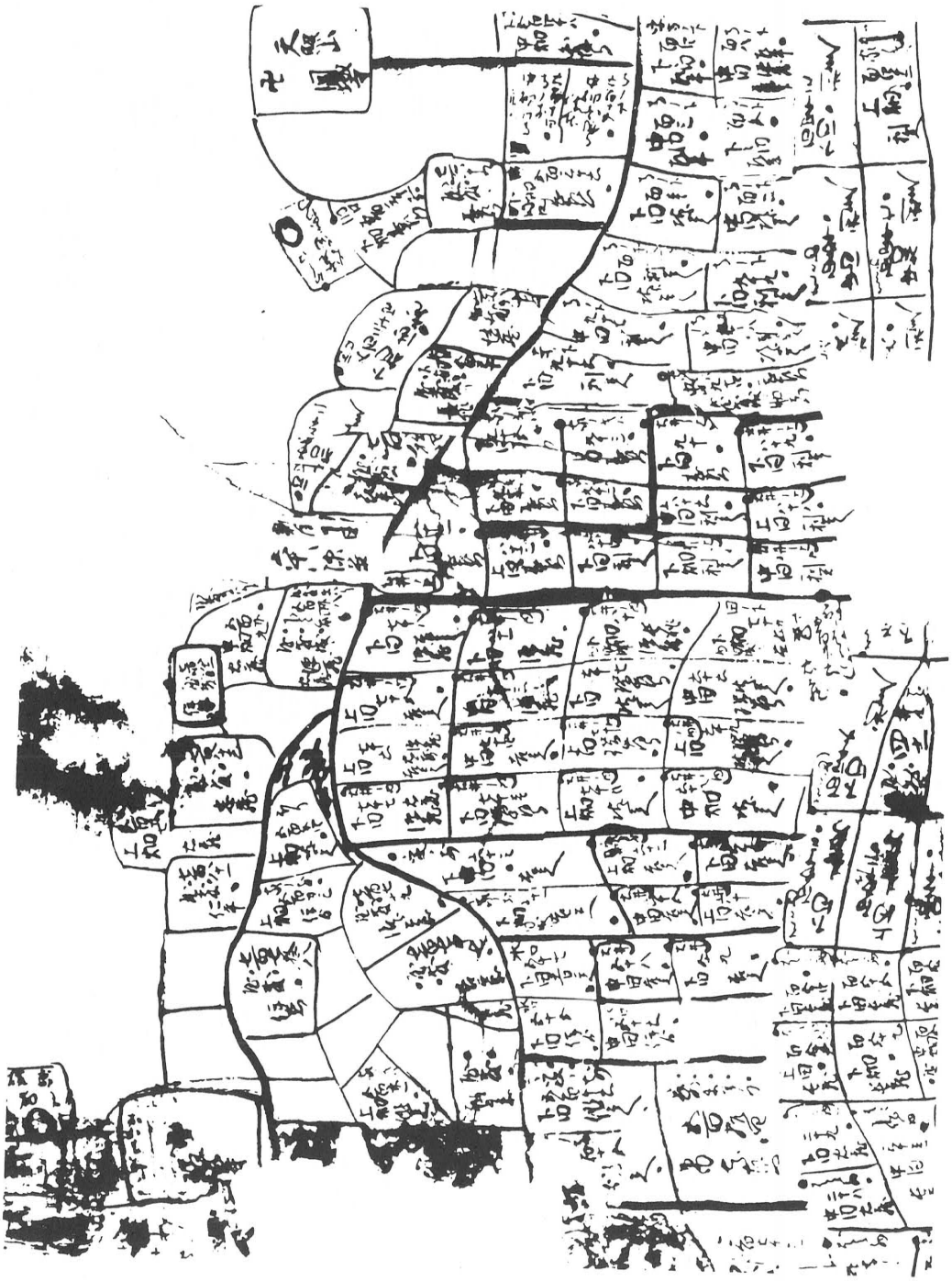
第9図をみると，「土井ノ内」・「土井ノ上」・「田ノ下」・「ほりはた」などの地名のところが畑として利用され，まわりの田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治



第９図　江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年）



第10図　江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年）



第11図　江馬氏下館跡付近絵図（江戸末～明治初年）

初年まではかつての館の構築物の形状が僅かではあるが残り，それらを利用した土地の利用が行なわれていたものといえよう。

館跡内郭部(土井ノ内)で，荒れはてた廃墟のまま残されていたと想定される庭園遺構も江戸時代末期の文化年間，江馬氏との関係の深い瑞岸寺(臨済宗)12世陽堂泰旭によって開発されたと伝えられている。埋立てられた土砂，畦畔に用いられた巨石のいずれをみても，それまで残されていた旧跡の遺構利用の結果であることがわかる。また遺構に近接する瑞岸寺本堂は文化末年の再建で，境内の拡張に際して巨石を用いた石垣を構築しており，石材は高原諏訪城から搬入したと村内では伝えられている。だが山城は石垣を用いた形跡はなく，また仮にそうだとしても搬入は不可能と考えられ，やはり下館跡の開田工事と併せて抜き取った石を再利用したものと考えられる。

このような開発の結果，明治21年の地籍図(第10図)をみると明らかなように，中通一帯はすべて田になっている。地割にかつての遺構の名残はみられるものの，地形的には明治初年まで残っていたかつての館の痕跡はすっかりなくなっていたようである。

(c)地形および原地形

土地改良事業施行前の地形(原地形)は，「土地改良事業計画概要書」(昭和47年10月31日付，岐阜県知事平野三郎宛，神岡町営土地改良事業施行認可申請書)によると，「旧来の圃場は極めて小さく，そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西１/60・南北１/350の傾斜で，地質は洪積層に属する。土質は地表から０～30cmまでは茶褐色粘質土質腐植土壌，30～80cmまでは黒色泥質土壌で花崗岩礫が混っている。80cm以上は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」とされている。具体的には，中通一体は南北に細長く緩傾斜で広がり，東側山麓から河川敷跡までの巾は南北に比して狭く，傾斜が急な地形であった。土地改良事業の施行に伴い，山麓の起伏が多い高地を削り取り，その土砂で段丘野尻の低地が埋められた。その結果，館跡西部の外郭部分は土砂の著しい移動がなされ原地形は失われてしまった。また中通一帯，江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく，土地改良事業とあいまって埋立て，宅地化，工場敷地等の開発も進み，市街地近郊として様相を一新し，かつての地形とはその姿を大きく変えている。

3　周辺の属城跡（図版１・２，第８図，第54～61図）

高原諏訪城跡：江馬氏下館の東側背後，二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上，保木戸平（城山）山頂に位置する。標高622m，比高270mである。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く，いかにも包囲された感じであるが，南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり，比較的攻撃しにくい位置にある。江馬氏は支配下の各地に城を築き，高原郷全体を要害としていたが，高原諏訪城は江馬氏の本城としてその中心となっ

ていたとされている。しかし，築城年代・築城者ともに不明である。本丸は東西20～24m・南北34mの平地で，ここには用途不明の径30～45cmの川石70数個が散在している。本丸から下った所に南北36mの土塁と思われる設備があり，それが途切れるところにおよそ９m四方の平地がある。本丸下には幅６～10m・長さ139mの鉢巻き状の腰曲輪がある。本丸の南方，直下12m下に東西の方向に山地を掘り切った幅1.8m・長さ36mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に，東西9.6m・南北10.8mの二の丸(出丸)がある。

東町城跡：現在の神岡町東町，江馬氏下館の北側，殿段丘の段丘野尻に位置する。『飛州志』によれば，江馬氏が武田氏に属した後，武田信玄の越中侵攻のため，その家臣山形昌景の縄張りでつくられ，後の金森長近の入国の際，その家臣山田小十郎が入ったとされている。『飛州志』には「江馬之御館」と記されている。

洞城跡：現在の神岡町麻生野，町の中心からやや高原川をさかのぼった麻生野集落の山上，標高630m，比高190mのところにある。「麻生野城」ともいわれる。『飛州志』には，城主は麻生野右衛門大夫直盛と記されており，築城者はこの直盛であると考えられる。また彼は永禄７年(1564年)に55歳(一説には57歳)で没しており，築城は天文頃と考えられる。江馬氏の支城の一つである。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正６年(1578年)８月18日夜，輝盛の軍勢に攻められ，慶盛は自害し，城も焼け落ちた。山頂を利用して二段ほどの平場を設けた簡単な構造の城である。

石神城跡：現在の神岡町石神にある。「杏城」・「二越城」ともいわれる。江馬時経の築城とされる。麻生野城と同様，山頂を利用して二段ほどの平場を設けた簡単な構造の城である。

なお，高原郷と鎌倉街道(越中と信州松本平とを結ぶ)とを結ぶ道に，下館そのものの中を通過し上宝を経て信州に出る道がある。麻生野城と石神城は共にこの古道沿いに，双方の展望に留意して築かれている。

寺林城跡：現在の神岡町寺林，玄蕃山と呼ばれる半独立峰頂部にあり，二段の平場が残っている。「玄蕃城」ともいわれる。高原郷の主要街道である越中東街道沿いにある。

政元城跡：現在の神岡町西にある。「山田城」ともいわれる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも，正本主馬の居城とも伝えられている。円形の平場と腰曲輪が残っている。高原郷の主要街道である越中東街道は巣山・十三墓峠を越える本道と，数河峠を越える脇道に分れるが，政元城はその分岐点の押えであった。

土城跡：現在の神岡町牧，高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。「鬼ケ城」ともいわれる。頂部に二段の平場がある。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎守之の居城であった。高原郷の主要街道は越中東街道であるが，もう一本東に越中と信州松本平を結ぶ鎌倉街道があった。高原郷と鎌倉街道を結ぶ道には，字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る道がある。土城はその分岐点に置かれ北方に備えると共に，属城越中中地山城(現

在の富山県上新川郡大山町)との連絡にあてられた。

梨打城跡：現在の吉城郡国府町八日町，古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峡に入ってまもなく，北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。『飛州志』には高原郷諏訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記されている。北飛騨の雄であった江馬氏が南方を固めるために造った出城と考えられるが，築城者，築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた時，本城高原諏訪城と共に落城している。城は，本丸・二の丸からなる整然とした縄張りであったと伝えられるが，現在では遺構は判然としない。『斐太後風土記』には，城地は東西72m・南北108mと記されている。

その他江馬氏持ち分の関係城跡には「八幡山城」・「吉田城」(神岡町)，「苧生茂城」・「尻高城」・「天元城」(上宝村)，「中地山城」(富山県上新川郡大山町)などがある。

(大平愛子)

第３章　江馬氏下館跡発掘調査の成果

１　調査前の知見（図版５～９・第12図・第１表）

江馬氏下館は北飛騨吉城郡の豪族である江馬氏の居館であることで知られ，1980年に国の史跡指定をうけた江馬氏城館跡の中心である。

1973年，「五ケ石(御花石)」と呼ばれる江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ地域の土地造成工事に伴う試掘調査で，広範囲にわたる遺構の存在が確認された。この調査では庭園遺構の概略がほぼ確認され，池に接続した礎石建物跡，館を囲む堀跡の存在も明らかにされている。これ以降，神岡町教育委員会は1978年にかけて調査区を拡大しつつ館内外の発掘調査を行った。耕地整理のため，耕作土はもとより遺物包含層の存在すら危ぶまれたが，成果は予想外に大きく庭園跡，建物跡，堀跡などの遺構が検出され，多くの土器，陶磁器類が出土している。以下の知見は調査概報(神岡町教育委員会1979)に基づくものである。(第12図参照)。

これによると江馬氏下館は東西100m，南北100mほどの規模で西を正面としており，堀は東側の山裾部を除いて館跡の三方を取り囲む形でめぐる。北堀は上幅４m，下幅1.5m，深さ１mの箱形で堀の内側には幅３m，高さ50cm～80cmの土塁状の高まりがみられる。西堀については上幅４m，深さ2.5mで地山をＶ字形に掘り込んだ薬研堀である。北堀と南堀の中心に幅７mの土橋状の開口部があり，館への導入部と考えられる。西堀は南堀には接続せずに途中で西方向へ鍵の手状に曲がって終わっており，またその埋土は自然の堆積でなく，整地土で一度に埋め戻されている。南堀は幅５m，深さ１mの箱形のもので，東部分についてはいったん埋められて整地された後に南側に新しく造りかえらえている。ただし園池の排水溝以西については旧堀跡をそのまま利用している状況がみられた。各堀は西堀を除いて，水の流れた痕跡がみられるとされる。庭園遺構は館の南西隅に位置しており庭園の石組み，池への導水路，池中の石組みや橋脚，またこれに付属する建物などが検出されている。石組みだけでなく池辺の施設や建物の配列，周辺の境界施設なども整備されていることから，京都の庭園様式を模倣して造られたものと考えられる。この庭園は，排水溝，導水溝をもち，園池からの排水溝は南堀の古い段階の堀に接続する。

館内の建物跡は，古い順に地山，黒色砂質土，茶褐色粘質土の３層においてみられ，館創立後，大きく３時期にわたって多くの遺構を同時期に廃棄し，広範囲な埋立て整地を行っていると推測される(基本層序については第３章第３節(a)参照)。建物跡には部分的な改築，新築によるものがあり，複数の時期にわたる建物もみられる。古い方の２層につい

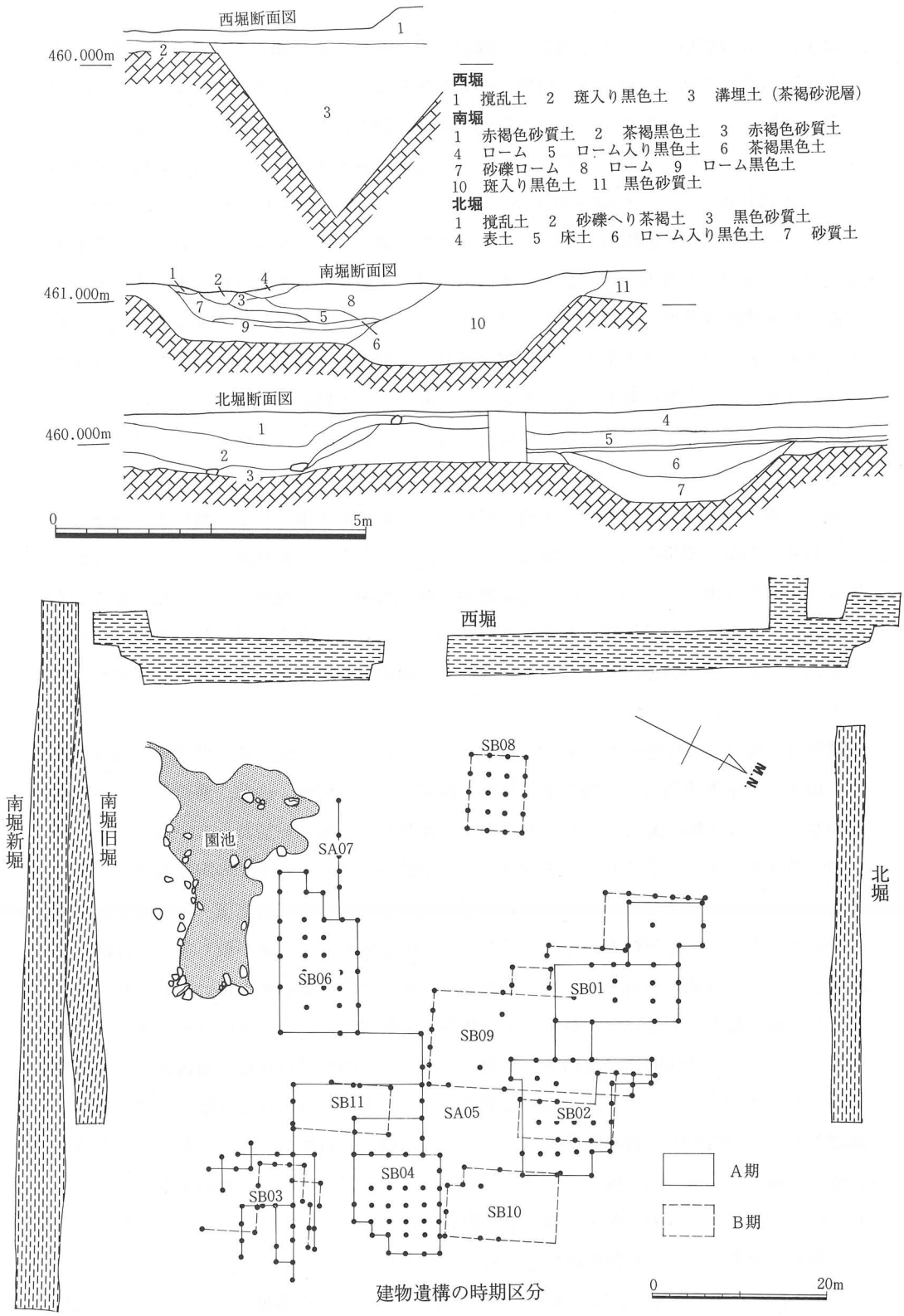
ては主に土層観察用トレンチで部分的に確認したのみであり，調査では最上層遺構面である茶褐色粘質土上面で11棟の礎石建物，堀立柱建物などのほか庭園跡を検出した。建物群は礎石や抜き取り穴の配置で，方位の違いから２時期あったことが確認され，報告書中ではこれをＡ期及びＢ期にわけて整理している。両者の新旧関係については一部礎石抜き取り穴の重複（SB03･SB11）や礎石の検出レベルからみてＡ期（SB01～SB07）がＢ期（SB08～SB11）に先行することが判明している。Ａ期建物は礎石，抜き取り穴，根石等の残存状態が良好で平面規模も推測できており，その内訳は，主殿に比定される庇をもつ礎石建物や炉跡を伴う礎石建物跡，園池に面した建物跡などである。Ｂ期建物はＡ期より一段高い位置にあるため，礎石，抜き取り穴等が削平され，平面規模は明瞭ではない。なおＢ期建物はその主軸方位が南堀の新しく造りかえられた堀の方位と概ね一致するとされる。各期の遺構には，建物跡の主軸方向，堀の重複状況等にみられるように前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれる。

78年度調査では館外部の調査も実施している。土地改良工事等により地山まで削平をうけており，明確な遺構の広がりは確認できなかった。ただし，館外部のＣ地区では方形の竪穴住居跡を検出している。このことは堀の外側が馬場などに使用されていた可能性があるものの，まとまった構築物が存在していなかったためと評価できる。報告書では江馬氏一族および家臣団の居館は地形もしくは戦略上の制約等の諸条件により分散して存在していたものとしている。

遺物は土師器皿を中心にして3500点程が出土しており，その出土量は堀の内側地区に多い。出土した中世遺物は，土師器皿，瓦器，珠洲，八尾，信楽，越前，瀬戸系，貿易陶磁器類などの土器・陶磁器で，これにわずかの金属製品，石製品が加わっている。唐津，伊万里，越中瀬戸も若干含まれるが調査報告では遺跡の主体となる中世の陶磁器を第１表にまとめている。出土遺物のなかでは土師器皿が最も多く，その成形技法・形態等には時間差を示すと考えられる特徴がいくつか見られる。国産陶器で出土量が最も多いのは瀬戸美濃製品である。白瓷系陶器をわずかに含むが，古瀬戸後期の製品が主体となる。器種的には天目茶碗，盤なども多いが，瓶子，すり鉢等も定量含んでいる。珠洲は壺，甕，すり鉢が出土しており，年代的にはⅡ期からⅤ期にかけてのものが見られる。報告書では常滑窯製品として報告されているが，ここで常滑系とされたものの中には富山県八尾窯の製品が確認される（吉岡1989）。貿易陶磁器類には青磁，白磁に，わずかの青花がみられ，青磁には蓮弁文碗，雷文碗，無文碗などが多く，白磁では口禿皿が多い。なお第１表では集計されていないが，土師器内耳鍋・土釜，滑石製石鍋なども出土しており，また金属製品として火縄銃の弾丸とされる鉛弾が注目される。

遺物からみた館の機能年代は，まず出土量の最も多かった土師器皿についてはその年代観

江馬氏城館跡



第12図　78年度調査遺構概略図（神岡町教育委員会1979より）

第1表　中世陶磁器一覧表（79年度報告分）

種類＼用途		食膳具		貯蔵具	調理具		暖房具	他	計	
		碗	皿	壺・甕	鉢	卸皿	火鉢			
土師器			847					3	850	1003
			152	1					153	
瓦　器							82		82	97
							14	1	15	
珠　洲				89	48			1	138	285
				113	34				147	
八尾ほか				57	1				58	79
				21					21	
信　楽				1					1	7
				6					6	
越　前				1					1	4
				1	2				3	
瀬戸美濃	白磁系	13	3		1			1	18	25
		3	2		1			1	7	
	鉄釉	99	7	29	71			5	211	347
		70	13	24	21			8	136	
	灰釉	46	21	49	98	9		2	225	331
		14	35	12	31	9		5	106	
中国製陶磁器	青磁	94	1		6			9	110	168
		45	12		1				58	
	白磁	3	12	1	5			19	40	64
			22	1				1	24	
	染付	2	2						4	15
		9	2						11	
	他	15						2	17	21
		4							4	
計		272	893	227	230	9	82	42	1755	2446
		145	238	179	90	9	14	16	691	
		417	1131	406	320	18	96	58	2446	

破片数集計：上段は堀の内側，下段は堀の外側の地区

が明らかではないが,陶磁器類は13世紀から16世紀にわたる各時期の遺物から構成される。報告書では13世紀から14世紀にかけてがその量的なピークとされる。量的には少ないが16世紀中頃までの遺物も一定量出土しており，館の機能年代はこの時期にまで下ると考えられる。出土した火縄銃の鉛弾なども館衰退期の様相を示していると言えよう。ただ，越前一乗谷で見られるような16世紀主体の遺物構成は明確には認められない。出土遺物の量的変化，組成などについての詳細な分析は，現在までのところなされてはいない。

従来の調査で検出された遺構・遺物はともに下館跡が南北朝から室町時代初期にかけて江馬氏一族の生活地であったことを示している。江馬氏にとって最盛期にあたる室町時代中期には，本遺跡を縮小もしくは廃墟となし，他に生活本拠を移したものと推定される。

（中田書矢）

2　調査の方法（図版４）

以上の調査前の知見に基づき，本年度は館を取り囲む三方の堀の実態と年代を確認するための資料を得ることを主な目的として調査を実施した。

78年度調査では,庭園跡に接続して検出された建物跡の軸に合せた一つの基準点を結び,延長した東西の軸とそれに直交する南北の主軸を基点としてグリットを設定している。今回の調査では残された前回調査の基本杭１(国土座標軸X=35878.577，Y=13064.049，標高455.555m)，２(国土座標軸X=35913.142，Y=13116.680，標高455.653m)を確認したうえで基本杭１上に測量原点Oを設置した。そして，基本杭１，２を結ぶ直線を主軸にとり，これに沿って南北をＸ軸，東西をＹ軸とした。測量原点Oから北東方向を第１象限，北西方向を第２象限，南西方向を第３象限，南東方向を第４象限として，北方向，東方向に正値を示す６ｍ方眼のグリットを設定し，杭を設置した。

以上の測量原点間の水平距離を光波測距儀を使用して計測し，これを基準として縮尺1/50（一部縮尺1/20)，等高線20cm間隔の平面図を作成した。

発掘調査区は，前回調査で東側の山裾部を除き館跡の三方を取り囲む堀の存在が確認されているが，それぞれの堀が想定される場所に北堀地区(X=7.8～X=9.0，Y=-0.4～Y=7.0の範囲)，南堀地区(X=-6.0～X=-7.5，Y=０～Y=11.0の範囲)，西堀地区(X=-2.1～X=6.0，Y=-0.5～Y=-1.6の範囲)を設定した。また館内部の未調査地区に館内部地区(X=0.5～X=3.0，Y=9.5～Y=10.5の範囲)，調査済地区に館内部Ａトレンチ(X=3.0～X=4.0，Y=-0.5～Y=9.5の範囲)を設定，さらに館外部の遺構の広がりを確認するために館外部Ｂトレンチ(X=18.0～X=18.5，Y=1.0～Y=1.5の範囲)を設定し調査を行った。南堀地区では新旧堀埋土の堆積状況の確認のためにSAトレンチ，SDトレンチ，旧堀の堀底確認のためにSBトレンチ，SCトレンチ，SEトレンチ，SFトレンチ，SGトレンチ，SIトレンチをそれぞれ設

定した。西堀地区では，堀の内側に想定された土塁の確認のために，WAトレンチ，WBトレンチを設定した。館内部の調査区では地山までの掘削を行っていない。基本層序については各地区ごとに調査区壁面で確認を行った。

調査面積は，北堀地区約240㎡，南堀地区約820㎡，西堀地区約379㎡，館内部地区約86.5㎡，館内部Ａトレンチ約93㎡，館外部Ｂトレンチ約９㎡，合計約1627.5㎡であり，76・77・78年度調査を合せた総調査面積は約9126㎡におよぶ。

遺物の出土地点は，原則的に平面に関しては３m単位の北東グリットで取り上げた。これは78年度調査時の３mグリット取り上げに準じている。立面に関してはレベルによって標高を測定した。

なお，グリット主軸は磁北から35度西へ振っている。　　（大川　進）

3　堀跡の発掘調査

（ａ）基本層序（第13図・第２表・第３表）

江馬氏下館跡は神岡町の南北を貫流する高原川の両岸に開けた河岸段丘上に立地しており，標高は館東部に山があることと関係し西から東にかけて高くなっている。特に今回設定した館外部地区と館内部地区の標高差は大きい。

各調査地区においてそれぞれ基本土層の観察を行っているが，ここでは堀跡地区の層序を中心に記述する。まず堀跡地区の堆積状況を示した後に館内外の堆積との比較を行い，さらに前回調査で確認された基本層序との対応関係を示したい。

本遺跡の基本層序については，各調査区の土層断面の観察により表土，土地改良土，カドミ汚染土，遺物包含層，地山１，地山２をそれぞれ確認している。表土は近現代の耕作土と土地改良に伴う客土からなっている。カドミ汚染土とは神岡鉱業所の排出したカドミウムによって汚染された旧耕作土のことであり，当地域は1970年以降休耕したままであった。汚染土上には明黄褐色砂質土の客土がなされる。遺物包含層については，本地域の土地整理事業や前回調査の削平をうけたためか堆積が認められる調査区は少ない。館を囲む三方の堀が掘り込まれる層を地山１とする。後述するが地山１については館内部の調査地区の層位と対応する。地山２は堀跡地区については各地区ともに確認しており，対応すると考えられる。

堀跡地区の基本層序：各堀跡地区で土層堆積の観察を行なっている。

北堀地区では調査区東壁(A-A')で層位の観察を行なっているが，表土は上から第１層黄褐色砂質土と第２層明黄褐色砂質土にわかれ，後者は土地改良に伴う客土である。第３層黒褐色弱粘質土はカドミ汚染土(旧耕作土)である(図版36の１)。調査地区の関係から地山１は確認できず堀の掘り込み面も明らかではない。

南堀地区の層位は堀に設けた土層観察用畦(D-D')で観察した。表土は第1層黒褐色砂質土である。第17層黒褐色砂質土および第29層暗褐色砂質土の上面が遺構検出面であり，堀はこの層から掘り込まれている。第17層，第29層を地山1とすると，第31層灰黄褐色砂質土が地山2に相当する(図版39)。当地区ではカドミ汚染土，及び土地改良土は確認されなかったが，これは前回調査に際して地山1上面までの掘り下げが行なわれたためと考えられる。

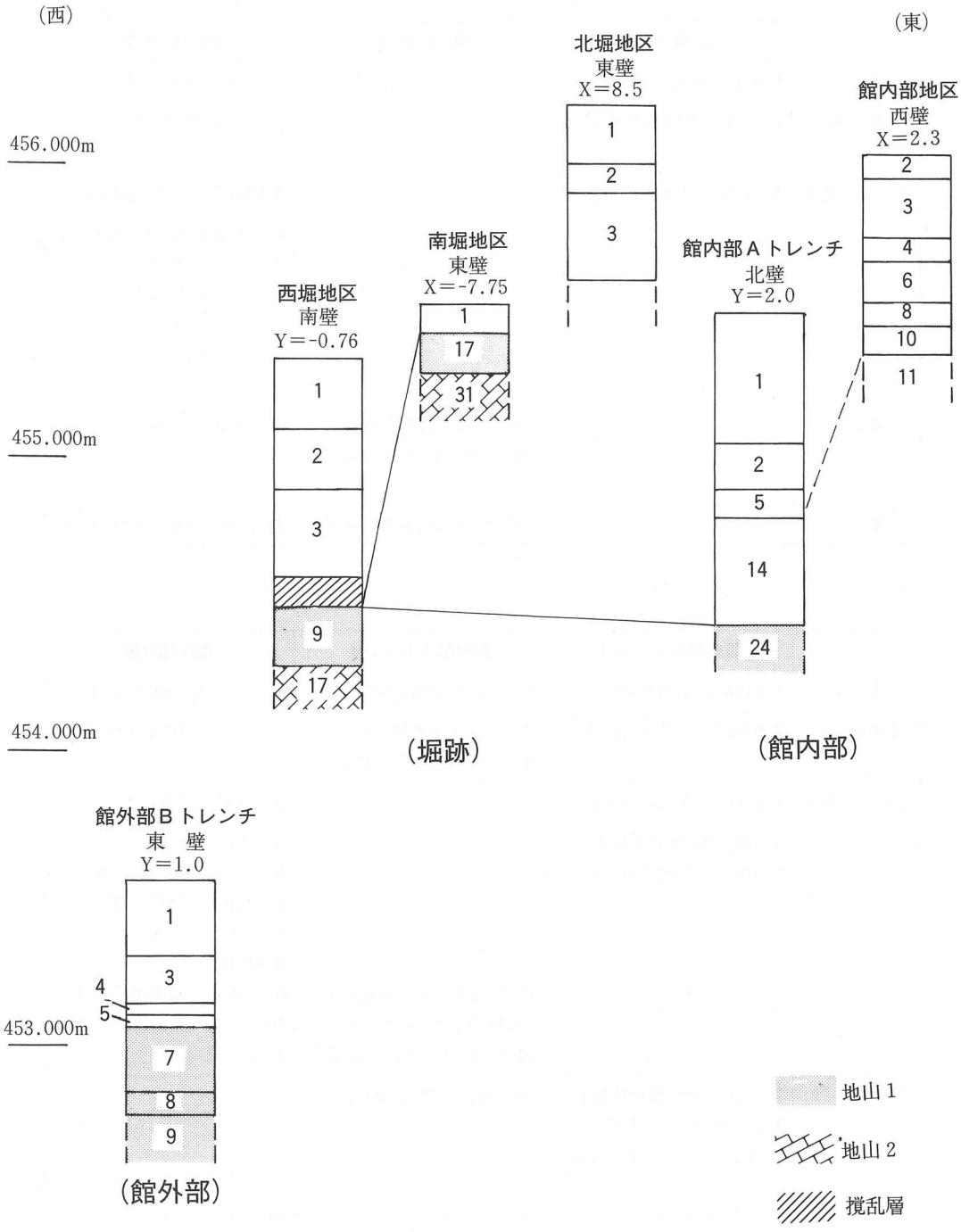
西堀地区の層位は，薬研堀に設けた土層観察用畦(I-I')で観察を行なっている。表土は上から第1層黄褐色砂質土と第2層明黄褐色砂質土に分かれ，後者が土地改良に伴う客土である。第3層黒褐色弱粘質土はカドミ汚染土(旧耕作土)であり，以下第4層鈍い黄色砂質土，第7層黒褐色土，第8層黒褐色土と続き，これらは遺物包含層である。第9層黒褐色土の上面が中世の遺構面であり，堀はこの層上面から掘り込まれている。第9層が地山1，第17層暗青灰色砂質土が地山2である(図版41の2)。

三方の堀はいずれも前回調査の知見と同様，地山1上面から地山2を掘り込んで造成されていると判断する。

館内部・外部地区層序との対応関係：今回の調査では堀跡地区のほかに，館内部に2調査地区，館外部に1調査地区を設けている。館の北方に設定した館外部Bトレンチでは東壁(O-O')で観察を行い，9層に分層できる。表土は上から第1層暗褐色砂質土と第2層明黄褐色粘質土に分かれ，後者は土地改良に伴う客土である。第3層黒褐色砂質土がカドミ汚染土(旧耕作土)である。以下第4層灰褐色粘質土，第5層黒褐色粘質土，第7層黒褐色粘質土，第8層黒褐色粘質土，第9層オリーブ黒色粘質土と続き，第7層の上面が遺構検出面である。調査地区が離れているため，堀跡地区及び館内部地区との対応は難しく，また明確に地山2と判断される層も確認できなかった(図版48)。

館内の北部に設定したAトレンチ層序は北壁(N-N')で観察を行った。表土は上から第1層黄褐色砂質土，第2層明黄褐色砂質土，第5層黄灰色砂質土に分かれる。第2層・第5層が土地改良に伴う客土である。第13層暗黒褐色砂質土上面が前回調査の遺構検出面である。前回調査ではこの面で最上部の遺構群であるA・B両期の建物遺構を検出している。本地区はその大部分で前回調査時に表土掘削作業が行われているため，カドミ汚染土及び土地改良土は確認されなかった。なおこのトレンチについては西堀地区に拡張を行い，土層の対応関係を確認した。第24層黒色弱粘質土には西堀地区で確認された堀を掘り込んでいる地山1が対応する(図版47)。

館北東部に設定した館内部地区では西壁(M-M')で観察を行ない，11層に分層できる。表土は上から第1層黄褐色砂質土，第2層明黄褐色砂質土の2層に分かれ，後者は土地改良に伴う客土であり，第3層黒褐色土がカドミ汚染土(旧耕作土)である。以下第4層黒褐



※図中の番号は第2表及び図版中の層位に対応

第13図 基本層序模式図

第2表　基本層序対照表（94年度調査分）

	北堀地区	南堀地区	西堀地区
表　土	1 10Y5/3黄褐色砂質土	1 10YR2/3黒褐色砂質土	1 2.5Y5/3黄褐色砂質土
土地改良土	2 2.5Y6/6明黄褐色砂質土		2 2.5Y6/6明黄褐色砂質土
カドミ汚染土	3 10YR2/2黒褐色弱粘質土		3 10YR2/2黒褐色弱粘質土
			4 2.5Y6/4鈍い黄色砂質土 7 5YR2/1黒褐色土 8 7.5YR3/1黒褐色土
地山1		17 10YR2/3黒褐色砂質土 29 10YR3/4暗褐色砂質土	9 10YR2/2黒褐色土
地山2		31 10YR6/2灰黄褐色砂質土	17 10BG4/1暗青灰色砂質土

	館外部Bトレンチ	館内部Aトレンチ	館内部地区
表　土	1 10YR3/3暗褐色砂質土	1 2.5Y5/3黄褐色砂質土	1 2.5Y5/3黄褐色砂質土
土地改良土	2 10YR6/8明黄褐色粘質土	2 2.5Y6/6明黄褐色砂質土 5 2.5Y5/1黄灰色砂質土	2 2.5Y6/6明黄褐色砂質土
カドミ汚染土	3 10YR2/3黒褐色砂質土		3 10YR2/2黒褐色土
	4 5YR4/2灰褐色粘質土 5 10YR2/3黒褐色粘質土	13 7.5YR2/2暗黒褐色砂質土 14 10YR2/2黒褐色弱粘質土 23 10YR5/4鈍い黄褐色砂質土	4 10YR2/3黒褐色土 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土 6 10YR3/2黒褐色砂質土 7 7.5YR5/6明褐色土 8 10YR2/1黒色土 9 7.5YR2/2暗黒褐色砂質土 10 2.5Y3/1黒褐色砂質土 11 10YR4/4褐色土
地山1	7 7.5YR2/2黒褐色粘質土 8 10YR3/2黒褐色粘質土 9 5Y3/2オリーブ黒色粘質土	24 2.5Y2/1黒色弱粘質土	
地山2			

※表中の番号は第13図及び図版中の層位に対応

第3表　基本層序対照表（79年度報告分）

層位	基本土層	細部分類
Ⅰ	表土 耕作土 土地改良	1．土地改良混入土　4．土地改良混入土（黒色土） 2．〃（砂れき入り黒色土）　5．撹乱層 3．〃（灰色白砂質土）　6．表土（従来の耕作土）
Ⅱ	床土	1．盤土 2．〃（ローム入りがはっきりしているもの）
Ⅲ	褐色土	1．茶褐黒色土　12．花崗岩質性砂れき、れき入り褐色土 2．金属質性赤褐色粘質土　13．粘土質性灰白色土 3．赤褐色土　14．花崗岩性砂れき入り黒色粘質土 4．ふ入り黒色土　15．花崗岩質性れき 5．砂れき入り茶褐色土　16．灰白色砂質土 6．茶褐色粘質土　17．ふ入り茶黒色土 7．砂れき入り黒色土　18．赤褐色砂質土 8．黒色土（炭片混入）　19．砂れき入り粘質土 9．灰白色砂質土　20．ローム入り黒色粘質土 10．ローム入り黒色土　21．砂れき及びローム沈澱土 11．ローム　22．灰層
Ⅳ Ⅰ	黒色砂質土	1．ふ入り黒色土　4．ふ入り灰白色土 2．黒色砂質土　5．ふ入り茶黒色土 3．黒色粘質土
Ⅳ Ⅱ	茶褐色土	1．赤褐色土 2．花崗岩質性れき入り茶黒色土
Ⅴ	地山	緑青色砂質土

（神岡町教育委員会 1979より）

色土，第6層黒褐色砂質土，第8層黒色土，第10層黒褐色砂質土と続き，これらは遺物包含層であると考えられる。中世の遺構面は第11層褐色土上面で検出した。遺構は前回調査でA期・B期とされた最上層の建物跡，溝跡を検出している。A・B期の遺構面構築土はAトレンチでも確認しており，これと対応させることができる(図版45)。館内部地区では地山1を確認していない。館内部地区と堀跡地区の層位の対応からは，A・B期の遺構群が地山1に広範囲な埋め立て整地(Aトレンチ第13層・第14層・第23層)を行なって構築し

ていることが確認できる。

前回調査基本層序との対応関係（第２・３表）：調査各地区の層位の対応関係は第２表に示した。館内部地区と館外部地区の対応関係は明確ではない。南堀地区及び館内部Ａトレンチにおいてカドミ汚染土，及び土地改良土の堆積がみられないのは前回調査に際し，表土除去作業が行われたためであると考えられる。第３表は79年度報告で示された基本層序表である。前回調査では館を囲む三方向の堀がⅣ－Ⅰ層黒色砂質土から掘り込まれていることが確認されており，これには今回調査の各堀跡地区で対応した地山１が一致する。地山２については79年度報告のⅤ層緑青色砂質土が対応すると考えられるが，館内部地区では地山１以下の層位を確認していない。館内部で広範囲にわたる整地を行い，新しく構築する時期が館創立後３時期あったとする見解についてであるが，館内部Ａトレンチでは地山１の上層に最上層遺構群であるＡ期・Ｂ期（２期・３期）の遺構面が構築されている。前回報告では２期・３期遺構面は第Ⅳ層上層の第Ⅲ層褐色土に包含されるとされ，今回調査の理解と一致する。（中田書矢・米出敬子）

（ｂ）遺構

北堀地区

X=7.8～9.0，Y=-0.4～7.0の範囲に調査区を設定した。調査区規模は，長さ44.5m，幅は東壁6.9m，西壁5.0mである（調査面積：約252㎡）。本調査区では，館の北辺と考えられる堀跡のみの調査を行った。なお，78年度調査では堀の内側に幅約３mの土塁状の高まりを確認しているが，今回は調査区の関係等からこれを確認するには至らなかった。

北堀（図版10・11・36）：箱堀である。方位は南北方向を主軸とすると，Ｎ-60°-Ｅをとる。検出長は40.9mを測る。堀幅は最大で上場6.5m・下場1.5m（Y=3.3ライン），最小で上場2.75m・下場1.0m（Y=4.0ライン）を測る。立ち上がりはそれぞれY=3.3ラインで北側60°南側42°，Y=4.0ラインで北側61°南側53°である。深さは0.6～1.0mを測り，底面は平らである。底面レベルは調査区東端で454.369m，調査区西端で453.107mであり，館東部に山があることに関係し，地形にあった勾配が見られる。78年度調査Ⅰ区とY=0.0～0.5，Y=1.0～2.0，Y=3.5～4.0，Y=4.5～7.0の範囲で重複しており，そのうちY=3.5～4.0トレンチは今回調査において攪乱として確認した。

北堀の埋土は調査区東壁（Y=7.0ライン）で観察を行った。地表下約20cmの第１層黄褐色砂質土が表土である。第２層明黄褐色砂質土は土地改良に伴う客土である。第３層黒褐色弱粘質土はカドミ汚染土（旧表土）である。第４層黒褐色砂質土から第11層褐灰色粘質土が堀の埋土である。このうち第５層黒褐色砂質土（一部黄褐色土が混じる）から第９層暗黒褐色粘質土は館外部からの流れ込みの層と考えられる（図版36の１）。調査区の関係から各堀跡地区で対応した地山１については確認できなかった。旧状は空堀であったと考えられる

が，埋土の最下層には褐灰色粘質土が僅かに堆積しており，堀底は泥湿状を呈していたと推定される。また堀の北側斜面X=8.7～9.0，Y=1.0～3.0の範囲に集石を検出した。径10～40cmの自然石が堀の西端より東へ約6.5mの地点から，東西約11mの範囲に散在している。石の中には建物の礎石と考えられるものもあり，同様の石が堀底でもいくつか検出された。これらは土層断面で確認された館外部からの流れ込み層に伴うものと考えられる(図版36の２)。

遺物は土師器皿，瀬戸美濃，珠洲，青磁，八尾，瓦器などが出土した(図版49･50の23～26)。出土遺物には二次被熱をうけているものが多く認められる。なお，堀埋土の遺物中で最も新しい年代を示すものは，大窯第２小期の端反皿(図版49の22)である。

(三林健一・岩崎誉尋)

南堀地区

X=-6.0～X=-7.5，Y=０～Y=11.0の範囲に土層観察用畦を残して，調査区を設定した。調査区規模は，長さ69.4m，幅は東壁9.5m，西壁8.3mである(調査面積：約820m²)。西壁は後に南側へ8.0m拡張した。本調査区では，方位の異なる２本の堀が検出され，古い堀を埋め戻した後，角度を東へ振って新しい堀を造りかえている。堀は，古い方を旧堀，新しい方を新堀とする。

南堀（図版12～21・37～39）：両者は，Y=5.0ライン付近で重なっている。２本の堀の切り合いと土層の堆積状況を調べるため，６箇所で土層の観察を行った。観察を行った地点は，調査区西壁，SAトレンチ西壁(Y=2.0ライン)，土層観察用畦(Y=4.7ライン)，SFトレンチ東壁(Y=6.0ライン)，SGトレンチ東壁(Y=6.6ライン)，調査区東壁である。まず，調査区西壁層序では，地表下約50cmの第１層及び第２層が表土で，第３層から第17層が堀埋土である。そのうち第３層から第10層が新堀，第11層から第17層が旧堀の埋土である。堀埋土のうち，第４・５・６・13･16層には地山ブロックが混じる。SAトレンチについては，新旧堀の堀底部分についてのみ土層の観察を行った。第１層から第７層が堀埋土であり，第１層及び第２層が新堀埋土，第３層から第７層が旧堀埋土である。第２・３・６層には地山ブロックが混じる。土層観察用畦では，地表下30cmの第１層が表土で，第２層から第30層が堀埋土である。第17層及び第29層上面が中世の生活面であると考えられ，堀は，この面を掘り込んでつくられている。第２層から第16層が新堀の埋土である。堆積状態により大きく２段階の掘り込みの跡が見られる。第２層から第９層は新しい段階の埋土であり，第10層から第16層はこれに先行する自然堆積である。第18層から第28層が旧堀の埋土である。旧堀は堆積状態により３段階の掘り込みの跡が見られる。第18層から第20層は新しい段階の埋土であり，堀廃絶に伴うと考えられる人為的な堆積である。第21層から第24層がそれに先行する埋土である。このうち，第21層から第23層は館内部からの流れ込みの層と考え

られる。第25層から第28層は最も古い段階に伴う自然堆積である。また，第30層は新堀に伴うSD02の埋土である。旧堀については，第24層の上面でSK02，SP25などの遺構が明確に検出された為，その上面で遺構検出を行っている。第7・13・16・18～27層には地山ブロックが混じる。SFトレンチについては，旧堀埋土の堆積の観察を行い，第1層から第3層の堆積が確認された。このうち，第1層及び第3層は地山ブロックが混じる。SGトレンチについてもSFトレンチと同様，旧堀埋土の堆積の観察を行った。第1層から第8層の堆積が確認され，第3・4・7・8層には地山ブロックが混じる。調査区東壁については，新堀埋土の堆積の観察を行った。第1層から第7層の堆積が確認される。第1層及び第2層は攪乱層である。第3・4・6・7層にシルト層と砂層が交互に堆積しているのがみられるが，確認されるのは調査区東壁のみであり，この部分のみ水がたまっていた可能性がある。攪乱が著しく地山1を確認するには至らなかった。また，各壁の土層の対応関係であるが，調査区西壁の第10層，SAトレンチ東壁の第2層，土層観察用畦の第13層，調査区東壁の第7層が対応し，この層より最も多くの遺物が出土した(図版51の51～84・52・53・54の115・116:新堀最下層粘質土)。調査区東壁の第4層にみられる地山の流入と考えられる層は土層観察用畦の第14層に対応する。旧堀においては，調査区西壁の第15層，SAトレンチ西壁の第6層，土層観察用畦の第27層が対応する(図版14～16・39)。

旧堀（図版37・38）箱堀である。方位は南北方向を主軸とするとN-55°-Eをとる。検出長は44.9mを測る。堀幅は最大で上場4.1m・下場3.3m(Y=6.0ライン)，最小で上場3.2m・下場2.4m(Y=1.0ライン)を測る。立ち上がりはそれぞれY=6.0ラインで北側48°南側45°，Y=1.0ラインで北側48°南側43°である。深さは0.5～1.10mを測り，底面は平らである。底面の検出レベルは調査区東端で454.478m，調査区西端で454.215mであり，地形に伴う勾配が見られる。Y=7.5ラインで途切れており，これ以東は未調査のため不明である。第24層の上面で遺構検出を行ったところ，ピット5，土壙1を検出した。堀については完掘は行わず，トレンチを入れて部分的に堀底を確認した。トレンチをいれた地点は，SBトレンチ(Y=3.7ライン)，SCトレンチ(Y=4.3ライン)，SDトレンチ(Y=4.7ライン)，SEトレンチ(Y=5.0ライン)，SHトレンチ(Y=7.0ライン)，SIトレンチ(Y=7.5ライン)である。土層観察用にあけたSFトレンチでは，掘形から舌状に張り出す遺構が検出されたが，部分的な検出しか行っておらず遺構の性格については不明である(図版13の2)。また，Y=4.0ラインに20cm前後の石が多く検出されたが，これらは旧堀廃絶時に投棄されたものと考えられる。埋土からは土師器皿などが出土している(図版50の27～49)。

SK02（図版18の2・19の1・38）調査区の中央北寄り，X=-6.5，Y=5.5に位置する。直径1.35m，底径1.10m，深さ35.1cm，検出レベル454.610mを測る土壙である。土層観察用畦の旧堀埋土第24層上面で検出された。埋土は黒褐色砂質土であり，土師器皿1点が出土

した(図版54の131)。

新堀（図版37･38）箱堀であり，主軸方位はN-65°-Eをとる。検出長は67.7mを測る。堀幅は最大で上場6.3m・下場5.1m(Y=11.0ライン)，最小で上場3.8m・下場2.0m(Y=3.0ライン)を測る。Y=11.5ラインで北に張出している。立ち上がりはそれぞれY=11.0ラインで北側38°南側40°，Y=3.0ラインで北側45°南側30°である。深さは0.5～0.86mを測り，底面は平らである。底面の検出レベルは調査区東端で454.834m，調査区西端で454.460mであり，館東部に山があることに関係し地形にあった勾配が見られる。埋土の最下層である暗オリーブ褐色粘質土の堆積は薄く，旧状は空堀であったと考えられるが，堀底は泥湿状を呈していたものと推測される。土層確認の為，Y=7.5ラインにSJ１トレンチ・SJ２トレンチをあけたが，これは78年度調査のトレンチの跡である。遺物は，土師器皿を中心に15世紀後半から16世紀初頭のものがまとまって最下層粘質土層より出土した(図版51～54の123)。なお，最下層粘質土層からは中国製青花の端反皿(図版52の96)が出土している。

SD02（図版17の２，３･37･38）新堀の堀底で検出した。堀のラインと平行に伸びており，新堀と同時期のものと推定される。主軸方位はN-65°-Eで，検出長は50.22m，幅は最大38.0cm，最小20.0cm，深さは，最も深いところで11.4cm，最も浅いところで3.3cmを測る。調査区の東壁より伸びるが，途中Y=6.5ライン付近で一度途切れる。その後Y=3.0ライン付近まで伸びるが，西に向かって浅くなっていく。土師器皿，瀬戸美濃(図版54の133)などが出土している。

堀以外の遺構　堀以外の遺構として，柱穴31，土壙２，溝４が検出された。

SD01（図版17の１･37）：調査区の西端X=-7.0～-8.5，Y=０の範囲に位置する。溝の主軸方位はN-35°-Wで，検出長は7.95m，幅は最大1.15m，最小80cm，深さ17.2cm，検出レベル455.200mを測り，埋土は黒褐色土である。新堀によって切られているため，旧堀に伴うものである可能性がある。調査区壁に沿っているため，規模，形状は不明であるが，現代農道に沿って南方へ延びている。遺物は出土していない。

SD03（図版37）：旧堀の堀形X=-6.0，Y=4.0に位置する。溝の主軸方位はN-36°-Wで，検出長は1.55m，幅55cm，深さ2.9cm，検出レベル455.200mを測り，埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SD04（図版38）：旧堀の堀形X=-6.5，Y=8.0～8.5の範囲に位置する。溝の主軸方位はN-74°-Wで，検出長は3.35m，幅35cm，深さ9.3cm，検出レベル455.130mを測り，埋土は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SD05（図版38）：旧堀の堀形X=-6.0～-6.5，Y=8.0～8.5の範囲に位置する。溝の主軸方位はN-64°-Wで，検出長は3.22m，幅2.25m，深さ13.4cm，検出レベル455.120mを測り，埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SK01（図版37）：調査区の西端南寄りX=-8.0，Y=0.0付近に位置する。直径1.35m，底径1.05m，深さ47.5cm，検出レベル455.220mを測る土壙であり，埋土は黒褐色砂質土である。SP08を切っている。遺物は出土していない。

SK03（図版38）：旧堀の堀形X=-6.0，Y=5.5付近に位置する。直径75cm，底径70cmを測る土壙である。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SK04（図版19の2・38）：調査区中央部南寄りX=-7.5，Y=6.5付近に位置する。直径95cm，底径75cmを測る柱穴である。埋土は黒色砂質土である。堀廃絶後の遺構であり，新堀埋土を掘り込んだものである。SK05・SK06と同時期とも考えられるが，遺物は出土していない。

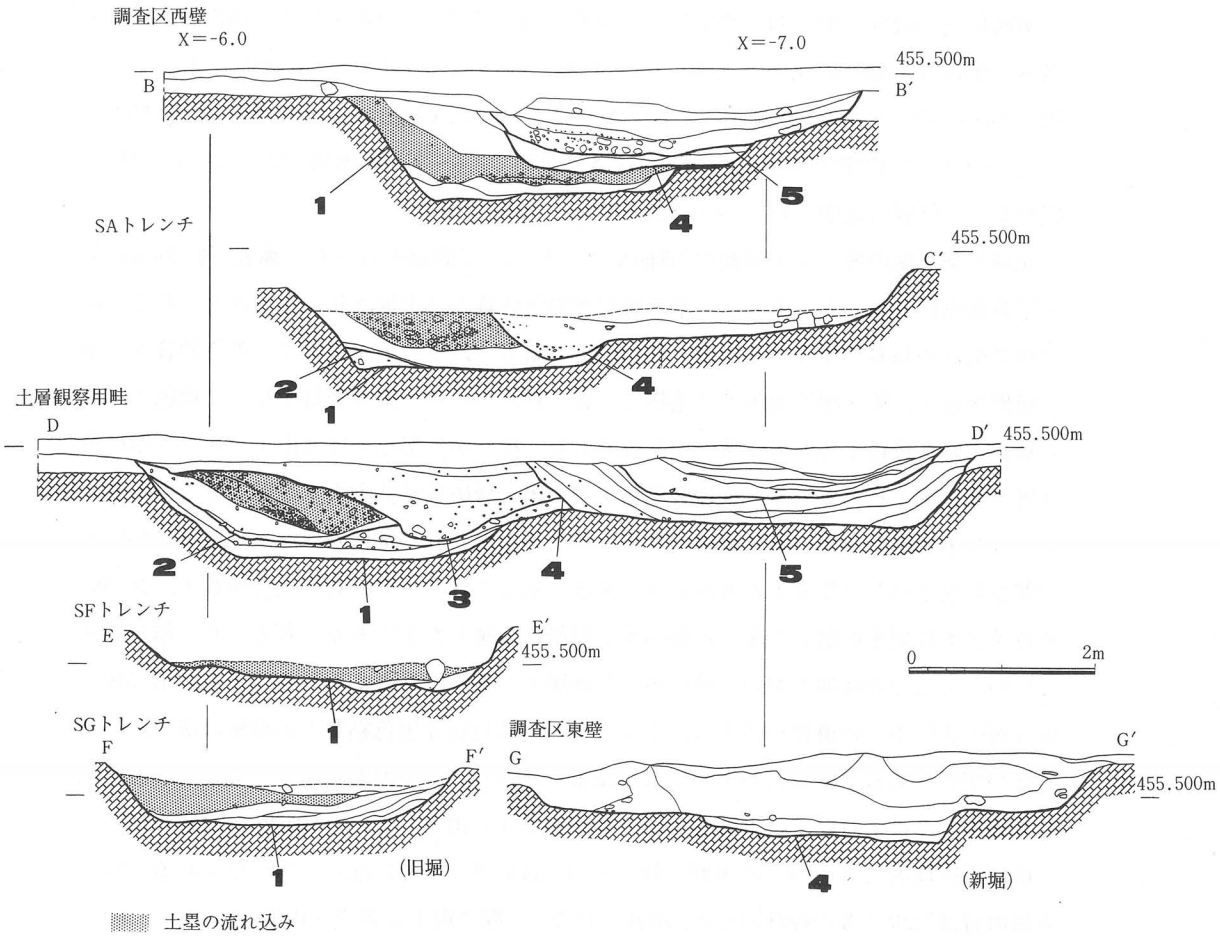
SK05（図版20・38）：調査区東部北寄りX=-6.5，Y=9.0付近に位置する。直径1.20m，底径90cmを測る柱穴である。埋土は上から第1層暗褐色砂質土，第2層黒褐色砂質土（地山ブロック混），第3層黒褐色砂質土の順に堆積している。堀廃絶後の遺構であり，新堀埋土を掘り込んでいる。SK04・SK06と同時期と考えられる。瀬戸美濃の志野丸皿（図版54の132）が出土した。

SK06（図版21・38）：調査区東部北寄りX=-7.0，Y=10.0付近に位置する。直径1.17m，底径1.05mを測る柱穴である。埋土は上から第1層黒褐色砂質土（地山ブロック・礫混），第2層黒褐色砂質土（地山ブロック混），第3層黒褐色砂質土の順に堆積している。堀廃絶後の遺構であり，新堀埋土上から掘り込まれたものである。SK04・SK05と同時期と考えられる。土師器皿が2点出土した。

遣水遺構（図版6・37）：調査区の北西部X=-6.0，Y=0.3に位置する。前回調査で検出された庭園に伴う石組の遣水遺構を旧堀の肩部で再確認した。

南堀の変遷（第14図）：南堀の変遷は，大きくみて新旧2時期あり，それぞれの堀での細かい掘り込みも合わせて6段階に分けることができる。1段階目は旧堀が掘られた時期である。自然堆積の後，2段階目の掘り込みが行われている。SK02などの遺構はこの段階のものである。2段階目の堀は館内部の土塁の流れ込みと考えられる層によって埋められている。その後3段階目の掘り込みが行なわれ，これも人為的に埋められている。次に方位を東に振って4段階目の堀にあたる新堀に作りかえられる。5段階目は自然堆積によって埋まった後，新たに掘り込まれたものである。6段階目は新堀廃絶後の時期であり，調査区東半で新堀埋土を掘り込んでいるSK04・SK05・SK06等がこれにあたる。なお，SK05からは17世紀の瀬戸美濃の志野丸皿（図版54の132）が出土している。また，旧堀には館内部からの土塁の流れ込みと考えられる地山ブロック混じりの層がみられるが，新堀にはみられない。このことから新堀段階には土塁が伴っていなかった可能性が指摘できる。堀からは15世紀から16世紀初頭の遺物が主に出土したが，遺物年代観による旧堀と新堀の時期

差は明確ではない。内部建物と堀の関係についてみると，新堀は79年度報告ではＢ期とされる建物群とほぼ主軸方位を同じくし，同時期に使われていたと推測されている。今回知見の４段階・５段階目がこれにあたる。旧堀と方位を同じくする建物遺構は79年度報告の成果からは見られない。なお，79年度報告では新堀は旧堀の肩にある遣水遺構の継続利用を意識して付け替えられているとされている。　（大平奈央子）



第14図　南堀土層堆積図（縮尺1/80）

西堀地区

X=-2.1～6.0，Y=-0.5～-1.6の範囲で土層観察用畦を２本残して調査区を設定した。調査区規模は長さ50.5m，幅は北壁7.5m，南壁5.0mである(調査面積:約379㎡)。本調査区では，館の西辺と考えられる堀と館内部への導入部である２本の土橋が検出され，北から土橋１，土橋２とした。検出された堀は地点によって形状が異なる。館の正面にあたる土橋２の両脇では急斜面に仕上げられた鋭利なＶ字型をした薬研堀が検出された。土橋１の北側では箱堀が検出された。

西堀（図版22～29・40～44）：西堀は館内部Ａトレンチの第９層黒褐色土を掘り込んでつくられており，薬研堀・箱堀は方位が僅かに異なる。

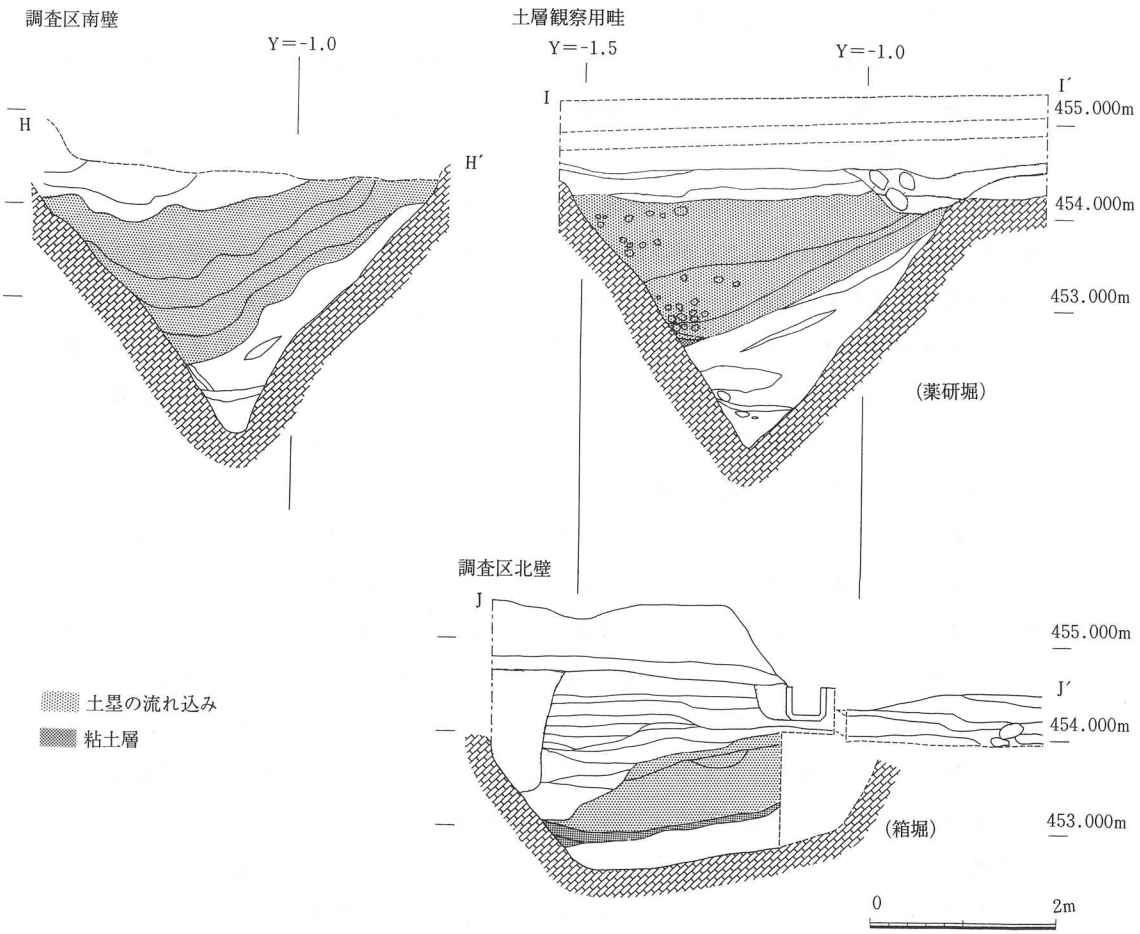
薬研堀（図版26・40・41）南北方向を主軸とするとＮ-35°-Ｗをとる。検出長35.0mを測る。堀幅は土橋２の北側で上場4.7m・下場0.5m(X=2.5ライン)，南側で上場4.3m・下場0.2m(X=-2.0ライン)を測る。立ち上がりはそれぞれX=2.5ラインで西側60°東側52°，X=-2.0ラインで西側50°東側54°である。深さは北側で2.6～3.0m，南側で2.9～3.0mを測る。底面レベルは堀の北端で451.750m，南端で451.604mである。

北側の薬研堀の埋土は土層観察用畦(X=2.0ライン)で観察を行った。地表下約30cmの第１層黄褐色砂質土が表土である。第２層明黄褐色砂質土は土地改良に伴う客土である。第３層黒褐色弱粘質土はカドミ汚染土(旧表土)である。以下の第４層にぶい黄色砂質土，第７層黒褐色土，第８層黒褐色土は遺物包含層と考えられる。第５層暗オリーブ褐色土，第６層にぶい黄橙色土は近現代溝の攪乱層である。第９層黒褐色土は地山１であり，堀は第９層上面を掘り込んでいる。第10層黒色土から第16層灰色砂質土までが堀の埋土である。このうち第10層から第12層には地山ブロックが多く混じり，堆積の状況から堀廃絶時に館内部から崩された土塁盛土の流れ込みであると想定された。第15層褐灰色砂質土，第16層灰色砂質土は堀を掘削した後，比較的早い段階に堆積した土であると考えられ，館が機能していた大部分の時期の堀底は第15層，第16層上であったと考えられる。また，第15層，第16層の砂層からの遺物の出土はほとんどない。第14層赤黒色粘質土の堆積は薄く，当時の堀が空堀であるが堀底にわずかに水が溜まっており，底が泥湿状を呈していたことを示している。この薬研堀では土師器，珠洲等がわずかに出土している(図版56の155～157)。

南側の薬研堀には土橋２の南側に幅0.8～1.5mを測る方形の掘り込みが見られる。堀の東側の肩は近現代溝の攪乱のため，明確ではない。堀の埋土は調査区南壁（X=-2.0ライン）で観察を行った。第４層黄灰色砂質土から第12層灰オリーブ砂質土までが堀の埋土である。このうち，第４層黄灰色砂質土から第７層黒色粘質土(第６層黒褐色粘質土を除く)には地山ブロックが多く混じる。なお，第４層から第７層は堆積の状況から館内部からの流れ込みの層と考えられる。流れ込みの層は，後述する堀内側の土塁からのものであると考えら

れる。第８層褐灰色砂質土から第12層灰オリーブ色砂質土は堀を掘削した後，比較的早い段階で堆積した砂であると考えられ，第８層上が館が機能していた大部分の時期の堀底と考えられる。

箱堀（図版22・27の１･40･42）土橋１から北へのび，方位は南北方向を主軸とすると，N-45°-Wをとる。検出長は7.4mを測る。堀幅は上場4.5m・下場が2.0m(X=5.5ライン)を測る。立ち上がりはX=5.5ラインで西側40°東側35°である。深さは1.2～1.5mを測り，底面は平らである。底面レベルは調査区北端で451.740m，土橋１の際で453.107mである。堀の東側の肩は近現代溝による攪乱のため，明確ではない。堀の埋土は調査区北壁(X=6.0



第15図　西堀土層堆積図（縮尺1/80）

ライン)で観察を行った。地表下約60cmの第1層黄褐色砂質土が表土で第2層明黄褐色砂質土が土地改良に伴う客土である。第3層黒褐色土は近現代溝の攪乱層，第4層黒褐色粘質土は現代コンクリート溝の攪乱層である。堀の埋土は第12層黒色弱粘質土から第23層灰色砂質土までである。なお，第18層黒褐色砂質土から第20層黒褐色砂質土には地山ブロックが多く混り，館内部からの流れ込みの層であると考えられる。堆積の状況からこの層は後述する堀内側の土塁盛土の流れ込みであると考えられる。第23層は堀を掘削した後，比較的早い段階で堆積した砂であると考えられ，館が機能していた時期の堀底は第23層上であると推定される。また，第21層，第22層の堆積は薄く，当時の堀底にわずかに水が溜まっており，泥湿状を呈していたことを示している。箱堀では土師器，瀬戸美濃，珠洲，八尾，瓦器等が出土している(図版56の147～154)。

各層位の対応関係であるが，最下層の粘土層である土層観察用畦の第14層と調査区北壁の第21層・第22層が対応する。調査区南壁の第8層と土層観察用畦の第15層と調査区北壁の第23層が対応する。　(堀内大介)

土塁（図版28・44）：薬研堀及び箱堀の土層の観察と79年度報告の北堀での知見より，堀の内側に土塁が存在することが想定されたため，館内部からの流れ込みの層が確認された西堀調査区東壁X=5.25，Y=-0.5の地点から，東方に長さ約5.4m，幅約1.2mのWAトレンチを拡張設定した。更に，WBトレンチをWAトレンチの南方約4.5mの地点に長さ約1.9m，幅約1.1mの大きさで設定した。なお，WBトレンチは土塁だけでなく，土橋1上面で検出されたSX01の範囲を確認することも目的とした。土層観察は両トレンチとも北壁で行った。WAトレンチは，23層に分層できる。土塁状の盛り上がりは第22層の黒褐色土に認められ，これを土塁の基底部と考えると，第6層にぶい黄褐色土，第7層黒褐色土，第8層暗褐色土，第9層暗褐色土，第10層灰黄褐色土，第11層黒褐色土，第12層黒褐色土，第13層黒褐色土，第14層黄灰色土は，基底部上の版築盛土と推定できる。WBトレンチは10層に分層できる。WBトレンチでも第8層黄灰色土にわずかな盛り上がりが確認できる。WAトレンチの第22層黒褐色土とWBトレンチの第9層黒褐色土が対応する。しかし，土塁の内側において明確な立ち上がりが確認できず，土塁の規模，形状等は不明である。なお，第22層付近から珠洲焼Ⅳ期のすり鉢口縁部(図版56の159)が出土している。

土橋（図版23・25・43）：西堀地区で北側と南側に2つ検出された。地山のオリーブ褐色土などを掘り残す形でつくられており，館への導入部として機能するものである。

北側の土橋1は，X=3.8～X=4.9，Y=-0.7～Y=-1.6の範囲で検出された。土橋の北側は幅0.7m，長さ2m，南側は幅2.2m，長さ4.4mにわたってわずかに掘りくぼめられている。土橋上から柱穴7が検出され，そのうちの6は土橋の西側に集中している。土橋1上のSP02から鉄釘が出土している(図版56の160)。また，土橋にかかわる門遺構の検出もない。

土橋上面は，南北に幅約0.8mの範囲で近現代溝による攪乱を受けている。

前回調査でも確認している南側の土橋２は，土橋の南端が土層観察用畦と重なったため，南北幅は明確ではないが前回調査では７mであると確認されており，東西幅は６mである。土橋上から柱穴が12検出され，そのうちの７は東側に集中し，５は土橋中央に散在している。各柱穴からの遺物の出土はない。いずれも深さ10cm前後と浅く，門遺構や柵列の可能性は少ない。

SX01（図版24･43）：土橋１の東側，館への導入部と考えられる部分を中心に，南北９mにわたる集石が検出された。石の大きさは径12cmから16cmのものが多く，大きなもので径50cm程度である。石の中には建物の礎石に用いられたと思われるものがあり，同様の石は土橋１北側の箱堀埋土においても数点確認されている。これらの大きな石だけでなく小礫も密に検出されている。WBトレンチの調査で，密な集石の範囲が約２m幅であることが確認された。集石は中世の生活面と考えられる黒褐色土上にあるが，石の中には面上に捉えられていないものもあり，明確な遺構としては存在していない。土塁及び門に関係するものと想定されるが，遺構の性格等については不明である。　　（内田亜紀子）

（ｃ）遺物

遺物の記述について，貿易陶磁は国立歴史民俗博物館集成の分類（国立歴史民俗博物館1993）に，瀬戸美濃は藤澤良祐氏の分類・年代観（藤澤1986・1991ａ）に，珠洲は吉岡康暢氏の分類・年代観（吉岡康暢1994）に，瓦器は79年度調査概報（神岡町教育委員会1979）の分類に従っている。なお各遺物の計測データについては別表７～13を参照。

北堀地区

北堀埋土（図版49の１～図版50の26）：

土師器皿（１～10）　１～６・８～10は手づくね成形の土師器皿である。１は口径約8.2cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は，わずかに小石を含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。２は口径約10.1cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げている。胎土は密であり，焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。３は口径約11cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面には不規則に撫で調整を施し，体部外面に指押さえ痕がみられる。口縁部の撫では省略されており，端部は丸みを帯びる。胎土は密であり，焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。４は口径約12cmを測り，体部は薄手のつくりである。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は小石をわずかに含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。５は口径約13cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を強く施し，端部は丸味を帯びる。胎土は密であり，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。６は口径約15.5cm

を測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。8は口径約9.5cm，器高約2.3cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であるが，体部内面に指押さえ痕がみられる。口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にはタールが付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。9は口径約12cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面には不規則に撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面には鉄釘が付着していた痕跡が見られる。胎土は細かいが，わずかに小石を含む。焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。10は口径約12.8cmを測り，体部は直立気味にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は小石をやや含み，焼成は良好である。色調は黄白色を呈する。7は轆轤成形の土師器皿である。底径は約6㎝を測る。内外面に回転撫で調整を施し，体部は屈折気味に立ち上がる。底部に篦削り痕がみられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

青磁（11～13）　11～13は青磁碗である。11は底部破片であるが高台は欠損している。見込に印花文を押印し，その周囲に一条の沈線を巡らす。緑色の釉を施すが，高台内は露胎である。龍泉窯系碗C２類かD類に属し，15世紀前半のものと考えられる。12は口径約15㎝を測る。口縁部内外面に雷文帯を持ち，体部内面には篦描きによる文様を施す。全面にくすんだ緑色の釉を施す。龍泉窯系碗C２類に属し，15世紀前半のものと考えられる。13は口径約16cmを測る。口縁部外面に雷文帯を持ち，全面にくすんだ緑色の釉を施す。龍泉窯系碗C２類に属し，15世紀前半のものと考えられる。

瀬戸美濃（14～22）　14は瀬戸美濃の直縁大皿である。口径は約28㎝を測る。体部は直線的にひらき，口縁端部はやや丸味を帯びる。緑灰色の灰釉を施す。胎土は細かく，色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期に属し，14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。15は瀬戸美濃の折縁中皿である。口径は約14.5㎝を測る。口縁はわずかに外折して内面に小突起を形成し，端部上面はやや凹む。灰釉を施すが，二次被熱を受けて灰黄色を呈する。胎土は細かく，色調は灰褐色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。16は瀬戸美濃の卸皿である。口径は約14㎝を測る。口縁端部は折り返され，内側に小突起を形成する。緑灰色の灰釉を口縁部内外面にのみ施すが，二次被熱を受け一部釉が剝離している。胎土は密であり，色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期～古瀬戸後Ⅲ期に属し，14世紀後半～15世紀前半のものと考えられる。17は瀬戸美濃の折縁深皿である。口径は約38cmをはかる。体部は直線的にひらく。口縁部は外折し，端部上面は浅く凹む。全面に緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり，色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)段階に属し，15世紀中頃のものと考えられる。18は瀬戸美濃のすり鉢型小鉢である。

口径は約20cmを測る。口縁部内面に小突起を形成する。体部上方に錆釉を施すが，二次被熱を受けて茶褐色を呈する。胎土は密であり，体部外側の色調は黄橙色，内部の色調は灰黄色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)段階に属し，15世紀中頃のものと考えられる。19は瀬戸美濃の平碗で口径約17.8cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁端部との境で稜が入る。体部下半には回転篦削り調整痕が顕著に残る。体部下方を除き灰釉を施すが，二次被熱を受けて緑灰色を呈する。胎土は密であり，色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期に属し，15世紀後半のものと考えられる。20は瀬戸美濃の直縁大皿である。口径は約32cmを測る。体部は直線的にひらき，上方は轆轤目が顕著に残る。口縁端部は内側にわずかに肥厚する。体部上方に黒褐色の鉄釉を施すが，内面中位の釉は使用のため，摩耗剝離している。胎土はわずかに砂粒を含み，色調は黄褐色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)段階に属し，15世紀中頃のものと考えられる。21は瀬戸美濃の端反皿である。口径約９cm，器高約２cm，高台径約4.5cmを測る。体部下方はやや丸味を帯び，口縁部で外反する。全面に緑灰色の灰釉を施し，釉が高台内面まで及ぶ。胎土は細かく，色調は黄褐色を呈する。大窯第１小期に属し，15世紀末のものと考えられる。22は瀬戸美濃の端反皿である。底部破片であり，高台径約6.2cmを測る。体部下半は丸味を帯びる。全面に緑灰色の灰釉を施し，釉が高台内面まで及ぶ。胎土は細かく，色調は灰黄色を呈する。大窯第２小期に属し，16世紀前半のものと考えられる。

珠洲（23･24）　23は珠洲のすり鉢である。口径は約28cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁端面は，ほぼ水平である。体部内外面の轆轤目は顕著に残る。内面には８条の卸目が施される。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀のものと考えられる。24は珠洲の研磨壺である。口径は約９cmを測る。なで肩の器体から口頸部は直立気味に立ち上がる。口径端部は，ほぼ水平に仕上げる。体部の上部には「五」の刻印が施される。焼成は還元硬質であり，色調は暗灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀のものと考えられる。

打製石斧（25･26）　25は打製石斧である。刃部のみ残存し，全長65mm×全幅70mmを測る。短冊型と思われ，側縁が若干広がる。石材は安山岩である。形を整えるために全体に敲打調整の後，研磨を施している。26は打製石斧である。刃部のみ残存し，全長77mm×全幅75mmを測る。短冊型であり，側縁は平行する。石材は安山岩である。形を整えるために全体に敲打調整の後，刃部の要所要所に研磨を施している。　（稲石純子）

南堀地区

南堀(旧堀) 埋土（図版50の27～49）：

土師器皿（27～44）　27･28，30～33，35～44は手づくね成形の土師器皿である。27は口径約7.5cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を

つまみ上げて整形する。胎土は細かく，焼成は良好であり，灰白色を呈する。28は口径約7.2cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好であり，灰白色を呈する。30は口径約12cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈する。31は口径約11cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。32は口径約11.5cmを測る。口縁部には一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。口縁部に煤が付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈する。33は口径約10cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部には一段の撫で調整を施す。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。35は口径約９cmを測り，体部は屈折気味にひらく。内面に一方向に横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。底部外面には煤が付着している。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は外面が灰白色を呈し，内面は淡黄色を呈する。36は口径約10.2cmを測り，体部は外反気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は淡黄色を呈する。37は口径約9.7cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，つまみあげて整形する。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。38は口径約13.6cmを測り，体部はやや直線的にひらく。口縁部には一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。39は口径約15.3cmを測り，口縁部には一段の強い撫で調整を施す。外面に段を有し，端部は丸く仕上げている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。40は口径約15.8cmを測る。口縁部に撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。41は口径約9.8cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，指押さえ痕がみられる。口縁部に一段の撫で調整を弱く施し，端部を丸く仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。42は口径約8.3cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を弱く施し，端部を丸く仕上げる。口縁端部にはタールが付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈する。43は口径約12.7cmを測る。内面に横撫で調整を強く施すが，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。44は口径約12.4cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。29･34は轆轤成形の土師器皿である。29は口径約８cmを測る。体部は回転撫で調整を施し，直線的に立ち上がる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。34は底部破片である。底径約5.5cmを測る。体部に回

転撫で調整を施し，底部外面には回転糸切痕がわずかに残る。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。

須恵器（45）　45は須恵器の無高台の碗である。底径は約6cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。体部内外面の轆轤目は顕著である。底部には回転糸切痕が見られる。色調は灰黄褐色であり，二次被熱を受けたと考えられる。焼成は還元硬質である。

青磁（46）　46は青磁碗である。高台径は約6cmを測る。見込みに模様が施されている。くすんだ緑色の釉を全面に施釉している。龍泉窯系碗C類かD類に属し，15世紀前半のものと考えられる。

瀬戸美濃（47）　47は瀬戸美濃の折縁深皿である。底径は11cmを測る。体部は直線的に立ち上がり，下半には回転篦削り調整痕が明瞭にみられる。外面体部上半に明黄褐色の灰釉を施す。胎土は密で，色調は黄色を呈する。古瀬戸段階のものと考えられる。

瓦器（48･49）　48は瓦器の火鉢の体部破片である。外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げ，菊花文を印文する。内面は燻べ焼きにより黒色を呈し，タールの付着がみられる。胎土は石英粒や雲母片を若干含み，焼成は良好である。色調は胎土・内面が淡黄色で，外面が黒色を呈する。15世紀のものと考えられる。49は瓦器の火鉢である。口径は約29cmを測る。内外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられる。口縁部は肥厚せず強く内湾し，端部は，やや外傾する。体部外面には菊花文を印文する。胎土には石英粒や雲母片を若干含み，焼成はやや悪い。色調は内外面が淡黄色で，胎土が浅黄色を呈する。15世紀代のものと考えられる。また，79年度報告における分類のⅠ類に相当すると考えられる。

（匂坂友秋）

南堀（新堀）埋土 D-D'セクション14　Hue10YR 2 / 3 黒褐色砂質土＋Hue10YR 6 / 6 明褐色砂質土（図版51の50）：

土師器皿（50）　50は手づくね成形の土師器皿である。口径は約9.3cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。口縁部内外面にタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

南堀（新堀）埋土 最下層粘質土層　Hue2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色粘質土（図版51の51～図版54の116）：

土師器皿（51～91）　51～83･85･86･88･90は手づくね成形の土師器皿である。51は口径約11.5cmを測り，体部は直線的にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にはタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。52は口径約12cmを測り，内面の撫で調整は不明瞭である。口縁部の撫では省略されており，

端部をつまみながら整形している。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は橙色を呈する。53は口径約11.8cmを測り，体部は内湾気味にひらく。体部内面には指頭使用痕が浅く残る。口縁部に一段の撫で調整を弱く施し，端部を丸く仕上げる。胎土は細かく，焼成は悪い。色調は黄褐色を呈する。54は口径約12cmを測り，内面の撫で調整は不明瞭である。口縁部の撫では省略されており，端部をつまみながら整形している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。55は口径約11.8cmを測り，体部は直線的にひらく。内面に横撫で調整を浅く施し，口縁部の撫では省略されている。内外面にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。56は口径約13.2cmを測り，体部は直線的にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，口縁部は外反する。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は灰黄色を呈する。57は口径約12.9cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に横撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されている。口縁部内面には煤及びタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。58は口径約14cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，工具の圧痕がみとめられる。口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。59は口径約９cm，器高約1.6cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は上から見て緩やかな弧状に施され，その後に直線方向の撫でが施される。口縁部の撫では省略され，タールが付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は橙色を呈する。60は口径約7.7cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を浅く施し，端部を尖り気味に仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は灰黄色を呈する。61は口径約9.1cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面には不規則な撫で調整痕と，工具の圧痕がみとめられる。口縁部の撫では省略されており，端部をつまんで整形している。胎土は細かく，焼成は悪い。色調は灰白色を呈する。62は口径約9.8cmを測り，体部はやや直線的にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。口縁部内外面にはタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。63は口径約10cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。64は口径約11.2cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。65は口径約12cmを測り，体部は直線的にひらく。内面に一方向の直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されており，

端部に指頭使用痕が浅く残る。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。66は口径約11.9cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は粗く，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。67は口径約14.3cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，外反させるが，端部は尖り気味に整形している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。68は口径約14cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面には不規則な撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されているが，端部を尖り気味に仕上げている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。69は口径約14.4cmを測る。体部は内湾気味にひらき，口縁部に一段の撫で調整を施す。口縁部は弱く外反し，端部を丸く仕上げる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。70は口径約14.3cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は浅黄橙色を呈する。71は口径約14.3cmを測り，体部は直線的にひらく。口縁部に一段の撫で調整を浅く施し，端部を丸く仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は灰白色を呈する。72は口径約８cm，器高約1.9cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，見込に工具の圧痕がみられる。口縁部に一段の撫で調整を浅く施し，端部を丸く仕上げる。口縁部内面にタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。73は口径約８cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。74は口径約８cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は浅黄橙色を呈する。75は口径約10.1cm，器高約２cmを測り，体部は直線的にひらく。内面に直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。76は口径約11cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。77は口径約10.5cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。78は口径約10.5cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。断面に製作過程の粘土の継ぎ目が認められる。胎

土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。79は口径約12cm，器高約2.3cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は浅黄橙色を呈する。80は口径約11.7cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。81は口径約12.7cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略される。端部をつまんで挽き出して，やや尖り気味に整形する。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は灰黄色を呈する。82は口径約11.8cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は悪い。色調は白色を呈する。83は口径約12cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。85は口径約15cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は淡黄色を呈する。86は口径約15.5cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。端部をつまみながら整形している。口縁部内外面に煤及びタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。88は口径約12cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭である。口縁部の撫では省略されており，端部をつまみながら整形している。胎土はやや粗く，良く焼き締まる。色調は明褐色を呈する。90は口径約15.1cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。内面の口縁部付近にタールが付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。84·87·89·91は轆轤成形の土師器皿である。84は口径約15.2cmを測る。体部内外面に回転撫で調整を施し，体部は直線的にのびる。底面には篦削り調整を施す。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は黄白色を呈する。87は口径約17.9cmを測る。体部は回転撫で調整を施し，外傾して浅くひらく。内外面に煤及びタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。89は底部破片であり，底径約6cmを測る。底面には回転篦削り調整を施す。胎土は砂粒を多く含み，良く焼き締まる。色調は灰白色を呈する。91は口径約15cmを測る。体部は屈折気味にひらき，口縁部を外反させている。体部下半に篦削り調整を施す。内面に煤が付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，やや砂粒を含み，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。　（景山和也）

青磁（92～95）　92～95は青磁碗である。92は口径約14cmを測る。口縁部外面には沈線がみられ，くすんだ緑色釉が施されている。龍泉窯系碗E類に属し，14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。93は口径約11cmを測る。口縁部外面に雷文帯を持つ。二次被熱を受けており，釉調は緑灰色を呈する。龍泉窯系碗C２類に属し，15世紀前半のものと考えられる。94は口径約13cmを測る。体部は内湾気味にひらき，口縁部を外反させている。くすんだ青灰色の釉が薄く施されている。龍泉窯系碗D類に属し，14世紀後半～15世紀前半のものと考えられる。95は底部破片であり，高台径は約4.4cmを測る。厚く緑灰色の釉を施した後，高台内部の釉を輪状に削り取っている。二次被熱を受けている。龍泉窯系碗C類かD類に属し，15世紀前半のものと考えられる。

青花（96）　96は中国製染付の端反皿である。口径約12cmを測る。口縁部内外面に界線，外面体部に牡丹唐草文と思われる文様を施す。Ｂ１群に属し，15世紀末～16世紀初頭のものと考えられる。

瀬戸美濃（97～107）　97は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約13cmを測る。体部下方はやや丸味を帯び，口縁部はやや内湾して端部は外折する。黒褐色の鉄釉が施されている。胎土は密であり，灰白色を呈する。大窯段階のものと考えられる。98は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約12cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁部はやや直立して端部は短く外折する。黒褐色の鉄釉が施されており，体部下半には暗赤褐色の錆釉が施されている。胎土は密であり，灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。99は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約12cm，器高約5.8cm，高台径約4.5cmを測る。体部下方はやや丸味を帯び，口縁部はほぼ直立して端部は短く外折する。底部は削り出し輪高台で，高台脇の削り幅はやや広い。黒褐色の鉄釉が施され，高台周辺には部分的に暗赤灰色の錆釉が施されている。胎土は砂粒をわずかに含み，灰黄色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。100は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約12.1cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁部はやや内湾して端部は短く外折し，玉縁状となる。黒褐色の鉄釉が施されている。胎土は密であり，灰色を呈し，良く焼き締まる。大窯第１小期に属し，15世紀末のものと考えられる。101は瀬戸美濃の天目茶碗の底部破片である。底径約4.2cmを測る。底部は内反り高台で，高台内は削り込みが浅く，摩耗が著しい。黒色の鉄釉が施されているが，高台部は露胎である。胎土は密であり，灰黄色を呈する。焼成はやや悪い。古瀬戸後Ⅲ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。102は瀬戸美濃の卸皿の口縁部破片である。口径約16cmを測る。口縁部の内側に小突起が形成され，端部上面は浅く凹む。体部上方から内面にかけて緑灰色の灰釉が施されている。胎土は密であり，灰黄色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期に属し，14世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。103は瀬戸美濃の重圏皿の底部破片である。底径約３cmを測る。体

部は外傾しており，体部内面には鏝の押圧による凸線が同心円状に巡る。底部に回転糸切痕がみられる。胎土は密で，暗赤褐色を呈する。大窯第１小期に属し，15世期末のものと考えられる。104は瀬戸美濃の小壺の底部破片である。底径約５㎝を測る。体部下方は回転篦削りが施され，やや内湾気味に強く立ち上がる。底部には回転糸切り痕が見られる。緑灰色の灰釉が施されているが，底部周辺は露胎である。胎土は密であり，淡黄色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。105は瀬戸美濃のすり鉢の底部破片である。底径約10㎝を測る。体部は直線的に強く立ち上がる。約2.7㎝幅の卸目が３帯確認でき，１帯当たりの条数は14条である。底部には回転糸切り痕がみられる。全面に黒褐色の濃い錆釉が施されている。胎土は砂粒をわずかに含み，灰白色を呈する。大窯第１小期に属し，15世紀末のものと考えられる。106は瀬戸美濃の直縁大皿である。口径約32㎝，器高約6.2㎝，底径約18.6㎝を測る。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部は丸く収まる。内外面に緑灰色の灰釉が施されている。胎土は密であり，灰黄色を呈する。焼成は良好である。古瀬戸後Ⅲ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。107は瀬戸美濃のすり鉢である。口径約38㎝を測る。体部は直線的にひらき，口縁部は上方に延びる。約1.1㎝幅の卸目が１帯確認でき，１帯当たりの条数は６条である。全面に暗褐色の錆釉が施されている。胎土は密であり，灰白色を呈する。大窯第２小期に属し，16世紀初頭のものと考えられる。（石内詩保）

瓦器（108･109）　108は瓦器の火鉢である。口径は約27㎝を測る。口縁が肥厚しないまま，強く内湾するものである。胴部以下は欠失するが，胴張りの太鼓形と推定される。外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられ，内面は指頭などを用いた撫でつけの痕跡がある。色調は内外面，胎土ともに肌色を呈するが，口縁部には煤の付着がみられる。焼成は良好である。15世紀代のものと考えられ，また79年度報告における分類のⅠ類に相当する。109は瓦器の風炉である。底径約27㎝を測る。脚を持ち，底部際に隆線が貼り付けられている。外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられ，内面は指頭などを用いた撫でつけ調整の痕跡がある。また器面は燻べ焼きによって炭素を吸着し，黒色を呈する。胎土は石英粒や雲母片をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。15世紀代のものと考えられる。

珠洲（110～113）　110は珠洲のすり鉢の口縁部破片である。口径は約26㎝を測る。口縁部はやや内傾して面をとる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀のものと考えられる。111は珠洲の壺である。口径は約16.8㎝を測る。撫で肩の器体からやや外傾気味に口頸部が立ち上がる。口縁端部を引き出して肥厚させ面をとった後，丸く仕上げる。頸部外面中位に横撫で調整による微隆起を持ち，下位には叩き板が当たったと思われる圧痕が残る。体部外面には３㎝幅に８

条の平行叩き目を施し，内面には当て具痕がみられる。胎土は小石を多く含む。焼成は還元硬質だが焼きがやや悪いために色調は灰白色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し15世紀前半のものと考えられる。112は珠洲の壺である。口径約23cmを測る。口頸部はなだらかな弧をなして外反しながら立ち上がる。口縁端部をやや引き出して面をとる。また頸部外面中位に，横撫で調整による微隆起を持つ。胎土は小石をわずかに含み，焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。113は珠洲の甕である。口径は約52cmを測る。口縁部は短く「く」の字状に屈曲させ，比較的四角く仕上げている。体部外面には3cm幅に8条の平行叩き目を施し，内面には当て具痕がみられる。胎土は小石をわずかに含み，焼成は還元硬質である。色調は黒灰色を呈する。

石製品（114）　114は石臼である。上臼の破片であり，直径は約30cmを測る。中央に貫通する孔の痕跡があり，側面中位には2cm×3cmの角形の挽き手孔がみられる。下面は摩滅が激しいが刻み目が施されているのが認められる。石材は花崗岩である。

（近藤美紀）

打製石斧（115·116）　115は打製石斧である。基端部を欠損し，全長103mm×全幅56mmを測る。撥型であり，側縁部はやや内湾する。石材は安山岩である。刃部縁辺には刃こぼれや摩滅の痕がある。平砥石様の石器を被熱破砕し，転用したものである。116は打製石斧である。全長130mm×全幅62mmを測る。撥型であり，明瞭なくびれを有する。石材は泥岩である。刃部片面にのみ研磨が施されている。

南堀（新堀）埋土 SAトレンチC-C'セクション2（図版54の117）：

瀬戸美濃（117）　117は瀬戸美濃の天目茶碗である。高台径は約4.5cmを測る。体部下半から底部にかけて回転篦削り調整痕が顕著にみられる。底部は削り出し輪高台で，高台脇の削り幅は狭く，高台内の削り込みも浅い。胎土は密であり，淡黄色を呈する。釉調は二次被熱のため灰赤色であり，高台周辺には赤褐色の錆釉が施される。大窯第1小期に属し，15世紀末のものと考えられる。

南堀（新堀）埋土　B-B'セクション6（図版54の118～121）：

土師器皿（118·119）　118·119は手づくね成形の土師器皿である。118は口径は約10cmを測る。内面に横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，よく焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。119は口径12cmを測る。内面に横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。

青磁（120）　120は青磁碗である。口径は約13.4cmを測る。釉調は二次被熱を受けているため，くすんだ緑色を呈する。龍泉窯系碗E類に属し，15世紀前半～15世紀中頃のものと考えられる。

瀬戸美濃（121）　121は瀬戸美濃のすり鉢である。口径は約30cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁部は折り返され，内側に小突起が形成される。体部上方は轆轤目が顕著にみられる。全面に黒褐色の錆釉が施される。胎土はやや粗であり，灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。

南堀(新堀）埋土 SJ1トレンチ（図版54の122）：

瓦器（122）　122は瓦器の火鉢の体部破片である。外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられ，14弁をもつ菊花文が連続的に印文される。内面は篦磨きによる調整と指頭を用いた撫で調整の痕跡が明瞭である。胎土には石英をわずかに含み，焼成は良好である。色調は内外面は浅黄色を，胎土は灰白色を呈する。15世紀代のものと考えられる。

南堀(新堀）埋土 SJ2トレンチ（図版54の123）：

土師器皿（123）　123は手づくね成形の土師器皿である。口径は約12.4cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土は小石をわずかに含み，焼成は良好である。色調は明黄褐色を呈する。

南堀攪乱層（図版54の124～130）：

土師器皿（128･129）　128は轆轤成形の土師器皿である。口径は約17.9cmを測る。体部に回転撫で調整を施し，直線的にひらく。内面にも轆轤目が顕著に見られ，体部外面下半には回転篦削り調整を施す。口縁部は弱く外反し，端部は尖り気味に仕上げる。口縁部にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。129は手づくね成形の土師器皿である。口径は約14.8cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は小石をわずかに含み，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。

白磁（124･126･127）　124は白磁皿の底部である。高台径は約3.6cmを測り，削り出し高台である。釉調は白色を呈する。白磁皿17類に属し，15世紀中頃のものと考えられる。126は白磁皿である。底径は約6cmを測り，内面見込みに段を有する。空色を帯びた白色の釉を体部下半まで施し，底部は露胎である。白磁皿1類に属し，13世紀中頃～14世紀中頃のものと思われる。127は白磁口禿皿である。口径は約12cmを測る。口縁部は朝顔形に外反し，端部が口禿になる。空色を帯びた白色の釉を施しているが，底部外面は露胎である。胎土は細かく，白色を呈する。白磁皿1類に属し，13世紀中頃～14世紀中頃のものと考えられる。

青磁（125）　125は青磁碗の底部である。高台径は約5.2cmを測る。くすんだ緑色釉を高台内以外の全面に施こす。高台は断面四角形で，底部の器厚は厚い。龍泉窯系碗C2類に属し，15世紀前半のものと考えられる。

打製石斧（130）　130は打製石斧である。全長120mm×全幅53mmを測る。撥型であり，側縁部はやや内湾する。石材は砂岩である。刃部縁辺の刃こぼれが著しい。

SK02埋土（図版54の131）：

土師器皿（131）　131は手づくね成形の土師器皿である。口径は約13.8cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は密で良く焼き締まる。色調は明黄褐色を呈する。

SK05埋土（図版54の132）：

瀬戸美濃（132）　132は瀬戸美濃の志野丸皿である。高台径は約6.6cmを測る。灰白色の長珪石釉が，内面と体部外面に施される。大窯第９小期に属し，17世紀前半頃のものと考えられる。（匂坂友秋）

SD02埋土（図版54の133）：

瀬戸美濃（133）　133は瀬戸美濃の折縁深皿である。口径は約38cmを測る。体部は直線的にひらき，口縁端部は丸く仕上げている。口縁部内側に小突起が形成される。体部外面の轆轤目は顕著であり，体部上方の内外面にのみ浅黄色の灰釉が施される。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。

表土（図版55の134～146）：

土師器皿（135～141）　135～139は手づくね成形の土師器皿である。135は口径約9.1cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にはタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。136は口径約9.5cm，器高約2.6cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面に一方向の直線的な撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されている。体部内面に煤が顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。137は口径約8.2cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は黄白色を呈する。138は口径約10cmを測り，体部は内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は橙黄色を呈する。139は口径約12.2cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭であり，口縁部の撫では省略されている。口縁部から体部内面にかけてタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。140･141は轆轤成形の土師器皿である。140は口径約15.2cmを測り，体部は直線的にひらく。体部内外面に回転撫で調整を施しており，外面下半には回転篦削り調整痕が顕著に残る。口縁部はゆるやかに外反し，端部をわずか

につまみ上げている。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は黄白色を呈する。141は口径約15.1cmを測る。体部外面には回転篦削り調整痕が顕著に残る。口縁部に回転撫で調整を施し，直線的にひらく。口縁部はゆるやかに外反し，端部をわずかにつまみ上げている。体部内面に工具の圧痕がみとめられる。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は黄白色を呈する。

白磁（142）　142は白磁碗である。高台径約5.5cmをはかる。空色を帯びた白色の釉を薄く施しているが，高台内は露胎で灰白色を呈する。白磁碗４類に属し，13世紀代のものと考えられる。

珠洲（143･144）　143は珠洲のすり鉢である。口径約30cmを測る。口縁部は外傾して面をとり，口縁端部をやや外方向に挽き出す。3.5cm幅の卸目が二帯確認でき，一帯当たりの条数は13条である。焼成は還元軟質であり，色調は暗赤褐色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。144は珠洲の甕の口縁部破片である。口縁端部は長めであり，外反して面をとる。体部外面に３cm幅に８条の叩き目が施される。焼成は還元硬質であり，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀のものと考えられる。

瓦器（145）　145は瓦器の火鉢である。口径約28cmを測る。口縁が肥厚せずに，強く内側に折られており，上面は水平に作られる。口縁下には２本の隆線の間に菊花文が印文される。内外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられている。器面は燻べ焼きによって炭素を吸着し，黒褐色を呈する。胎土は長石粒を多く含み，橙色を呈する。15世紀代のものと考えられ，また79年度報告における分類のⅢ類に相当する。

石製品（146）　146は石臼である。上臼であり，直径約28cmを測る。上面にくぼみがあり，中央よりやや寄った部分に円形の孔が貫通する。そして側面には角形の挽き手孔がみられる。下面中央にはくぼみがあり，その中央部には芯棒孔がみられる。またくぼみの周囲には放射状に刻み目が施される。石材は花崗岩である。

打製石斧（134）　134は打製石斧である。全長160mm×全幅66mmを測る。やや撥形を呈する。石材は安山岩である。片面に自然面を残し，刃部に若干の刃こぼれが認められる。

（景山和也）

西堀地区

西堀（箱堀）埋土（図版56の147～154）：

土師器皿（147～149）　147～149は手づくね成形の土師器皿である。147は口径約９cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部には一段の撫で調整を施す。口縁部は弱く外反し，端部を丸く仕上げている。内面に煤が付着しており，破片となった後，二次被熱を受けたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は内面が暗灰黄色，外面は灰白色を呈する。148は口径約12cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫

で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。内面に煤が付着している。胎土は1㎜大の石をわずかに含み，良く焼き締る。色調は暗灰黄色を呈する。149は口径約14㎝を測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。体部外面に煤が付着している。胎土は細かく良く焼き締る。色調は内面は浅黄橙色，外面は灰黄褐色を呈する。

瀬戸美濃（150･151）　150は瀬戸美濃の平碗の口縁部破片である。口径約15㎝を測る。灰緑色の灰釉が施される。古瀬戸後Ⅱ～後Ⅲ期に属し，14世紀末～15世紀前半のものと考えられる。151は瀬戸美濃の折縁深皿の底部破片である。底径16㎝を測る。露胎で，回転篦削り調整痕が明瞭であり，脚が残る。胎土には小石を多く含み，色調は灰白色を呈する。焼成はやや悪い。古瀬戸後Ⅳ期に属し，15世紀中頃～後半のものと考えられる。

瓦器（152）　152は瓦器の風炉の口縁部破片であり，内面は剝離している。口縁上面は水平に切られており，外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられている。菊花文と花状文が隆線の下に印文されている。胎土には石英粒を多く含み，色調は内外面，胎土ともに淡黄色を呈する。15世紀代のものと考えられ，また79年度報告における分類のⅡ類に相当すると考えられる。

鉄製品（153）　153は鉄釘である。長さ約4.6㎝，頭の下の幅約0.4㎝を測る。

打製石斧（154）　154は打製石斧である。全長183㎜×全幅71㎜を測る。撥形であり，縁辺が明瞭にくびれ，刃部に向かってゆるやかにひらき円形を呈する。石材は安山岩である。刃部の一部に使用によると思われる若干の摩耗が見られる。

西堀（薬研堀）埋土（図版56の155～157）：

土師器皿（155･156）　155･156は手づくね成形の土師器皿である。155は口径約13㎝を測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されており，端部をやや尖り気味に仕上げている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。156は口径約13㎝を測る。内面の撫で調整は不明瞭である。口縁部の撫では省略されており，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。

珠洲（157）　157は珠洲の甕の口縁部破片である。口径は約46㎝を測る。口縁が「く」の字状に立ち上がり，端部は肥厚している。口縁部に自然釉がかかる。胎土には砂粒を含み，焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。

WAトレンチ（図版56の158･159）：

瀬戸美濃（158）　158は瀬戸美濃摺絵皿Ⅰ類である。口径は約14㎝を測る。口縁部は外折し，ヒダ状に仕上げる。浅黄色の灰釉が施される。胎土は密であり，乳白色を呈する。近世期のものと思われる。

珠洲（159）　159は珠洲のすり鉢の口縁部破片である。口径は約30cmを測る。口縁端部を挽き出して水平に面をとり，口縁端面をわずかに凹み気味に仕上げる。また口縁基部を押さえ，撫で調整を施している。胎土はわずかに小石を含み，粗い。焼成は還元硬質であり，色調は黒褐色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀初頭～14世紀中頃のものと考えられる。

SP02埋土（図版56の160）：

鉄製品（160）　160は鉄釘である。長さ約6.3cm，頭の下の幅約0.5cmを測る。全体に錆が付着している。

表土（図版56の161～163）：

瀬戸美濃（161）　161は瀬戸美濃の折縁深皿の口縁部破片である。口径は約28.4cmを測る。口縁部内側に小突起が形成され，内外面に明黄褐色の灰釉が施される。胎土は密であり，色調は灰黄色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)段階に属し，15世紀中頃のものと考えられる。

石器（162）　162は剝片である。全長85mm×全幅55mmを測る。石材はチャートである。人工的な力を加えたことで折れた打損品である。二次的に使用されることはなかったと思われる。

銅器（163）　163は銅製の飯食器である。口径約8.4cm，器高約8.7cm，底径約6.2cmを測る。台脚部には2本の紐を巡らせ，その間はわずかに隆起している。飯食器は仏に供養する飯食や汁，餅，菓などを盛って壇上に安置するためのものである。

（古沢亜希子）

4　館内部の発掘調査

館内部地区

館内部については前回までの調査でその大部分を調査しており，多くの建物遺構を検出している。今回調査では館内部の未調査地区であるX=0.5～3.0，Y=9.5～10.5の範囲に調査区を設定した。調査区規模は長さ13mであり，幅は東側8m，西側6mである(調査面積：約86.5m²)。本地区は前回調査で検出された礎石建物SB02の裏手にあたる。ここでは館内北東部の遺構群が検出された。

（a）基本層序（図版45）

調査区西壁で東から土層観察を行った。現地表面から検出遺構面までの深さは約70cmで，11層に分かれる。上から第1層黄褐色砂質土，第2層明黄褐色砂質土(小石混)，第3層黒褐色土(やや粘質)，第4層黒褐色土(やや粘質でにぶい黄褐色土のブロックが混ざる)，第5層暗オリーブ褐色土(やや粘質)，第6層黒褐色砂質土(小石混)，第7層明褐色土(小石

混)，第８層黒色土，第９層暗黒褐色砂質土(小石混)，第10層黒褐色砂質土，第11層褐色土である。第11層以下の層位については確認しなかったため，各堀跡地区で対応する地山１・地山２については不明である。第１層が表土層，第２層が土地改良に伴う客土で，第３層はカドミ汚染土(旧表土)と判断される。第４層から第10層までは遺物包含層であり，第11層上面が遺構検出面である。今回調査の範囲と78年度調査の範囲が，X=1.0～2.5，Y=10.0～10.5の範囲で重なっているが，検出面ではこれによる攪乱は受けていなかった。検出した遺構は前回調査でＡ・Ｂ期とした館内最上層の遺構面に伴うものであり，前回調査で検出した礎石群などを一部再確認している。第11層は後述する館内部Ａトレンチの層位観察結果から，館を取り囲む三方の堀が掘り込まれた層である地山１を広範囲に埋立てた整地層であると考えられる。ただし地山１，及び地山２を確認していないためその関係は明確ではない。また本地区の遺構面の検出レベルは，455.220m～455.400mである。なお，第９層，第10層より土師器皿，珠洲，瓦器などを主体とする中世期の遺物が出土した(図版57～59)。

館内部Ａトレンチ（図版34・35・47）：X=3.0～4.0，Y=-0.5～9.5の範囲に，館北部の土層堆積状況を確認するためにトレンチ調査を行なった。トレンチは館内部地区と西堀地区とを結ぶ形で設定し，規模は長さ60m，幅1.5mである(調査面積:約93㎡)。76，77年度調査区域にY=1.0～9.5ラインの範囲で重複する。76年度，77年度における本地区の調査では館内の主殿に比定される礎石建物を検出している。また調査区のほとんどが一度表土掘削をうけていることと関連し，カドミ汚染土(旧表土)の堆積は確認されていない。調査区北壁を南から観察した層位は24層に分層できる。上から順に，第１層黄褐色砂質土，第２層明黄褐色砂質土，第３層暗褐色砂質土，第４層黒褐色砂質土＋赤褐色土，第５層黄灰色砂質土，第６層黒褐色弱粘質土，第７層黒褐色砂質土，第８層暗灰黄色砂質土，第９層黒褐色砂質土，第10層黄褐色土，第11層褐灰色砂質土，第12層黒色砂質土＋黒褐色土，第13層暗黒褐色砂質土，第14層黒褐色弱粘質土，第15層黒褐色砂質土，第16層黒色粘質土，第17層黒褐色土１，第18層黒色弱粘質土，第19層黒褐色土２，第20層黒褐色弱粘質土，第21層暗黒褐色弱粘質土，第22層黒褐色弱粘質土，第23層にぶい黄褐色砂質土，第24層黒色弱粘質土である。なおこのトレンチは西堀地区方向に拡張を行い，それぞれの層序の対応関係を確認している。第１層から第９層までは表土で前回調査後の埋め土であると考えられる。前回調査では第13層上面で館内最上部の遺構群であるＡ・Ｂ両期の生活面を確認している。トレンチ拡張の結果，第24層黒色弱粘質土が西堀地区の地山１と対応していることが確認されたが，この層はY=6.5ライン付近までしか確認を行っておらず層序関係に不明な部分を残す。地山１についてはY=-0.27ラインで人為的に削平されたあとが見られ，その後に第17層から第22層の版築状の土盛が見られる。これについては館内部の整地，あ

るいは西堀地区WAトレンチで部分的に確認された土塁との関係もふまえたうえでの解釈が必要であると考えられる。このトレンチでは各堀跡地区で対応した地山２については確認を行っていない。但しトレンチ西端の堆積状況をみる限り，地山１下層での堆積が想定できる。Ａ・Ｂ期遺構面はこの地山１に第13層・第14層及び第15層による埋立て整地を行った後に構築されている。整地層はY=1.0ライン以東に連続して認められ，地山１との関係に若干不明な点を残すものの，館内部地区の遺構検出面に対応すると考えられる(今回調査及び前回調査の基本層序対応関係については第３章第３節(a)参照)。Y=4.0ライン付近でセクションより確認したピットもこの整地層から掘り込まれている遺構である。またY=5.8ライン，Y=6.5ライン，Y=8.4ライン付近で，Ａ・Ｂ期のものと考えられる前回調査検出の礎石を再確認している。　　(三林健一)

（ｂ）遺構（図版30～33･45･46）

館内部地区では土層観察を行いながら，褐色土上面まで堀り下げた。その結果，礎石及び礎石掘形５，礎石を取り除いたと思われる遺構５，柱穴 67，溝８が検出された。SP19，35，63については，根石を配した柱穴である。X=2.1，Y=10.2の地点でSP65の北側にある石は取り除かれた礎石である可能性がある。また，柱穴とした遺構の大半が礎石抜き取り穴であるとみられる。なお礎石建物に関してのみ，前回調査知見との関係を検討するため，前回調査の遺構番号を継承し，通し番号とした。

SB10：調査区の中央南寄り，X=1.0～1.8，Y=9.8～10.0の範囲に位置する礎石建物である。南北方向に２間，南北方向を主軸とするとＮ-18°-Wをとる。柱間はほぼ等間隔で，１間が約2.08mである。柱穴にはすべて40～50㎝程度の大きさの礎石が残存していた。SP40は直径52cm，検出レベル455.330mで，SP32は直径58cm，検出レベル455.250m，SK02は直径1.02m，検出レベル455.280mを測る。SP40，SP32はSD01を切っている。この礎石群は，78年度調査によっても確認されている。礎石列の延長上にさらにSP40より北へ3.5m，X=2.4，Y=10.0の地点でこの建物の根石と考えられる石群が検出されたが，礎石との関係は明確ではない。埋土はいずれも黒褐色砂質土で，SP40からは土師器皿(図版58の194･195)，SK02からは土師器皿，鉄製品，瓦器の火鉢が出土している(図版58の203～208)。SP32からは遺物の出土はない。

SB12：調査区の中央西端部，X=1.2～2.1，Y=9.5～10.0の範囲に位置する遺構である。柱穴の形状等から礎石抜き取り穴とみられ，礎石は取り除かれたものと推定される。主軸方位は，Ｎ-12°-Wとなる。建物の柱間は桁，梁ともに２間以上を想定できる。建物の西側は調査区の範囲外にあたり，その規模は明確ではない。SP02は直径58cm，深さ6.8cm，底径51cm，検出レベルは455.310mを測る。SP29は直径49cm，深さ4.4cm，底径38cmで，検出レベルは455.300mを測る。SP57は直径33cm，深さ4.9cm，底径13cmで，検出レベル

は455.330mである。SP02はSD01を切り，SP57はSD04を切っている。また南北方向の軸はSA01の方位と一致する。SP02，SP29の埋土は黒色砂質土，SP57は黒褐色砂質土である。SP02からは土師器皿(図版57の181)と珠洲の壺が，SP29からは土師器皿が出土した。

SA01：調査区の東南隅のX=0.9～1.8，Y=10.2～10.5の範囲に位置する遺構である。南北方向に2間，主軸方位はN-12°-Wをとる。柱間寸法はほぼ等間隔で，1間が約2.22mである。柱穴は北からSP46，SP75，SP12の順で並んでいる。SP46は直径28cm，深さ18.6cm，底径11cm，検出レベル455.290m，SP75は直径39cm，深さ12.1cm，底径30cm，検出レベル455.270m，SP12は直径26cm，深さ21cm，底径14cm，検出レベル455.220mである。SP46，SP75の埋土は黒褐色砂質土で，SP12の埋土は黒色砂質土である。各柱穴とも土師器皿が出土し，SP75からはその他鉄製品も出土した(図版58の199～201)。

SA02：調査区のほぼ中央，X=1.5～2.1，Y=10.0～10.2の範囲に位置する柵列である。南北方向に2間，主軸方位はN-24°-Wをとる。柱間は等間隔で，1間が約1.36mである。柱穴は北から，SP56，SP50，SP41の順で並んでいる。SP56は，直径31cm，深さは17.4cm，底径24cm，検出レベルは455.290mを測る。SP50は直径29cm，深さは5.9cm，底径15cm，検出レベルは455.290mを測る。SP41は直径32cm，深さは13.9cm，底径17cm，検出レベルは455.290mを測る。この柵列はSD01の方位と概ね一致することから同時期のものと考えられる。SP56，SP50の埋土は黒褐色砂質土である。SP41は黒褐色粘質土で鉄分を含んでいる。SP56からは土師器皿が出土したが，その他からは遺物は出土しなかった。

SD01：調査区のほぼ中央，X=1.3～3.0，Y=9.8～10.0の範囲に位置する。主軸方位はN-26°-Wで，検出長は9.62m，幅34cm，深さは8.3cmで，検出レベルは455.300mを測る。SP02，SP05，SP36，SP37，SP63にそれぞれ切られている。溝の北端より3m程度の所まで焼土が広がっており，さらにその外周にも広がっている。また，溝は極端に浅いことから，後世の削平を受け実際の深さより浅くなっている可能性が指摘できる。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿(図版57の164～174)が集中して出土したが，その近くには20cm前後の礫が散在していた。そのほかに縄紋土器，鉄釘(図版57の175)，瓦器の火鉢(図版57の176)，木炭が出土した。

SD02：SD01の西側，X=1.6～1.9，Y=9.6～9.7の範囲に位置する。主軸方位はN-10°-Wで，検出長は1.24m，幅22cm，深さは4.9cmで，検出レベルは455.320mを測る。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿(図版57の177)が出土した。

SD03：SD01の西側，X=1.8～2.2，Y=9.6～9.8の範囲に位置する。主軸方位はN-12°-Wで，検出長は1.99m，幅29cm，深さは6.2cmで，検出レベルは455.330mを測る。SD02に切られ，SD04，SD05を切っている。埋土は黒褐色砂質土で，出土遺物はない。

SD04：SD03にほぼ垂直に切られる溝で，X=2.0～2.1，Y=9.5～9.7の範囲に位置する。

主軸方位はN-68°-Eで検出長は78cm，幅46cm，深さは3.9cmで，検出レベルは455.360mを測る。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿が出土した。

SD05：SD04とほぼ平行な溝でX=2.1～2.2，Y=9.5～9.8の範囲に位置する。主軸方位はN-65°-Eで検出長は90cm，幅38cm，深さは6.7cmで，検出レベルは455.330mを測る。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿が出土した。

SD06：調査区の南東端で検出された溝で，X=1.0～1.1，Y=10.3～10.7の範囲に位置する。主軸方位はN-63°-Eで，検出長は1.66m，幅45cm，深さ8.7cmで，検出レベルは455.280mを測る。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿(図版57の178，179)，瀬戸美濃の天目茶碗，木炭が出土した。

SD07：調査区の南東側にあたる溝で，X=1.3～1.6，Y=10.2～10.8の範囲に位置する。主軸方位はN-75°-Eで，検出長は2.78m，幅86cm，深さ4.4cmで，検出レベルは455.220mを測る。埋土は黒褐色砂質土で，遺物は出土していないが溝斜面及び溝底に礫が検出された。

SD08：調査区の南西側にあたり，X=1.4～1.6，Y=9.5～9.9の範囲に位置する。主軸方位はN-65°-Eで検出長は1.96m，幅56cm，深さ3.4cmで，検出レベルは455.280mを測る。また，20cm程度の礫列を検出した。この溝はX=1.5，Y=9.9付近でSD01と接し，両溝は同時期のものである。埋土は黒褐色砂質土で，遺物は出土していない。

SK01：X=0.9～1.0，Y=10.0～10.2の範囲に位置する。直径66cmで，形状は楕円形を呈する。深さは18.2cm，底径22cm，検出レベルは455.240mを測る。東部をSP13に，西部はSP74に切られている。埋土は，黒褐色砂質土で，土師器皿(図版58の202)の他木炭が出土した。

SK02：X=1.0～1.2，Y=9.8～10.0の範囲に位置する。直径1.02mで，北側にやや突出部を持つ楕円形に近い形状を呈する。深さは4.6cm，底径1.01m，検出レベルは455.280mを測る。南東部をSD18，SP20と接し，SP18，SP20を切っている。また直径30cm程の大きさの礎石が検出された。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿(図版58の203～205)や瓦器の火鉢，鉄釘(図版58の206～208)が出土した。

SK03：X=1.2～1.5，Y=10.2～10.5の範囲に位置する。直径1.31mの不整円形を呈する。深さは11.1cm，底径26cm，検出レベルは455.260mを測る。SD07，SP19と北接し，SD07，SP19を切っている。穴の中には20cm大の石が検出された。埋土は黒褐色砂質土で，土師器皿(図版58の209～219)や瀬戸美濃の天目茶碗，鉄製品，木炭が出土した。

館北東部における建物群の変遷（第16図）：ここでは，館北東部における建物群の変遷を述べるが，これと関連して前回調査で確認された建物遺構を整理する。建物の礎石，抜き取り穴の配置で，主軸方位の違いから２時期の建物群が確認され，SB02，SB04をＡ期，SB10，SB11をＢ期としている。以下，各遺構について述べる。

SB02　館内部地区の西側，X=2.0～4.8，Y=6.6～8.8の範囲に位置する礎石建物である。南北8.4m（７尺等間），東西13.4mの東西棟の建物で，北側に７尺の庇を西側に９尺の張出しを持つ。また南面西端の１間分（７尺）に３尺の張出しを持つものである。

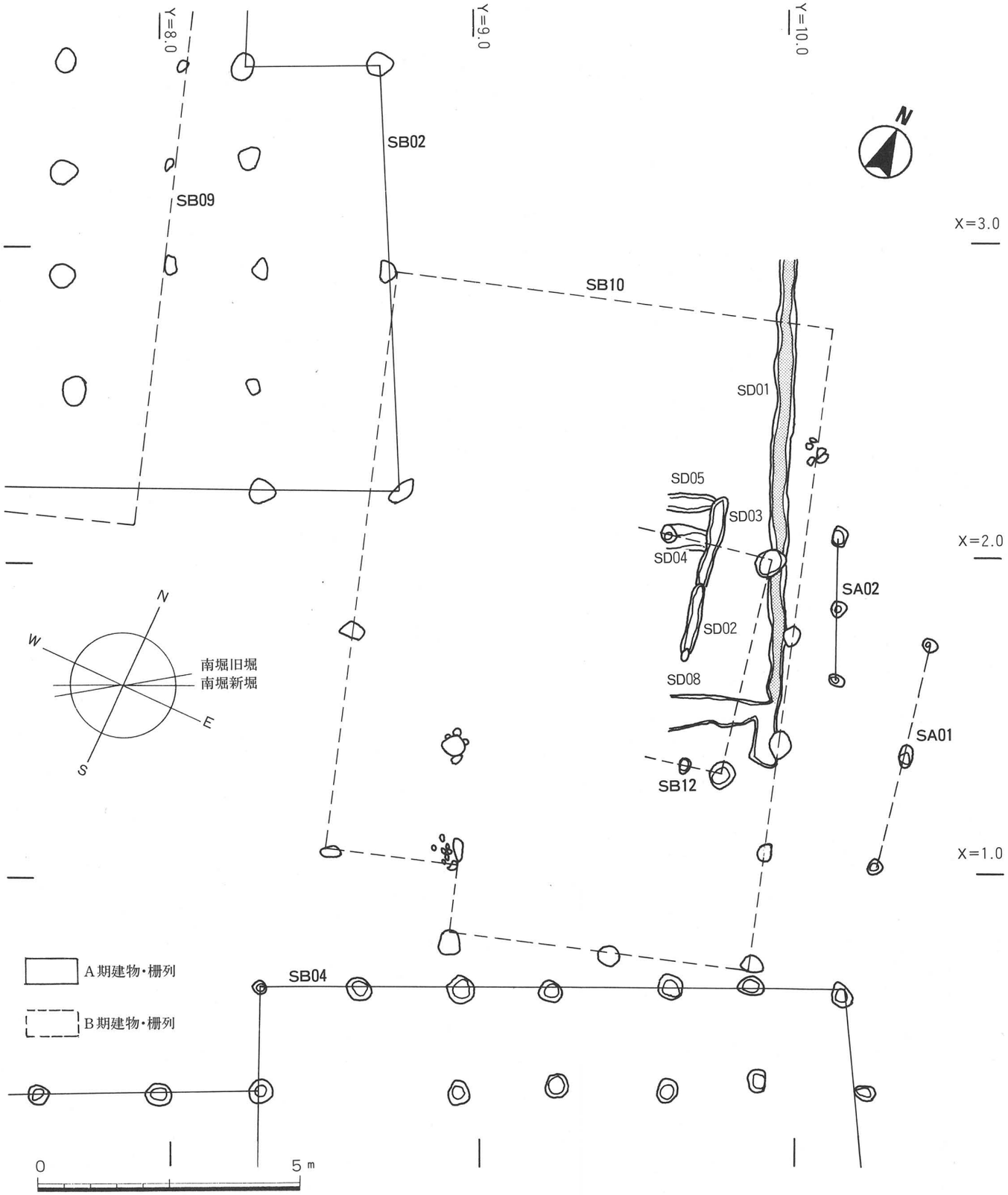
SB04　館内部地区の南側，X＝-1.0～0.8，Y=7.7～10.3の範囲に位置する礎石建物である。南北6.2m（３間７尺等間），東西9.8m（５間７尺等間）の東西棟建物で，東・南・北面に庇（７尺）が，西面に２間の張り出しが取りつく。総柱で全て礎石の抜き取り穴を検出している。

SB10　SB04の北側，X=0.5～4.0，Y=9.0～11.5の範囲に位置する礎石建物で，南北11.3m，東西5.8mの南北棟で，柱間は７，９，10尺と不揃いである。今回調査においても，この礎石建物と柱筋を揃える礎石群が確認できた。

SB11　SB02の南側，X=-2.3～0.4，Y=7.0～8.0の範囲に位置する建物で礎石の抜き取り穴，根石が柱通りを揃えて残る。この建物の抜き取り穴の一部でＡ期との切り合いが見られる。

館内部地区において検出されたSB10，SB12とSD01，SD02，SD03，SD04，SD05，SD08及びSA01，SA02との関係について，特にその主軸方位に注目してまとめる。SD01は，南北方向を主軸とすると，N-26°-Wで，これはその主軸方向からＡ期建物とほぼ同時期と考えられる。SB02，SB04の主軸方位はそれぞれ，N-27°-W，N-29°-WとなりSD01の方位と概ね一致する。今回調査で検出したSA02の主軸方位もN-24°-Wで，SD01の方位とほぼ一致し，SD04，SD05，SD08においては，SD01と直交することから同時期であると考えられる。79年度報告では，SB11の抜き取り穴の一部でＡ期との切り合いが見られ，Ａ期はＢ期より古いことが指摘されているが，今回調査でもSD01の埋土をSB10の礎石堀形が切っていることから，Ａ期・Ｂ期の新旧関係を明確に確認出来た。さらに，今回の館内部地区からはＡ期，Ｂ期の建物とは方位が異なる遺構をいくつか検出している。SB12の主軸方位はN-12°-Wで，SD02，SD03及びSA01の主軸方位はそれぞれ，N-10°-W，N-12°-W，N-12°-Wとなり，ほぼ同時期と考えられる。SD01の埋土をSB12の礎石の堀形が切っていることや，SD04，SD05をSD03が切っていることから，Ａ期より新しいことがわかるが，Ｂ期との新旧関係は不明である。

（塩田明弘・芳賀万里子）



第16図　館北東部における遺構変遷図（縮尺1/100）

（c）遺物

館内部地区

SD01埋土（図版57の164～176）：

土師器皿（164～174）　164～170·172～174は手づくねの土師器皿である。164は口径約8cmを測る。内面に一方向の直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。全面に煤及びタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は灰褐色を呈する。165は口径約10.5cmを測る。摩耗が著しく，調整その他は不明である。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は悪い。色調は乳白色を呈する。166は口径約11cm，器高約2.6cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に一方向の直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。内面底部には煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。167は口径約12.2cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。内外面の口縁部付近に，鉄錆が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。168は口径約16.5cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を強く施して外反させ，端部をやや尖り気味に仕上げる。底部は平底を呈する。体部内面に煤が付着している。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は浅黄橙色を呈する。169は口径約12cm，器高約2.7cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面には一方向の直線的な撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されており，口縁部付近に指頭使用痕が浅く残る。口縁部にタールが付着しており，外面の体部下半に煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。170は口径約17.8cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を強く施して外反させ，端部を丸く仕上げている。内面にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。また破片となった後，二次被熱を受けたと考えられる。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。172は口径約12.2cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。口縁部にはタールが付着している。胎土はやや粗く，焼成は悪い。色調は浅黄橙色を呈する。173は口径約12.5cm，器高約2.9cmを測る。不整円形を呈し，体部は内湾気味にひらく。内面に一方向の直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。口縁部にはタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。外面の体部下半には煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。174は口径約13.2cmを測る。体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を弱く施してわずかに外反させ，端部をやや尖り気味に仕上げている。内面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられ

る。また破片となった後，二次被熱を受けたと考えられる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。171は轆轤成形の土師器皿である。底径は約6cmを測る。体部には回転撫で調整痕が顕著に残る。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は灰黄橙色を呈する。

鉄製品（175）　175は鉄釘である。長さ約3.6cm，頭の下の幅約0.5cmを測る。

瓦器（176）　176は瓦器の火鉢の口縁部破片である。口径は約42cmを測る。外面は篦磨き調整によって平滑に仕上げられており，内面にも篦磨き調整が施されている。口縁が肥厚せずに強く内側に折られており，上面は水平に作られる。口縁下には2本の隆線の間に32枚の花弁を持つ菊花文が印文される。器面は薫べ焼きによって炭素を吸着し，黒色を呈する。胎土は石英粒や雲母片を多く含み，浅黄色を呈する。15世紀代のものと考えられる。また，79年度報告における分類のⅢ類に相当すると考えられる。

SD02埋土（図版57の177）：

土師器皿（177）　177は手づくね成形の土師器皿である。口径は約14cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は細かく，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。

SD06埋土（図版57の178·179）：

土師器皿（178·179）　178·179は手づくね成形の土師器皿である。178は口径約12cmを測り，体部は直線的に立ち上がる。口縁部に一段の撫で調整を強く施してゆるく外反させ，端部を丸く仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。179は口径約17.2cmを測る。口縁部に一段の撫で調整を強く施してやや外反させ，端部を丸く仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。

SP01埋土（図版57の180）：

土師器皿（180）　180は手づくね成形の土師器皿である。口径約9.8cmを測る。体部は直線的にひらき，ゆるやかに屈折する。口縁部に弱く一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は灰白色を呈する。

SP02埋土（図版57の181）：

土師器皿（181）　181は手づくね成形の土師器皿である。口径は約13cmを測り，体部は直線的にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

SP07埋土（図版57の182～185）：

土師器皿（182～184）　182·184は手づくね成形の土師器皿である。182は口径約10cm，器高約2cmを測る。体部は直線的にひらく。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の

撫では省略されるが，端部は丸みを帯びる。口縁部にタールが付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。184は口径約12cmを測り，体部は直線的にひらく。内面には不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は1㎜大の小石をやや含み，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。183は轆轤成形の土師器皿である。口径は約12cmを測る。体部は回転撫で調整を施し，やや内湾気味にひらいて，端部で強く外反する。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は乳白色を呈する。

鉄製品（185）　185は鉄釘である。長さ約4.4cm，頭の下の幅約0.5cmを測る。鉄錆が多量に付着している。

SP08埋土（図版57の186･187）：

土師器皿（186･187）　186･187は手づくね成形の土師器皿である。186は口径約11.2cmを測る。摩耗が著しく，調整その他は不明である。体部はやや内湾気味にひらく。外面の口縁部付近と，体部下半には，指頭使用痕が浅く残る。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は悪い。色調は乳白色を呈する。187は口径約16.2cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締まる。色調は黄橙色を呈する。

SP64埋土（図版57の188）：

瓦器（188）　188は瓦器の火鉢の口縁部破片である。口径は約44.4cmを測る。口縁がほぼ垂直に立ち上がる筒形と考えられる。内外面は篦磨き調整によって，平滑に仕上げられている。器面は薫べ焼きによって炭素を吸着し，黒色を呈する。胎土は石英粒や雲母片を多く含み，浅黄色を呈する。15世紀のものと考えられる。　（滝 寿美代）

SP09埋土（図版58の189･190）：

土師器皿（189･190）　189･190は手づくね成形の土師器皿である。189は口径約7.8㎝，器高1.6㎝を測る。体部はやや内湾気味に浅くひらき，内面に一方向の横撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されており，不整円形をなす。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は灰白色を呈する。190は口径約12㎝を測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に一方向の横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をやや含み，良く焼き締る。色調は黄橙色を呈する。

SP10埋土（図版58の191）：

土師器皿（191）　191は手づくね成形の土師器皿である。口径約7㎝，器高約1.5㎝を測り，体部はやや内湾気味に浅くひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，体部外面に指頭使用痕が不規則に浅く残る。口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は灰褐色を呈する。

SP15埋土（図版58の192）：

土師器皿（192）　192は手づくね成形の土師器皿である。口径は約10cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を丸く仕上げる。口縁部外面に煤が付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。

SP24埋土（図版58の193）：

瀬戸美濃（193）　193は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径は約13cmを測る。体部は直線的に伸びてほぼ直立し，口縁端部でややくびれる。黒色の鉄釉が施されており，体部下半の露胎部には回転篦削り調整痕がみられる。胎土は密であり，灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し，15世紀前半のものと考えられる。

SP40埋土（図版58の194･195）：

土師器皿（194･195）　194･195は手づくね成形の土師器皿である。194は口径約10.4cm，器高約1.6cmを測り，体部は内湾気味に浅くひらく。体部外面には指押さえ調整痕が不規則に浅く残る。口縁部に一段の撫で調整を弱く施す。端部をつまみ上げてやや尖り気味に仕上げる。口縁内外面に煤が付着している。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。195は口径約12cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，体部外面に指頭圧痕が浅く残る。口縁部に一段の撫で調整を弱く施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土はやや粗く，焼成は良好であり，色調は淡黄橙色を呈する。

SP43埋土（図版58の196）：

土師器皿（196）　196は手づくね成形の土師器皿である。口径は約８cm，器高約1.4cmを測る。体部は屈曲して立ち上がり，内面に横撫で調整を施す。口縁部の撫では省略されており，端部をつまみながら整形している。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は浅黄色を呈する。

SP53埋土（図版58の197）：

土師器皿（197）　197は手づくね成形の土師器皿である。口径約11.6cmを測り，体部は直線的にひらく。内面には横撫で調整を浅く施し，口縁部の撫で調整は省略されている。外面の体部下半にタールが付着している。破片となった後に二次被熱を受けたと考えられる。胎土はやや粗く，良く焼き締る。色調は灰黄色を呈する。

SP70埋土（図版58の198）：

土師器皿（198）　198は手づくね成形の土師器皿である。口径約10cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を強く施して外反させ，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

SP75埋土（図版58の199～201）：

土師器皿（199･200）　199は手づくね成形の土師器皿である。口径は約9.5cmを測り，

体部はやや内湾気味にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。内面の口縁部付近に煤が付着している。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は灰黄色を呈する。200は轆轤成形の土師器皿である。口径は約14cmを測り，体部には回転撫で調整痕がみられる。ゆるく外反させた口縁部の端部をつまみ上げている。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は浅黄橙色を呈する。

鉄製品（201）　201は鉄釘である。長さ約3.4cm，頭の下の幅約0.6cmである。

SK01埋土（図版58の202）：

土師器皿（202）　202は手づくね成形の土師器皿である。口径約14.5cmを測り，体部は直線的にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施して外反させ，端部をわずかにつまみ上げている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

SK02埋土（図版58の203～208）：

土師器皿（203～205）　203は轆轤成形の土師器皿である。口径約7.3cm，器高約1.5cm，底径4.7cmを測る。体部は回転撫で調整痕がみられ，直線的に立ち上がる。底面には回転糸切痕がみられる。胎土は砂粒をやや含み，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。204・205は手づくね成形の土師器皿である。204は口径約8.9cmを測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。口縁部内面にはタールが付着している。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好であり，色調は灰黄褐色を呈する。205は口径約10.9cm，器高約1.9cmを測り，体部はやや内湾気味に浅く立ち上がる。内面の見込に一方向の直線的な撫で調整を施した後，口縁部付近に横撫でを施す。口縁部の撫では省略されており，口縁部内外面にタールが付着している。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。

鉄製品（206～208）　206～208は鉄釘であり，全体に錆が付着している。206は長さ約2.8cm，頭の下の幅約0.5cmである。207は長さ約3cm，頭の下の幅約0.5cmである。208は長さ約2.8cm，頭の下の幅約0.6cmで屈折している。

SK03埋土（図版58の209～219）：

土師器皿（209～219）　209・210・212・214～218は手づくね成形の土師器皿である。209は口径約7.5cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に一方向の横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。器壁は薄手に仕上げられている。胎土は砂粒をやや含み，良く焼き締る。色調は浅黄褐色を呈する。210は口径約8.5cmを測り，体部はやや内湾気味にひらき，内面に一方向の横撫で調整を浅く施す。口縁部の撫では省略されており，不整円形をなす。内面の口縁部付近に煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は灰黄色を呈する。212は口径約10.5cmを測る。体部は内湾気味に浅くひらき，内面は「の」の字に撫で調整をしていると考えられる。口縁部に一段の横撫でを施し，

端部をやや尖り気味に仕上げる。器壁は薄く仕上げられている。内面には煤が付着している。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。214は口径約10.8cmを測り，体部はやや内湾気味に浅くひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をやや尖り気味に仕上げる。口縁部内面から外面全体に煤が付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。215は口径約10.8cmを測り，体部はやや内湾気味に浅くひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をわずかに尖り気味に仕上げている。口縁部内面に煤が付着している。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。216は口径約11.9cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部を尖り気味に仕上げている。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。217は口径約13cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をわずかに尖り気味に仕上げる。胎土は砂粒をやや含み，焼成は悪い。色調は灰白色を呈する。218は口径約13cmを測り，体部は内湾気味にひらく。口縁部内面から外面にかけて横撫で調整を施す。胎土は砂粒をやや含み良好である。色調は浅黄褐色を呈する。211·213·219は轆轤成形の土師器皿である。211は口径約8.9cmを測り，体部内外面に回転撫で調整を施す。口縁端部は撫でによって丸くおさめられている。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。213は口径約10cmを測る。体部内面に回転撫で調整を施し，内湾気味にひらく。口縁部は外反し，端部を丸く仕上げている。外面体部下半に篦削り痕がみとめられる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。219は口径約15cmを測る。体部は回転撫で調整痕が顕著に残り，直線的にひらく。外面体部下半には回転篦削り調整痕が顕著に残る。口縁部はわずかに外反し，端部を尖らせ気味に仕上げる。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は黄褐色を呈する。

包含層　Hue7.5YR 2 / 2　暗黒褐色砂質土（小石混）

（図版58の220～225·図版59の226～228）：

土師器皿（220～223）　220～222は手づくね成形の土師器皿である。220は口径約11cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に直線的な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。外面の体部下半部に煤が付着している。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。221は口径約11cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を施し，端部をつまみ上げてやや尖り気味に仕上げている。体部外面に指圧痕が浅く残る。内面には煤が付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。222は口径約12cmを測り，体部はやや内湾気味にひらく。口縁部に一段の撫で調整を弱く施し，端部をやや尖り気味に仕上げている。口縁部内外面にタールが付着している。胎土は細かく，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。223は轆轤成形の土師器皿である。口径約15cmを測る。体部は回転撫で調整痕がみられ，

やや内湾気味にひらく。外面体部下半に回転篦削り調整痕が顕著に残る。口縁部は強く外反し，端部をつまみ上げている。胎土は砂粒をわずかに含み，良く焼き締る。色調は淡黄色を呈する。

青磁（224･226）　224は青磁碗である。口径約17.2cm，器高約7.2cm，高台径約5.7cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部で外反する。底部は付高台で，断面は四角形である。内外面とも無文で，くすんだ緑色釉が高台外面まで薄くかかり，外面体部下半には篦削り調整痕がみられる。高台部畳付及び内部は露胎であり，灰色を呈する。龍泉窯系碗D類に属し，14世紀後半のものと考えられる。226は青磁盤である。口径約19.5cmを測る。大きく曲った口折れ部は口縁端部を更に上に直角に曲げている。内外面とも無文で，緑色釉がやや厚めにかかる。

瀬戸美濃（227）　227は瀬戸美濃の直縁大皿の底部破片である。高台径は約25cmを測る。底部は付高台で，断面は四角形である。内面にのみ透明な緑色の灰釉が薄く施される。外面体部下位から底部にかけては露胎であり，明黄褐色を呈する。胎土は密で，灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期～後Ⅲ期に属し，14世紀末～15世紀前半のものと考えられる。

瓦器（225）　225は瓦器の火鉢である。口縁部が肥厚し，強く内湾する浅い胴張りのもので，口縁上面が水平に切られている。口縁下には15枚の花弁を持つ菊花文が印文される。胎土は石英粒や雲母片を多く含み，内外面･胎土ともに淡黄色を呈する。15世紀のものと考えられる。79年度報告における分類のⅡ類に相当すると考えられる。

珠洲（228）　228は珠洲の片口鉢である。口径は約25cmを測る。端部外そぎにしっかりと面を取っている。卸目は2帯確認できるが，いずれも計測に耐えないため，1帯当たりの条数は不明である。焼成は還元硬質で，色調は灰色を呈する。珠洲Ⅲ期に属し，13世紀後半のものと考えられる。

包含層　Hue2.5Y 3 / 4　黒褐色砂質土（図版59の229～231）：

土師器皿（229～231）　229～231は手づくね成形の土師器皿である。229は口径は約10cmを測る。内面に不規則な撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。230は口径約10cmを測る。内面に横撫で調整を弱く施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。231は口径約10cmを測る。内面には不規則な撫で調整を弱く施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は2mm大の小石を含み，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。

表土（図版59の232～244）：

土師器皿（232～239）　232～238は手づくね成形の土師器皿である。232は口径約8.8cmを測る。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわず

かに含み，焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。233は口径約11㎝，器高2.4㎝を測り，体部はやや内湾気味に浅くひらく。内面に一方向に横撫で調整を施し，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をやや含み，焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。234は口径約10.8㎝を測り，体部はやや内湾気味に浅くひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にはタールが付着している。胎土は密で，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。235は口径約11.4㎝を測り，体部は直線的にひらく。内面の撫で調整は不明瞭で，口縁部の撫では省略されている。口縁部内外面にタールが顕著に付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は橙色を呈する。236は口径約12㎝を測り，体部はやや内湾気味にひらく。内面に不規則な撫で調整が施され，口縁部の撫では省略されている。胎土は砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。237は口径約12㎝を測る。体部は内湾気味にひらき，内面の撫で調整は不明瞭である。口縁部の撫では省略されており，わずかに外反する。口縁部内外面にタールが付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。238は口径約12㎝を測り，体部はやや内湾気味に浅く立ち上がる。内面に不規則な撫で調整が施され，口縁部の撫では省略される。端部は丸みを帯びている。胎土は１㎜大の小石を含み，焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。239は轆轤成形の土師器皿である。口径約12㎝を測る。体部には回転撫で調整が施されるが，磨耗が著しく明瞭ではない。体部はやや内湾気味にひらくが，口縁部を外反させ，端部をやや尖り気味に仕上げる。胎土は細かく，良く焼き締る。色調は浅黄橙色を呈する。

瀬戸美濃（240）　240は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径は約12㎝を測る。体部はやや丸味を帯び，口縁端部は中央がややくびれる。黒色の鉄釉が施されており，胎土は密であり灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(新)段階に属し，15世紀後半のものと考えられる。

珠洲（241）　241は珠洲のすり鉢である。口径は約22cmを測る。体部は直線的にひらき，端面はほぼ水平に仕上げる。卸目は１帯確認できるが，使用による摩耗が著しいため，１帯当たりの条数は不明である。焼成は還元硬質であり，色調は青灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し，14世紀のものと考えられる。

縄紋土器（242･243）　242は縄紋土器の深鉢の胴部破片であると思われる。外面にLR縄紋を縦位に施す。内面に炭化物が付着している。胎土には細かい雲母片･小白石を含み，焼成は良好である。243は縄紋土器の深鉢の頸部破片と思われる。外面に２本の微隆起線を縦横に交差させる。微隆起線は両脇から良く撫でつけるため，断面は二等辺三角形を呈する。内外面に炭化物が良く付着する。胎土に白色粒と小石英を含み，焼成は良好である。

打製石斧（244）　244は打製石斧である。全長134㎜×全幅65㎜を測る。短冊型であり，

側縁が直線的に若干広がる。石材は安山岩である。刃部縁辺に刃こぼれがあり，全面に敲打調整を施す。

館内部Aトレンチ（図版59の245）：

伊万里（245）　245は伊万里の碗である。口径約９㎝を測る。体部は湾曲気味に立ち上がり，体部中央から口縁部にかけてやや直線的にひらく。内面には圏線が２本描かれる。口縁部外面に太い圏線が１本あり，菊花状の文様を描く。菊花状の文様内には魚と考えられる文様がある。18世紀後葉以降のものと考えられる。（坪田聡子）

5　館外部の発掘調査

堀の外側の地区の発掘調査は78年度に各地区のトレンチ調査を実施しているが，館外部に明確な遺構の広がりは認められていない。地山まで削平をうけた地区も多く報告されている。今回も館外部で部分的な試掘調査を行った。

館外部Ｂトレンチ（図版35の２･48）：館外部Ｂトレンチは江馬氏下館の北堀から約57m北方X=18.0～18.5，Y=1.0～1.5の範囲に設定した。78年度調査のK地区の南北トレンチの延長上にあり，堀外部の遺跡の広がりを確認するため，長さ３m，幅３mの規模で調査区を設定した(調査面積:約９㎡)。館跡地区の標高と比べると極端に低い地区に位置する(第３章第３節(a)参照)。土層の観察は東壁で行った。層位は９層に分かれ，上から第１層暗褐色砂質土(粘土ブロック混)，第２層明黄褐色粘質土，第３層黒褐色砂質土(小石混)，第４層灰褐色粘質土，第５層黒褐色粘質土，第６層暗褐色粘質土，第７層黒褐色粘質土，第８層黒褐色粘質土(小石混)，第９層オリーブ黒色粘質土(小石混)である。第１層が表土，第２層が土地改良に伴う客土である。第３層がカドミ汚染土(旧表土)であり，第７層上面が遺構検出面である。直径約10㎝のピットが二つ検出されたが，いずれも単層で遺物の出土はなかった。以下の層位についてはサブトレンチを設定して第９層まで確認した。館内部地区及び堀跡地区では堀が掘り込まれる地山１上面などで層位の対応関係が認められるが，本調査区は地点が離れていることもあって，これらの層位との対応を明確に見出すことはできない。地山２についても確認するに至っていない。トレンチからの出土遺物は少ないが，表土から青磁，肥前系近世陶器，伊万里，瀬戸美濃の天目茶碗が出土しており，第５層上面のピットの存在も考慮すると，館関係の遺構がこの付近まで広がっていたことが想定される。

（米出敬子）

6 小　結

（a）遺　構（第17・18図）

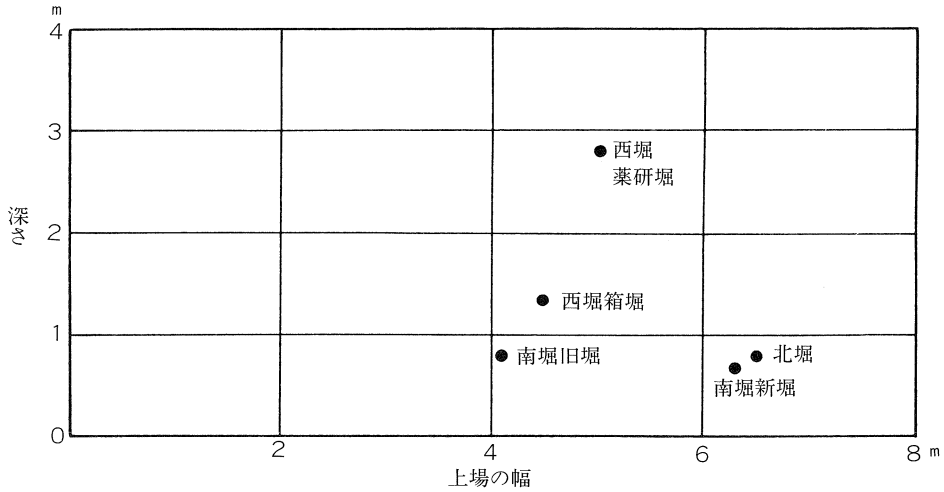
今回調査では，前回までの調査でトレンチによって部分的に確認されていた堀跡をより広範囲に発掘したが，新たに確認できた発掘調査の成果をまとめてみよう。まず北堀では館外部からの流れ込み層が確認された。南堀では，新旧の２本の堀を再確認した。さらに細かい掘り込みの検討から，大きくは新旧２時期にわたる６段階の変遷をたどることがわかった。旧堀には地山ブロック混じりの流れ込み層がみられ，この堀に土塁が伴う可能性がある。なおこの層は新堀には認められず，新堀段階には土塁が伴っていなかった可能性が指摘できた。なお，北堀・南堀では地形にあった勾配があり，東から西に低くなっている。西堀では前回調査で確認された薬研堀・土橋２を再検出し，さらに西堀の北側部分で土橋１を確認した。土橋１の東側，館への導入部と考えられる部分に集石を確認したが遺構の性格については明らかにできなかった。また，この土橋１の北側に箱堀を確認した。堀埋土の流れ込みと，トレンチの層位の検討から西堀の内側にも土塁が存在していた可能性が高いことが確認された。館内部地区では，前回調査で確認されたＡ期建物とＢ期建物の新旧関係を再確認した。また今回の調査ではＡ・Ｂ期の建物とは方位の異なる遺構をいくつか確認した。切り合い関係からＡ期より新しいことは確認されたが，Ｂ期との新旧関係は明らかにならなかった。

第４表　堀跡計測表

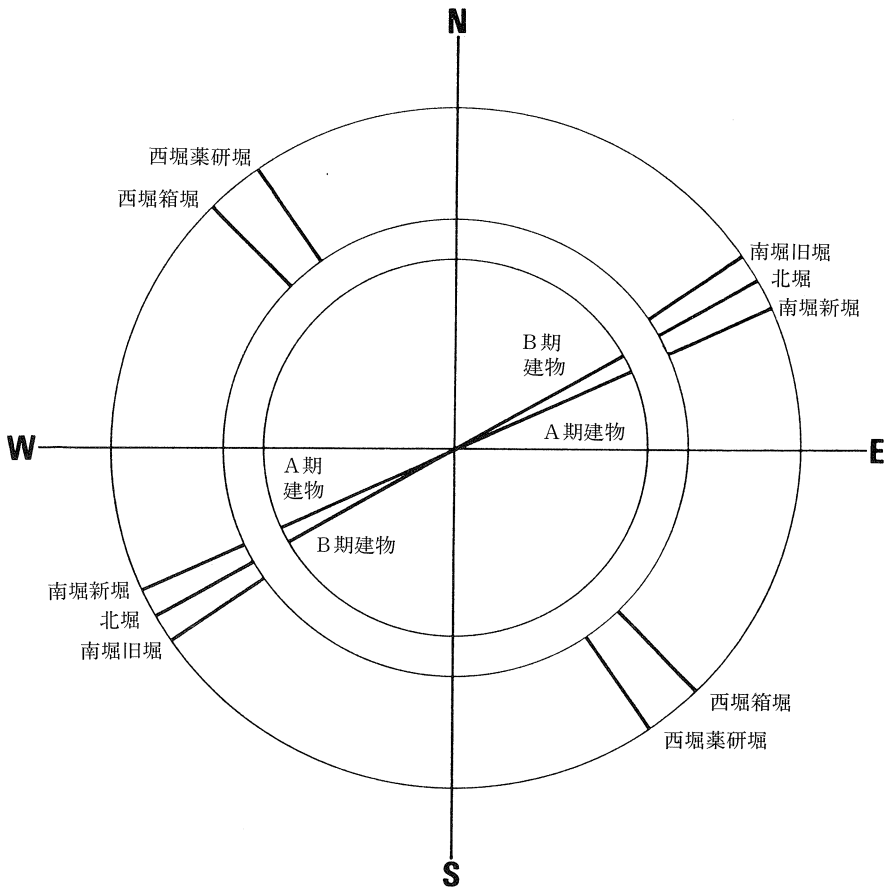
単位：m

堀　跡	形　状	主 方 向	検出長	堀　　幅	立ち上がり	深　さ	備　　考
北堀	箱堀	N－60°－E	40.9	最大幅：上場 6.5　下場 1.5（Y＝ 3.3） 最小幅：上場 2.75　下場 1.0（Y＝ 4.0）	北60° 南42° 北61° 南53°	0.6～1.0	空堀　堀肩に礎石の流れ込みを確認
南堀(新)	箱堀	N－65°－E	67.7	最大幅：上場 6.3　下場 5.1（Y＝11.0） 最小幅：上場 3.8　下場 2.0（Y＝ 3.0）	北38° 南40° 北45° 南30°	0.5～0.86	空堀
南堀(旧)	箱堀	N－55°－E	44.9	最大幅：上場 4.1　下場 3.3（Y＝ 6.0） 最小幅：上場 3.2　下場 2.4（Y＝ 1.0）	北48° 南45° 北48° 南43°	0.5～1.10	空堀
西　堀	薬研堀	N－35°－W	35.0	最大幅：上場 5.0　下場 0.25（X＝ 3.5） 最小幅：上場 4.25　下場 0.1（X＝ 0.7）	東55° 西45° 東55° 西20°	2.6～3.0	空堀　土橋１、土橋２を検出
	箱堀	N－45°－W	7.4	最大幅：上場 4.5　下場 2.0（X＝ 5.9） 最小幅：上場 4.3　下場 1.75（X＝ 5.7）	東30° 西35° 東30° 西35°	1.2～1.5	空堀

次に堀の規模と，堀と建物の主軸方位について検討してみよう。第17図に堀の規模を示した。上場は最大幅を示し，北堀がY=3.3ライン，南堀旧堀がY=6.0ライン，南堀新堀がY=11.0ライン，西堀薬研堀がX=3.5ライン，西堀箱堀がX=5.5ラインで測っている。深さは最大値と最小値の平均を示した。まず，深さをみると１ｍを越える堀は西堀だけであ



第17図　堀の規模散布図



第18図　堀・建物主軸方位図

り，西堀薬研堀が群を抜いて深い。また同じ箱堀でも西堀のものだけが１ｍを越えており，館の正面にあたる西堀は薬研堀・箱堀ともに深いことがわかる。また，南堀では旧堀のほうが新堀よりも若干深い。上場の幅についてみると，掘り直された新堀は旧堀に比べ幅が広くなり，その規模が北堀とほぼ同じである。また，南堀新堀と北堀が他の堀よりもその幅が広いことがわかる。

第18図に堀と建物の主軸方位を示した。堀については今回の調査で得た数値を，建物については前回調査の図面から起こした数値を示した。堀についてみると南堀旧堀・北堀・南堀新堀の主軸方位のずれは５°ずつであり，ほぼ平行していると考えられる。西堀薬研堀は南堀旧堀と91°の角度，北堀と95°の角度があり，堀そのものはつながってはいないものの，主軸の延長はほぼ直交していると考えられる。南堀の旧堀・新堀，西堀の薬研堀・箱堀では共に10°のずれがあり，南北方向を主軸とすると，南堀新堀は旧堀よりも東よりに掘り直されている。西堀の薬研堀と箱堀で主軸の方向が若干ずれることは注意すべきであろう。なお北堀と西堀箱堀とは105°の角度がある。

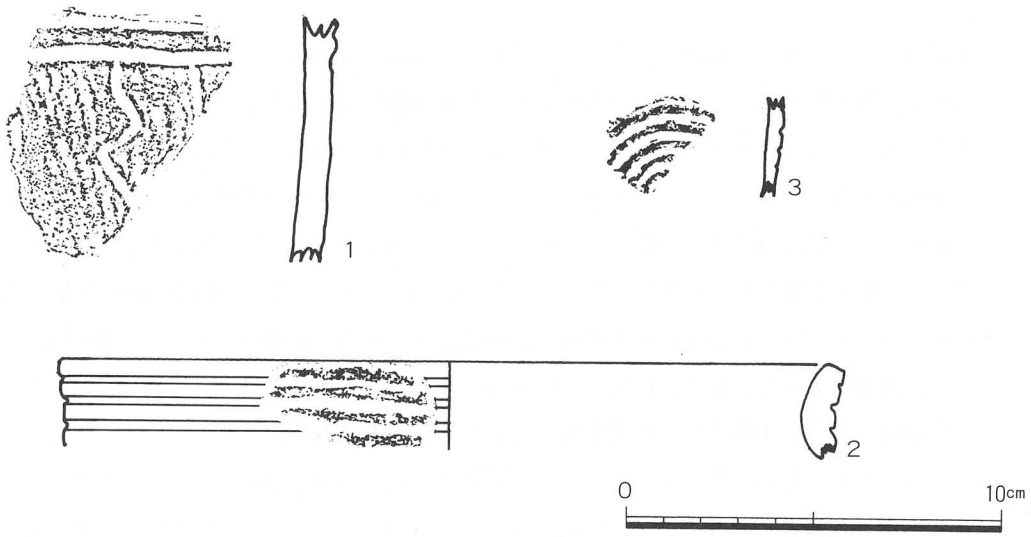
建物についてみると，館内建物のＡ期建物の主軸方向は南堀新堀と一致している。また，Ｂ期建物の主軸方位は北堀と一致している。従来の知見ではＢ期建物はＡ期建物より後出のものであるとされ，またＢ期建物と南堀新堀の主軸が平行（または直交）であるので，Ｂ期建物が南堀新堀と同時期であるとされていた（神岡町教育委員会1979）。しかし以上の知見から，南堀新堀段階にＡ期・Ｂ期建物の両方が伴う可能性が高いことが指摘できる。現時点では出土遺物から堀・建物の個々の年代を明確にはできないため，これらの堀と建物の時期的な対応関係の検討は今後の課題としたい。　（大平愛子）

（ｂ）遺　物

縄　紋（第19図・第５表）

今回調査で検出された縄紋遺物は，縄紋土器19片，打製石斧10点，磨石１点，凹石22点，その他剝片と思われる石が２点であった。今回調査では縄紋時代の遺構は検出されず，遺物はすべて堀の建造時に埋土内に紛れこんだものか，表採されたものである。

縄紋土器はすべて小片で，口縁部破片は１片のみであった。その多くは堀の埋土内から検出されたものである。図版に掲載しなかったもので特徴的な土器をこの場で紹介しておく。第19図１はＲＬ縄紋を地紋とし，横位平行沈線から縦位の波状沈線を垂下させる紋様構成をとる。湯屋遺跡（益田郡小坂町），荒城神社遺跡（吉城郡国府町）等で同様の構成をもつ土器群が報告されている。おそらく中期後葉曾利式系統の流れを汲むものであると思われる。加曾利Ⅲ式，曾利Ⅲ～Ⅳ式併行期と考えられる。第19図２は口縁部破片であり，半截竹管による横位平行半隆起線で器面を埋める。この半隆起線は，比較的太くはっきりと



第19図　出土縄紋土器実測図（縮尺1/2）

第５表　出土縄紋遺物観察表

縄紋土器

No	図版No	出土地区	X	Y	出土遺構	部位	器種	地紋	その他の紋様	器面調整	胎土	備考
1	-242	館内部			表土	胴部	7	ＬＲ縄紋		内面ナデ	白色粒・小石	
2	-243	館内部			表土	胴部	7	無紋	隆帯区画紋	内外面ミガキ	白色粒・砂	後期
3		館内部	1.5	10	ＳＰ30		7	無紋		内外面ナデ	白色粒・砂	
4		館内部	1.5	10	ＳＰ30		7	無紋		内外面ナデ	白色粒・砂	
5		館内部	2.5	10	ＳＤ１					ナデ	白色粒・砂	
6		館内部	1.5	10.5	ＳＰ12		9	無紋		内外面ナデ	白色粒	
7		南堀	-6	5.5	堀埋土		8	無紋		内外面ナデ	砂	
8		南堀	-6	5.5	堀埋土		8	縄紋		不明	白色粒・砂	
9		南堀	-6	6.5	堀埋土	胴部	8	無紋		内外面ナデ	砂	
10		南堀			堀埋土		7	ＲＬ縄紋		不明	砂	
11		南堀	-5.5	8.5	堀埋土			ＲＬ縄紋		不明	白色粒・砂	
12		南堀	-6.5	7	堀埋土		8				砂	
13		南堀	-6	1.5	堀埋土	胴部	5	無紋	平行沈線による渦巻紋	不明	白色粒	堀之内式系
14		南堀			堀埋土	胴部	7	ＲＬ縄紋	平行沈線，縦位波状沈線	内面ナデ	白色粒・雲母	加曾利・曾利式系
15		北堀	8.5	1	堀埋土	口縁部	8	無紋	平行な横位半隆起線	不明	白色粒・雲母	北陸系
16		北堀	6.5	-1	堀埋土					ナデ	白色粒・砂	
17		西堀	3	-0.5	土壌基底部	胴部	1.1	条痕		内面ナデ	石英・長石細粒砂混	
18		西堀	5.5	-1	堀埋土		8	ＬＲ縄紋		ナデ	白色粒・砂	
19		西堀	5.5	-1	堀埋土		7	縄紋		内面ナデ	白色粒	

打製石斧

No	図版No	出土地区	X	Y	出土遺構（層位）	形態分類	刃部分類	全長	全幅	厚さ	重さ	石質	残存状況	備考
1	-244	館内部			表土	短冊	偏	13.4	6.5	2.8	380	安山岩	完形	
2	-115	南堀	-6.5	6	堀埋土	撥	円	(10.3)	5.6	1.7	(135)	安山岩	基端部欠損	砥面残存
3	-116	南堀	-6.5	7	堀埋土	撥	直	13	6.2	2.8	250	泥岩	完形	刃部のみ研磨
4	-134	南堀	-5.5	6	表土	撥	偏	16	6.6	3	400	安山岩	完形	砥面残存
5		南堀	-6.5	4.5	堀埋土	短冊	円	(7.0)	7.5	2.9	(140)	安山岩	欠損	一部擦痕あり
6		南堀			表採	短冊	円	11.2	5.3	1.9	180	安山岩	完形	刃部のみ研磨
7	-130	南堀			堀埋土	撥	偏	12	5.3	1.4	120	砂岩	完形	砥面残存
8	-25	北堀	9	3.5	堀埋土	?	円	(6.5)	7	2.1	(150)	安山岩	欠損	敲打調整後研磨による調整
8	-26	北堀	9	3	堀埋土	?	円	(7.7)	7.5	2.1	(250)	安山岩	欠損	敲打調整後研磨による調整
10	-154	西堀	5.5	-1	堀埋土	撥	直	18.3	7.1	2.6	500	安山岩	完形	

その他の石器

NO	図版NO	出土地区	出土遺構	X	Y	長さ	最大幅	厚さ	重さ	石質	備考
1		南堀	堀埋土	-6	6	6	5.7	0.9	55	凝灰岩	凹石
2		南堀	堀埋土	-5.5	7	6	6.4	3	220	花崗岩	擦石
3		南堀	表採			8.8	8	3.5	330	砂岩	凹石
4		南堀	ＳＰ10	-6	5.5	1.8	1.8	0.3	0.1	鉄石英	剥片
5	-163	西堀	堀埋土	1	-0.5	8.5	5.5	1.9	85	チャート	剥片

施紋される。これらの特徴は，北陸の中期前半上山田・天神山式土器様式の複合口縁を思わせる。第19図３は，やや薄めの器厚に細い半截竹管による渦巻き状の紋様を施す。堀之内式系統の土器と思われる。図版59の243は，微隆起線で施紋した土器である。細い隆帯を両側から押し付けるようにして貼り付ける。類例として南垣内遺跡(高山市)，荒城神社遺跡(吉城郡国府町)，向洞遺跡(萩原町)などの出土例があげられ，飛騨地方に広く分布している。後期前葉のものと思われる。その他の破片について，地紋に縄紋を施したものは，５点あり，その内４点が単節ＲＬ縄紋で，残る１点は単節ＬＲ縄紋であった。器面はナデによる調整が大半で，胎土に白色粒・砂を多く含むものが多い。以上，今回の発掘で出土した縄紋土器は，中期中葉～後期前葉のものが大半であると考えられる。

石器は大半が打製石斧である。ほとんどが縄紋土器と同様堀埋土より出土したものであり，完形・欠損品の比率は半々である。大きさは完形のもので，長さが11.2～18.3cm，最大幅が5.3～7.5cm，厚さが1.4～2.9cm，重さは120g～500gでやや小型のものと大型のものが存在する。石質は安山岩，泥岩，砂岩のものが確認された。形態を伝統的な分類である短冊型(側縁が平行，または若干広がり，最大幅が中央寄りにくる)，撥形(側縁が括れるか広がり，最大幅が刃部近辺にくる)，分銅型(明瞭な括れ部を持ち，刃部・胴部の幅がほぼ同じになる)でみてみると，分銅型はなく，残りは撥型，短冊型で分けられる。一部研磨痕を残すものがみられたが，砥石からの転用，または成形の段階の研磨によるものと思われる。その他の石器としては，完形品では花崗岩製の擦石と砂岩製の凹石が検出されている。擦石は，一方が丸い形状を示し使用されているが，反対側が平たく，折れた様な形状になっている。石表面は全体的に滑らかである。凹石は，厚さ3.5cmの偏平な砂岩の片面に円形の窪みを有する。敲打痕はみられず，磨耗による窪みと思われる。その他，凝灰岩製の凹石の破片とチャート，鉄石英の剝片が，１点づつ出土している。

以上今回の発掘で出土した主な縄紋遺物をみてきたが，土器については，今回確認された中期中葉～後期前葉のものの他に前回調査の遺物の中に早期の押型紋土器がある。ポジティブな横位の楕円押型紋が施紋される。そのため，遺跡存続期間の時期幅はさらに下る可能性がある。打製石斧については，大きさ，形状，調整技法において類別が可能である。この差が，時期によるものか用途によるものかは今後の検討を要する。高原川流域の縄紋時代の様相を知る上で，今後の資料の充実が望まれる。　　(長谷川 幸志・大泰司 統)

中　世

土師器（第20図・第6・7表）：出土遺物中で最も出土量の多かった中世土師器皿について分析を行う。出土陶磁器の年代観から館の機能年代が13世紀から16世紀にわたることが明らかにされており（第4章第1節参照），土師器皿はその各時期に伴うものと考えられる。

94年度調査では，南堀地区及び館内部地区から多量の土師器皿が出土しているが，観察の結果，これらには前回までの調査で出土した土師器皿と同様の特徴がみられた。

79年度報告では出土土師器皿を手づくね成形と轆轤成形にわけ，ＡⅠからＡⅥ類，ＢⅠからＢⅣ類の10型式に分類しているが，各類の編年的な位置付けや，セット関係などは明らかにされていない。今回の遺物整理にあたっては前回の知見をベースとして，若干の改変を加えつつ形態と調整の違いから一括して基本的な分類を行った。出土土師器皿を手づくね成形によるT類と轆轤成形によるR類にわけ，以下のように分類した（第20図，第6表参照）。

手づくね成形（T類：1～20）

T-1類　口縁部が垂直に立ち上がり，口縁部に一段の撫で調整を強く施すもの。端部は丸く仕上げられる。

T-2類　ゆるく内湾する体部から口縁部に一段の撫で調整を強く施すものを一括して分類した。これには端部を上方へややつまみあげながら撫で調整を施す4や，撫で調整によって端部がやや外傾する5などがあり，将来的に細分の必要がある。

T-3類　大型の皿で，口縁部を薄くし，強く外反させて段をつけるもの。灰白色の精良な粘土を用いており，焼成も良好である。

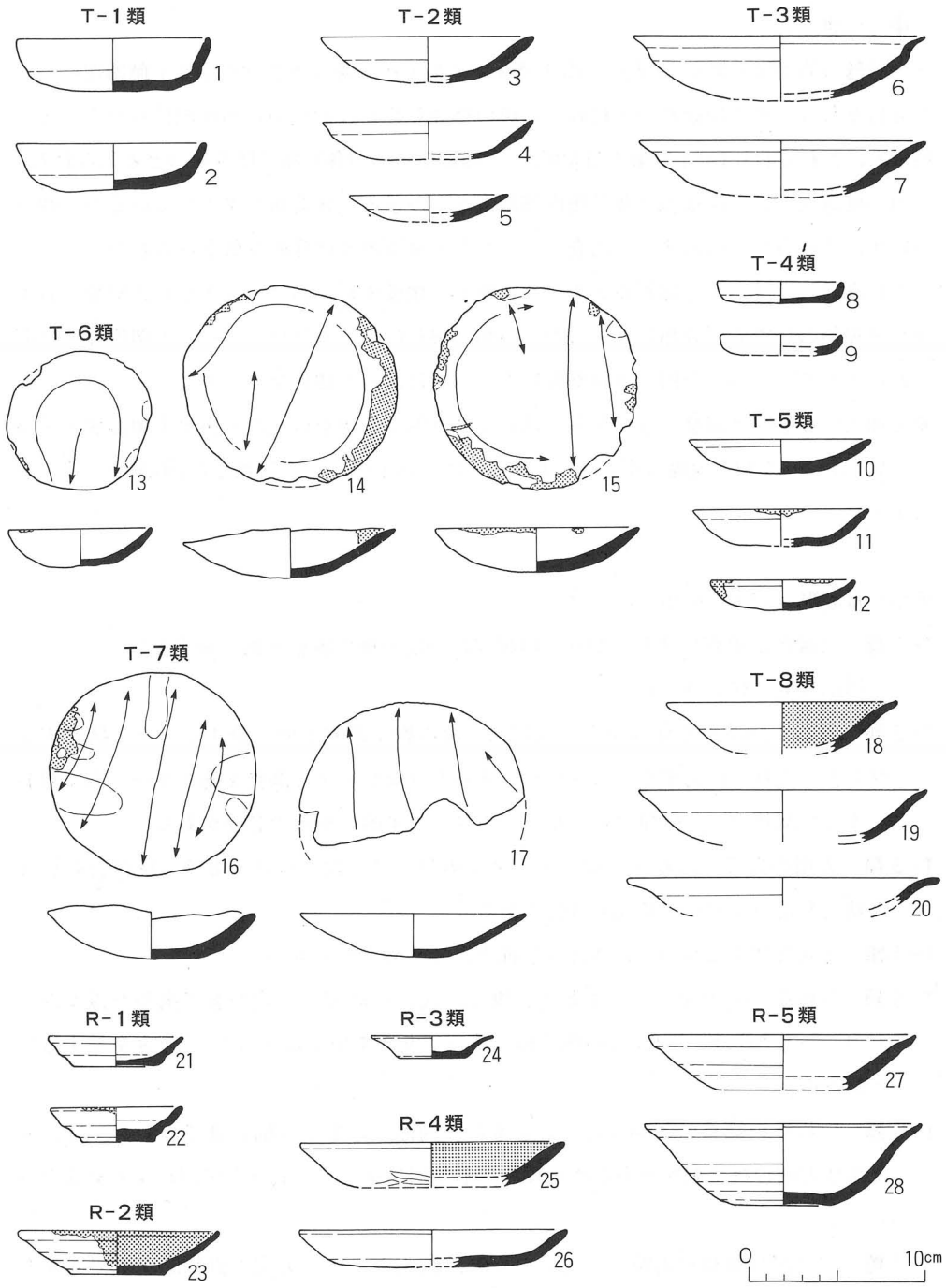
T-4類　平底を呈する小皿で，体部が屈曲ぎみに立ち上がるもの。

T-5類　内面を「の」の字又は，不規則に撫でた後，口縁部に一段の撫で調整を浅く施すもの。T-2類に比べ口縁部の撫で幅が狭い。丸底を呈する10･12と，平底を呈する11とがある。

T-6類　口縁部の調整が省略されているもの。内面だけを不規則に撫でており，見込みに複数方向の撫で調整痕が認められる。不整円形をなし，底部を平坦にする意識がみられない。

T-7類　口縁部の調整が省略されているもの。内面だけに一方向の直線的な撫で調整を施している。不整円形で立ち上がりの浅いものが多く，底部を平坦にする意識がみられない。

T-8類　横撫で調整により口縁部を強く外反させるものを一括して分類した。器壁の薄いものが多い。ただし細部において違いが認められ，更に細分が可能である。



第20図　土師器皿分類図（縮尺1/4）

第6表　土師器皿計測表

（法量単位：cm）

番号	調査地区	X	Y	遺構	口径	器高	底径	類型	色調	個体数	片	備考
1	78-				11.2	2.9		T-1	浅黄色	0.54	5	
2	78-B地区	-13.5	1.5	遺構面上	10.7	2.7		T-1	浅黄橙色	1.00	24	
3	78-				12.0	2.6		T-2	浅黄色	0.23	1	
4	78-				12.0	2.2		T-2	灰白色	0.20	1	
5	78-G地区	1.0	9.0	褐色土	9.0	1.6		T-2	橙色	0.13	1	
6	78-C地区	-14.0	-5.5	住居跡	16.0			T-3	灰白色	0.15	2	
7	78-C地区	-14.0	-5.5	住居跡	16.0			T-3	灰白色	0.24	2	
8	78-E地区	-2.5	9.5	褐色土	7.2	1.1		T-4	灰白色	0.29	1	
9	78-				7.0	1.2		T-4	橙色	0.16	1	
10	78-E地区	-2.0	11.0	遺構面上	10.5	2.0		T-5	黄橙色	0.33	1	
11	78-E地区	-2.5	10.5	遺構面上	12.0	2.1		T-5	灰白色	0.05	2	タール付着
12	78-E地区			攪乱	6.2	1.7		T-5	浅黄橙色	1.00	1	タール付着
13	78-E地区	-3.5	9.0	遺構面上	8.2	2.2		T-6	浅黄色	0.91	1	タール付着
14	78-E地区			攪乱	12.1	2.9		T-6	灰黄色	1.00	7	タール付着
15	78-E地区			攪乱	11.5	2.5		T-6	黄橙色	0.91	1	タール付着
16	94-館内部地区	2.5	10.0	SD01	12.0	2.7		T-7	浅黄橙色	1.00	1	タール付着
17	78-E地区	-3.5	10.5	遺構面上	12.9	2.5		T-7	浅黄色	0.50	6	
18	94-館内部地区	3.0	10.0	SD01	13.2			T-8	黄橙色	0.00	1	タール付着
19	94-館内部地区	3.0	10.0	SD01	16.5			T-8	黄橙色	0.00	1	
20	94-館内部地区	3.0	10.0	SD01	17.8			T-8	黄橙色	0.00	1	タール付着
21	78-E地区			攪乱	7.5	1.6	5.0	R-1	灰白色	1.00	1	タール付着
22	78-I地区	11.5	1.5	土壙	7.2	1.9	4.2	R-1	浅黄色	0.75	2	
23	78-				11.0	2.6	5.4	R-2	橙色	0.10	1	タール付着
24	78-E地区	-2.0	10.5	褐色土	7.0	1.6	4.0	R-3	灰白色	0.06	2	
25	94-南堀地区	-6.5	2.0	南堀	15.0			R-4	黄橙色	0.00	1	煤付着
26	94-南堀地区	-7.0	6.5	南堀	15.2			R-4	黄白色	0.00	1	
27	94-南堀地区	-6.5	11.5	表土	15.2			R-5	黄白色	0.00	1	
28	78-E地区	-2.5	10.0	褐色土	15.5	4.5	5.8	R-5	灰白色	0.16	12	

表中の番号は第20図に対応

第7表　土師器皿分類対照表

類型	手づくね成形								轆轤成形				
	T-1	T-2	T-3	T-4	T-5	T-6	T-7	T-8	R-1	R-2	R-3	R-4	R-5
前回報告分類	AV	AII	AIII	AIV	AII	AI			BI	BII	BIII		BIV

轆轤成形（R類：21～28）

R-1類　浅い小皿で，ゆるく外反する口縁をもち，腰に轆轤目による段を有する。底部に回転糸切り痕を残す。

R-2類　体部がゆるく外へ開く。口縁は丁寧につくられ，外側に面取り風に篦が用いられる。底部に回転糸切り痕を残す。

R-3類　口縁が強く外反する。底部は静止篦削りのように観察できるが，破片が小さく，不明な点が多い。

R-4類　浅い皿型で底部を静止篦削り調整している。体部が直線的に開くものと，口縁部でゆるく外反させるものとがある。

R-5類　杯に近い深めの器形であり，口縁部でゆるやかに外反する。底面から胴上部までを回転篦削り調整によって整形している。直線的に開く27と，腰にふくらみをもつ28とがある。

以上のように土師器皿は13類に分類することができたが，これらは，製作の地域差・製作者の違い，あるいは時間差を示していると考えることができよう。

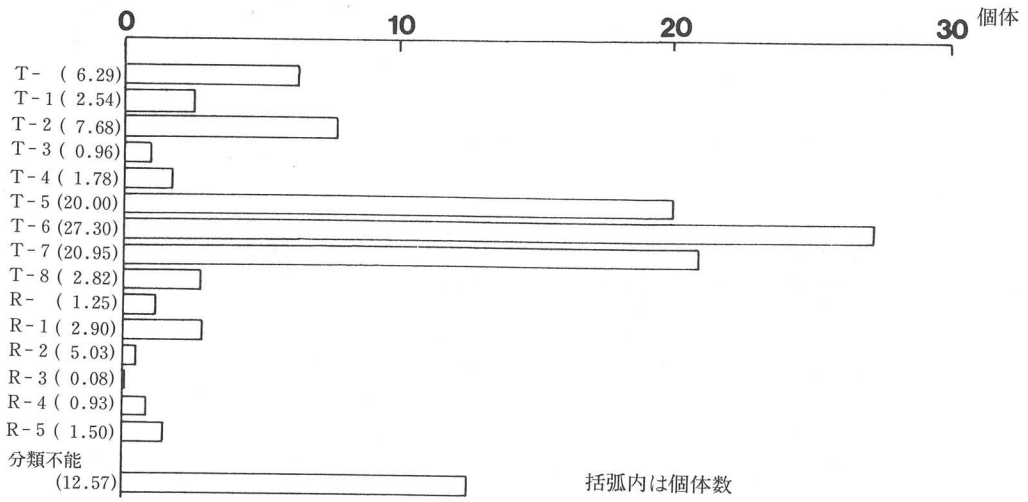
なお79年度報告の分類との対応は第7表に示す。前回報告の分類では口縁部に一段の横撫で調整を施すものを一括してAⅡ類に分類している。今回はこれをT-2，T-4，T-8類に細分した。

先に示した分類に基づいて前回調査，94年度調査出土遺物の計測をあわせて行った。対象とした資料の総数は1967破片，110.08個体分であった。以下の分析は口縁部計測法(宇野1992)によるものである。

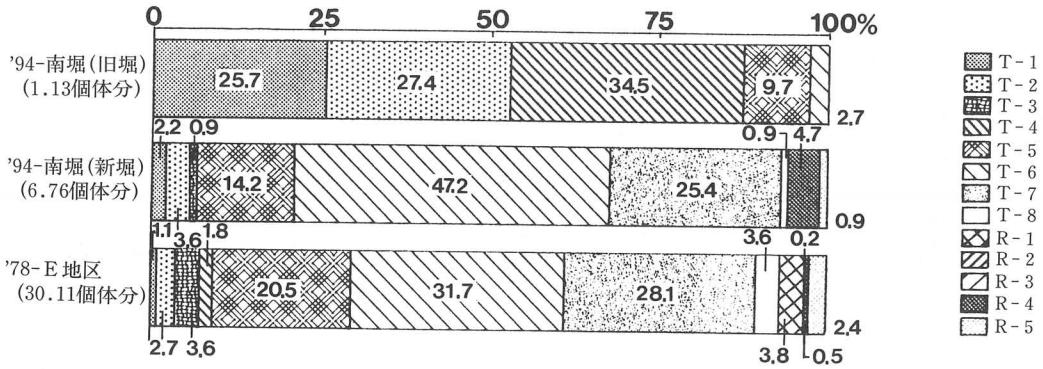
成形技法

T類については粘土盤から皿状に起こして成形し，内面見込みに撫でを施した後に口縁部を撫で調整する。だだしT-6・T-7類などの内外面には凹凸はほとんど認められず，平滑である。これはある種の型づくりの可能性がある。型を用いた成形の後，内面だけを撫でるが，口縁端部の調整は省略されている。基本的にこの型式のものは口縁部が歪み，不整円形をなすが，なかには端部をつまむことによって成形するものもみられる。特に内面の撫で調整が一方向のみのT-7類は多方向撫でを施すT-6類に比してその立ち上がりが弱く，器形も浅い皿形をなす。轆轤成形品のなかには回転糸切り跡を残すものと，R-5類のように回転糸切り後，逆さに伏せて，底面から胴上部までを回転篦削り調整により整形しているものがある。

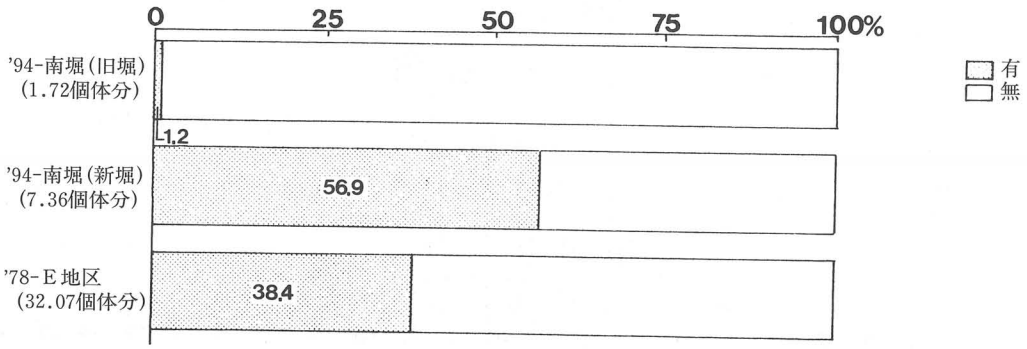
第12図に各型式の個体数を示した。計測資料についてはできる限り分類を試み，小破片



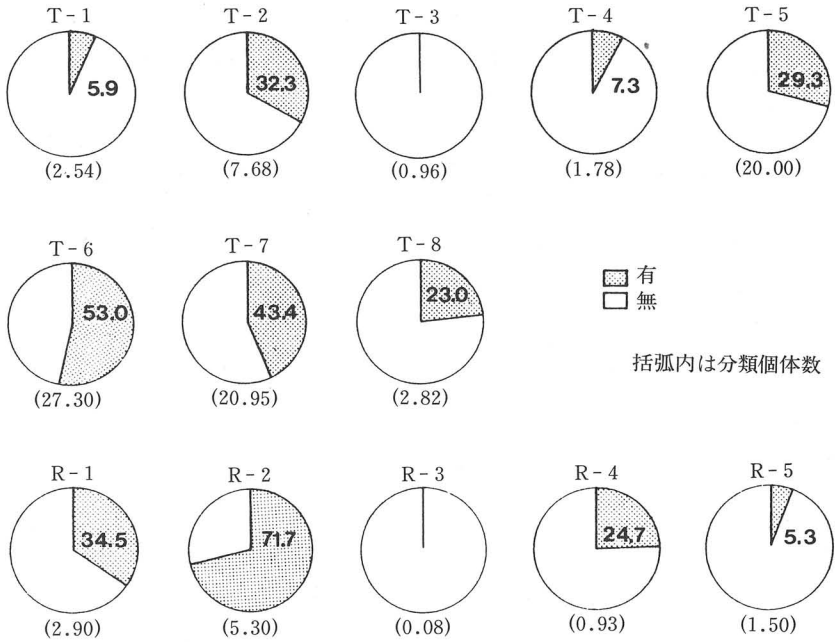
第21図　土師器皿の分類別個体数



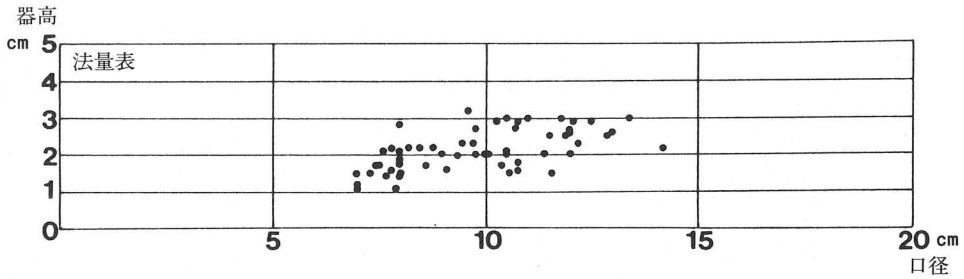
第22図　遺構・地区別の土師器皿の分類別個体数

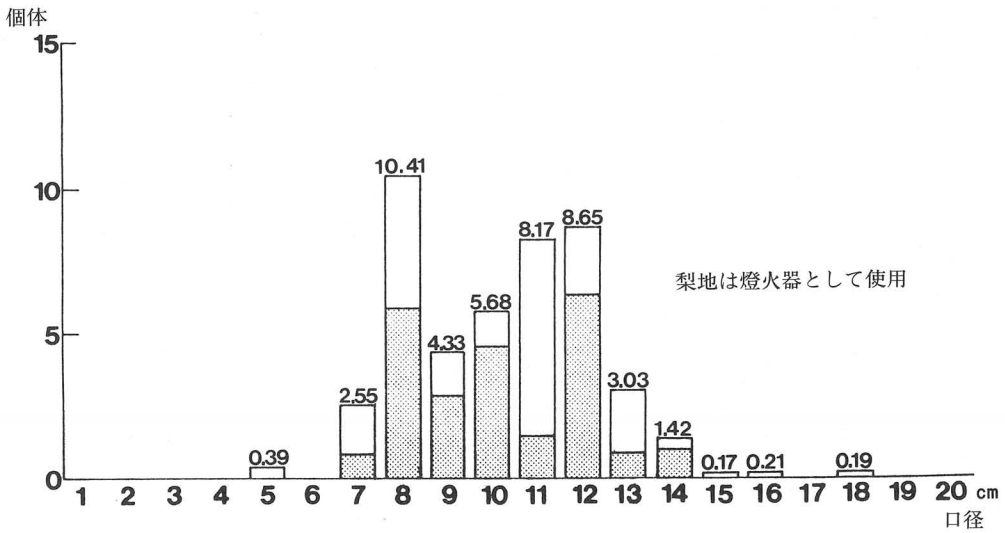


第23図　遺構・地区別のタール煤付着土師器皿の比率



第24図　分類別のタール煤付着土師器皿の比率





第25図　土師器皿の法量別個体数

についてはT類，R類の判別のみ行った。T-6類，T-7類については認識が困難なものが多く，これについては確実にT-6類，T-7類と判定できたものの比率に応じて配分し，算出した。分類可能な97.51個体の内訳は手づくね成形品が92.6%，轆轤成形が7.4%であり，本遺跡出土の土師器皿はそのほとんどが手づくね成形によるものであった。T-6類が27.30個体と最も多く，これにT-7類の20.95個体，T-5類の20.00個体が続く。T-6類とT-7類については内面の調整以外の差異は認められず，これを同じく認識するならば本遺跡の中で主体をなすものはT-6・7類であるとも言える。轆轤成形品ではR-5類が主体をなす。

出土地点別の分類別比率（第21～23図）

以上で分類した土師器皿がそれぞれどのようなセット関係を持っていたか，一括資料などによる分析が必要とされる。しかし現在までの調査では一括遺物として十分な量に恵まれた資料に乏しく，詳細な分析を行うにはデータ不足と言わざるをえない。ここでは，ある程度時間的なまとまりを持つ資料として，遺構の前後関係の明確な新旧の南堀埋土の土師器皿を扱い，さらに78年度調査で多くの遺物が出土したE地区の土師器皿を用いて，型式組成・タール煤付着率についての比較を行った(第21～23図)。館内部E地区ではA期からB期への立て替えが認められる2棟の礎石建物を検出している(第3章第1節参照)。その結果，特に直接切れ合う二本の堀跡資料に顕著な違いが見られた。まず南堀旧堀においては部分的な調査しか行っておらず，データ的に乏しいものの1.72個体出土し，うち1.13個体が分類可能であった。資料中T-6，T-7類などの主体タイプはほとんど認められない。その内訳はT-4類が34.5%と高率を占め，以下T-2類，T-1類と続く。R類はみられない。次に旧堀を直接切っている新堀出土資料であるが，この遺構からは埋土最下層を中心に7.36個体出土しており，うち6.76個体が分類可能であった。T-5類14.7%，T-6類47.2%，T-7類25.4%と主体タイプの出土が目立つ。またこれにR-4類，R-5類がわずかに伴う。ここでは旧堀で主体をなしたT-1類，T-2類，T-4類はわずかである(3類あわせて5.8%，T-4類の出土はなかった)。館内部E地区では32.02個体出土しており，うち30.11個体が分類可能である。新堀同様にT-5類20.5%，T-6類31.7%，T-7類28.1%と主体タイプの占める割合が高いが，T-1類～T-4類も一定量出土しており(4類あわせて9.2%)，R類も各類あわせて6.9%みられる。第23図では同様に出土地区ごとのタール煤付着率の違いを示した。旧堀での付着が1.2%と低いのに対し新堀では56.9%のものに付着しており，様相がおおきく異なる。館内部E地区では38.4%に付着が認められる。

新旧南堀にみられる型式比，タール付着率は一定程度の土師器皿の前後関係を表していると考えられるが，陶磁器による時期差は明確には導き出せない。南堀旧堀のように主体タイプをほとんど伴わない遺構に対する新堀の在り方に注目してみるならば，館内部E地

区も新堀段階とほぼ同様の傾向を示しており，これは新堀とE地区礎石建物の使用年代が関係しているものと考えられる。大きく南掘の付け替えに前後して，主体タイプの出現前と出現後の2段階を設定することができ，さらにタール煤付着率の違いより旧堀段階から新堀段階へ土師器皿の使用形態が変化したものと推測される。

煤付着品の比率（第24図）

第24図は各型式ごとのタール煤付着率をそれぞれもとめたものである。T-6類(53%)，T-7類(43.4%)に比較的顕著な付着がみられ，出土量に比して付着率がさほど高くないT-5類(29.3%)と対照的である。T-1類及びT-4類の付着率も低く(それぞれ5.9%，7.3%)，特にT-3類の付着は全くみられないことが注目される。なおT-3類は他の土師器皿と比べて大型で灰白色の精良な粘土を用いている特殊品である。

T-2類，T-8類にも一定の付着がみられる。轆轤成形のものについては全体的に付着率が低く，ただR-2類のみ高率で付着する(71.7%)。R類については分析資料自体が少ないこともありここでの評価は避けたい。型式ごとに見られるタール煤付着率の違いは各類型ごとの時間差，または目的及び使用の場などに反映される使用状況の差異に起因するものと想定できる。

法量（第25図）

完形品に乏しく，法量の分析は詳細には行い得ないが，出土全点の分析結果のみを第25図に示した。法量分析に際しては誤差を少なくするため口縁残存1/4以上の資料を用いるのが望ましいとされる(宇野1981)。グラフからは法量に明確なまとまりは認められないが，これはT-6類，T-7類などに不整円形をなすものが多かったり，時期の異なる資料を含んでいるためと考えられる。口径8㎝前後のものが多いようだが，明確ではない。法量分化については型式単位の分析ともあわせて今後，資料の増加を待ったうえで提示したい。

変遷段階

現在までのところ飛騨地方を中心とした一般的な型式は明らかにされていない。また前回及び今回調査において良好な一括遺物は皆無であり，陶磁器類との明確な共伴関係も見られない。これらのことから土師器皿についてはその年代的な位置づけが難しいと言える。ここでは周辺地域の様相と比較することによって時間的な前後関係を想定してみたい。飛騨と南接する美濃地方ではいまだ基本的な編年研究はなされておらず，また当該期の城館発掘例も乏しい。岐阜県東氏館跡(大和町)及び城之内遺跡(岐阜市)などで15世紀代の土師器皿が出土しているが，年代幅があり地域的なバリエーションも強いため比較対象として明確なものではない。逆に高原川の下流に位置する越中地域ではすでに基本的な編年軸が設定されている(宮田1992a)。これに対応させて考えるならば，手づくね成形により体部

直立気味に立ち上がるT-１類やT-５類は14世紀代の遺跡にみられる。江馬氏下館において主体をなすT-６類・T-７類については周辺地域に類例がなく，本遺跡において特徴的な型式である。ただし陶磁器の時期別出土量の分析から15世紀前半代にピークを迎えることが明らかにされており(第４章第１節参照)，主体タイプであるT-６・T-７類がその館の盛期に伴う可能性が高い。T-２類，T-８類についてはなお細分の余地を残しており，対応は難しい。これらは時間幅をもつ可能性が高いが恐らくは15世紀代のものと考えられる。なお越中弓庄城に見られるような16世紀代の特徴をもつものは今回の整理ではみられなかった(宇野1986)。ただT-８類としたものの中に15世紀の末期的な特徴のうかがえる資料があり今後検討を加えたい。轆轤製品については，底部に静止篦削りを施すR-４類は富山県井口城に類似例がある。井口城分類におけるＡ３類(上野1990ａ)がこれにあたり，報告書ではこれを15世紀後半に位置づけている。T-５類のように底部に回転篦削り調整を施すものについては越後阿賀北地方及び阿賀野川下流域に出土例があるが，上・中越地方の遺跡からはほとんど出土していないとされる(坂井1988・鶴巻1992)。北陸東部や東日本においては15世紀を中心としてやや轆轤土師器が目立つことが述べられており(浅野1991・鶴巻1992)，越中の様相などとも比較して，本遺跡の轆轤土師器皿についてもそのほとんどが当期に属するものであるとみられる。また北陸では一般的に中世後期になって油痕のつく資料が増加する現象があり（北陸中世土器研究会1992)，本遺跡での傾向もこれに一致すると考える。

いずれにせよ各型式の年代的な位置づけは，今後良好な一括遺物を得たうえでの課題としたい。周辺地域の資料との比較も不十分なままであり，これについても検討を加えるべき点が多く残る。ただあくまで推論でしかないが，T-１類，T-５類によって構成されるタール付着率の低い段階と，本遺跡の主体タイプであるT-６・T-７類及びこれにR-４類，R-５類などの加わるタール付着率の高い段階の２段階を設定できる。一応，現段階の認識として，主体タイプの盛行が15世紀前半の居館の盛期と一致するものとしておく。

（中田書矢）

貿易陶磁（第８表）：前回調査では，貿易陶磁は合計233片出土し，その年代的主体は13世紀から14世紀とされる。今回の調査では，合計39片，0.72個体分が出土した。これらの器種及び分類別出土量について，破片数と口縁部個体数を用い，第８表を作成した。分類名は，国立歴史民俗博物館集成の分類に従っている(国立歴史民俗博物館1993)。最も多いのは青磁であり，30片を数える。口縁部個体数も0.56個体と高数値を示している。中でも，碗C２類と碗D類で全個体数の５割を占めているのが目立つ。白磁は８片見られるが，分類不可能なものが半数を占める。青花は，１片のみ出土し，分類可能である。

青磁については，14世紀から15世紀前半にかけてのものが主流であり，16世紀に下るも

のは見られない。白磁については，碗４類と皿１類のような13世紀から14世紀にかけてのものが見られるのに対し，皿17類は15世紀のものである。青花については，15世紀後半から16世紀前半にかけてのものである。絶対数が少ないことから年代主体は明確ではないが，14世紀から15世紀前半に量的なまとまりがある。（石内詩保）

瀬戸美濃（第10表）：前回調査では，瀬戸美濃製品は合計851片出土し，出土製品の年代主体は，白瓷系陶器が14世紀初頭から15世紀初頭，鉄釉・灰釉製品が14世紀末から16世紀中頃におかれている。今回の調査では堀跡を中心に，合計112片，3.07個体分が出土した。うち，器種が判明する90片，2.87個体分の時期別出土量について第10表を作成した。年代観については藤澤良祐氏の編年観に従っている（藤澤1986･1991ａ）。すり鉢の25片（0.11個体），天目茶碗の22片（1.44個体）などが高数値を示しており，全体の個体数では，５割を占める。用途別の量比は，皿・碗等，食膳具（51片，2.38個体）が，全個体数の８割を占め，すり鉢・卸皿等，調理具（28片，0.49個体）も２割を占める。

出土製品の年代主体は，古瀬戸後Ⅳ期（新）にあるが，新しいものでは大窯第９小期の志野丸皿がある。卸皿については，古瀬戸後Ⅳ期（新）以降のものはみられない。すり鉢については，古瀬戸後Ⅳ期（新）が14片（0.06個体）と最も多く，それ以前にはみられない。天目茶碗については，古瀬戸後Ⅳ期（新）が4.5片（0.44個体）と最も多く，大窯第１小期の2.5片（0.38個体）とつづく。ただし，天目茶碗については，大窯第１小期と判別のつかない古瀬戸後Ⅳ期（新）のものが存在する。仏器・貯蔵具については，年代を確定できないものが大半を占める。小片であり，絶対数が少ないものもあることから，年代主体は明確ではない。前回調査の様相と合せて考えると，15世紀代にまとまりがあると考えられる。

（滝 寿美代）

珠洲（第９表）：前回調査では，珠洲製品は合計397片出土し，年代的には，壺がⅢ期中心，甕がⅢ期からⅤ期，すり鉢はⅡ期からⅤ期に中心があった。全体としてはⅣ期からⅤ期にかけての製品がみられる。今回の調査では堀跡を中心に，合計83片，2.26個体分が出土した。出土した珠洲について，破片数と口縁部個体数を用い，第９表を作成した。年代観については，生産地で示されている編年（吉岡1994）に従った。最も多いのは甕であり，28片，0.77個体を数える。次いで壺Ｔ種が24片，0.85個体，すり鉢16片，0.58個体と続く。出土した珠洲の年代的主体はⅣ期からⅤ期，すなわち14世紀から15世紀前半におくことができる。Ⅳ期は23.5片，0.48個体，Ⅴ期は37.5片，1.58個体という出土量の多さに対し，Ⅲ期はわずか２片，0.17個体である。これは前回調査の出土製品の傾向ともおおむね一致する。また，前回調査ではⅡ・Ⅲ期に属する製品が見られたが，今回の調査ではⅢ期より以前の製品は出土しなかった。さらに，Ⅴ期以降の製品が皆無であることから，この時期

第8表　出土貿易陶磁一覧表

種類	器種・分類	破片数	個体数
青磁	碗B0類	1	0.05 (8.9%)
	碗C2類	4	0.20 (35.7%)
	碗D類	2	0.22 (39.4%)
	碗E類	2	0.04 (7.1%)
	碗 不明	9	0 (*)
	皿 不明	2	0 (*)
	盤	1	0.05 (8.9%)
	不明	9	0 (*)
	青磁 小計	30	0.56〔77.8%〕
白磁	碗4類	1	0 (*)
	碗 不明	1	0.06 (46.2%)
	皿1類	1	0.04 (30.8%)
	皿17類	1	0 (*)
	皿 不明	2	0.03 (23.0%)
	杯	1	0 (*)
	不明	1	0 (*)
	白磁 小計	8	0.13〔18.0%〕
青花	皿B1群	1	0.03 (100.0%)
	青花 小計	1	0.03〔 4.2%〕
合計		39	0.72

第9表　出土珠洲一覧表

器種＼編年	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明	合計
壺T種		6 (0.33)	11 (0.52)	7 (*)	24 (0.85) ／〔37.6%〕
壺K種		2 (*)		1 (*)	3 (0) ／〔 * %〕
甕		11.5 (0.06)	21.5 (0.74)	4 (0.03)	37 (0.83) ／〔36.7%〕
すり鉢	2 (0.17)	4 (0.09)	5 (0.32)	5 (*)	16 (0.58) ／〔25.7%〕
不明				3 (*)	3 (0) ／〔 * %〕
合計	2 (0.17)	23.5 (0.48)	37.5 (1.58)	20 (0.03)	83 (2.26)

( ) 内は口縁部個体数

表10表　出戸瀬戸美濃一覧表

	古瀬戸	後Ⅱ	後Ⅲ	後Ⅳ(古)	後Ⅳ(新)	大窯	大窯1	大窯2	大窯4	大窯9	不明	合計
天目	1 (＊)		2 (0.16)	0.5 (＊)	4.5 (0.44)		2.5 (0.38)	1.5 (0.25)			10 (0.21)	22 (1.44)／〔50.3%〕
平碗	1 (＊)	0.5 (0.03)	1.5 (0.03)	0.5 (0.09)	0.5 (0.09)							4 (0.24)／〔8.2%〕
端反皿							1 (0.25)	1 (＊)				2 (0.25)／〔8.7%〕
折縁中皿					1 (0.06)	1 (0.03)						2 (0.09)／〔3.1%〕
折縁深皿	3 (＊)	0.5 (＊)	1 (＊)	2.5 (0.07)	1 (0.09)							8 (0.16)／〔5.5%〕
卸皿	1 (0.24)	0.5 (0.03)	0.5 (0.03)	1 (0.08)								3 (0.38)／〔13.3%〕
皿									1 (＊)	1 (＊)	3 (＊)	5 (0)／〔＊ %〕
すり鉢					14 (0.06)	2 (＊)		1 (0.05)			8 (＊)	25 (0.11)／〔3.9%〕
直縁大皿		1.5 (0.03)	1.5 (0.04)	1 (0.13)			1 (＊)					5 (0.20)／〔7.0%〕
大皿			0.5 (＊)	0.5 (＊)							2 (＊)	3 (0)／〔＊ %〕
壺類	1 (＊)			1 (＊)								2 (0)／〔＊ %〕
瓶子	2 (＊)											2 (0)／〔＊ %〕
花瓶	1 (＊)											1 (0)／〔＊ %〕
その他											6 (＊)	6 (0)／〔＊ %〕
合計	10 (0.24)	3 (0.09)	7 (0.26)	7 (0.37)	21 (0.74)	3 (0.03)	4.5 (0.63)	3.5 (0.30)	1 (＊)	1 (＊)	29 (0.21)	90 (2.87)

表中の上段は破片数
下段は口縁部個体数

に貯蔵具・調理具の使用形態に，何らかの変化が生じたことがうかがわれる。

瓦器（第26図・第11表）：瓦器は前回調査では合計167片，今回調査では合計28片が出土している。器種は火鉢と風炉である。いずれも破片であり，詳細は不明であるが，前回調査の報告における分類に基づき，口縁部形態を主として以下に示す６類に分類した。

第Ⅰ類　口縁部が肥厚しないまま強く内湾する。胴張りの太鼓形と考えられる。

第Ⅱ類　口縁部が肥厚して強く内湾しており，口縁上面が水平に切られている。胴張りの太鼓形と考えられ，口縁下には格子状，雷文などの印文が２本の隆線の間に施される。

第Ⅲ類　口縁部が肥厚せずに強く内側に折られており，上面は水平に作られる。胴張りの太鼓形と考えられ，口縁下には菊花や襷掛の印文が連続的に施文される。

第Ⅳ類　高さ２～３cmの垂直に立った口縁を持ち，肩が大きく張って筒状の足にゆるくすぼむと考えられる。

第Ⅴ類　口縁がほぼ垂直に立ち上がる筒形と考えられる。

第Ⅵ類　口縁が斜め上方にまっすぐ開く形であり，平面四角形を呈すると考えられる。

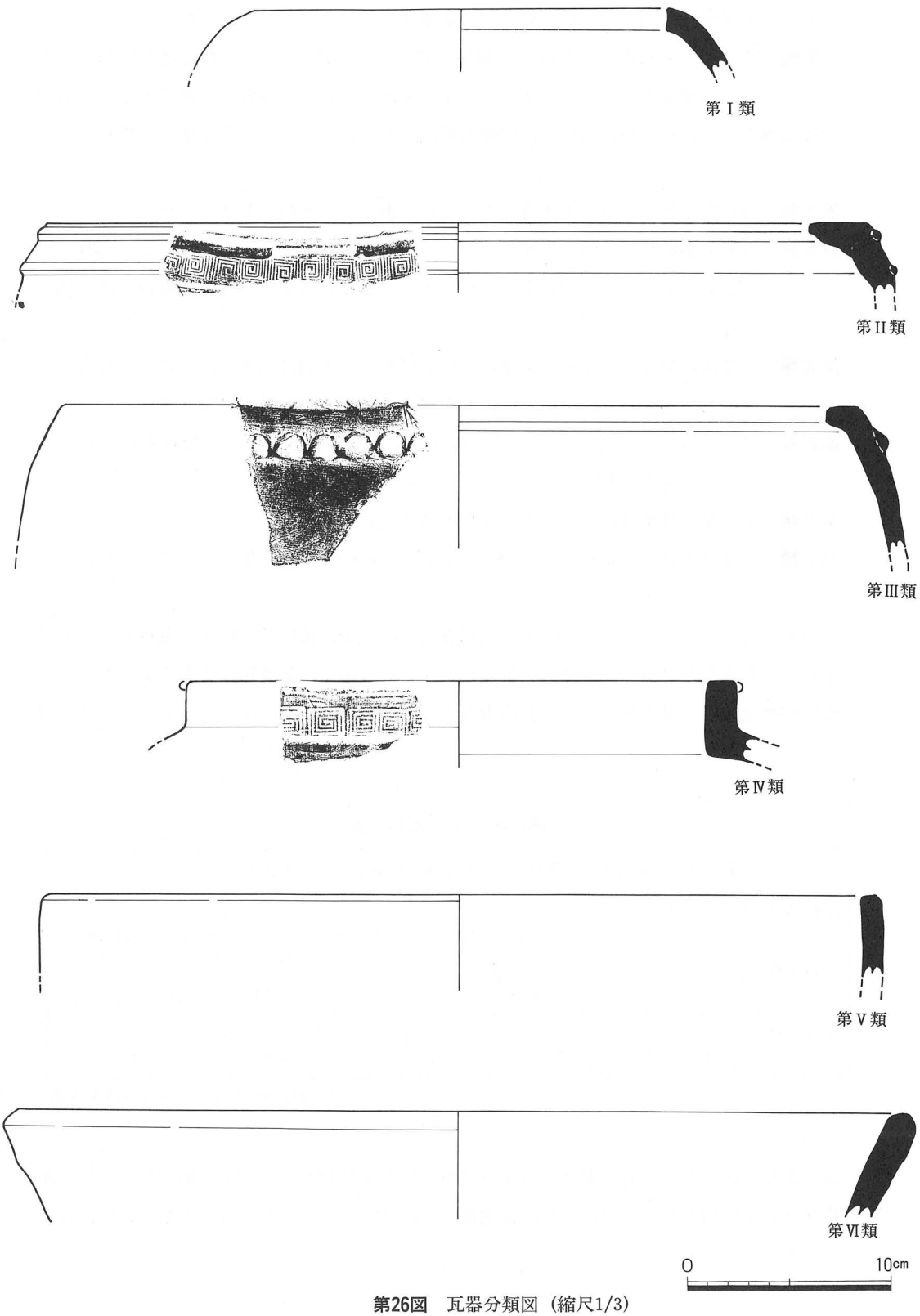
以上の分類にしたがって，前回・今回調査出土の瓦器の破片数と口縁部個体数について第11表を作成した。前回調査では第Ⅲ類が８片と最も多く，第Ⅵ類は皆無であるが，その他は同程度の出土量であった。今回の調査では，分類可能なものが７片と少なく，傾向は

第11表　出土瓦器一覧

	第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類	第Ⅳ類	第Ⅴ類	第Ⅵ類	合　計
前回調査	5 (0.37)	4 (0.11)	8 (0.35)	5 (0.25)	6 (0.05)		28 (1.13)／〔79.6%〕
今回調査	2 (0.05)	3 (0.19)	1 (＊)			1 (0.05)	7 (0.29)／〔20.4%〕
合　計	7 (0.42)	7 (0.30)	9 (0.35)	5 (0.25)	6 (0.05)	1 (0.05)	35 (1.42)

表中の上段は破片数、下段は口縁個体数

読み取れなかったが，前回調査ではみられなかった第Ⅵ類のものが１片出土している。江馬氏下館で使用された瓦器は大半が在地産のものであり，その年代は15世紀代に位置付けられると考えられる。



第26図　瓦器分類図（縮尺1/3）

八尾：前回調査においては，瓷器系陶器は合計198片が出土している。このうち10片は信楽と確認されている。その他の大半が富山県八尾窯製品と考えられるが，常滑や越前も含まれている。瓷器系陶器は今回の調査では，合計14片が出土し，そのうちの11片が八尾であった。器種は大半が甕である。酒井重洋氏によると八尾甕の形態はA・Bに分かれるとされる。甕Aは広口で，口縁部が緩く「く」の字状に外反する。甕Bは口縁部が立ち上がり，狭い壺状を呈する。A・Bの中でさらにそれぞれ第1群(未発達な「N」字状口縁を持つ)，第2群(口縁部が垂れ下がる発達した「N」字状口縁を持つ)に分かれ，大きく第1群から第2群へと変化する(酒井1990)。前回・今回調査とも口縁部の残りは悪く，分類可能なものはわずかであったが，大部分のものは第1群に属すると思われる。また，八尾窯製品の年代は13世紀前半から14世紀末までと考えられており，この時期を通じて貯蔵具として使用されたと考えられる。

銅製品：今回の調査では，銅製の飯食器が1点出土した。飯食器は仏に供養する飯食や汁，餅，菓子などを盛って壇上に安置する器である(岡崎1982)。使用年代の確定はできないが，江馬氏下館における日常の信仰に関係するものと考えられる。　　(近藤 美紀)

94年度調査における出土傾向（第27図・第12·13表）：今回の調査では1103点の中世遺物が出土しており，その内訳は土師器皿825点，瓦器35点，瀬戸美濃90点，珠洲83点，貿易陶磁器39点，銅製品1点，鉄製品30点である。この中で主体を占める食器資料を集計すると1037破片，38.98個体分となる。出土量の年代的な変化や構成比，遺跡での遺物散布状況などについては第4章第1節で前回までの出土遺物ともあわせて分析することとし，ここでは94年度調査における中世遺物の出土傾向だけをまとめておきたい。

今回調査の遺物は年代的には13世紀から16世紀までのもので構成され，土師器主体の食器組成が見られるなど，館全体の構成との間に大きな差異は認められない。ただし今回の調査は主として館をとりまく三方向の堀跡を対象として実施しており，この堀埋土遺物の様相は細部において全体の傾向と異なる。各堀跡については前回調査で確認された建物跡との時期的な対応関係，及びその変遷段階は不明であるが，以下において各堀跡の遺物の出土状況について考察する。

第12表には各堀跡出土資料の全てについて時期別に仕分けた量を示した。出土陶磁器については各堀跡とも同様の年代傾向を示し，古くは13世紀代の遺物からみられ，15世紀前半にその量的なピークをむかえる。この傾向は後章で明らかにする時期別遺物出土量の変化とも一致する。注目すべき点はいずれの堀も出土する遺物の年代観が全て16世紀の前葉までに納まるということであり，このことから衰退しつつも16世紀中頃まで機能していたと考える遺跡全体の様相(第4章第1節参照)との間に年代的なズレが指摘できる。これを検討するため土師器皿に次いで出土量が多く，年代決定の決めてとなる瀬戸美濃製品を用

第12表　各堀跡における遺物群の時期別出土量

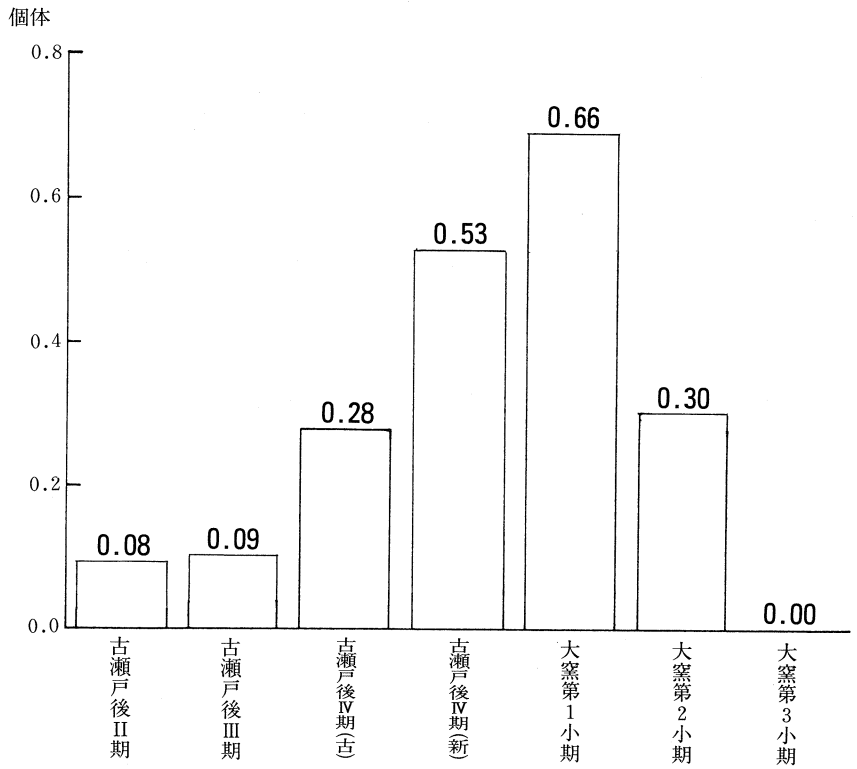
	13世紀	14世紀	15世紀前半	15世紀後半	16世紀前半	合　計
南堀	7 (*)	26.5 (0.23)	32.5 (1.33)	23 (0.56)	5 (0.21)	94 (2.33)/〔32.5%〕
北堀	2.5 (*)	8.5 (1.04)	17 (1.10)	4.5 (0.22)	3.5 (0.30)	36 (2.66)/〔37.1%〕
西堀	0.5 (*)	8.5 (0.08)	8 (0.73)	2.5 (0.64)	0.5 (0.02)	20 (1.47)/〔20.5%〕
館内部	1 (0.09)	4 (0.08)	8.5 (0.29)	3.5 (0.25)		17 (0.71)/〔 9.9%〕
合計	11 (0.09)	47.5 (1.43)	66 (3.45)	33.5 (1.67)	9 (0.53)	167 (7.17)

上段は破片数，下段は口縁部個体数

第13表　各堀跡における瀬戸美濃の時期別出土量

	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期(古)	後Ⅳ期(新)	大窯第1小期	大窯第2小期	合　計
南堀		3 (0.04)	1 (*)	18 (0.47)	4 (0.16)	1 (0.05)	27 (0.72)/〔32.3%〕
北堀	1.5 (0.06)	1.5 (0.03)	3 (0.24)	1 (0.06)	1.5 (0.50)	2 (0.25)	10 (1.14)/〔51.1%〕
西堀	0.5 (0.02)	1 (0.02)	1.5 (0.04)				3 (0.08)/〔 3.6%〕
館内部	1 (*)	2 (0.16)	0.5 (*)	1.5 (0.13)			5 (0.29)/〔13.0%〕
合計	3 (0.08)	7.5 (0.25)	6 (0.28)	20.5 (0.66)	5.5 (0.66)	3 (0.30)	45 (2.23)

上段は破片数，下段は口縁部個体数



第27図　堀跡出土の瀬戸美濃個体数

いて第13表を作成した。表は生産地において詳細な編年を行った藤澤編年に対応させて集計・作成している。これをもとに館の衰退期の様相をまとめてみた。なお南堀資料として扱ったものは全て新堀の最下層粘質土層からの出土品である。南堀では古瀬戸後Ⅲ期から大窯第２小期までのものが認められ，古瀬戸後Ⅳ期(新)段階のものが最も多い。大窯第３小期以降の製品が出土していないのは北堀でも同じ様相を示している。南堀地区では大窯第９小期に属する志野丸皿がみられるが，これは南堀廃絶後の遺構であるSK05からの出土である。西堀では全体的に出土量が少ないこともあって，資料が限られ，様相に不明瞭な点が多い。古瀬戸後Ⅱ期から後Ⅳ期(新)段階までの製品が出土し，これ以降の製品はみられない。南堀は館において一時期ゴミ捨て場として機能していた可能性があるとされ(第４章第１節参照)，北堀については館の外側から礎石などを投げ入れて埋め戻している状況が確認されている。このような遺構の状況等からも16世紀初頭において堀の果たした機能が大きく変化したことが指摘できる。

第27図からは堀跡埋土品に大窯第１小期のものが最も多くみられることがわかる。後章

で明らかにするが，本遺跡の瀬戸美濃製品全ての分析から，後Ⅲ期の製品が最も多く，後Ⅳ期(新)段階がこれに次いでいることが判明している。このような全体の傾向と比較するならば，堀跡出土遺物群の年代的主体は瀬戸美濃製品に限って言えば年代的にやや新しい製品を多く含んでいると言える。ここでは構成比を示さなかったが南堀新堀には珠洲の貯蔵具が多くみられ，館内部での状況との相違も認められる。今後，館の各地点の様相が明らかになるにつれて，堀跡遺物群の位置づけも明確なものとなろう。土師器皿の年代観については現段階での評価が難しいが，ただ直接切り合う新旧の南堀の資料に土師器皿の型式・タール煤付着率の違いがみられる。（中田書矢）

近　世

近世の遺物は，近世遺構面の検出が明確に出来なかったため，そのほとんどを表土および攪乱，排土中からのものに頼らざるをえなかった。遺物量は89点あまりであり，江馬氏下館廃絶後の近世の様相を明らかにすることは極めて難しい。これらの前提をもとに，遺物の出土傾向から考えられる居館廃絶後の近世の様相について述べる。

出土遺物は産地別に分けると，伊万里・不明陶器・瀬戸・土師器(土師質陶器を含む)の順で多い。このほか，キセルと用途不明の銅製品が出土している。年代については，伊万里の年代を一部明確に出来たが，瀬戸・不明陶器および土師器については，その大半が細片であることから，年代を確定できたものは極わずかであった。年代ごとの傾向を見ると，18世紀後葉以降のものが大半を占める。これに対して17世紀の遺物はわずか6点しか出土しておらず，対照的な傾向を示す。また，器種を見ると碗・皿などが中心で，このほかにすり鉢，徳利などがある。そして，その全てが，粗製品とされるものである。

近世遺物の傾向によってわかる当地の利用は17世紀に始まる。そして，18世紀後葉以降においてある程度広がったのではないかと考えられる。

いずれにしても，近世遺物は中世のそれと比べて量が激減しており，居館の廃絶後，当地が盛んに利用されることはなかったものと推察される。（新本 真之）

第4章　考　　察

1　出土遺物の様相

江馬氏下館の発掘調査はすでに館内の大部分で行われており，各遺構・包含層からは様々な遺物が出土している。ここでは種々の計量分析をまじえることによって本遺跡における遺物の様相をまとめ，これをもとに館の生活様相を導き出すこととする。

今回,94年度調査の遺物整理と平行して前回調査時の出土遺物の計測をあわせて行った。整理に際しては出土遺物4409点のすべてについて地点，遺構，層位，種類・器種，分類，法量，口縁部個体数，破片数を記録し，これをもとにデータベースを作成した。後述するが前回調査遺物の出土地点については可能な限り今回調査と同様の方法に基づいた復元を行っている。全出土遺物4409点の内訳は縄紋土器片45点・石製品36点などの縄紋遺物，須恵器片1点，中世の土器・陶磁器片3915点，近世陶磁器片219点，不明陶器片80点，不明磁器片22点，銅製品７点，鉄製品・鉄片50点，鉛弾３点，貨幣類10点，石製品21点である。このうち遺跡の主体となる城館期の生活様相を明らかにするために扱った食器資料は総計3915破片，150.68個体分を数え，土師器1967片，瓦質土器195片，貿易陶磁器302片，白瓷系陶器25片，瀬戸美濃895片，珠洲423片，八尾83片，瓷器系陶器23片によって構成される。分析の結果，食器の様相にはそれを用いた社会の特色が強く現れていることが判明し，これをもとにして江馬氏下館の生活環境の復元に努めることとした。

まず使用・廃棄のサイクルが短いとされるすり鉢の量的変化から館の機能年代について考察を進め，時期別の遺物出土量の変化を示し，遺物からみた館の盛行期を明らかにする。次に各々の時期毎における用途別種類構成の変化を検討し，さらに遺跡における遺物の出土散布状況と比較から館の場の機能の分析を試みる。最後に以上で分析した様々な事象を総括して段階別の食器組成を明らかにし,館での生活とその盛衰を探る基礎資料としたい。

なお以下の分析は原則的に口縁部計測法(註1)を用いて行ったものである。

(ａ)遺物からみた館の機能年代について

前回調査の知見では出土遺物の年代は13世紀から16世紀の各時期にわたっており，特に13世紀から14世紀にかけての遺物群が顕著にみられるとされている。しかし観察の結果，15世紀代の遺物も比較的まとまって出土していることが判り，このことから館の機能年代と出土量の増減について再検討を行うこととした。

一般的に，館跡の使用年代をこまかく示すものとしてまず，最も出土量が多く，使用・

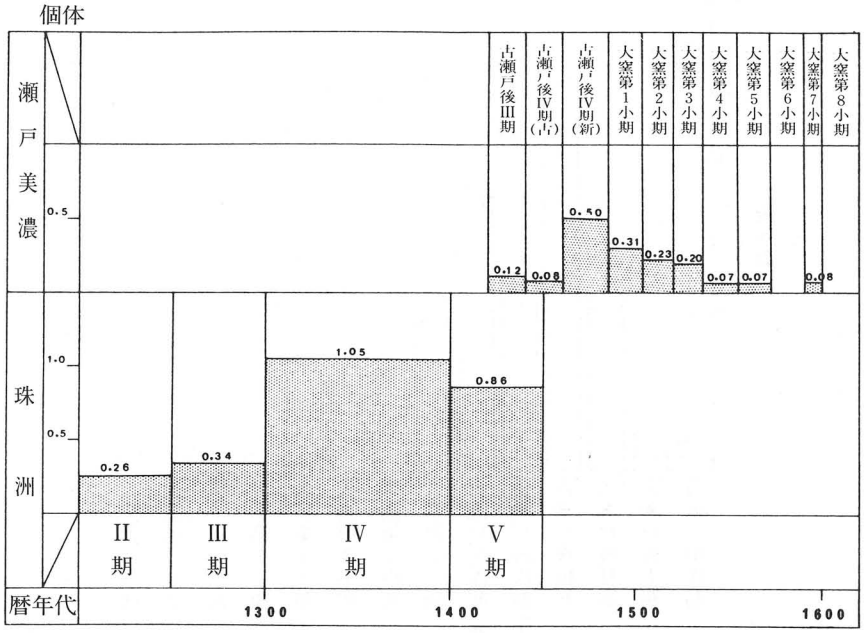
廃棄の期間が短いとされる土師器皿があげられる。しかし江馬氏下館の場合，土師器の型式にやや年代的な変化がみられるものの良好な一括資料・層位資料に乏しく，未だ詳細な編年を示し得ない。本遺跡における土師器編年の確立は今後の課題とすべきであろう(第３章第６節参照)。故にここでは土師器皿に変わるものとして，陶磁器類のなかでは比較的使用期間が短いとされるすり鉢の時期別出土量の推移を分析して館の機能期間の検討を行うこととした。

藤澤良祐氏は尾張，三河，美濃地方の城館趾出土の瀬戸美濃大窯製品を扱って各城館趾の築・廃城年代を解釈しており，本稿でも基本的にこれに準拠した方法で分析を行ないたい(註２)。ただし江馬氏下館の場合，既に吉岡康暢氏によって15世紀の中頃を境に日常雑器が珠洲から瀬戸美濃へ転換していることが指摘されており(吉岡1994)，その様相はより複雑である。以下では珠洲すり鉢の時期別個体数の変化も合せて検討することによって館の機能期間を想定しようと試みる。

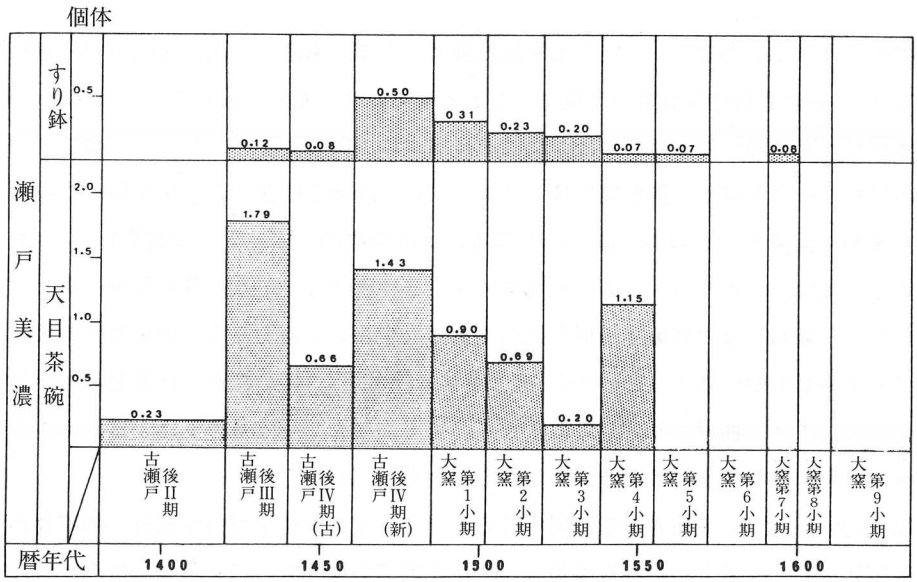
第28図は瀬戸美濃と珠洲のすり鉢について，両者の時期別出土量の変化を示している。すり鉢は13世紀から16世紀まで出土しているが，その前半にあたる13世紀～15世紀前葉にかけては珠洲が，後半にあたる15世紀後葉～16世紀にかけては瀬戸美濃がその役割を果たしていたことがわかる。すなわち珠洲はⅡ期の製品から出土がみられ，Ⅳ期においてそのピークを迎える。ただし珠洲Ⅳ期には14世紀100年間の年代が与えられており，実際の最盛期はⅤ期になる。Ⅵ期以降の出土はなく，それに代わって古瀬戸後Ⅲ期から出土がみられる瀬戸美濃のすり鉢が後Ⅳ期(新)段階に量的な最盛期を迎える。この時期に調理具において珠洲から瀬戸美濃の流通圏への転換がすすんだことが判る。そして大窯期に入ると瀬戸美濃すり鉢の出土量は徐々に減少し，第５小期までの製品がみられる。第７小期のものが一点のみみられ，それ以降の製品の出土はない。

第29図は瀬戸美濃のすり鉢と天目茶碗の時期別出土量の変化である。すり鉢は古瀬戸後Ⅲ期から大窯第7小期まで，天目茶碗は古瀬戸後Ⅰ期から大窯第4小期までの出土がみられる。すり鉢の出土量のピークは古瀬戸後Ⅳ期(新)であるが，天目茶碗のピークは古瀬戸後Ⅲ期にあり，ズレが認められる。これはすり鉢は使用による磨耗が激しいため，搬入から使用，廃棄のサイクルが短かかったためであるが，天目茶碗ではこのサイクルが長く，伝世を含めた長期の使用を推定できる。このことは藤澤氏が明らかにした三河・尾張地方の城館跡での傾向と一致する(藤澤1991ｂ)。

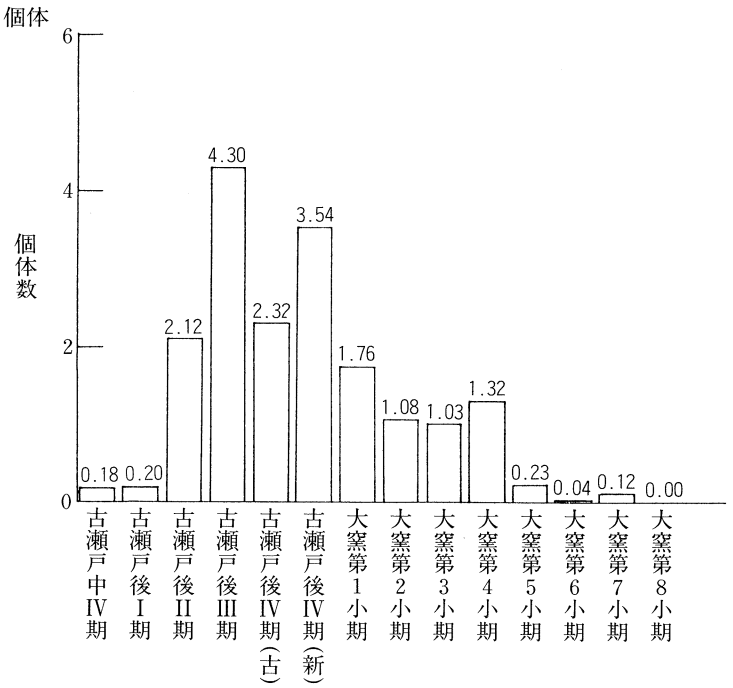
第30図には瀬戸美濃全体の出土量の推移を示した。瀬戸美濃製品は古瀬戸中Ⅳ期からみられ，後Ⅱ期の製品から安定的に出土するようになる。留意すべき点は江馬氏下館の当主が14世紀末から多くの瀬戸美濃製品を入手していたことである。瀬戸美濃は15世紀代を通じて器種・量ともに豊富であるが，古瀬戸後Ⅲ期の製品が特に多く見られる。後Ⅲ期製品



第28図　すり鉢の時期別出土量



第29図　瀬戸美濃製品の時期別出土量１（すり鉢・天目茶碗）

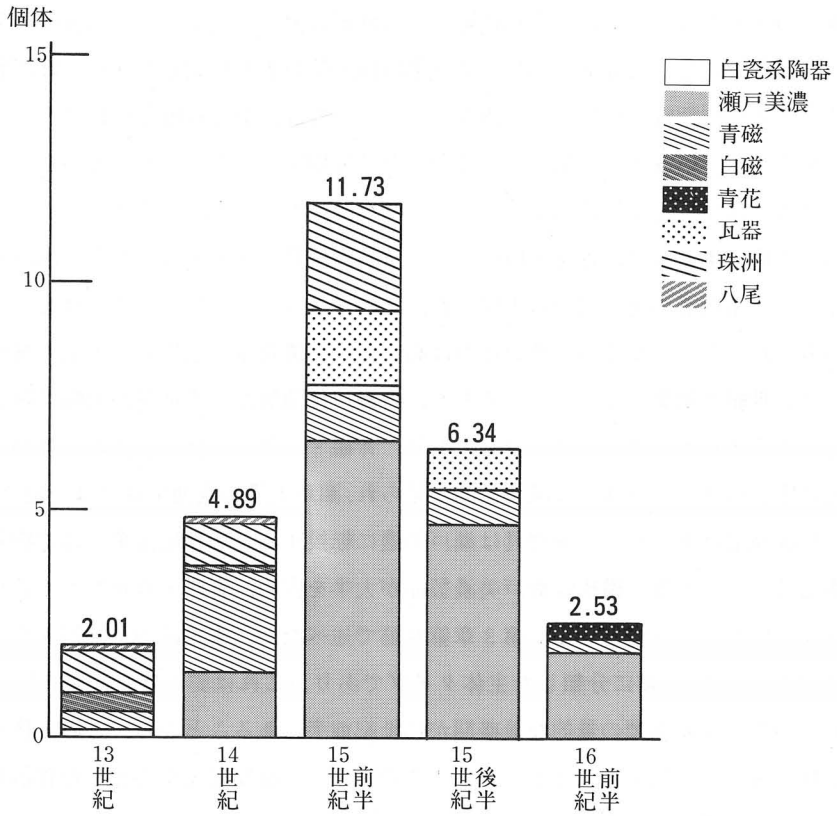


第30図　瀬戸美濃製品の時期別出土量２

の増加については当期においての生産地の動向，つまり東濃，三河，遠江への技術拡散がおこり，古瀬戸系施釉陶器窯が出現することともあわせて充分な検討を要する課題である。

瀬戸美濃流通圏の拡大はまず後Ⅱ期における主に茶陶を中心とした流入に始まり，後Ⅲ期の量的ピークを経て，後Ⅳ期にはすり鉢において珠洲と転換する。後Ⅳ期(古)段階になって僅かに減少するものの，続く(新)段階には再び増加している。大窯第1小期のものから著しい減少がみられるが，第４小期までは定量存在する。これ以降も僅かな出土が認められるが，量的には大窯第４小期と比べて極めて少ないものとなる。南堀出土の製品がすべて大窯第２小期に納まることから(第３章第６節参照)，堀の機能が16世紀初頭を境として変化したことが推察され，さらにそれ以降第４小期まで一定量の流通が確認できることから16世紀の中葉頃までは機能が続いたものと考えられる。

以上の分析によって館の機能期間を設定したうえで，遺跡全体の時期毎の陶磁器出土量の変化を示した。出土した陶磁器類のうち生産地での編年などによって年代を把握できたものを選択し，これを大まかな時期区分にあてはめて集計を行った。なお年代観の明らかでない土師器皿についてはここでは除外して考えることとする。時期区分のスケールを陶



第31図　江馬氏下館跡の時期別遺物出土量の変化

第14表　江馬氏下館跡の時期別遺物出土量

	13世紀	14世紀	15世紀前半	15世紀後半	16世紀	合　計
白瓷系陶器	0.19					0.19〔 0.7%〕
瀬戸美濃		1.44	6.52	4.76	1.96	14.68〔53.3%〕
青　　磁	0.38	2.18	1.03	0.75	0.23	4.57〔16.6%〕
白　　磁	0.40	0.14	0.10			0.64〔 2.4%〕
青　　花					0.34	0.34〔 1.2%〕
瓦　　器			1.71	0.83		2.54〔 9.3%〕
珠　　洲	0.93	1.02	2.37			4.32〔15.7%〕
八　　尾	0.11	0.11				0.22〔 0.8%〕
合　　計	2.01	4.89	11.73	6.34	2.53	27.50

磁器流通の在り方などから大きく13世紀代，14世紀代，15世紀前半代，15世紀後半代，16世紀前半代に設定し，口縁部個体数による第31図・第14表を作成した。図では消費のセット関係が不明で時期別の仕分けが困難なものについては，ある程度年代観の明確なものの量比で配分するという方法を用いて，できるだけ時期別データ化に努めている。中世の下館跡では古くは13世紀代の遺物がみられ，それ以降14世紀にかけて斬増していく傾向がある。これを構成するものは青磁・白磁などの貿易陶磁器や珠洲・八尾などの国産陶器である。また白瓷系陶器の碗・皿が若干伴うが，その量は少ない。14世紀代には瀬戸美濃施釉陶器がみられるようになるが，その比率は高くない。遺物量が急増し出土量の最盛期を迎えるのは15世紀の前葉になってからであり，古瀬戸後期製品の流通量が大幅に増加している。珠洲の出土量も14世紀以降安定しており，青磁・白磁の食膳具がこれに加わる。続く15世紀後半にはすでに全体的な減少傾向が見られ，瀬戸美濃の流通量はほぼ一定であるが，当期の珠洲製品はみられず，調理具は瀬戸美濃に転換する。16世紀前葉では遺物量はさらに減少している。食器の構成は瀬戸美濃製品が大半を占め，青磁・青花などの貿易陶磁器をほとんど伴わない段階となる。第３章第６節で述べたが，本遺跡の土師器皿で主体を占めるのはT-６・T-７類に分類した主体タイプであり，これは館の盛行段階に伴うものと見られている。陶磁器類の量的な最盛期が15世紀前半にあることから，この主体タイプが当期に伴うものと想定することができる。このころに土師器皿を中心とした食器組成が成立したものと評価できよう。

(ｂ)時期別の食器構成について

第15表は今回までの調査で出土した中世の食器資料3915破片，150.68個体分についてその種類・器種・用途ごとにまとめたものである。ここではこの構成表をもとに年代的な構成の変化も考慮しつつ，江馬氏下館(館の外郭を含む範囲で)全体の食器組成をまとめてみる。この構成は13世紀から16世紀中頃に至る年代幅を有しているものの，傾向として本遺跡における食器の使用状況を一定程度あらわしていると考えられる。ただ本遺跡での組成には時期的な変遷があることが想定され，これを理解するには各期における厳密な食器セットの抽出が必要となる。これを理解するために用途別の第32図～第34図を作成し，その時期毎の在り方について分析を行う。ただしここで示す時期変遷はあくまで生産地等で示されている年代観をもとに比定したものであり，必ずしも明確なセット関係ととらえられるものではない。

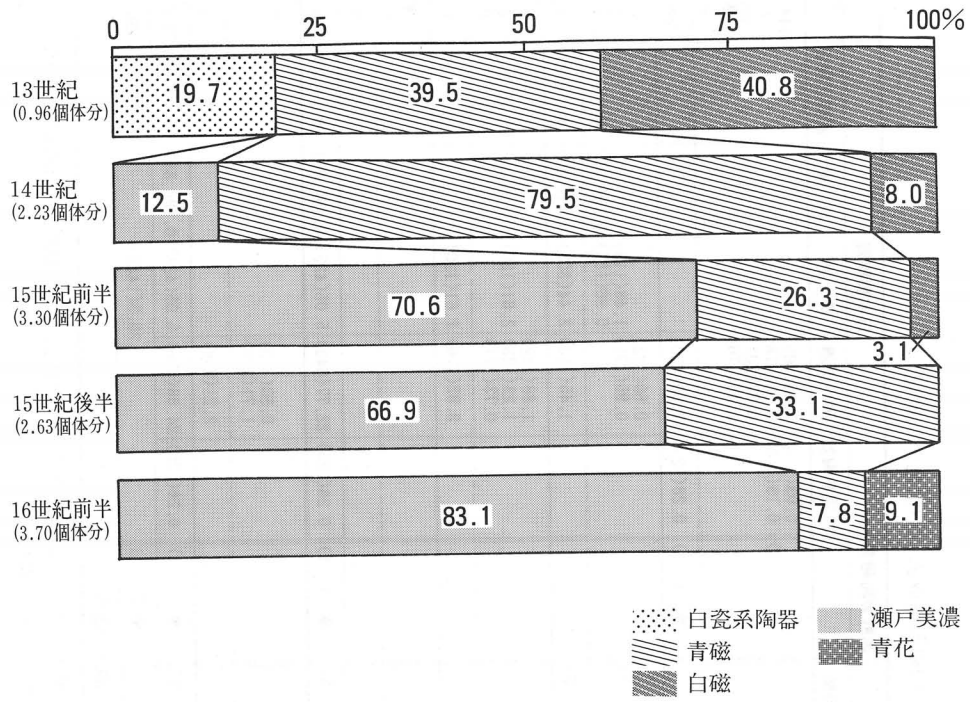
出土土器の中では土師器皿が最大の比率を占めており，食器全体に占める各種類の比率では日本製土器が75％と高く，以下日本製陶器の19％，中国製陶磁器の５％と続く。

まず食器全体のなかで食膳具の占める割合が９割と極めて高率であることがわかる。食膳具のなかでは土師器皿が大半を占めており，次に多いのが瀬戸美濃製品の碗皿類である。

第15表　江馬氏下館跡出土の土器・陶磁器構成表（13世紀～16世紀）

		日本製土器		中国製陶磁器						朝鮮製陶磁器	日本製陶器					小計
		土師器	瓦器	青磁	白磁	青白磁	青花	天目	その他		白磁系陶器	瀬戸美濃	珠洲	八尾	磁器系陶器	
食膳具	皿 碗 天目茶碗 杯 盤	110.08(1967)		0.15(4) 4.10(178) 0.31(10)	0.65(30) 0.56(8) ＊ (2) 		0.14(5) 0.16(7) 	 1.70(16) 	 	＊ (1)	0.09(7) 0.19(18)	3.63(65) 3.05(78) 8.37(201) 2.45(76)				114.74(2078) 8.06(290) 10.07(217) ＊ (2) 2.76(86)
	小計	110.08(1967)		4.56(192)	1.21(40)		0.30(12)	1.70(16)		＊ (1)	0.28(25)	17.50(420)				135.63(2673)
貯蔵具	壺(瓶子) 壺 甕					＊(3)			＊ (3)			0.50(22) 0.95(31)	1.48(116) 0.96(187)	0.19(83)	＊ (23)	0.50(25) 2.43(150) 1.15(293)
	小計					＊(3)			＊ (3)			1.45(53)	2.44(303)	0.19(83)	＊ (23)	4.08(468)
調理具	すり鉢 卸皿 その他											1.86(142) 1.23(23) 0.73(11)	2.61(120)			1.86(142) 3.84(143) 0.73(11)
	小計											3.82(176)	2.61(120)			6.43(296)
煮炊具	内耳鍋 釜	＊ (1) 0.08(1)														＊ (1) 0.08(1)
	小計	0.08(2)														0.08(2)
食器小計		110.16(1969)		4.56(192)	1.21(40)	＊(3)	0.30(12)	1.70(16)	＊ (3)	＊ (1)	0.28(25)	22.77(649)	5.05(423)	0.19(83)	＊ (23)	146.22(3439)
その他	火鉢 香炉		2.25(195)	 ＊ (35)								0.50(9) 1.71(237)				2.25(195) 0.50(9) 1.17(272)
	小計			＊ (35)								2.21(246)				4.46(476)
総計		110.16(1969)	2.25(195)	4.56(227)	1.21(40)	＊(3)	0.30(12)	1.70(16)	＊ (3)	＊ (1)	0.28(25)	24.98(895)	5.05(423)	0.19(83)	＊ (23)	150.68(3915)
		112.41(2164)		7.77(301)						＊ (1)	30.5(1449)					150.68(3915)
		150.68(3915)														

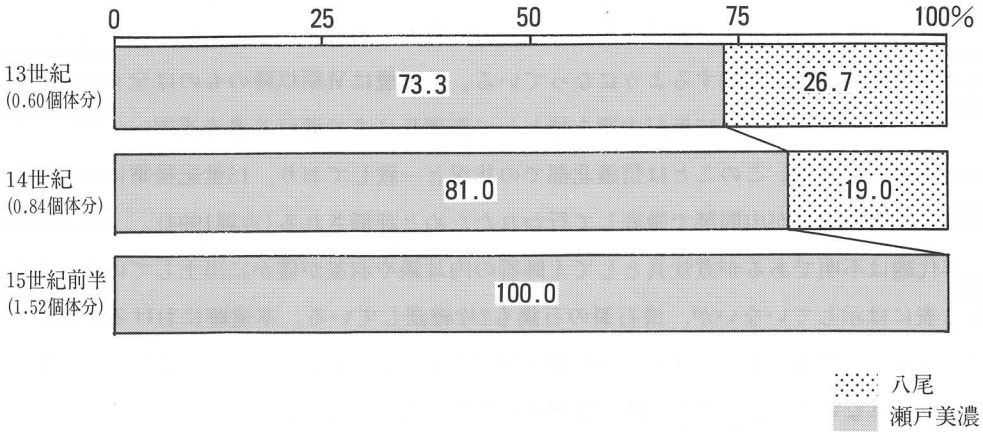
個体数は口縁部計測法により小数点第２位以下は四捨五入，括弧外は個体数，括弧内は破片数。
＊印は存在するが数値として表われないもの。



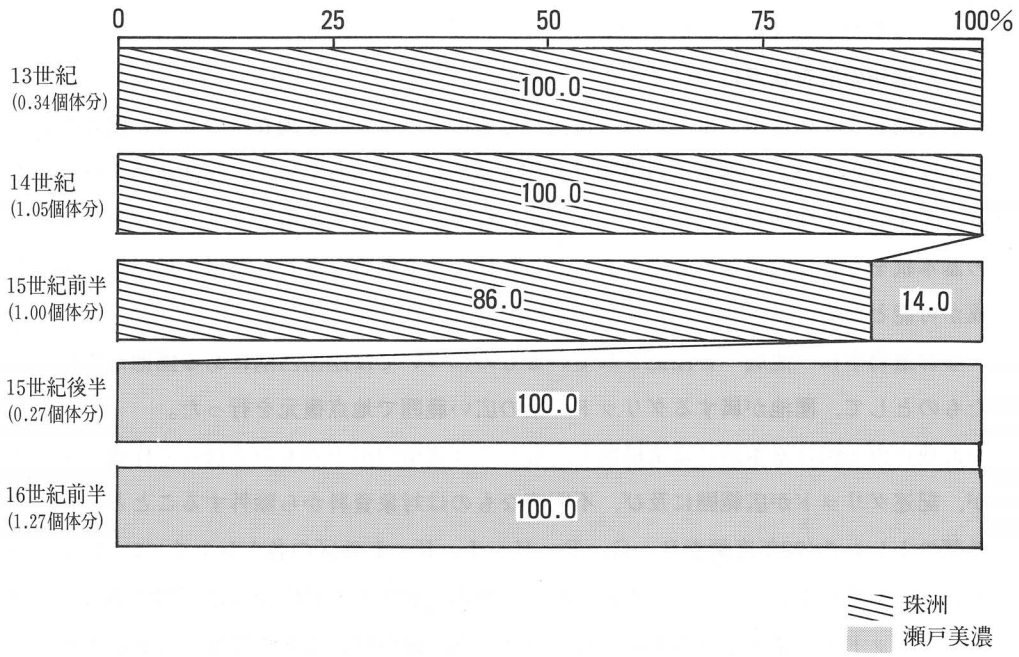
第32図　食膳具の種類別構成比

本遺跡では貿易陶磁器に比して国産施釉陶器が３：７と大きく優越する現象がみられる。第32図にその時期毎の種類別構成比を示した。13世紀から14世紀にかけては青磁･白磁が食膳具の80％以上を占めているが，15世紀前半に大きく減少し，これに代って古瀬戸後期の瀬戸美濃が70％前後の高率を示すようになる。そして16世紀代は食膳具は瀬戸美濃大窯製品と中国製青花によって構成されていたと推定される。最も出土量の多い土師器皿については，その年代観があきらかにされていないが，全点の計測結果から実に瀬戸美濃食膳具の約６倍，貿易陶磁器食膳具の約14倍の量を占めており，その組成比は各期においても最も高い比率を示すものとみられる。

貯蔵具では珠洲及び八尾の甕が見られる。富山県八尾窯製品については13世紀・14世紀代には一定量の製品が流通しているものの，珠洲などの不足部分を補完する程度であり，本遺跡の出土例から富山県内と飛騨の一部を対象とした地域窯とみられる(酒井1990)。時期毎の構成比の変化は第33図に示した。13世紀から14世紀には20％前後の八尾窯製品がみられるが，15世紀には珠洲のみの貯蔵形態に統一されるものと推定される。計測にあたり種類を瓷器系陶器としたものは常滑・越前と考えられるものであるが，いずれも体部破片



第33図　貯蔵具の種類別構成比



第34図　調理具の種類別構成比

で判別が困難なためここでの分析からは除外した。

調理具では珠洲と瀬戸美濃の両者がみられる。第34図に示したように13世紀から14世紀にかけては珠洲が江馬氏下館に流通する唯一の鉢形態であるが，15世紀後半代には瀬戸美濃焼のすり鉢が多く流通するようになっている。珠洲焼はⅥ期以降のものは全く出土しておらず，先述したように15世紀中葉を境として調理具にまで瀬戸美濃流通圏への転換が及ぶ現象がみられる。このことは信濃北部での状況と一致しており，15世紀後葉において珠洲の流通圏の縮小が山間部で徹底して行われたためと評価される(吉岡1994)。

年代観は不明であるが煮炊具として土師器の内耳鍋や羽釜が僅かに出土している。この他に表には示していないが，滑石製の石鍋も2片確認している。本遺跡における焼物の煮炊具は極めて少量であり，鉄鍋との併用を想定することも可能であるが，実際に出土品としてみられないことからその理解には慎重にならざるをえない。

このように江馬氏下館の食器には複数産地の競合がみられ，遺跡の各段階において多様な構成の変化が想定される。特に14世紀末以降，瀬戸美濃製品が大量に流入し，遅くとも15世紀の後葉までには食膳具において貿易陶磁器を，調理具において珠洲を圧倒していることが注目される。ここで明らかにした食器構成の変化は後述する江馬氏下館の時期区分におおよそ対応させることができる。

（c）遺物の散布状況について

前回調査までの遺物で出土地点の復元が可能なものは78年度調査時のものに限られる。79年度報告によると，調査では遺物は英字と数字による3mグリッド取りあげを行っており，まずこれを今回設定したグリッド表記に修正した。94年度調査グリッドは前回調査時の基本杭をもとに設定したものであり，これによって両者をあわせた出土地点復元図の作成が可能となる。

なお遺物中に“池底”と注記されているものについては館南西隅にある園池から出土したものとして，園池が属するグリッド一括の広い範囲で地点復元を行った。

なお地点復元図は基本的には遺構面上，もしくは遺構内出土のものを扱って作成しているが，記述グリッドが広範囲に及び，不明瞭なものは対象資料から除外することとした。館外部のトレンチ(78年度調査B，C，F，H，I，K，L地区の各トレンチ)については削平により旧地形を失っていたとされており，館内部層序との対応関係は不明である。試験的にグリッド出土遺物全点の集計を行ったところ，館外部にもある程度の散布が広がることが確認でき，注目される。特に78年度調査C地区検出の竪穴住居からは土師器・青磁・瀬戸美濃等がまとまって出土していることが判明したが，それ以外の地区については遺構との関わりが明確ではなく，現段階での理解は難しい。今回の分析からは外すこととしたが，今後調査が進むうえでの課題となろう。

第16表には79年度報告の集計結果もあわせて各調査地区における単位面積（1㎡）あたりの出土頻度の比較を示している。78年度，94年度調査あわせて館内の約2798㎡が調査されており，館外では78年度調査を中心に約1398㎡が調査されている。ただし館内部では少なくとも2回以上の広範囲の整地を行っているとされ，面積の把握の仕方については若干問題が残る。各地区毎ではまず館内の出土頻度の高さが目立つ（1㎡あたり1.68片）。館を取り囲む三方の堀からの頻度は南堀地区が1㎡あたり0.45片と高く，北堀0.35片，西堀0.27片と続く。館内全体をあわせると単位面積あたりの出土量は1.02片となり，これは館外部の0.49片に比べて高い数値を示す。このような出土頻度の違いは土師器皿において特に顕著であり，館外部からの出土は極端に少ない。グリッド単位の出土散布状況の分析に関しては78年度・94年度調査の精度の差異も考慮に入れるべきであり，難しい問題を含んでいるが，ここではむしろ積極的にそのあり方の意味に迫りたい。

次に館内部における出土散布状況の分析を行うが，館内部ではすでに多くの建物遺構が検出されており，空間構成等からその機能等が想定されている（神岡町教育委員会1979）。

第16表　調査区毎の遺物出土量一覧表

	調査面積〔㎡〕	破片数〔片〕	出土頻度〔片/㎡〕
北堀地区	240	83（ 29）	0.35(0.12)
南堀地区	820	370（237）	0.45(0.29)
西堀地区	379	104（ 60）	0.27(0.16)
堀の内側	1359	2289(1318)	1.68(0.97)
館内総計	2798	2846(1644)	1.02(0.59)
館外総計	1398	691（152）	0.49(0.11)

括弧内は土師器皿の破片数

分析はこれらの遺構配置とあわせてすすめるため，まず前提作業として既に検出されている建物等の性格を整理する。前回までの調査では館内部の最上面遺構群の調査が行われており，その配置の違いからＡ，Ｂの２時期の建物群が確認されている。切り合い関係から古いとされるＡ期建物群については礎石，抜き取り穴，根石等が比較的よく残り，平面規模も推測されている。５ないし６棟の礎石建物・掘立柱建物を復元することができ，本稿ではこの遺構群をベースとして散布状況の変化を示すこととした。第35図にその配置を示したが，規模・構造については79年度報告に掲載された図等から再構成して作成している。作成に際しては小野正敏氏の館の空間構造に関する論考中に示された復元図を参考にした（小野1994）。Ａ期建物の概要は以下のとおりである。

礎石建物１（SB01）：南北13.8m，東西6.3mの南北棟建物，広場と主殿になる礎石建物との位置関係などから遠侍に推定される。

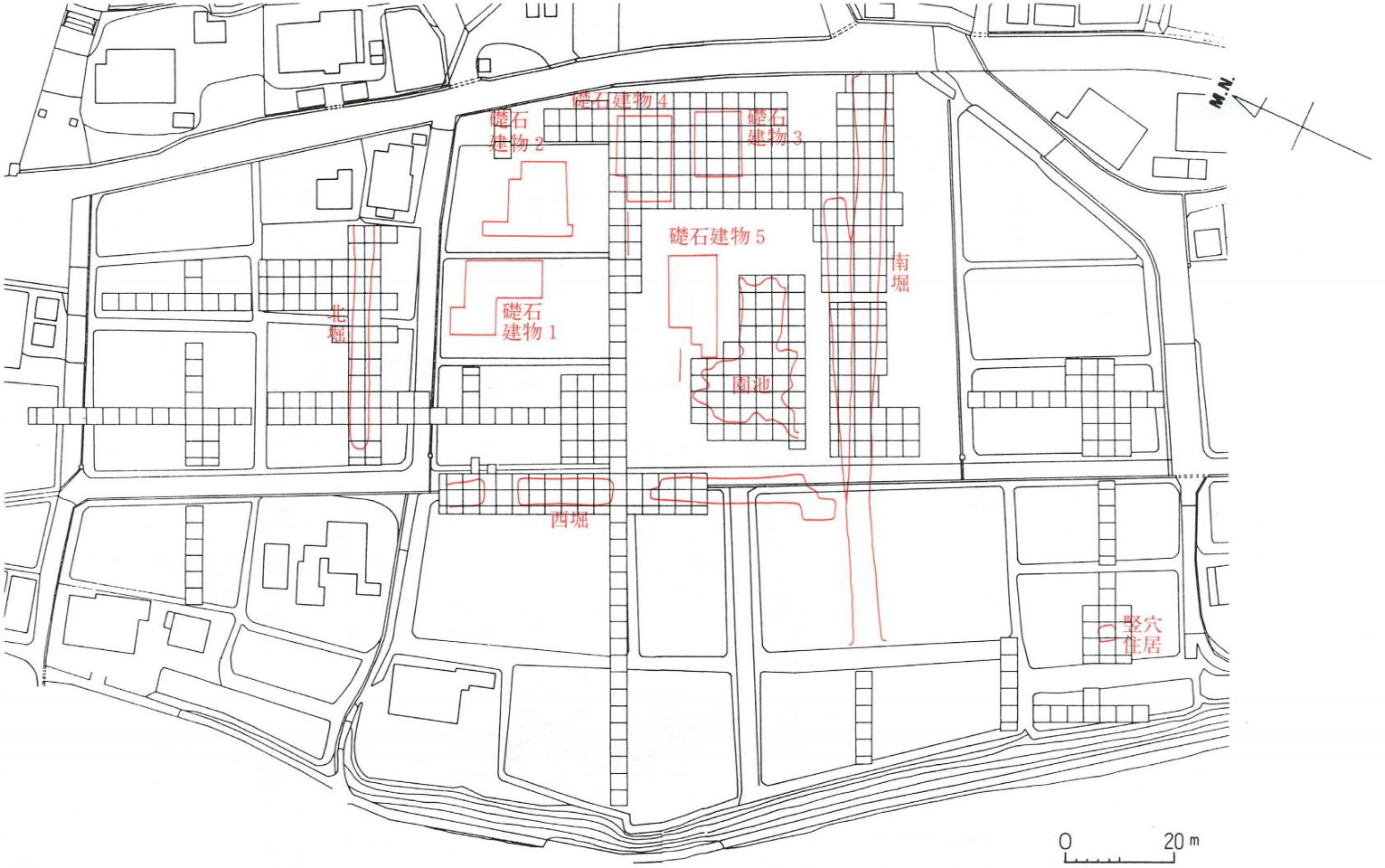
礎石建物２（SB02）：南北8.4m，東西13.4mの東西棟建物，北側に７尺の庇と西側に９尺の張出しをもつ。礎石建物1と１つになる可能性も指摘されている。広場に面した位置関係等から主殿に推定される。

礎石建物３（SB03）：柱間抜き取り穴が柱通りをそろえて残るが，残存状況が悪く平面規模等については不明である。付近に炉跡をもち，位置的に奥まっていることから常の御殿や台所に推定される。

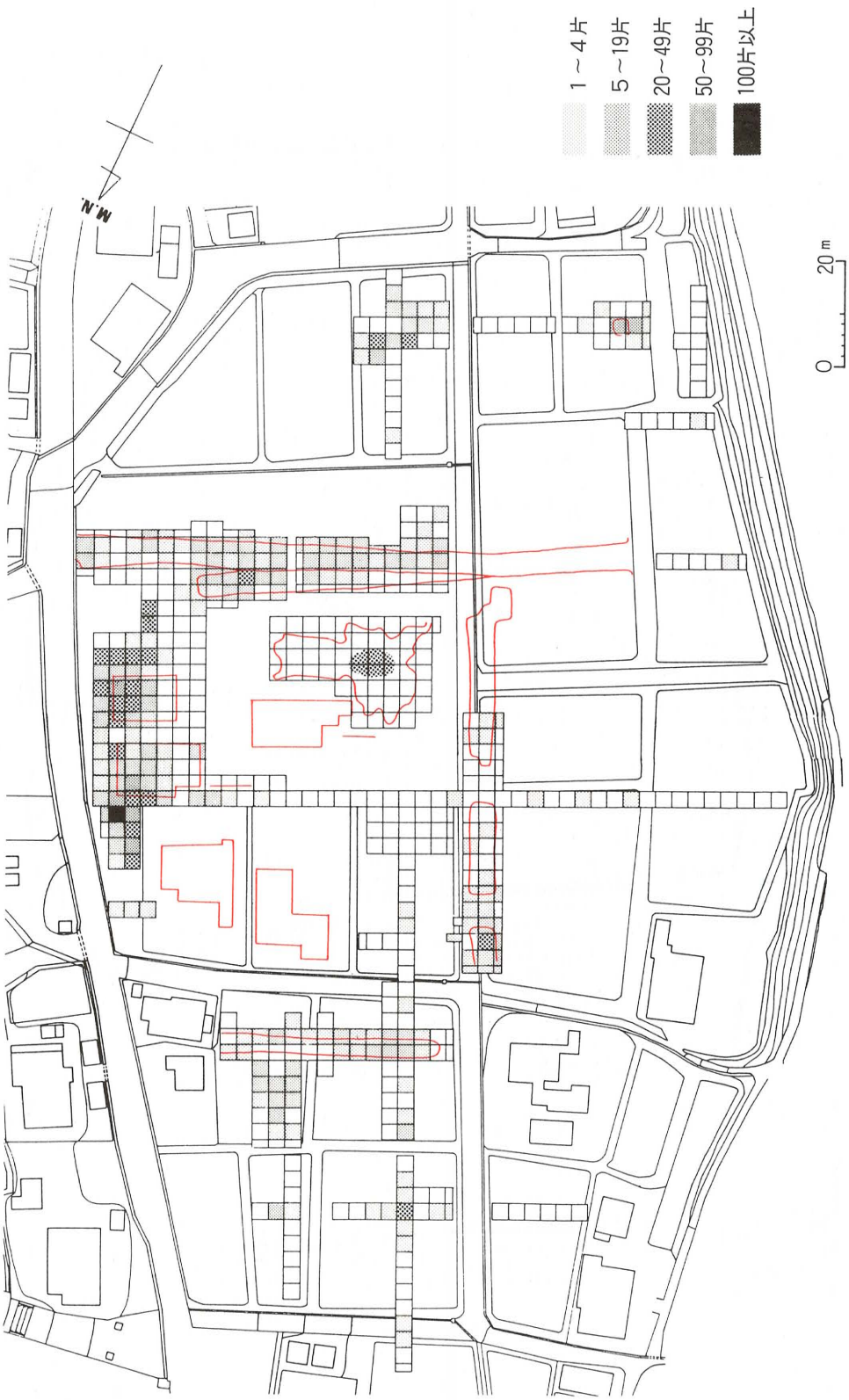
礎石建物４（SB04）：南北6.2m，東西9.8mの東西棟建物で，東・南・北面に７尺の庇がとりつく。礎石建物３の北に位置し，同様に付近に火の施設をもつことなどから常の御殿や台所に推定される。

礎石建物５（SB06）：南北９m，東西13mの東西棟建物で，一部欠損している箇所もあるが，いずれも根石を検出している。南面及び東面は10尺と広縁となっている。庭に面した建物であることから会所に推定される。

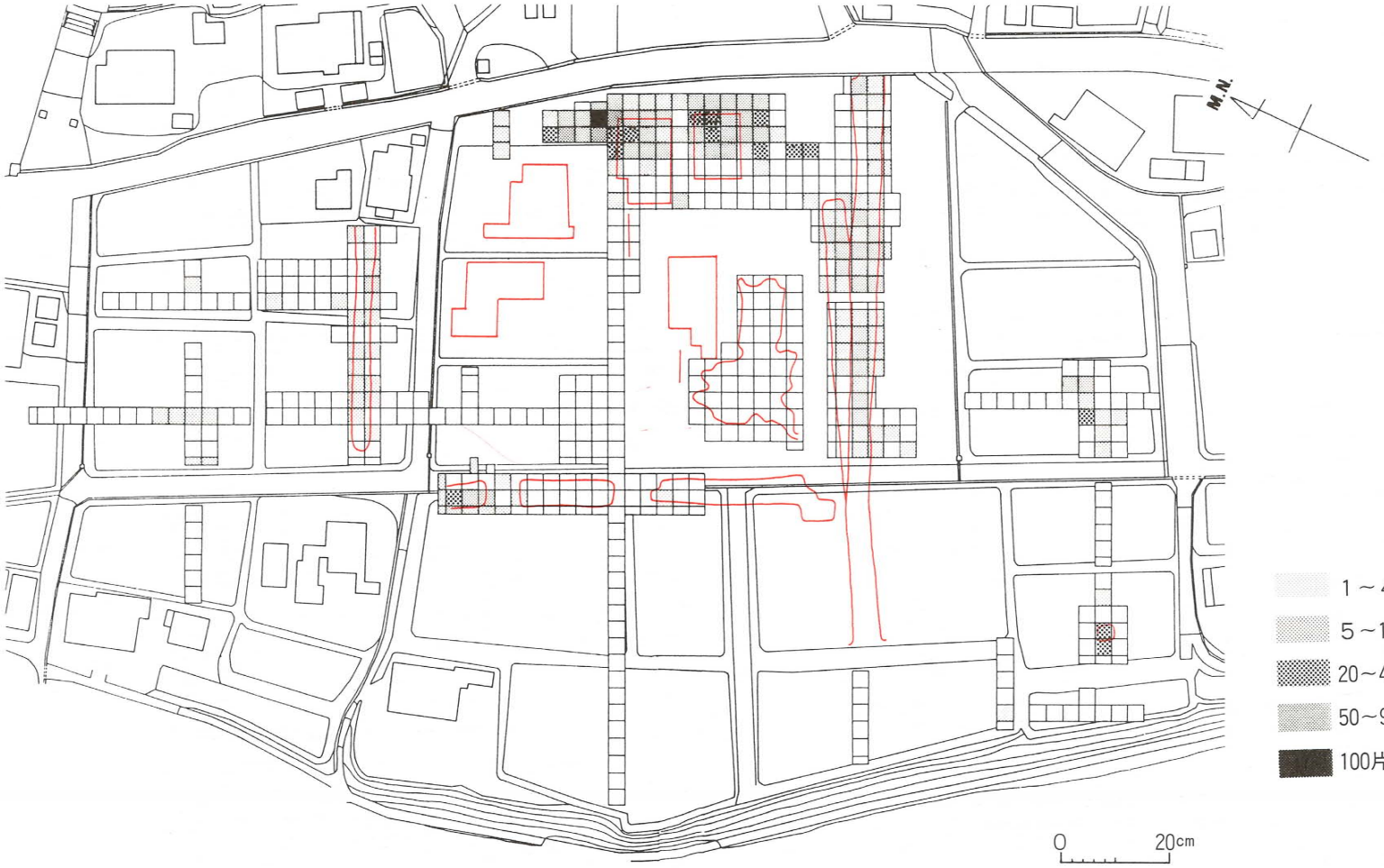
まず第36図は中世遺物全体の出土状況を示している。食器の出土は館内部の礎石建物３，４の東寄りに偏り，西側は少ない。館をとりまく三方向の堀では南堀に濃密に出土するが北堀，西堀では希薄である。この２箇所が館における遺物出土の集中区であり，１グリッドあたり100片を数える高数値を示す地区は礎石建物２・３の周辺に存在する。同じ堀埋土でも西堀の薬研堀からの遺物出土は極めて少ない。館外部では竪穴住居の遺物出土が顕著である。



第35図　江馬氏下館跡の遺構配置



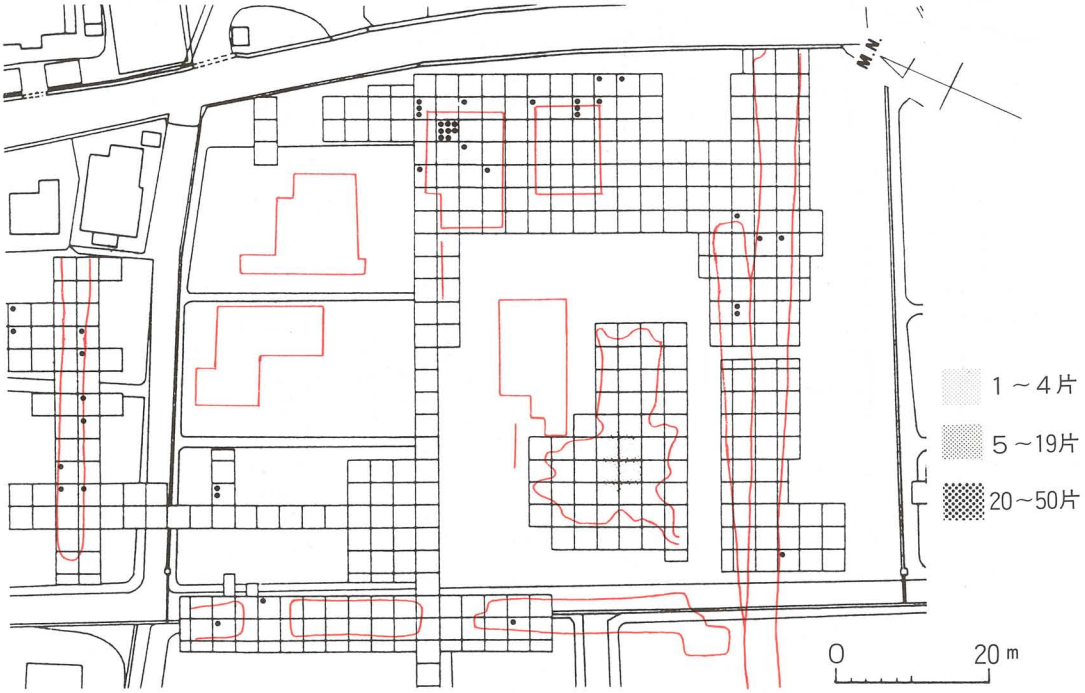
第36図　中世遺物の出土散布図（破片数）



第37図　土師器皿の出土散布図（破片数）

第38図　青磁碗の出土散布図（破片数）

第39図　瀬戸美濃天目茶碗の出土散布図（破片数）



第40図　瀬戸美濃 碗・皿の出土散布図（破片数）

第37図は出土量が最も多い中世土師器皿の散布状況を示しており，第36図とほぼ同様の傾向がみられる。館内部では礎石建物２・３・４の東寄りに偏って分布する。館を取りまく堀では南堀からの出土が最も多く，北堀及び西堀での散布は少ない。館外部での出土は竪穴住居を除いて僅少である。

第38図から第40図にはそれぞれ青磁碗，瀬戸美濃天目茶碗・碗皿類(平碗・縁釉皿等)の散布を示した。第37図とあわせて館内における食膳具の出土状況をまとめると，量的な差をおけば３者は全体としてよく似た分布傾向を示すことが明らかである。食膳具の分布は館内東部及び南堀を中心とし，約１：４程度の割合で館内東部が量的に優越する。館内部では礎石建物３・４の東側に濃密な出土が認められる。

第41図は珠洲の壺・甕の散布状況を示している。江馬氏下館で貯蔵具の主体を占めるのは珠洲であり，図は館での貯蔵具の散布を検討するために作成した。集中区については食膳具とほぼ重なるものの，その頻度は若干異なる。館内東部とほぼ同数の散布が南堀に認められるが,これは館内が優越する食膳具の分布とは大きく異なる傾向であると言えよう。なお北堀，西堀については食膳具と同様に出土が少ない。

第42図は珠洲のすり鉢の散布状況を示している。館での調理具の散布を検討するために

第41図　珠洲 壺・甕の出土散布図（破片数）

第42図　珠洲すり鉢の出土散布図（破片数）

第43図　13世紀：遺物の出土散布図（破片数）

第44図　14世紀：遺物の出土散布図（破片数）

第45図　15世紀：遺物の出土散布図（破片数）

第46図　16世紀：遺物の出土散布図（破片数）

作成したが，図からは明確な集中区を認められない。

第43図～第46図は13世紀から16世紀にかけて，年代観を判別できる陶磁器に限定して100年を単位とした分布の変化をとらえたものである。館内部での散布が濃密にみとめられる13・14世紀とは異なって，15世紀には館外周の堀を含めた広い範囲からの出土がみられ，さらに量的にも増加する傾向が読み取れる。なお図には示さなかったが，15世紀代に入ってから館外部での出土範囲が広がっており，竪穴住居からの出土が顕著にみられる。時期別出土量の分析からも15世紀前葉になって遺物量が著しく増加することが明らかであるが，当期において遺物がその出土範囲においても大きな広がりをみせていることが確認できた。16世紀前葉の出土範囲は非常に狭く，当期において館の生活様相が大きく変ったものと推測される。当期の遺物は南堀，及び北堀にも若干量の出土が認められるが，瀬戸美濃では大窯第２小期までの出土に限られる(第３章第６節参照)。

遺物群がかなり移動したと推測されるにも関わらず，このように全体の傾向から館の内部に出土の集中する２つの地区を認めることができる。すなわち館内東部と南堀の周辺を中心として，礎石建物３・４の東側で最も濃密に出土している。館中央部の様相については76，77年度調査の地点復元が不可能であるため特に礎石建物１・２周辺の状況が明らかではないが，78年度調査区内で部分的に復元ができた館北西部での出土は少なく，当地区での出土頻度は館東部に比して極めて低いものであったと推測される。

館を取り囲む三方の堀では西堀(薬研堀)からの出土が非常に少ない。西堀は断面層位の観察から，土塁の盛土と推定される整地土で一気に埋め戻されている状況が確認されており，これに出土量の少なさが起因しているとも考えられるが明らかではない。

２つの集中地区を比較してみると食膳具においては館内東部が優越し，貯蔵具ではその差異が顕著ではない傾向がみられる。このことと館内部の建物の機能とがどの様な相関性を持っているのか，現段階では明確な意味づけを行い得ない。

このような散布状況をまとめることによって館内の建物ないし区画の“場”の機能性の考察を試みたい。江馬氏下館では館内の大部分を調査終了しているにも関わらず，遺物の出土地点を復元できる地区が少なく，館全体の状況をもとにその意義を検討することは困難である。そこで時期的にはやや異なるが，既に館内郭の全面にわたって精密な調査を行っている一乗谷遺跡群朝倉館の様相(福井県教育委員会1979)と比較することによってその在り方の意義を考えたい。

江馬氏下館の館内部では火の施設を伴う建物である礎石建物３・４の周辺から各種の遺物が多量に出土しており，この建物が多くの陶磁器類を収容，使用する場であったと推定することができる。朝倉館ではカマドをもつ建物とそれに関連する補助的な建物付近に多量の陶磁器が集中する様相がみられ，逆に主殿，会所など小野正敏氏の指摘するハレ向の

建物(小野1994)付近では散布が極めて少ない事が報告されている。本遺跡では主殿，会所等に比定される建物周辺の状況が明らかではないが，部分的に出土地点を復元できた館中央部での頻度は低く，館東部の様相とは大きく異なることが想定できる。以上のことから空間構成より認識した各建物の機能と遺物の散布状況の関わりが朝倉館での様相と一致するものと考えられる。

次にもうひとつの集中区である南堀では，遺物の大半が新堀の最下層粘質土層から出土している。出土した遺物中では土師器皿が最も高い比率を占めるが，14世紀から16世紀前葉までの各種陶磁器も多く含む。南堀でも整地土によって人為的に埋め戻されている旧堀については，同様の埋り方をしている西堀(薬研堀)同様に遺物の出土が少ない。館における堀の機能についてであるが，朝倉館では堀の一部からまとまって土師器皿が出土する状況が確認されており，これと比較し対応させるならば，江馬氏下館では南堀が一時期，館におけるゴミ捨て場の機能を果たしていた可能性が高い。例えば朝倉氏館では北側の堀の一ケ所に土師器皿が廃棄され，その量は土塁の内側(約6000㎡)の317㎏に対し，堀の内側(170㎡)からは257㎏と，一ケ所にピラミッド状に堆積することが報告されている。なお本遺跡の南堀は出土する遺物の年代観から16世紀初頭にはその機能を終えている。

このように遺物の出土散布状況を観察することは，それに遺構の在り方を重ねあわせることによって，一定程度場の機能を復元するのに有効な手段となりえる。

(d) 遺物様相の変遷と江馬氏下館の時期区分

本稿の分析により遺物からみた様々な様相が明らかなものとなってきたが，次にこれを段階毎に理解する視点を持ちたい。まず生産地において詳細な編年を確立させている瀬戸美濃製品の年代観を暦年代の時間軸にとり，遺物の出土量の変化に注目しつつ，おおよその食器組成の変遷を想定した(第47図・第48図)。これに一部史料にみられる江馬氏の動向をあわせることによって，中世期の江馬氏下館について以下のような時期区分を行った。ここで示す変遷段階は江馬氏盛衰の軌跡を考えるうえでも重要であり，これをもとにして今後の下館跡の理解に備えたい。

江馬氏下館1期(13世紀代～14世紀)

江馬氏下館跡では13世紀後半以降を年代的主体とする陶磁器が一定量みられる。土師器皿・青磁・白磁などの食膳具や珠洲・八尾などの貯蔵・調理具がこれを構成しており，13世紀から14世紀にかけて遺物量は増加する傾向にある。当期に属すると考えられる確実な遺構の検出はなく，厳密な食器セットの抽出が困難な段階でもある。江馬氏が飛騨に入り，高原郷で勢力を拡大する経緯については諸説あって定かではない。鎌倉時代初期をその時期とする説がいくつかあり，これに伴う遺物群である可能性もあるが，当時の江馬一族の生活地を裏付ける文献史料はなく不明瞭である。

時期設定	暦年代	食膳具	文献
1期	1300	白瓷系陶器碗 青磁碗 白磁皿 1類 瀬戸美濃天目碗 後I 土師器皿 T-1類	
	1400	瀬戸美濃直縁大皿 後II 中国製天目碗 D類 T-4類 後II T-6類 C2類 17類 T-7類	1372(応安5)年　「山科家文書」に江馬氏の史料上の初現。
2期 a1		後III 後III B4類 R-1類	
		後IV 後IV R-4類	1471(文明3)年　山科家領の領家遵行を命じられる。 1489(延徳元)年　万理集九，高原城下で江馬氏から大いに饗応をうける。
2期 a2	1500	大窯1 B4類 青花皿 B1類 R-5類	
2期 b		大窯4	上杉・武田氏の圧力をうけるようになる。
3期	1600		1582(天正10)年　江馬輝盛三木軍に敗れる。 本拠高原諏訪城落城。

第47図　江馬氏下館跡における出土遺物群の変遷1（縮尺1/4，但し直縁大皿のみ1/6）

時期設定	暦年代	調理具	貯蔵具	煮炊具	その他
1期	1300	珠洲すり鉢 III期	珠洲甕 III期	滑石製石鍋	
			八尾甕 I群		
		IV期	IV期		瀬戸美濃香炉 I期
	1400	瀬戸美濃卸皿 後I	珠洲壺 IV期		
2期 a1		瀬戸美濃すり鉢 V期	V期	土師器羽釜	瓦器風炉 IV類
				土師器内耳鍋	瓦器火鉢 III類
		後IV(新)			
a2	1500	大窯1			
b		大窯4			
3期	1600	大窯7			

第48図　江馬氏下館跡における出土遺物群の変遷2（縮尺1/6，但し卸皿，香炉は1/4）

いずれにせよ１期の遺物群は初期の江馬氏の実態を知るうえで重要であり，今後調査の進展にあわせてより一層理解を深めることとする。

江馬氏下館２期（14世紀末～16世紀中葉）

瀬戸美濃製品の出土量の分析より14世紀末以降に多くの瀬戸美濃食膳具がみられるようになることが判った。15世紀前葉には多量の土師器皿を伴う食器組成が成立しているものとみられ，下館跡の最盛期もこれを中心とした時期にあたる。江馬氏が文献史料上に登場するのも「山科家文書」に記される応安５年(1372年)以降であり，永徳３年(1383年)までの10年間で山科家の被官人として領家職を司っていく活発な江馬一族の動きがみられる。当期の遺物出土は館内だけでなく館を取り囲む三方の堀もふくめた広範囲に及んでおり，その出土は館内のいわゆるハレ向の建物に少なく，台所や常御殿などのケの空間に多い。またゴミ捨て場として南堀が一時期使用されるなど，館内における遺物の出土状況からその個々の機能を読み取ることができる。この時期の下館の生活を，館を取り巻く堀の機能の変化から，さらに２つの時期に細分した。

２－ａ期：14世紀末から15世紀後葉までの幅広い期間を設定できるが，ここでは瀬戸美濃製品が大窯期になって大幅に減少していることを境として２－ａ１期／２－ａ２期の２小期を設定した。下館跡の最盛期は２－ａ１期のうちでも，古瀬戸後Ⅲ期製品を多く伴う15世紀前半であり，検出されている主要遺構はそのほとんどがこの時期のものであると考えられる(註3)。遺物量は続く２－ａ２期において大きく減少に転じている。すなわち大窯によって量産される民間雑器に転じた段階の瀬戸美濃製品は本遺跡では少なく，全国的に出土が増加するとされる中国製の青花も僅かしか認められない。また朝倉一乗谷遺跡でみられるようないわゆる16世紀的な食器組成も明確にはとらえることができず，ａ２期になって本遺跡での生活が衰退傾向にあったと考えられる。

２－ｂ期：94年度の調査では各堀跡の遺物が全て16世紀前葉までの年代に納まることが確認されており，当期において堀の主要な機能が終わっている。この段階に周辺の山城，高原諏訪城，及び東町城との関連の中で下館の機能自体が大きく変化したものと考えられる。このことついては関連城館の様相が明らかになったうえでの検討課題となろう。ただ千田嘉博氏の論考第３節では高原諏訪城の遺構年代について，16世紀半ばを中心に，一部後半にかけて改修されていることが指摘されている。ここで示された高原諏訪城の年代が，本稿で明らかにした下館の最盛期(２－ａ期)と一致しないことが注目され，当時の江馬氏の動向を探るうえで重要なものとなる。このように下館の機能が大きく衰退すると考えられる16世紀前葉を２-b期として館の盛行期と区分する。２-b期の遺物は少ないが瀬戸美濃製品の食器が一定量みられ，中には火縄銃の鉛弾などもあることから，下館跡一帯が16世紀の中葉までは一応の生活地として機能していたことが推察される。

江馬氏下館３期（16世紀後葉）

戦国期は江馬氏の活動が活発化する時期であり，上杉氏・武田氏の争いの間で勢力の拡大を目指したことを示す文献史料も多く見られる。ただし下館における当期の食器資料は，僅かな瀬戸美濃製品を除いてほとんど見られず，史料上の江馬氏とは対照的である。前段階において食膳具の主体を占めた土師器の型式にも16世紀的な特徴を有するものは見当らない。これらの様相は本期において江馬氏一族の生活地が下館以外の地へ移動したことを示唆しているといえよう。江馬氏が三木氏との戦いに破れ，本拠高原諏訪城が落城するのは天正10年(1582年)のことであるとされる。このような江馬氏の滅亡が当地への物流にも大きく関係していたと考えられるが，当時の様相は下館跡一帯では明らかではない。

（ｅ）小　　結

以上で検討した江馬氏下館跡出土遺物の様相をまとめておこう(第17表・第18表)。江馬氏下館の食器は日本製・中国製の様々な土器，陶磁器によって構成されており，これらは館の各時期において多様な使用構成をなしていたと考えられる。前項で本遺跡出土食器の変遷を江馬氏の動向に沿ってまとめたが，現在のところそれぞれの段階の使用状況を明確に知る資料がなく，厳密な食器構成の抽出は困難である。表では全体の遺物構成の中から15世紀中心の年代観が与えられる食器を選択して，江馬氏下館の最盛期である２-ａ１期の食器組成の復元を試みている(註4)。

まず土師器皿が食器構成の主体をなすことは本遺跡の特徴であり，これは一般的な村落の様相とは異なるものである。土師器皿を儀式的な宴会に使用する食膳具として解釈するならば，本遺跡の食器組成は館のもつ政治的重要性の一端を示しているといえよう(北陸中世土器研究会1991)。

陶磁器類では貿易陶磁器に比して，そのコピーである瀬戸美濃製品の占める割合が高いことが注目される。江馬氏下館跡では２-ａ１期になって多くの古瀬戸製品をその生活財に取り入れており，食膳具から貯蔵具・調理具，さらに宗教具にいたるまで豊富な器種構成がみられる。これは生産された製品が極めてストレートに当地にもたらされていた状況を示していると考えられるだろう。

調理具における珠洲流通圏から瀬戸美濃流通圏への転換，八尾窯製品の定量流通，土師器を含めた石鍋・鉄鍋などの煮炊具など，江馬氏下館の食器組成には各段階において複数産地の競合がみられ，その在り方は多様である。土師器皿にも，手づくね成形と轆轤成形品が併存し，これに轆轤篦削り整形のものが伴っている点などに独自の地域性があらわれている。下館跡での食器組成のありかたについても当地が北飛騨という北国相・東国相の接点に位置することと無関係ではあるまい。本稿で明らかにできた江馬氏下館の食器様相はこれより隣接する諸地域との比較を行うための基礎的資料として扱うべきである。今後

第17表　江馬氏下館跡出土食器の種類器種別組成表（2-a 1期）

種　類	器　種	破片数	個体数
土　師　器	皿	704	79.22(100.0%)
	(灯　明　皿)	172	31.82
	小　　計	704	79.22〔 84.8%〕
瓦　質　土　器	(火鉢・風炉)	180	2.25
珠　　洲	壺	39	0.91(40.7%)
	甕	74	0.61(27.2%)
	す　り　鉢	51	0.72(32.1%)
	小　　計	164	2.24〔 2.4%〕
瀬　戸　美　濃	天目茶碗	50	4.18(52.4%)
	碗	7	0.33(4.1%)
	皿	9	0.24(3.0%)
	盤	35	1.02(12.8%)
	瓶　　子	4	0　(＊ %)
	壺	3	0.08(1.0%)
	す　り　鉢	42	1.05(13.1%)
	卸　　皿	10	0.61(7.6%)
	(花　　瓶)	1	0
	(香　　炉)	2	0.17
	そ　の　他	5	0.48(6.0%)
	小　　計	165	7.99〔 8.6%〕
貿　易　陶　磁	天目茶碗	16	1.70(43.1%)
	青　磁　碗	39	2.14(54.4%)
	白　磁　皿	10	0.10(2.5%)
	白　磁　坏	1	0　(＊ %)
	小　　計	66	3.94〔 4.2%〕
総　　計		1099破片	93.39個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。)

第18表　江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表（2-a 1期）

用途	種類	破片数	個体数
食膳具	土師器	704	79.22(89.1%)
	瀬戸美濃	101	5.77(6.5%)
	貿易陶磁	66	3.94(4.4%)
	小計	871	88.93〔 95.2%〕
貯蔵具	珠洲	113	1.52(95.0%)
	瀬戸美濃	7	0.08(5.0%)
	小計	120	1.60〔 1.7%〕
調理具	珠洲	51	0.72(25.2%)
	瀬戸美濃	57	2.14(74.8%)
	小計	108	2.86〔 3.1%〕
総計		1099破片	93.39個体分

（個体数は全て口縁部計測法による。）

継続される館内外の組織的な調査によって，江馬氏の生活・文化の実態がより明らかなものとなることが望まれる。

〈註〉

（註1）　口縁部を含む全ての破片について口縁残存率(残存口縁周／復元口縁周)を計測し，種類，器種を同じくする土器・陶磁器の残存率を合計して，個体数を復元・算出した(宇野1992)。

（註2）　藤澤良祐氏は瀬戸美濃大窯製品の使用期間の長短を考慮に入れることにより，従来の大窯編年と城館跡の年代観のズレを解消した。氏は大窯製品の中で使用期間が短いと考えられるすり鉢を用いて城館跡の年代を検討している(藤澤1991b)。本稿ではこの方法を古瀬戸製品と珠洲製品に応用し，両者を併せて分析することで新たな発展を試みる。

（註3）　検出遺構の年代的位置づけに際しては，直接切り合う新旧南堀の掘削・廃絶年代が大きな問題となる。出土遺物からこれを検討するには旧堀からの遺物出土が量的に不充分であり，その理解には慎重を要する。ただ土師器皿の主体タイプであるT-6・7類が旧堀埋土から僅かに出土しており，このタイプの年代を第3章第6節で述べたように15世紀前葉(古瀬戸後Ⅲ期と並行する時期)のものと仮定するならば，旧堀の廃絶年代と，そしてそれと時期

差なく行なわれたであろう新堀の掘削年代を15世紀前葉に設定することができる。以上のように考えるならば新堀と主軸方位をほぼ同じくする79年度報告のA期遺構群の年代についても一応の解釈ができる。このことについては本章第4節の論考に譲りたい。

（註4）　例えば現段階では土師器皿の年代観についての評価が難しい。第17表・第18表ではT-5類　T-6・7類，R類を一応15世紀代のものとしてとらえている。このおおよその年代観は第3章第6節での分析結果に基づく。

（中田書矢・近藤美紀）

2　地籍図および絵図による検討

神岡町役場には，明治21年(1888)の地籍図が所蔵されているため，これに基づいて，江馬氏城館跡下館跡およびこれに関連する東町城について検討してみたい。

地籍図(『明治廿一年十月調/吉城郡阿曽布村殿組字絵図』および『明治廿一年十月調/吉城郡神岡村東町組字絵図』)は，小字ごとに描かれ冊子に綴じられたもので，大きさは45×31cm。道路(赤)，河等(水色)，宅地等(桃色)，原野等(薄緑)など部分的な彩色がある。なお，江馬氏下館については，付近を描いた江戸末～明治初年ころの絵図(『江馬氏城館跡発掘調査概報』1979年，神岡町教育委員会，に写真所収)も存在する(以下「絵図」とする)。これは筆書きのかなり粗い図で，小字・地番・地目・所有者を記した地籍図の祖形的なものである。江馬氏下館周辺は19世紀初の文化年間に開田されているため，地割り・地目等では地籍図の記載と基本的な違いはないが，小字が地籍図よりも詳しく，地目にもそれをややさかのぼるものがあり，地籍図との比較に有用である。

(a) 江馬氏下館

江馬氏下館周辺の地籍図(トレース図)は第49図に示した。近世末期に開田されていることもあり，遺構の状況は必ずしも明瞭には反映されていないが，いくつかの点は指摘できる。

まず，館(内郭)の北と南に，幅5～10mほどの帯状の地割りが認められる。これまでの発掘で確認された堀などを地籍図上に落としてみると，厳密な位置比定は困難なものの，堀はこの帯状の地割りより外に位置することがわかり，この位置関係からはまず土塁の痕跡である可能性が考えられる。内郭東南隅側の一筆は地目が畑地であり，土地がやや高いことを思わせ，またこの畑地と道路をはさんだ向かい側では，同じ方向に湾曲した石積み遺構が検出されているが，これも土塁の基底部の遺構である可能性が考えられよう。この湾曲した道路自体もかつての土塁の上に通されたものと考えることができ，内郭東北隅にある小さな芝地(荒地)もやはり土塁の残欠の一部かもしれない。

「絵図」(第50図)を見ると，内郭の内側の小字は「土井ノ内」，南側は「土井ノ上」であり，北側には「土井」の小字が見えており，「土井(土居)」は土塁を指すと思われる。内郭東北隅に乱雑に塗られている部分は地籍図の「芝地」の一筆と思われ，その外には「ほり(堀)」の小字もある。地目では，内郭の北側と南側にいくつかの畑地および畑地から田へ登録変更されたものが見られ，やはり元はやや土地の高い部分があったことを思わせる。

以上の検討から，内郭の周囲，少なくとも西側を除いた三方には，土塁が存在したことが予測される。南堀に新旧の二本があることも，この土塁の構築に関わるのではないだろ

うか。また，第49図に示した堀等の位置は厳密なものではないのだが，土塁跡と推測した地割りとの間に若干の空白があるらしいことを積極的に読むとすれば，堀との間に犬走り状の部分があったことも考えられよう。

外郭部分では，内郭の北西に「馬場西」の小字があることが注意される。越前一乗谷の朝倉氏館など，館の周辺に馬場を持つ例は多く，儀礼的な意味を持つ広場空間であったと考えられるが，地名の位置からは，「馬場西」の東側，すなわち北堀の外側付近にこうした馬場があったことが予想される。地割り等では，痕跡は積極的には認めがたいが，小字「森下」との小字界までが一応考えられよう。この付近は出土遺物の量が少ないとされることも，これに関わるかもしれない。

この他，外郭部分では，南堀が西堀を越えて延びていることから，何らかの施設が予想されるが，地割りからも西堀と小字界の間に明瞭な段差があることが読み取れる。内郭の南側も，南堀が西堀の延長上にも延びることからは同様に何らかの存在が考えられるが，地割り等からは，区画は積極的には認めがたい。

（b）東町城

江馬氏に関連する城館遺跡の一つに，東町城(「江馬之御館」「野尻城」とも)があり，地籍図による復原がかなり有効であったため，報告しておきたい。

東町城は，神岡町東町の，現市街地に臨む崖上にあり(第51図)，江馬氏が武田氏に属した後，武田信玄の越中発向のために家臣山県昌景の縄張りでつくられ，後に金森長近の入国の際，家臣の山田小十郎が入ったとされる(『飛州志』など)。現在は，1968年に天守閣が建てられた際に内堀・外堀も掘り出されて整備され「神岡城」となっているが(註1)，地籍図によると，現在住宅地になっている部分も含めて，旧状がより詳細に判明する。

地籍図(第52図)を見ると，まず外堀は，西・南の部分で帯状の畑地と，その両側の「芝地」として認められる。おそらく畑地は堀底にあたる部分，両側の「芝地」は堀の法面で，さらに内側に見える「芝地」が土塁であると考えられる。この堀と土塁の境が大字界となっているのも興味深い。東側では堀の痕跡は明瞭でないが，郭の範囲は地割りにはっきり遺っている。

内堀は，やはり西・南側で畑地および「芝地」の帯状の地割りとして見え，東側では地割り線として郭の範囲が残っている。崖に面した現在の天守閣が建つ部分は，一筆の方形の畑地があり，ここは元からやや高かった由である。その中にさらに小さな方形の畑地があるのは，宝暦5年(1755)に建立された秋葉権現の跡であると思われる(註2)。

この東町城については，『飛州志』に遺構の図が収載されているが(第53図)，地籍図と比較するとよく一致し，かなり信憑性の高い図であると言える。これによれば，外堀の東南部は三日月状の土塁・堀を用いた虎口になっており，地籍図に見える湾曲した地割り線

はこの部分の痕跡であることがわかる。図の遺構では馬出しにはなっていないが，土塁・堀の形には武田流の「丸馬出し」を思わせるものがあり，武田氏の手による縄張りという所伝を裏付けるものと言えるかもしれない。また，外堀西南部には安土城のものに近い食い違い虎口が描かれており，明らかに織豊政権の改修と考えられることから，これは金森氏家臣の居住という所伝に対応するものと言えよう。内堀部分には，石垣に登る二本の道が描かれ，南側のものはおそらく地籍図の帯状地割りの切れ目の部分と一致する。内部には櫓台状の石垣が描かれ，やはり地籍図の方形の畑地と一致する。なんらかの天守ないし櫓台的な建物が存在したことは間違いないであろう。

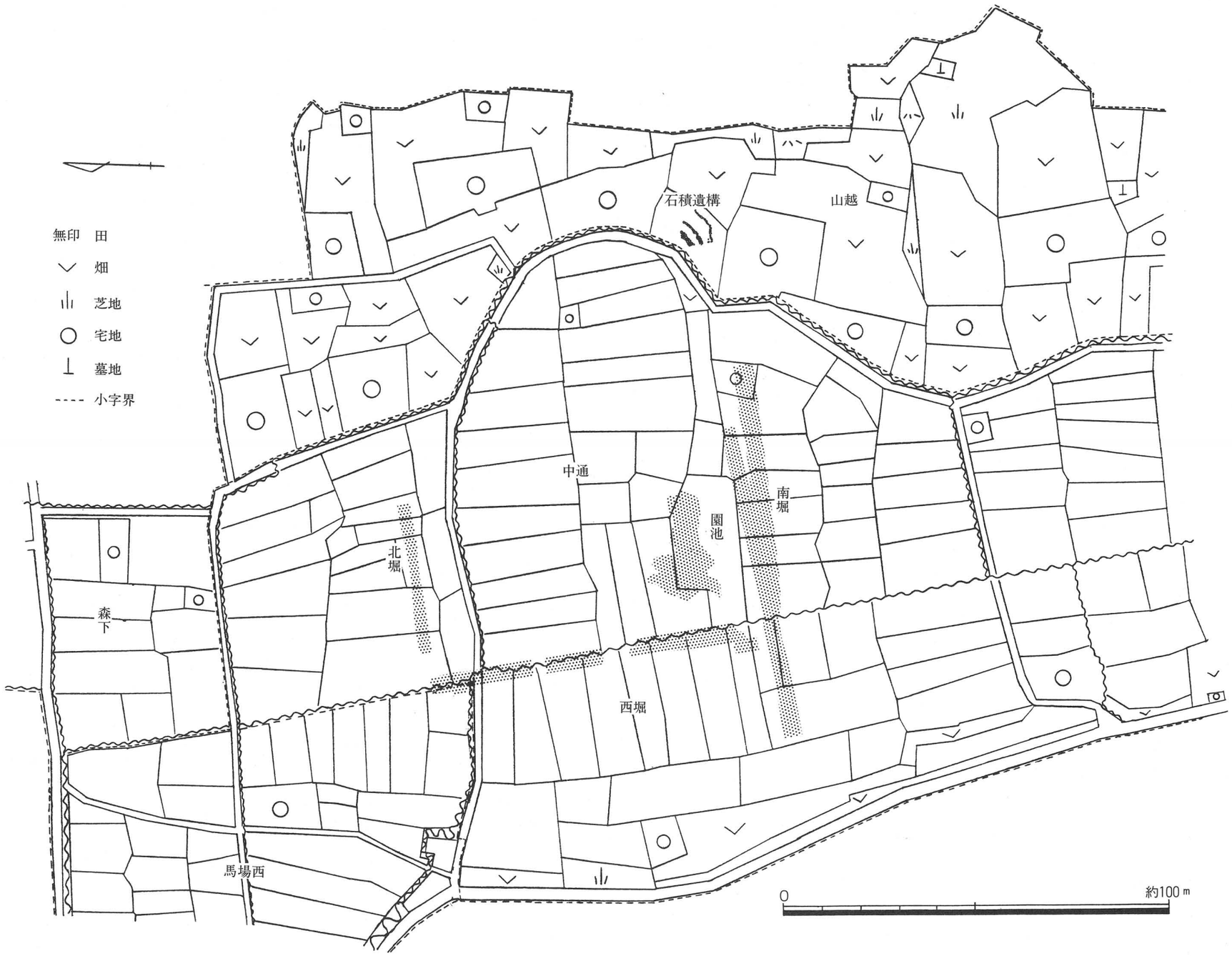
以上の内堀・外堀で囲まれた部分の外側では，まず同じ平坦面の南側・東側(大字殿小字下野)には何らかの関連施設が考えられそうだが，地割り等からは積極的には認めがたい。むしろ北側の，崖下の部分に，大きな長方形の畑地が道沿いに連続して並んでおり，重臣等の屋敷跡を思わせる。先述のように，この東町城の跡は，外堀に面した土塁の部分までが崖下と同じ大字東町に属しており，歴史的にこちら側との関係がより強かったものと思われる。「城下」の地名も残っているが，実際にこの東町側にはある程度の城下的な部分が形成されていたのかもしれない。あるいはさらに広く，戦国期から存在していたかと思われる高原川沿いの町を城下的な場として取り込み，城と一体化するプランであったとも考えられ，いずれにしてもこの東町城は，大字殿の江馬氏下館の後を受ける近世的な城館遺構として重要な存在である。

〈註〉

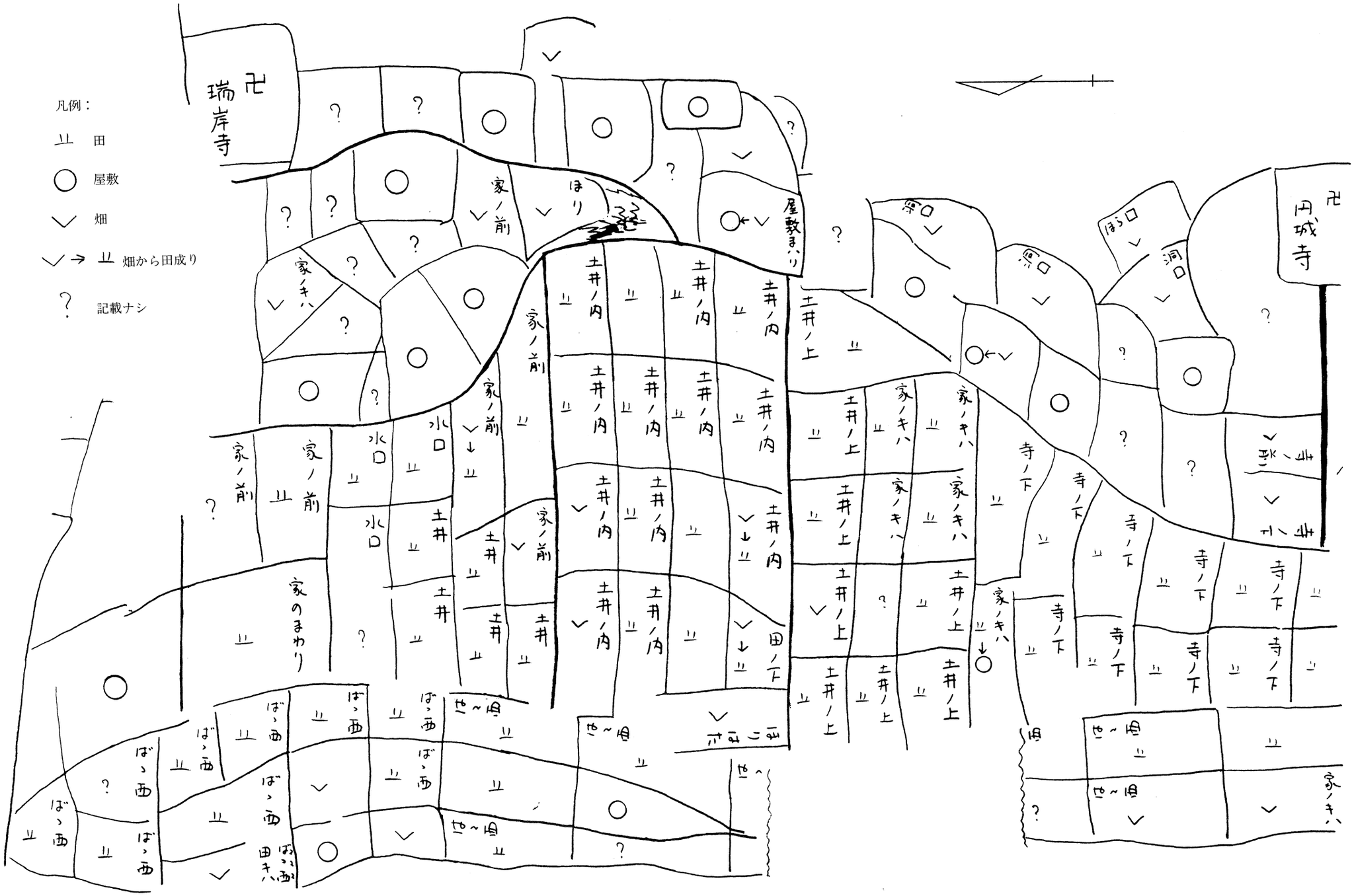
(註1)　現在の堀の石垣は，この時に，崩れていたものを石を補って積み直した由である(奥田静平氏の御教示)。なお，神岡城の建設経過については，同氏「わが町のシンボル神岡城」(『飛騨法人会だより』107，1991年)を参照。

(註2)　洞雲寺文書。奥田静平氏の御教示による。秋葉権現は明治年間に洞雲寺境内に移転。

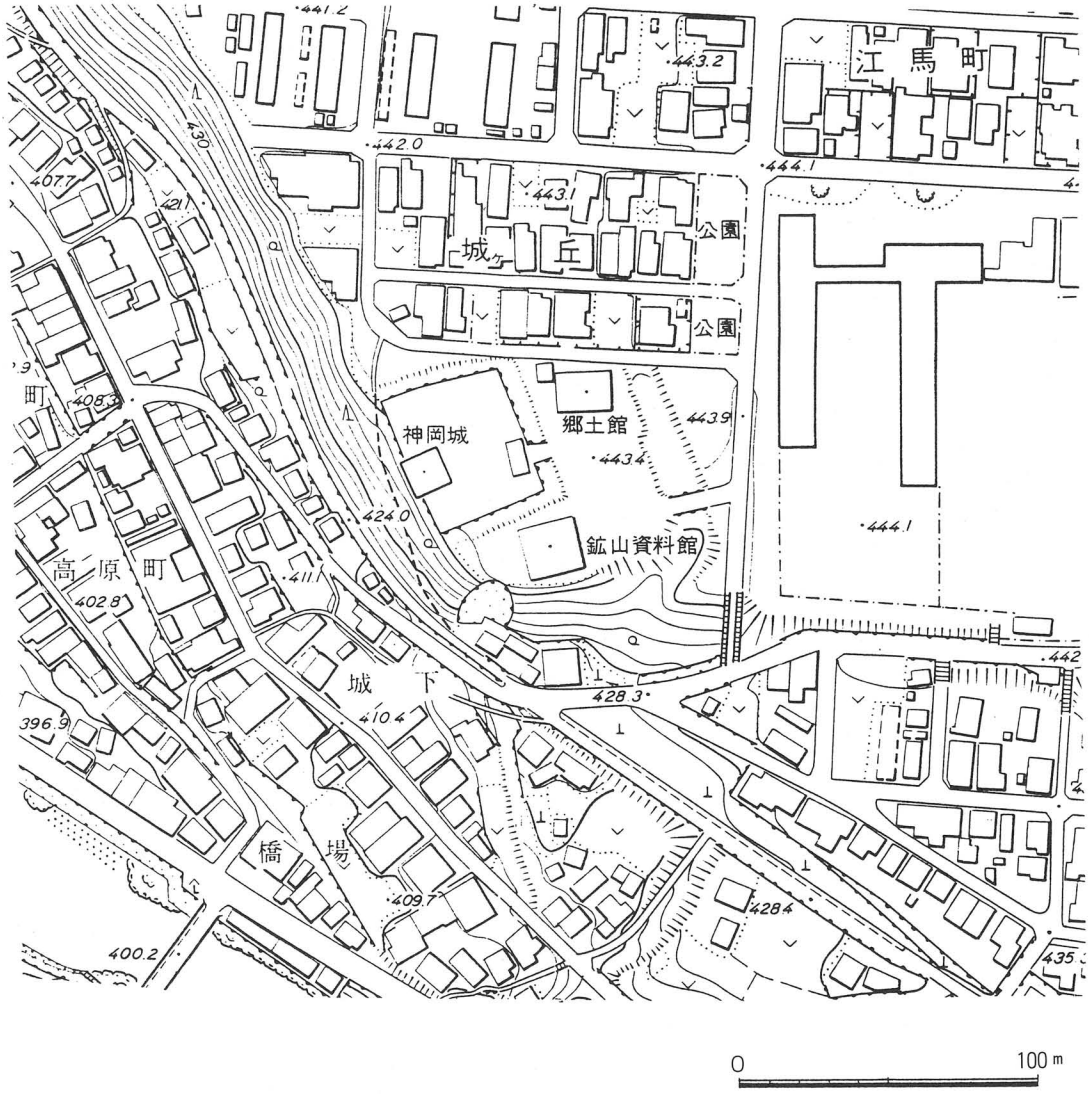
(小島道裕)



第49図　江馬氏下館跡付近地籍図（大字殿，明治21年〔1888〕）

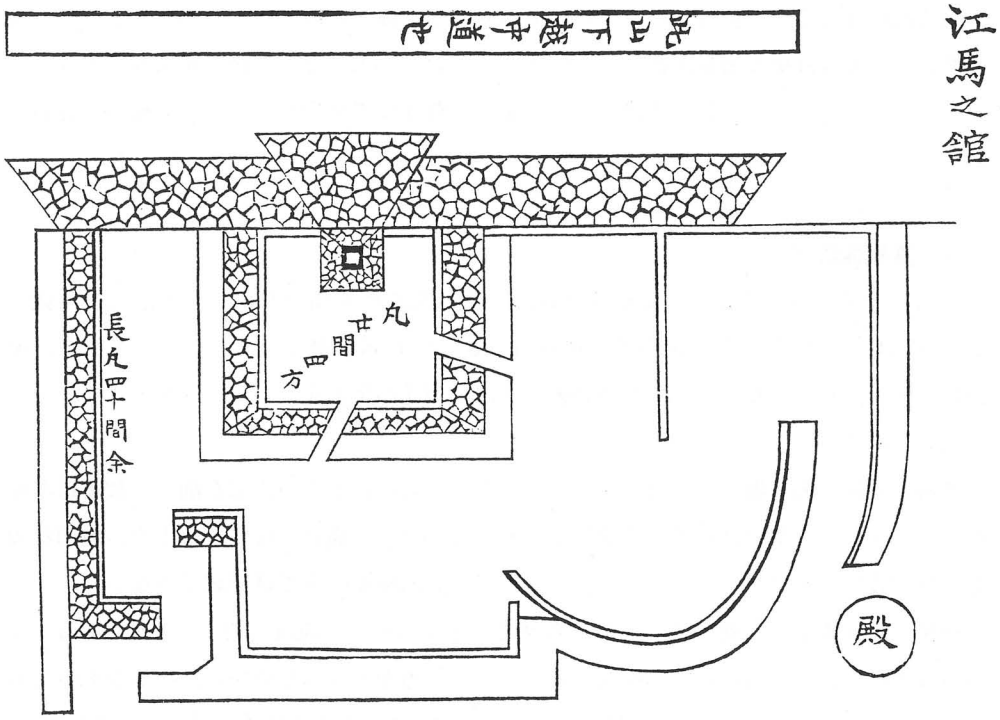


第50図　江戸末～明治初年の江馬氏下館跡付近絵図



第51図　東町城付近地形図（神岡町都市計画図〔1/25000，1988年〕）

第52図　東町城付近地籍図（大字東町・殿，明治21年〔1888〕）



第53図　『飛州志』所収東町城跡図

3　江馬氏の山城

江馬氏下館周辺には多数の城館が存在し(第54～61図)，館と共に国指定史跡となっている。これら城館群は江馬氏が活躍した時代を解明する重要な手がかりであり，江馬氏下館も周辺城館群のなかで位置づけてはじめて相対的な把握が可能になるのである。これら城館群については詳細な測量図がすでに作成されており，また近年の踏査成果も発表されている。そうした先学の道程を基礎として，筆者の踏査成果を合わせることで検討を行いたい。

(a) 高原諏訪城

江馬氏下館を南西の間近に望む標高619mの丘陵先端の頂部を利用して築かれた山城である(第54図)。山麓からの比高差は160m程である。城域北側は急峻な山塊に連なり，東西は天然の急斜面となる。このため防御の主眼は南北の尾根先上からの攻撃を遮断することに置かれている。

城域最北端にある堀切りAは二重堀切りである。現在は土塁中央部を削って散策道が城内に進むが，この部分は後世の破壊を受けている可能性が高い。堀の中の土塁に虎口状の開口部が設けられていたかどうかについては，地表面観察のみでは確認できない。

曲輪1は北東面に一連の土塁をめぐらせる。土塁の高さは現況で約1mほどである。この曲輪は小さな3つの段差から構成されており，城道が入り込む中央の削平地がもっとも低い。堀切りAを直下に見下ろす曲輪1の先端部は，登ってくる城道の真上を土塁で固め，防御の陣として効果的につくられている。

堀切りAからの城道が入り込む曲輪1の虎口は，両脇を土塁で押さえられているが，平入りのプランで，虎口自体に特別な工夫の痕跡は認められない。堀切りBにつづく南側は長いスロープとなる。東側には曲輪上から一体的に設けられた土塁が伸びる。

堀切りBは鞍部を利用しており，東西の斜面に向かって竪堀となる。殊に西側斜面へは長い竪堀となっている。この堀切りBから主郭3までの間は，もっとも技巧に富んだ縄張りを見ることができる。堀切りBを越えて城道を進むと竪堀C1にすぐ行き当たる。竪堀C1には東側に土塁が添えられており，ここで一旦出入りをチェックしようとした意図は明らかである。

竪堀C1の西側主要尾根筋上には主郭3直下に至る3つの曲輪が配置されており，堀切りBと竪堀C1の狭い範囲に敵兵を補足した上で，直上の3つの曲輪群から防射して敵をせん滅しようとしたのであろう。

また弓なりに曲がって深い竪堀となる堀切りDを備えた尾根先端部にも特別な工夫が見

られる。堀切りDに先端を守られ，背後を竪堀C2で防御されたところに全体を土塁囲みにした曲輪が集中的に配置されていた。ここは武者隠し的な機能も発揮したと考えられ，この方面の防御力を著しく高めたと考えられる。

このように尾根先端の曲輪を土塁囲みにした例には後北条氏によって天正18年(1590)頃に築かれた静岡県三島市の山中城の岱崎出丸の擂鉢曲輪が上げられ，鉄砲を主体とした戦いへの対応であった可能性を指摘できる。

主郭3は周辺を比高差数m以上の切岸で防御する。保存状況はきわめてよく，主郭の堅固さをよく示す。しかし主郭への虎口は1折れした単純な坂虎口で，虎口空間などはもたなかった。さらに曲輪縁部の土塁も巡らされていなかったと評価される。こうした特色から主郭3は切岸の高さのみに頼って防御されていた様子が復原され，一般的には城域内で古拙的な状況を色濃く残した部分というべきだろう。

しかし，こうした特色は城域内の他の曲輪群との機能差の現れと評価することも可能である。主郭3は南北約35m，東西約25mで居住機能を考えるとかなり狭いといわざるを得ないが，土塁を縁部に巡らせれば，さらに活用できる曲輪の面積は減少してしまう。だから選択的に主郭3の防御機能の強化が行われず，別言すれば城域内の他の部分を強化することで，意図的に古拙的に見える状況が残されたとすべきであろう。

曲輪4を中心とした主尾根南端の曲輪群は先端に堀切りFと竪堀を備え，中段に諸郭を連結した帯曲輪を構えるなど，まとまったつくりとなっていた。中段の帯曲輪南西部に土塁が開口した竪堀状の窪地が認められるが，これは南山麓から高原諏訪城へ登る虎口と見て間違いない。山麓のどの部分に古道がつながっているか今回の調査では確認していないが，江馬氏下館との連絡を考えても，重要なルートであったと考えられる。

以上に述べた城域の1キロほど北の主要山稜の頂部に離れて城郭遺構が存在する。標高911m，神岡盆地側からの比高約470mを測る立地であり，高原川沿いの富山方面の交通路，山田川沿いの高山への交通路を一度に押さえた。東もしくは北の山中に位置した南平，栃洞側からの比高差は西側に比べれば少ないにしても，在地支配とは結びつかないきわめて深い深山にあり，この地域一帯を治めた高位の権力による遠見を目的とした砦であった。

一般に高原諏訪城の詰城ともされているようだが，そう考えるにしては離れすぎており，密接な関係をもっていたことはいうまでもないが，上述したように個別の機能をもった城と評価すべきである。地表面から観察できる遺構は戦国期であるが，こうした立地の特色から創築は南北朝期頃まで遡る可能性も考えるべきであろう。高原諏訪城の創築については地表面からの観察では詳らかにできないが，遺構年代としては，16世紀半ばを中心に一部後半にかけて改修されたと想定してまちがいない。

第54図　高原諏訪城要図（千田嘉博作図・縮尺1/4000）

（b）東町城（神岡城・江馬之御館）

神岡町城ヶ丘に所在するこの城は，高原川の河岸段丘を利用して築かれていた。段丘崖の下までは20m以上の落差があり，あたかも山城のような景観を示す。現在の神岡町の中心市街地が広がる旧城下町域から見上げたときの効果は大きかったにちがいない。

現在は天守閣型の資料館と鉱物資料館，古民家などが城内に移築され，神岡の観光の拠点となっている。しかしこうした一連の城跡公園としての整備によって城館の遺構や旧観はかなり変貌している。また城域の北部は区画整理のため失われている。佐伯哲也氏の調査によると，主郭北西の段丘崖に竪堀状の遺構が２カ所で認められ，主郭北西30m地点のものが外郭の堀に連結していた可能性がある。これらより復原される城域は東西約70m・南北約120mを測り，主郭は約50m四方となる（第55図）。

現在の東町城は地中に一旦埋め戻されていた堀を元通りに掘りなおし，当時あったであろうと推測された天守閣を石段上（櫓台跡？）に建設したものという。全体の堀の形状などは埋められる前の姿のままとされる。石垣も堀の塁壁にそのまま残っていたものに加え，堀中に崩壊転落していたものを積み直したものとのことである。

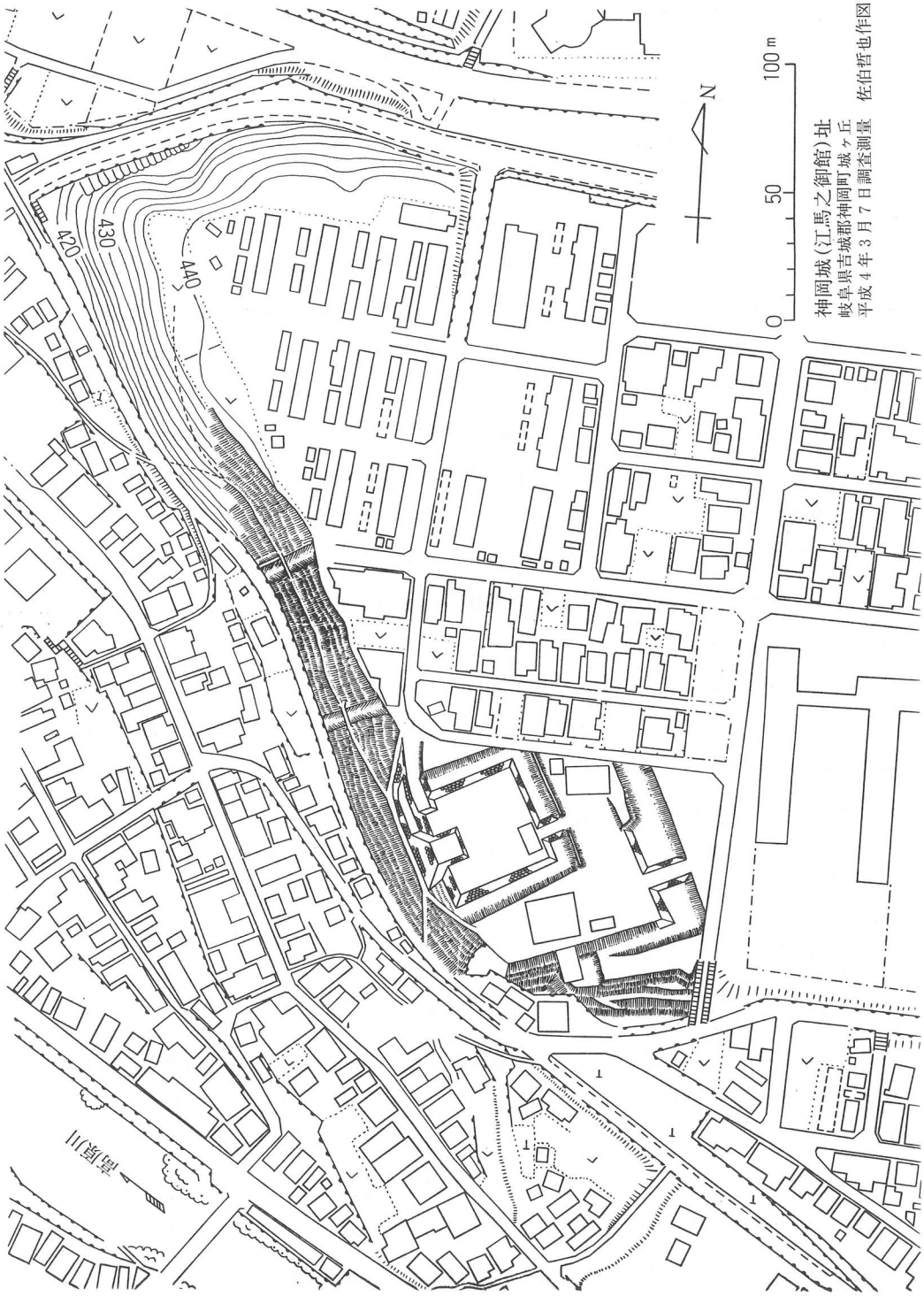
地表面観察及び小島道裕氏の論考第２節による明治期の地籍図を元にした城域の復原によると，東町城が最終段階に主郭とその外側の曲輪の２重の矩形の形態をしていたことは確実と考えられる。整備によって堀を丁寧に掘り戻したということも，現在考えれば，大きな問題を含んでいるにしても，平面形態は基本的には信頼してよい。

しかし石垣については，新しく積み直された石垣と元からの石垣の補修が混じり合い，城館分析の資料とするにはなお詳細な調査が必要である。ただし遺存する石材から，自然石を積んだ野面積み系の石積みであったと推測される。裏込めの状況は不明である。

最終段階の東町城が，主郭－外郭の２重の構成であったとすると，両者のバランスが著しく悪いことを指摘しなくてはならない。外郭中央部に主郭を築造したために，外郭は幅約30mのコ字形の帯状空間となってしまい，曲輪としてはきわめて使いづらいものになってしまっている。当初からこうした設計であったとは考えられず，主郭部分はある段階の付加と推測されよう。

外郭部の南堀が河岸段丘のコーナーを意識して築かれているように，当初から重層的な構成として築かれていたのならば，主郭も南端に寄せられていたと考えられる。改修にあたってあえてそうしなかったのは外郭の空間を犠牲にしても主郭を中心に配して，象徴性を高めたものとみてよいだろう。築造主体の大幅な変化が推測されるのである。

こうした東町城の構成の劇的な変化が，武田氏から金森氏への変化に対応したものであるとしてよいだろう。いずれにせよ未だ東町城に関する本格的な調査は行われておらず，また地表面の観察からだけでは，どこまでが本来の遺構か見分けが難しい。遺構の細部か



第55図　東町城要図（岐阜県吉城郡神岡町所在）

らの検討と評価は，今後の考古学的な調査を待ちたい。

なお東町城の外郭北端部の土塁がやや湾曲することをもって武田氏の丸馬出しとの関連を推測する説があるが，これは成り立たない。丸馬出しの「丸」とは馬出しの外側塁壁が丸いことに着目して呼ぶのであって，馬出しではない一般的な曲輪の塁線が丸くとも丸馬出しにはならない。意外と混同されることが多いので注意したい。

馬出しとは城館の出入り口＝虎口の前面に設けられた橋頭堡であって，主たる曲輪の出入り口の外側(多くは堀の対岸)に位置したものである。だから，この外郭北端部は馬出しではあり得ない。そして，こうした丸い塁線は武田氏の城館に限らないのである。

（c）その他の城館群

江馬氏関連の城館では，発掘が行われた下館，最初に検討した高原諏訪城などのほかに，町内に所在する土城(鬼ヶ城)，寺林城，政元城，洞城，石神城が国指定史跡にされている。すでにこれらの諸城については神岡町教育委員会によって詳細な測量図が作成されており，概況をつぶさに知ることができる。また佐伯哲也氏も精力的に縄張り図を作成しておられる。

これら先学の成果によれば，いずれの城郭も集落にほど近い丘陵に立地して2ないし3の曲輪によって構成された小規模な山城で，いわゆる村落領主クラスとされるものである。堀切や竪堀によって城域は明確であるが，土塁はおおむね未発達である。虎口は寺林城にくい違い虎口状のものが見受けられるが，政元城などでは虎口自体を地表面観察から特定できない。

また曲輪面積は矮小なものが多いことから，詳らかにできないが山麓の集落内に平時の館がセットになっていた可能性がある。今後，現地踏査や地籍図調査，聞き取りを進める必要があるだろう。

（d）まとめ

一連の城館に近接した丹生川村の尾崎城では，天正13年(1585)の金森氏の飛騨侵攻に抵抗して畝状空堀群と土塁・横堀を主体とした純軍事的な大改修が施されており，三木自綱が籠城したと伝えられる国府町の広瀬城とともに飛騨における戦国末期の在地城郭の到達点を示している(千田1989・丹生川村教育委員会1993・高田1994)。

江馬氏関連の城館群は，それらと比べたとき戦国最末期の大規模な改修を受けずにその役割を終えていたことが，一層鮮やかに浮かび上がる。地表面観察でかなり明らかにされてきた戦国最末期の在地の城郭とは違い，その様相や重層的な城館群の構成などがなお判然としない前段階の飛騨の城郭の諸類型を，江馬氏関連城館群は如実に示しているのである。

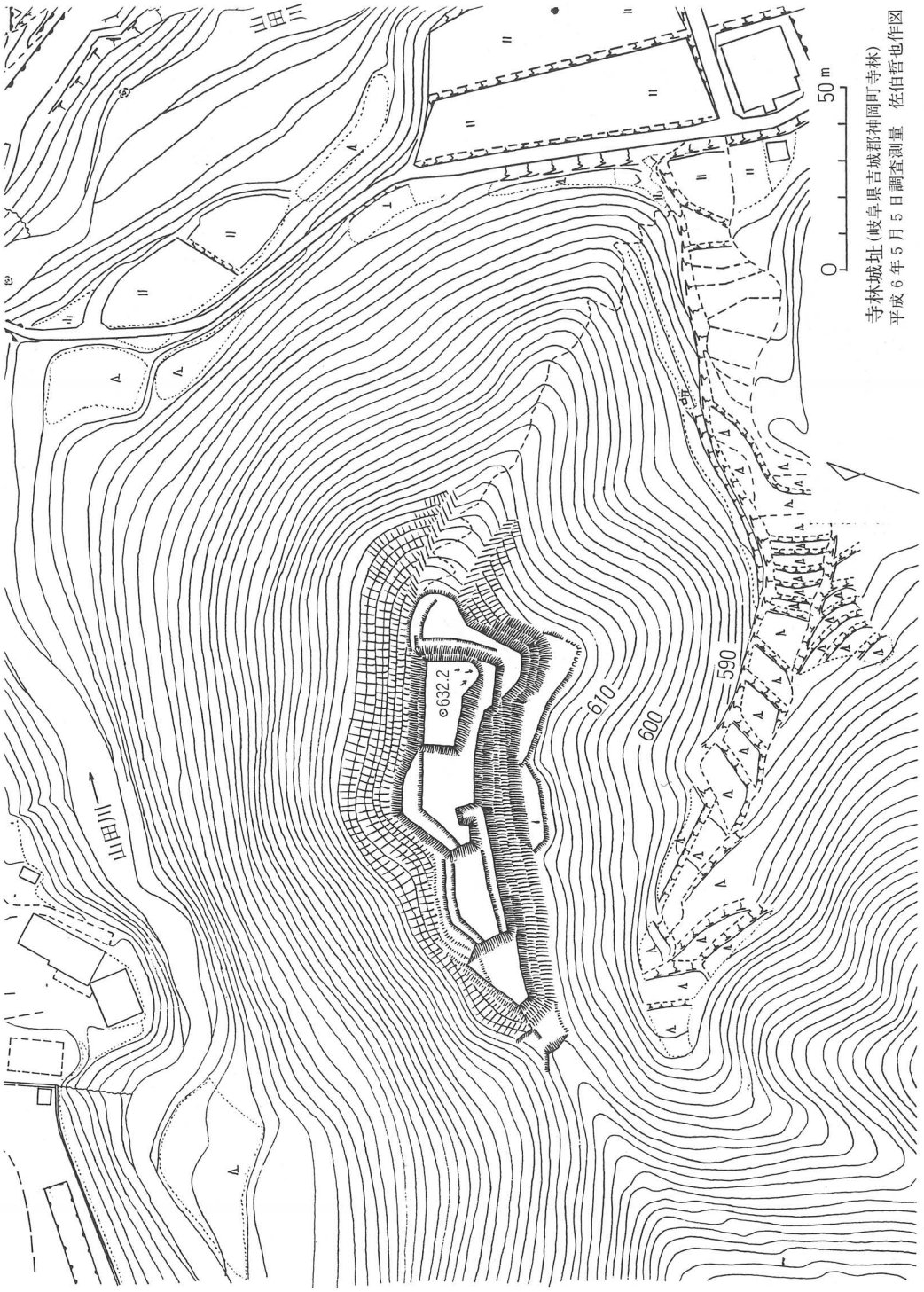
それだけに江馬氏下館に調査の視野を狭めることなく国指定を受けている城郭はもとよ

り，それ以外の地域の城館を群としてとらえた上で，さらに深い検討を加えていくことが求められる。本格的な整備に向けた歩みは緒についたばかりであるが，こうした枠組みを踏まえた中で今後の調査が着実に展開されることを期待したい。

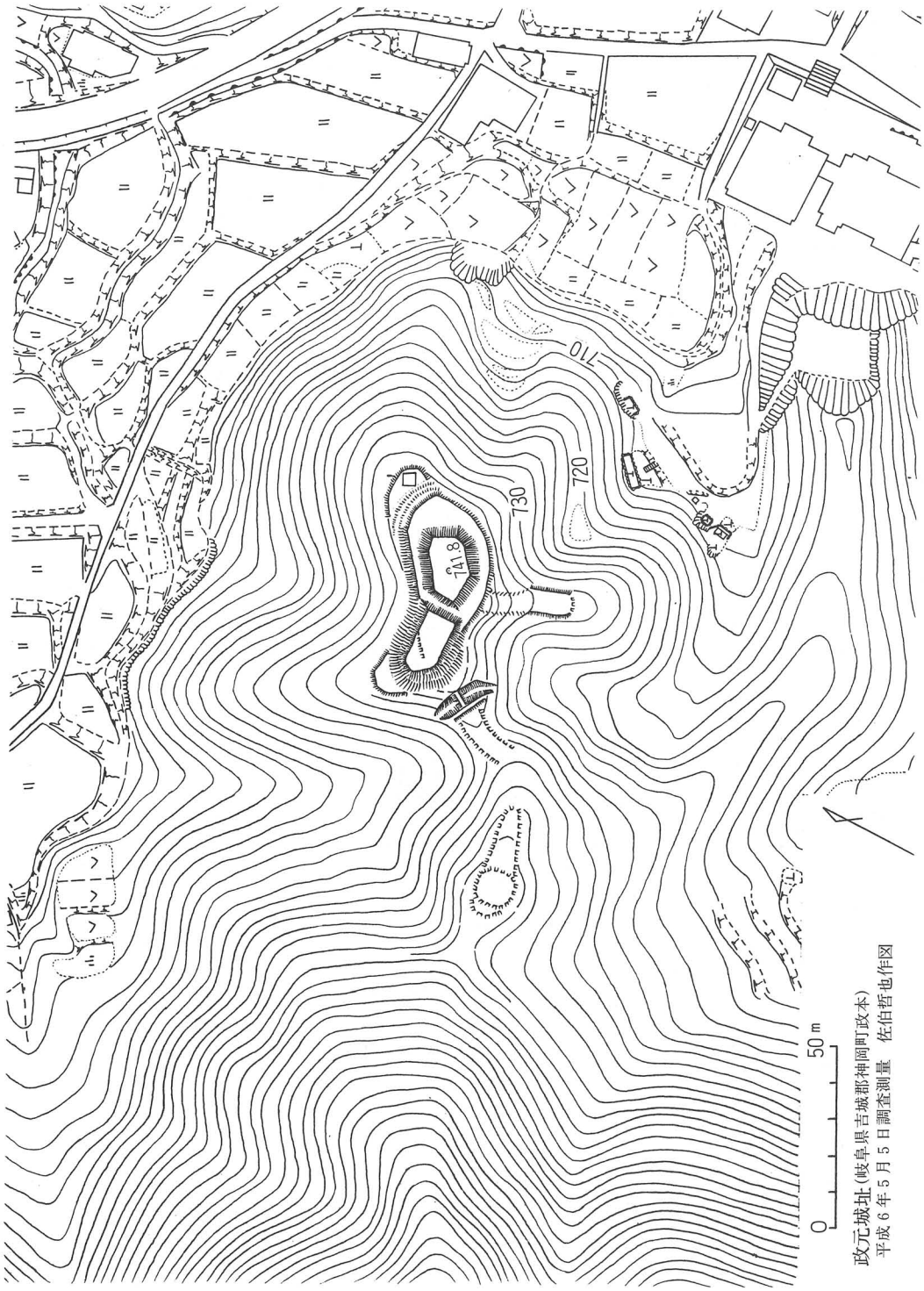
謝辞

本稿をまとめる機会を与えてくださった富山大学考古学研究室の前川要氏と考古学研究室の諸氏，ならびに神岡町教育委員会のみなさん，関連城館の調査に主々の便宜を図ってくださった岐阜県教育委員会の大熊厚志氏に感謝申し上げます。また，地籍図分析の成果を懇切にご教示くださった小島道裕氏に厚く御礼申し上げます。

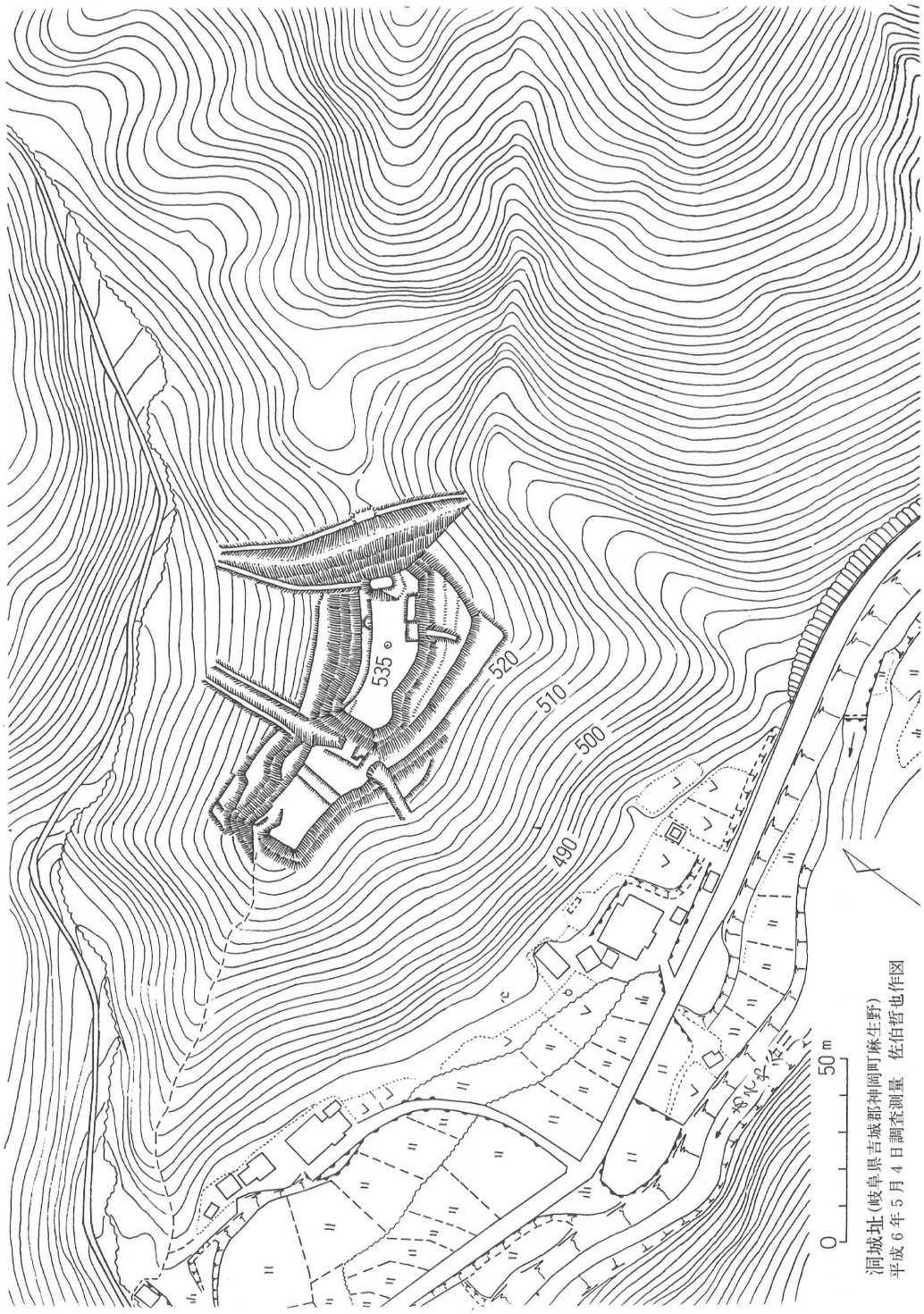
（千田嘉博）



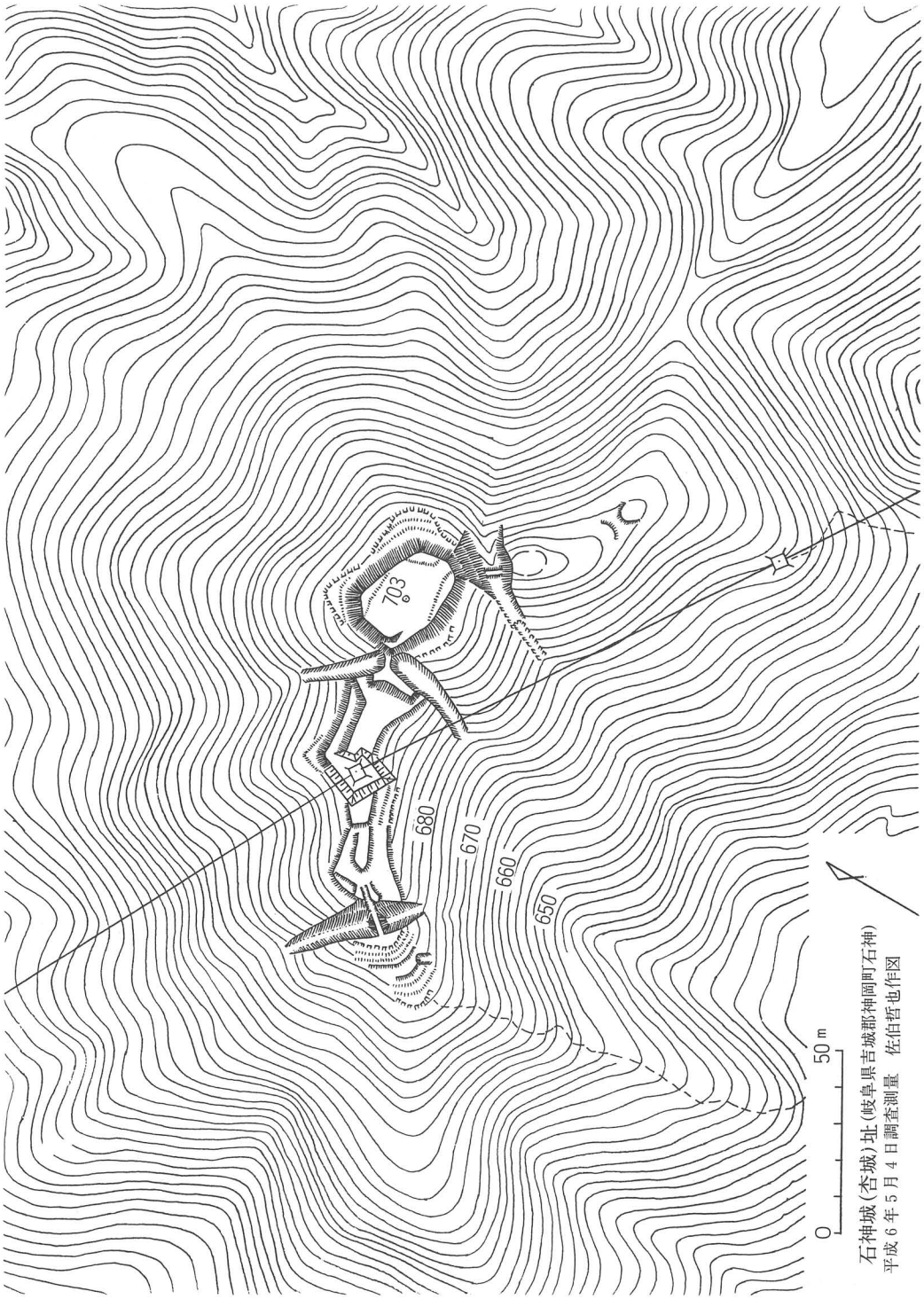
第56図　寺林城要図（岐阜県吉城郡神岡町所在）



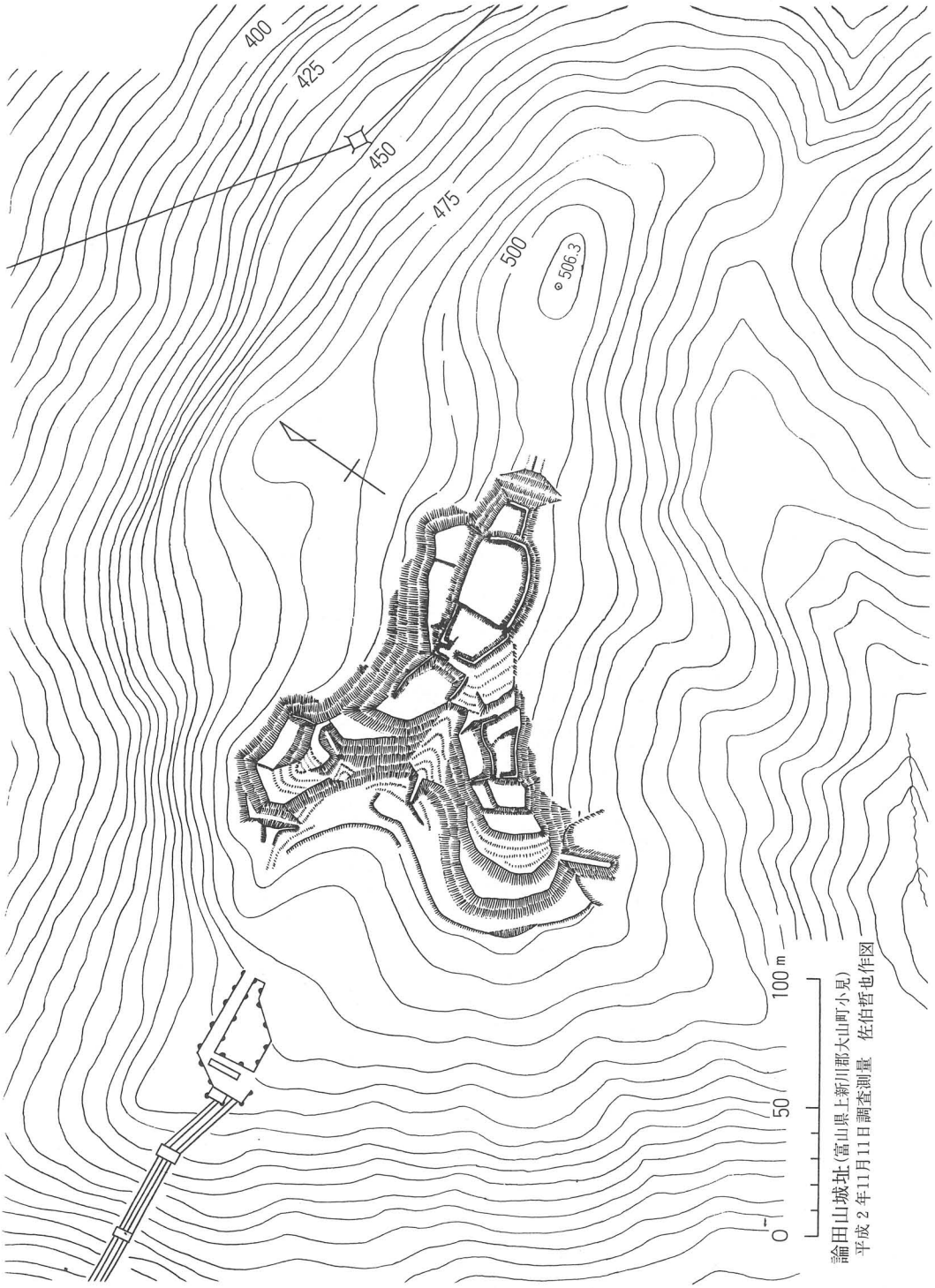
第57図　政元城要図（岐阜県吉城郡神岡町所在）



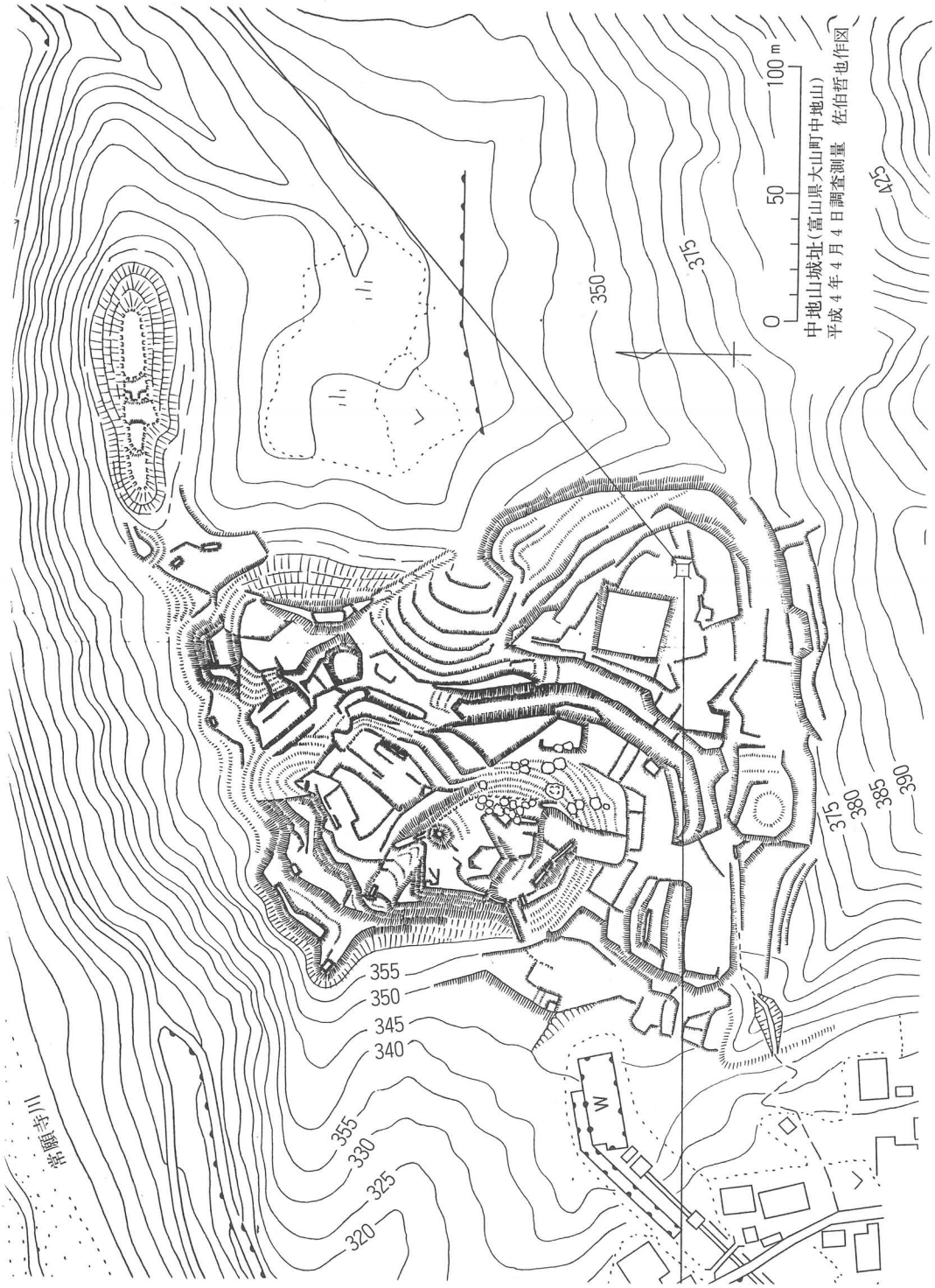
第58図　洞城要図（岐阜県吉城郡神岡町所在）



第59図　石神城（杏城）要図（岐阜県吉城郡神岡町所在）



第60図　論田山城要図（富山県上新川郡大山町所在）



第61図　中地山城要図（富山県大山町所在）

4　結　　語

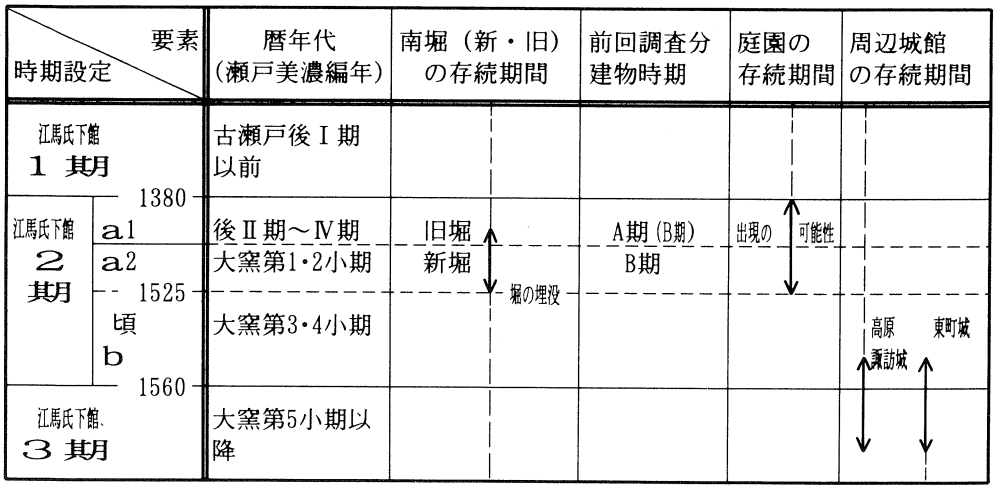
1994年度実施した下館跡の発掘調査では，多くの成果がもたらされた。さらに，1978年度実施した館内遺構との関連性についてもおおよそ明らかとなった。

中世城館の遺構の広がりは，面的に予想を超えてはるかに広くなる場合が多く，発掘調査を実施する際，発掘区域以外の部分についても関連資料について注意を払う必要がある。さらに，周辺の城館跡との関連性を考慮して大きく，周辺城館跡の分析から，地域の歴史像を読み解く必要性もある(千田ほか1993)。

本報告書では，関連分野の諸氏に，それらについて御寄稿頂き大きな成果を得た。それらをかいつまんで，第62図を参照しながら，以下に記しながらまとめとし，最後に総括する。

(a) 発掘調査で判明したこと

堀と土塁の関連性：南堀では，新旧2本の堀の切り合い関係と6段階の変遷を明確化して，さらに旧堀に伴う土塁の存在の可能性が示された。逆に新堀には，土塁が伴っていなかった可能性もある。しかしながら，後述の地籍図調査でも明らかなように，堀の位置の内側に明確な土塁痕跡が見られ，ある程度新しい時期まで土塁が存在したと考えられる。北堀についても同様であり，土層断面図を見るとむしろ館外側からの流れ込みが見られるのに対して，地籍図では土塁の存在が考えられる。



第62図　遺跡・遺構消長及び年代推定図

薬研堀：西堀では，前回調査で確認した薬研堀と土橋２を最検出した。さらに，今回は土橋２より北の地点において土橋１を発見し，門かあるいは土塁の基底部に関係する集石遺構も検出した。平地居館跡における非常に大きな規模の薬研堀の検出は，全国的にみてあまり例を見ないものである。土層断面から，この地点についても内側に土塁の存在が考えられる。

これらのことから，北・西・南の三方の堀にはそれぞれ内側に土塁が存在したことが判明した。さらに，築造年代は後述するように，明確な根拠は欠くものの，14世紀後半頃から15世紀前半頃が想定される。

前回調査層位との関連性：館内部地区では，平面的に前回調査で確認されたＡ期建物とB期建物の新旧関係を再確認した。さらに，この２時期以外の建物も確実に存在することも重要な事実である(註1)。

存続年代と画期：遺物の様相は，13世紀代から段階的に増加してきており，15世紀前半に最盛期を迎える。その後，16世紀前葉頃までに納まることが判明した。第４章第１節で詳述した様に，遺物の様相のみから見れば，江馬氏下館１期，２期，３期と大きく３時期に分期でき，２期は２-a，２-bの大きく２時期に分かれる。２-a期は前後の２時期に分期できる。遺物の総量から見れば，２-a1期が最も多く最盛期である。その時期の中でも，新堀の開削に見られるように，いく時期か分期できる可能性が高い。

建物の性格：基本的に遺物の出土状況から見て，第１節で詳論したように小野正敏氏の意見に首肯できる(小野1994)。

庭園の成立年代：従来，これについては南北朝期から室町期とする説(中井1990)，室町時代末から戦国時代のものとする説(村瀬1979)がある。今回の調査において，確実な根拠はないもののある程度推定しうる分析結果が得られた。発掘調査では，良好な一括資料が存在しないため，土師器皿の主体タイプの年代を古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期に併行することを前提として考察すると，古瀬戸後Ⅱ期，つまり14世紀末頃には，旧堀と同時期に庭園遺構が成立していた可能性が高い。

（ｂ）関連分野・周辺調査で判明したこと

地籍図調査：神岡町所蔵明治21年地籍図から，下館について多くの情報を得ることができた。まず，発掘調査では明らかにできなかった土塁の痕跡が，北堀と南堀の内側に相当する位置から看取できた。南北道路東側の荒れ地や発掘で検出された石垣がやはり土塁の痕跡である可能性が指摘された。内郭の北西に「馬場西」の小字名が有ることは，北堀の外側に一乗谷朝倉氏遺跡当主の館外側と同様の馬場が存在したことが想定される。

次に，東町城についてであるが，地籍図と飛州志掲載の図の分析から，武田流の「丸馬出し」とその後の織豊政権による石垣を中心とする改修が想定される。この武田流の「丸

馬出し」は，寄稿者によって意見が定まっていない。さらに，北側崖下の部分を重臣屋敷と見て，高原川沿いの推定される中世以来の町場を取り囲むように東町城を中心に近世に城下町化されたと評価されている。

周辺遺跡の縄張り調査：江馬氏関連の城館群は，いずれも戦国期最末期の大規模な改修を受けずにその機能を消失していたことがうかがわれる。高原諏訪城は，丘陵稜線上に比較的大きめの削平段を設け，帯曲輪をもった丘陵頂部を中心に深い堀切をそれぞれの稜線にもっており，優れた縄張りの城郭である。16世紀半ばを中心に後半にかけて機能していたことが考えられており，下館の最盛期と一致しない点の評価は後述する。江馬氏が関係するといわれる，千田嘉博論考付図の富山県大山町論田山城(第60図)や中地山城(第61図)の縄張りを見ると，織豊政権の直接的改修は受けずに，畳線土塁や虎口の独自の発達が見られる。このことから，高原諏訪城の縄張りも必ずしも武田流ではなく，江馬氏独自に高度な発達を遂げたものと考えられる。

遺跡周辺の自然環境：花粉分析から見ると，下館周辺には比較的日当たりのよい草地が広がり，森林植生が乏しい状態であり，さらに広葉樹林が乏しく，マツ２次林が拡大しつつあった可能性が指摘されている。このことから，小面積の遺構の分布や短期間の遺構の存続ではなく，周辺の森林が広く伐採され，遺構がかなり広くかつ長期間存続したことが考えられる。

遺跡探査法の模索：遺跡の評価と直接関係しないが，今回実施した方法のうち，重要なことは，レーダー探査が有効であることは再確認したが，電気探査についてシュランベルジャー法が，堀や溝に対して非常に有効であることが判明したことである。従来，堀に対してあまり試みられなかったものであり，今後大きな期待が寄せられる。

（ｃ）江馬氏城館跡下館跡の位置付け

下館跡の歴史的変遷：最後に，考古学的成果を中心に見た，江馬氏の飛騨北部における位置付けについて論じて結びとしたい。

南北朝期から室町期にかけては，飛騨北部の姉小路氏と南部の足利方の京極氏が対立していたが，室町前期には，江馬氏が強大となって，飛騨三分の体制ができあがったと言われている(吉岡1979)。以下に，周辺遺跡も含んだ，各時期の変遷を考えて見たい。

江馬氏下館１期(13世紀から14世紀)の実態は不明であるが，中国陶磁器を中心としたある程度まとまった遺物，さらには手づくね土師器が出土していることから，大きくは京都の影響下にあったと考えられる。江馬氏下館２-ａ１期(14世紀末から15世紀半ば)が館としての全ての機能が出そろう時期である。遺物出土量から見ても，この時期は，館の最盛期である。手づくね土師器の大量出土や庭園を見ると，恐らく京都文化の強い影響下で大きな館の改造が実施されたと想定される。これは，何等かの政治的影響力を感じざるを得な

い。ａ２期(15世紀末から16世紀初頭)は，遺物の量から見て衰退期に相当する。前回調査のＢ期がこれに比定される可能性が高い。２ｂ期(16世紀半ば)は，堀が埋没した後も，館が細々と機能した時期である。館の主な機能は，東町城に移動したと推定される。高原諏訪城の主な機能年代は，この時期から次の３期にかけてと推定される。江馬氏下館３期(16世紀後葉から末)は，館には若干の遺物は存在するが，基本的には廃絶の時期と想定される。東町城を中心に城下町が経営され，金森氏が入城以降は，近世城下町が建設される。

当該期の平地方形館の位置付けと「方形館体制論」の提唱：それでは，守護領国制下におけるこうした平地方形居館の位置付けは，全国的に見てどのように考えられるのであろうか。

近年，15世紀代の平地居館跡の発掘調査が盛んである。そのことが，戦国期城下町成立期以前の地域構造を明らかにする手掛かりを与えてくれている(註２)。例えば，岐阜県東氏館跡(大和村教育委員会1984)や長野県高梨氏館跡(中野市教育委員会1993)では，いずれも形状が一町四方の方形をしており，河川を支配するような位置，例えば，河岸段丘や河川堤防上に立地する。さらに，年代的に見ると，いずれも13世紀あるいは14世紀頃に若干出現して，15世紀前半頃最盛期を迎え，その頃土塁と堀をもち，16世紀前葉で消滅し，さらには庭園をもっているといった共通する特徴をもつ。そのほか，島根県三宅御土居跡(益田市教育委員会1993)や富山県井口城跡(井口村教育委員会1990)などでも館の形状や庭園を持たないといった相違点はあるにしても，遺物の年代幅や遺構の盛行期に，ほぼ同様の傾向が示されている。これらの築城主体は，多くの場合有力国人階層である。

それに対して，それよりも階層の高い，守護が建設する居館，つまり守護所の場合，15世紀前半の様相が調査事例が多くなく未だ不明瞭なものの，15世紀後半から16世紀前葉の事例として，二町四方の規模である場合が，新潟県至徳寺跡（小島1994)，岐阜県枝広館（内堀ほか1994）などで指摘されている。さらには，周辺にそれより小さな居館や屋敷が，地籍図や部分的発掘調査で推定されている。これらは，いずれも筆者が「田村型」と提唱した都市類型の一つであり(前川1994)，権力中枢の守護所と周辺の散在する館というありかたを示したものである。この類型の初源の年代について確実に押さえられる事例は現時点では存在しない。しかし，田村城周辺の屋敷の年代から見て，14世紀後半頃にはこうした体制が存在したと想定しても問題はなかろう。

このように考えてくると，地域的偏差はかなり存在することは当然であるが，大きく見ると，14世紀末頃から15世紀前半の最盛期を経て，16世紀前葉にかけての，二町あるいは一町の守護所を頂点として，一町の有力国人層の居館を次に置き，さらにその下に半町の屋敷をもつ地侍を置くといった，方形館の規模順の支配体制，いわば「方形館体制」がその当時の守護領国体制の支配権力を地域空間に具現したものと理解できよう(註３)。

勿論，方形館や土塁をもつ館は，畿内周辺を中心に中世前期に存在することは事実であり(中井1990)，地方においても点的には存在する。しかしながら，各小地域で必ず存在するようになるのは，14世紀後半から末以降と想定される。

さらに，そう考えた場合，この「方形館体制」における在地支配の基本構造は何か。それは，橋口定志氏が既に指摘しているように，潅漑用水体系の掌握である(橋口1987)。そのために，中世前期から継続してくる中世集落が，14世紀後半頃に再編され，館周辺に散在しながらも集住する。中世後期の平地居館が一見不安定な河川堤防上に立地することが多いのは，河川からの水の取入れ口を把握するためであることは，簡単に想像がつく。

また，多くの地域においても，戦国期城下町成立の時期と中世村落の衰退に時期差が存在して，その原因が不明であったことについてもこれで説明がつくであろう。

それでは，「方形館体制」下の江馬氏下館の位置は，どうなるのであろうか。周辺の発掘調査はほとんどされておらず，さらに飛騨守護所についても全く不明である。ただ大きく見ると，館の形状は一町前後の方形であり，周辺に家臣団集住の痕跡が，竪穴住居を初めとして，明瞭に見られる。さらに，庭園や土師器大量使用・投棄に見られるように京都文化の影響を色濃く出している。薬研堀の形状やそうした点から見ても，かなり有力な国人であったことは，間違いなかろうし，支配体制の中で有力な位置を示していたと考えられる。

(d) 今後の課題

今後の発掘調査や研究への期待：1995年度以降も江馬氏城館跡下館跡の発掘調査は継続される。今後この遺跡は，中世平地居館跡の諸問題を解明するための，多くの手掛かりを提供してくれると確信している。さらに，本書中で，多くの問題や仮説を提起したが，以後の地道で粘り強い発掘調査や研究によって解明されることを切に望みたい。

整備計画：今回の下館跡の発掘調査及び報告書の刊行は，調査・整備計画のごく端緒にしか過ぎない。発掘調査の成果に基づいた正確な整備を期した，長期的な計画と短期的な計画を発掘調査と平行して，発掘調査整備委員会で立案していく必要性が感じられる。恐らくその中で，最近激しく議論がなされている建物の立体復元についても，一定の方向性が示されていくのであろう(註4)。さらに，周辺の江馬氏関連城館についても，調査を着実に進めて行くことが重要と考えられる。

〈註〉

(註1)　遺跡の存続年代幅は，遺物の時間幅から13世紀から16世紀前半の250年間前後と考えられる。しかしながら，前回調査での検出建物の数は，A・Bの2時期では，遺跡の存続年代幅と比較して，あまりにも少な過ぎる。前回報告書でも示唆されてはいるが，下層遺構の

確認が重要な課題となる。それいかんによっては，第62図の大幅修正も必要となる。

（註２）　戦国期城下町の空間構造や地域構造のありかたについては，考古学サイドや文献史学サイドから今までに充分研究がなされてきており，ある程度の成果が得られている。近年の考古学の研究は，守護領国制下における在地権力のありかたや戦国期城下町への転換期に問題関心が移動してきており，最新の成果がまとめられている（金子ほか1994，千田1994）。

（註３）そうした場合，地域の条里遺構はあたかも古代都城制における条坊ということになる。勿論，農耕生産のための土地制度であることは言うまでも無いが，それにそった形で館・屋敷が展開していることは，空間意識の中では，中央制度をもってきたと想定しても良いのではないか。そうすれば，守護所の大きさが，二町や一町であったり様々であるのは，朝廷から贈られる官位と関係する可能性もあろう。この「方形館体制」は，各地域で相当の偏差があると予想される。特に畿内や東国は相当複雑であろう。生産・流通についても，15世紀代を沈滞期とみる考えかたも以前存在したが，現時点においては，むしろ活発な時期と見る，さらにこの体制の末端の在地領主が，都市計画の実施に強く関与していたと考えたほうがよさそうである。例えば，窯業生産を見れば，瀬戸美濃窯業生産技術の拡散・拡大期は15世紀初頭頃に存在するし，珠洲窯の生産は15世紀前半期にはかなり盛んであったことも判明している（吉岡1994）。古瀬戸後Ⅲ期の拡散の歴史的背景を守護土岐氏支族の有力国人妻木氏による領国経済振興策の一環として位置付ける見解が存在するが（楢崎1976），これもこの体制下で実施された政策と考えたい。流通についても，青森県十三湊遺跡や石川県普正寺遺跡など15世紀前半をピークにもつ遺跡も多く報告されている（国立歴史民俗博物館1994，石川県考古学研究会1970，石川県埋文センター1984）。さらに，この体制下の在地領主が方形館を都市内に構え，都市の再編に関与したと考えられる例は，十三湊遺跡や草戸千軒町遺跡（前川ほか1991）で知られている。今回は，紙数がないために詳論はできないが，これらについては，別稿にて再検討したい。

（註４）　1995年２月４日，奈良国立文化財研究所において，建築史学者の，建物の立体復元の是非をめぐるシンポジウムが開催され，筆者は出席した。建物の立体復元の良い点と悪い点が指摘され，山岸常人氏を代表として大勢としては，立体復元反対論であった（山岸1994）。江馬氏下館の計画の場合，単に首長の独断によるものではなく，恐らく地権者のみならず地域住民の要望があってのものと想定される。そうした際に，純粋に学問的に良い或は良くないというレヴェルの問題ではなく，むしろより発掘成果に基づいた史実に忠実な形で立体復元や整備に取り組むことが，研究者の社会的責務であると考えている。

（前川　要）

付章　自然科学的調査の成果

1．江馬氏下館における電磁気探査とレーダー探査

2．江馬氏下館の薬研堀内推積物から得られた古環境資料

1．江馬氏館における電磁気探査とレーダー探査

富山大学理学部　酒井英男
人文学部　武田昌明，前川要

1．はじめに

遺跡探査は理科学的な手法を用いて遺跡の概要，遺構や遺物の位置･性格を探る目的で実施されている（酒井ほか1993など）。電気探査，磁気探査，電磁法探査，地下レーダー探査，音波探査などの各種手法があるが，手法により適用できる遺構が限られる場合も多い（Clark1990）。現状は手法の適用範囲を検討している段階であり，発掘調査が行われる遺跡において発掘前に探査を実施して比較することは，適用範囲を検討し，手法を改良するのに非常に有効である。

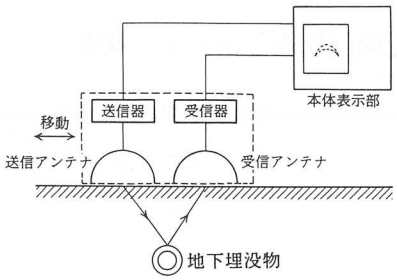
本稿では，同主旨にふさわしい探査として，岐阜県神岡町江馬氏館遺跡において，富山大学考古学研究室による発掘調査前に行った電磁気探査とレーダー探査を報告する。また，同装置による探査例として，群馬県子持村の古墳遺跡で実施した探査結果も報告する。

2．探査方法

探査は，地下レーダー探査，電気探査，電磁法探査（VLF-EM）の手法で実施した。各手法を簡単に紹介する。

2-1．地下レーダー探査（電磁波パルス反射法）

地下レーダー探査は特定周波数のパルス状電波を地下に向けて発射し，地下の埋蔵物や土層の境界面で反射して戻る電波を捉え，境界面解析から地下構造を探る探査方法である（第１図）。測線上の連続測定から垂直断面図が得られ，地下遺構による反射面を解析する。日本では，送信部と受信センサー部が箱にまとめられた台車タイプのレーダー装置が普及しているが，地形の起伏や樹木等の障害物に対応しづらく適用遺構が限られる難点があった。本研究では，センサー部がスキー板の様な形状を持ち探査地域の地形にあまり影響されないカナダ製EKKO-４型装置を使用した。

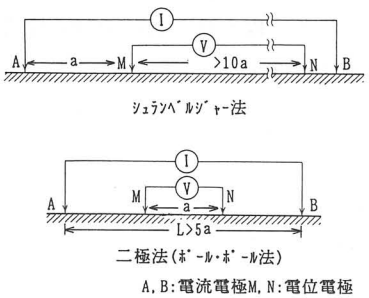


第１図　レーダー探査の概念図（楠 1993）

2-2. 電気探査

電気探査は，人工電流を地下に流して電気比抵抗の地下分布を探る手法である。大地内に電気比抵抗が周囲より高い領域が存在すると，電流は高比抵抗領域を避けてその周囲を流れる。逆に低比抵抗の領域では電流は周囲より集中して流れる。埋没遺構と周囲土壌の比抵抗の違いで生じた電流経路の変化を解析することで，遺構の位置が推定できる。

大地に２本の電極を差込んで電流を流すと，電流は流れやすい箇所を通って地中深くまで拡散する。電極間隔を広げるとより深部まで電流は浸み込む。電極間隔を一定にした移動観測では，電極間隔に応じたみかけ深度の比抵抗の二次元的な分布が得られる。実際の探査では４本の電極（電流電極２本と電位電極２本）を用いる。電極の配置に幾つかパターンがあり，今回は第２図のシュランベルジャー法と二極法を用いた。シュランベルジャー法は電流電極(C)と電位電極(P)を等間隔で配置するもので，電流の浸透深度が比較的一定で，比抵抗の異常領域をシャープに捉えられる利点がある。また二極法は浅部領域の解像度は少し劣るものの，探査効率が良いので広範囲の探査に適している。探査深度は土壌の物性にも依存するが電極間隔で見当がつき，シュランベルジャー法では，H=AB/２（ABは電流電極の間隔）が目安として利用できる。



第２図　電気探査の各種電極配置図
（楠 1993を引用，一部加筆）

2-3. 電磁法探査（VLF-EM）

電磁波は地下へ浸透する際，使用周波数と地下構成層の比抵抗により浸透度は異なる。地下へ浸透した電磁波（一次波）が反射して戻る二次電磁波は一次波より減衰しており，減衰度から地下の比抵抗構造が推定できる。比抵抗が低いほど，電磁波の振幅は大きく減衰する。今回はVLF帯域（Very low frequency；数k～数10kHz）の周波数帯を用いた探査を行っており，対象深度は数m～数10mである。

3．群馬県子持村古墳の調査例

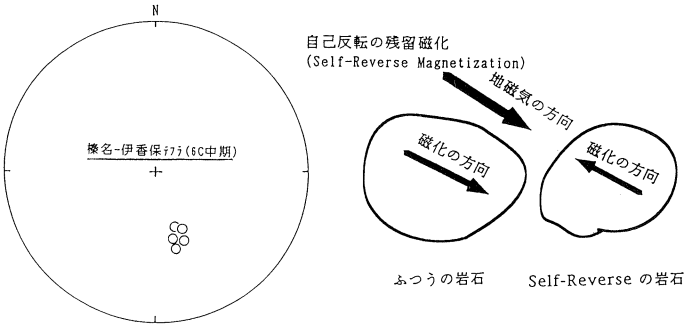
レーダー装置を用いた古墳探査が最近活用されている。そうした例として群馬県のほぼ中央に位置する子持村で実施した探査を紹介する。子持村（第３図）は，南西方向の榛名山や東方向の赤城山等の火山噴火による厚く堆積した火山灰が表層地質の主体となっている。特に榛名山二つ岳は，６世紀初め頃と中頃の二度にわたって大規模な火山爆発を起こしており，その度に子持村に大量の火山灰や軽石を降り積もらせている（石井1991）。６世紀中頃の降下軽石や軽石流で埋没した田尻遺跡の遺構を対象に，探査を実施した。

第３図　探査を行った田尻遺跡と古地磁気試料を採取した犬子塚遺跡。
右図の測線Ａで探査を実施した。

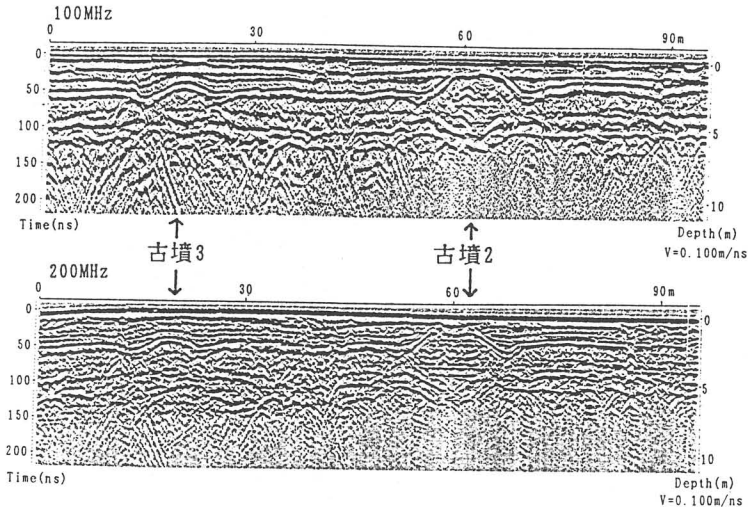
層厚約30cmの表層土の下には6世紀中頃の噴火による，「榛名-伊香保テフラ」と称される，降下軽石や軽石流からなる堆積層がある。軽石粒(角せん石安山岩)は，粒径が5mm～30cm，平均5～10cmのものが大部分を占め，粒径の大小から上下2層に分かれる。大きい軽石が目立つ上層は激しい噴火状態での降下軽石と推定されており，上下層合わせて2m以上の厚みを持つ軽石層は，比較的短い時間で降ったと考えられる。

露頭で定方位で採集した比較的大きな軽石は，第4図に示す様に地磁気と逆方向に磁化(熱残留磁化)を獲得していた。考古地磁気年代測定で利用されるように，焼けた土壌や岩石は，普通，地磁気と平行に磁化を獲得する。この軽石の磁化特性は，自己反転磁化と称される非常に稀な現象である(Nagata et al. 1952)。

上述の軽石層に埋没した田尻遺跡の第3図右の測線Aにおいて，レーダー探査(使用周波数100MHz，200MHz)を行った。第5図の反射プロファイルには，2つの古墳(古墳2と古墳3)の墳丘の盛り上がりや周囲の周溝が明瞭に現われている。古墳位置の下部のエコー(シグナル)については虚像の可能性が高いが，盛土(含水率)の違いを示唆する可能性もある。同地域では田村ほか(1989)等のレーダー探査が実施されており，併せて検討すると，今回実施したように複数の周波数の探査による探査深度を変えた探査で解析することが望ましい。



第4図　左：自己反転を示した6個の軽石試料の磁化方位のシュミットネット投影
磁化方位(白丸)は伏角が上向きで南方位を示しており，地磁気と逆方向である。
右：通常の岩石の磁化と自己反転磁化の概念図



第５図　地下レーダー探査(第１図の測線Ａ)のプロファイル
上図は100MHz，下図は200MHzでの結果を示す。

レーダー探査で認められた古墳周囲で電気探査を実施した結果，古墳３は低比抵抗，古墳２は高比抵抗の領域と確認された。第５図に見られるように古墳２の埋没深度は古墳３より深いので，比抵抗の高低の違いは古墳２の構成土壌が古墳３よりも電気抵抗が高い(土壌は固い)ためと考えられる。

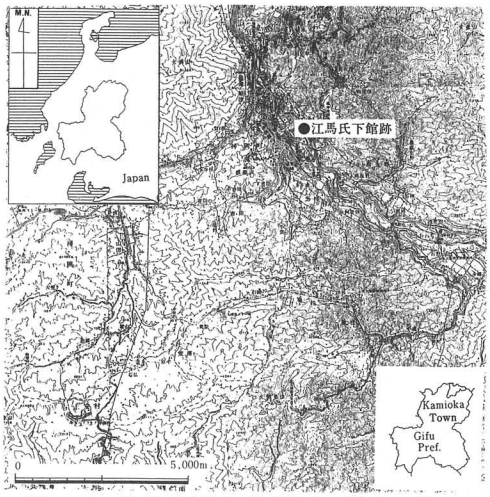
以上の結果はレーダー探査が有効に作用した例であるが，さらに検討すべき点もあり，遺構を埋没させたテフラ層の自己反転磁化という特殊な物性も考慮しなければいけない。探査の際には，可能な限り露頭土壌の電磁気物性も同時に調査することが必要と考える。

４．江馬氏下館における探査

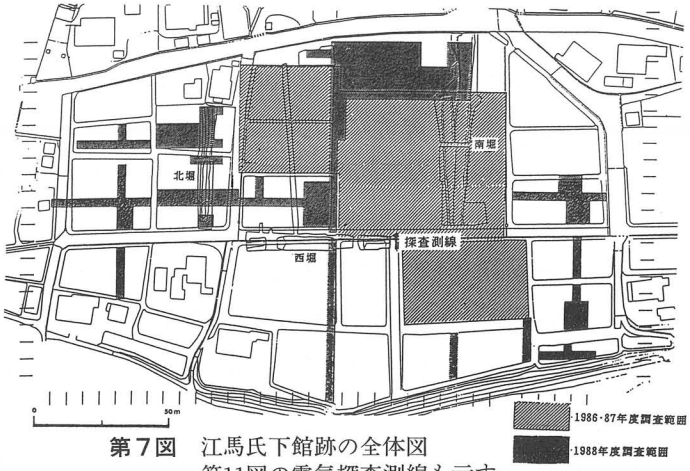
江馬氏下館は，岐阜県吉城郡神岡町の神通川水系高原川の河岸段丘に立地する中世豪族江馬氏の居館跡である(第６図および第７図)。1973～1978年に神岡町教育委員会によるトレンチ調査が実施され，館内部の庭園跡･館を巡る堀･建物の礎石が確認されている(神岡町教育委員会，1977)。遺構は第７図に示すように，庭園，建物と堀からなる。用いた探査手法は，電気探査，電磁法探査(VLF-EM法)，および地下レーダー探査である。

レーダー探査は，館跡の三方を取り囲む北堀，西堀と南堀の堀跡の断面推定を主な目的とし，電気探査は大規模な薬研堀(やげんぼり)である館西堀および南堀を対象にした。探査と併行して発掘調査が一部行われており，土層や遺構に関する情報を参考にできた。探査測線は，第８図に示すように堀跡と示唆された領域と直交方向に設置した。レーダー探査は，総計13本の測線において，15～25mの測線長を取り実施した。探査に使用したレー

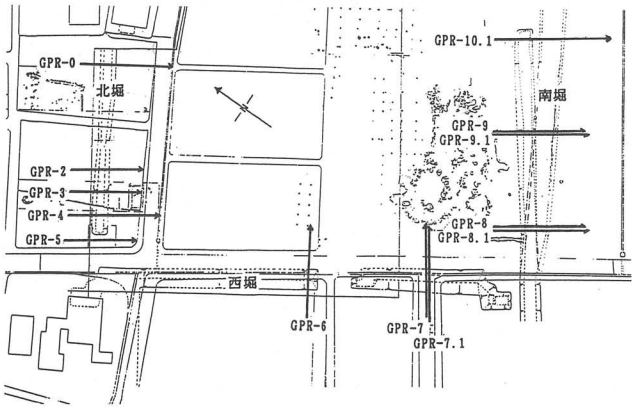
ダー波の周波数は，測線GPR7.1，8.1，9.1およびGPR10.1では50MHz，それ以外の測線では100MHzである。



第６図　岐阜県神岡町江馬氏下館跡の位置



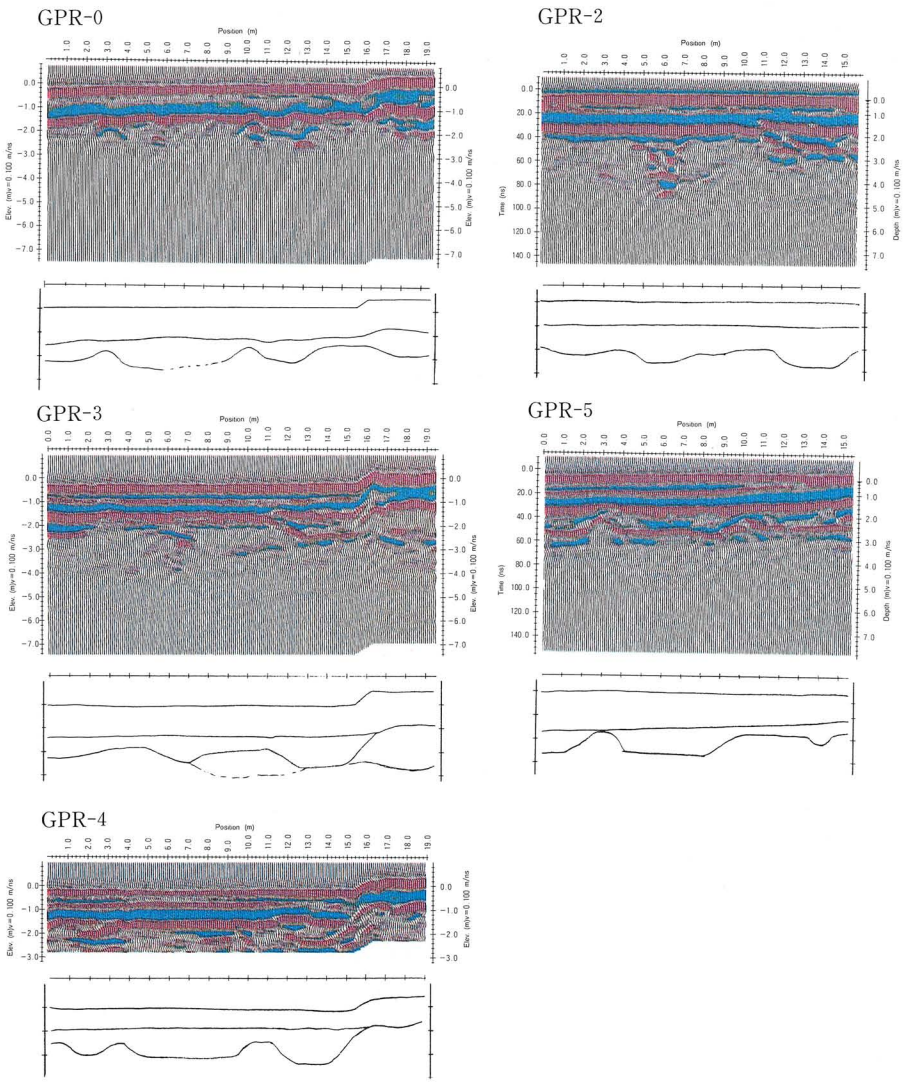
第７図　江馬氏下館跡の全体図
第11図の電気探査測線も示す。



第８図　地下レーダー探査の測線
GPR8.1，GPR9.1，GPR10.1の測線では第13図の電気探査も実施した。

4-1. 北堀の探査

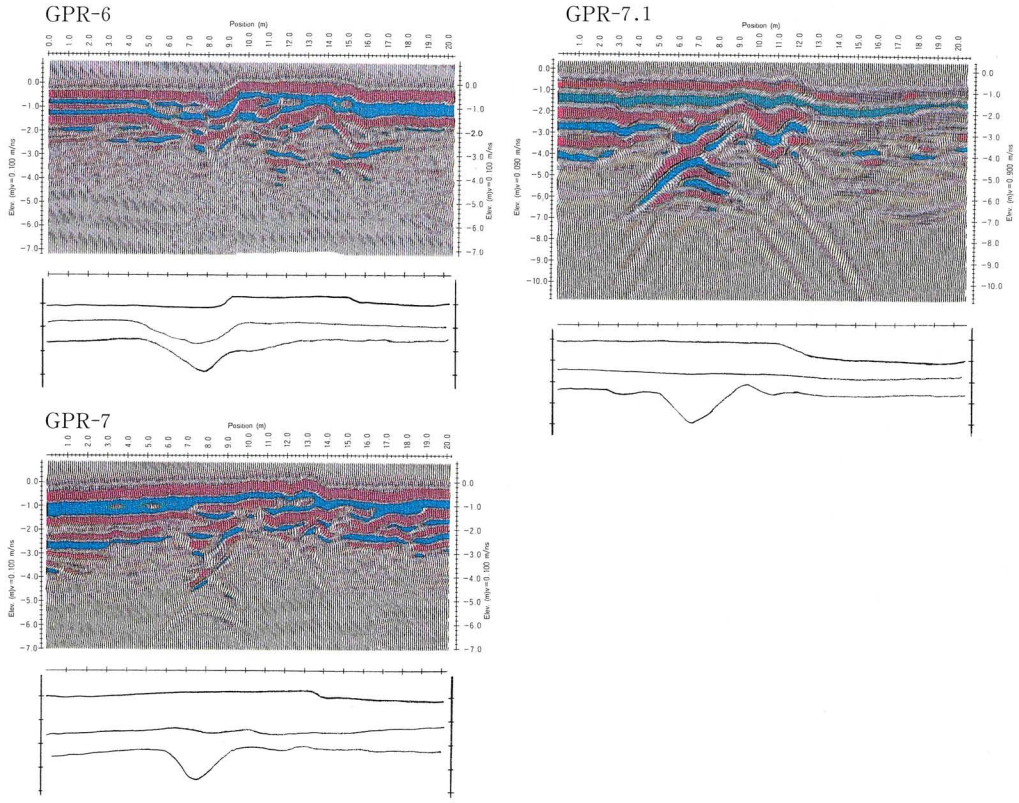
5本の測線(GPR 0，2，3，4，5)で地下レーダー探査を行った。第9図に示すGPR 0，4，5の測線には，堀跡と想定される凸形の堤天端と凹形の堀部分のリアルラインが明瞭に認められた。このパターンは概報で報告された堤間隔と深度も矛盾は無い。GPR 2とGPR 3の6m付近に現れた強い反射面は石や礫類を示唆する。また，各測線の12～15m付近に台形状の凹形反射面がある。測線GPR 2，3，4で明瞭なこの反射は堀跡と類似する遺構の可能性を示すと考えられる。



第9図　江馬氏下館北堀での地下レーダー探査の結果

4-2. 西堀の探査

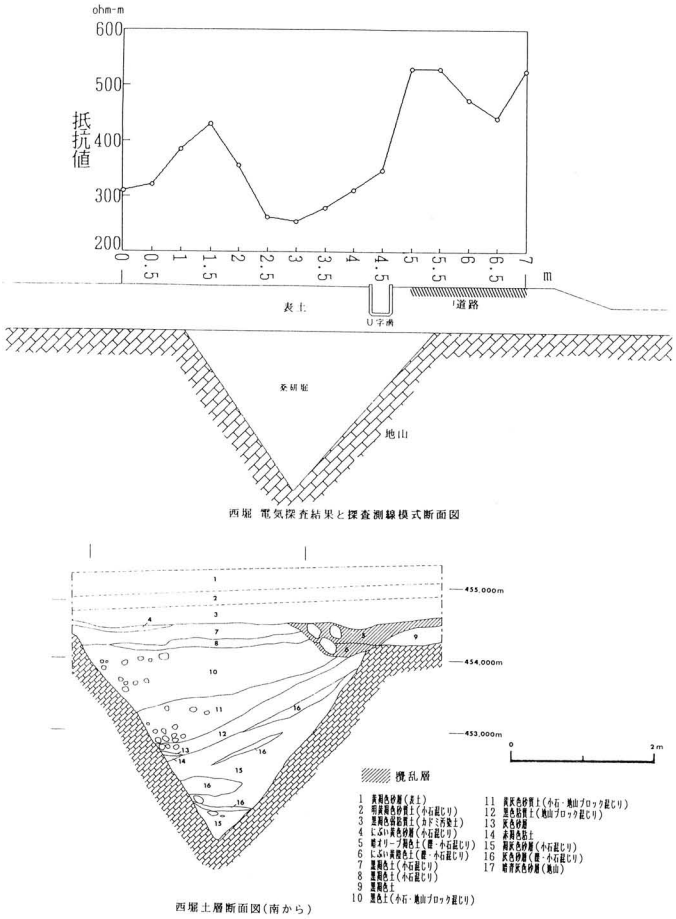
3本の測線(GPR 6，7，7.1)でレーダー探査を行った。第10図に示す各測線の5～9mの地域に約3m深度のV字形堀跡が表れている。農道を横断する測線のため，側溝構造物や盛土材料の影響で複雑な反射となっている。庭園内は比較的均一な土質構造を反映している。



第10図　江馬氏下館跡西堀での地下レーダー探査の結果

西堀では電気探査(シュランベルジャー法)を，館西堀に直交するように調査区横の現在農道となっている未発掘箇所(第7図の測線)で行った。電極間隔は探査深度2.0mに対応する間隔に設定した。探査前の夕方から夜間の雨の影響で，堀埋土の含水率は高い状態と考えられた。

第11図の上図に示すように測線上の2～4.5mの地域で堀の反応が明瞭に現れた。発掘結果(同図の下図)を参照すると，東側の館内部から西傾斜に埋土の堆積が見られる。探査結果の東から西への傾斜は堀埋土(土層番号10と12)の影響と考えられる。測線上の5～7mは現在の道路にあたり，踏みしめにより高比抵抗となって探査結果に現れていると考える。

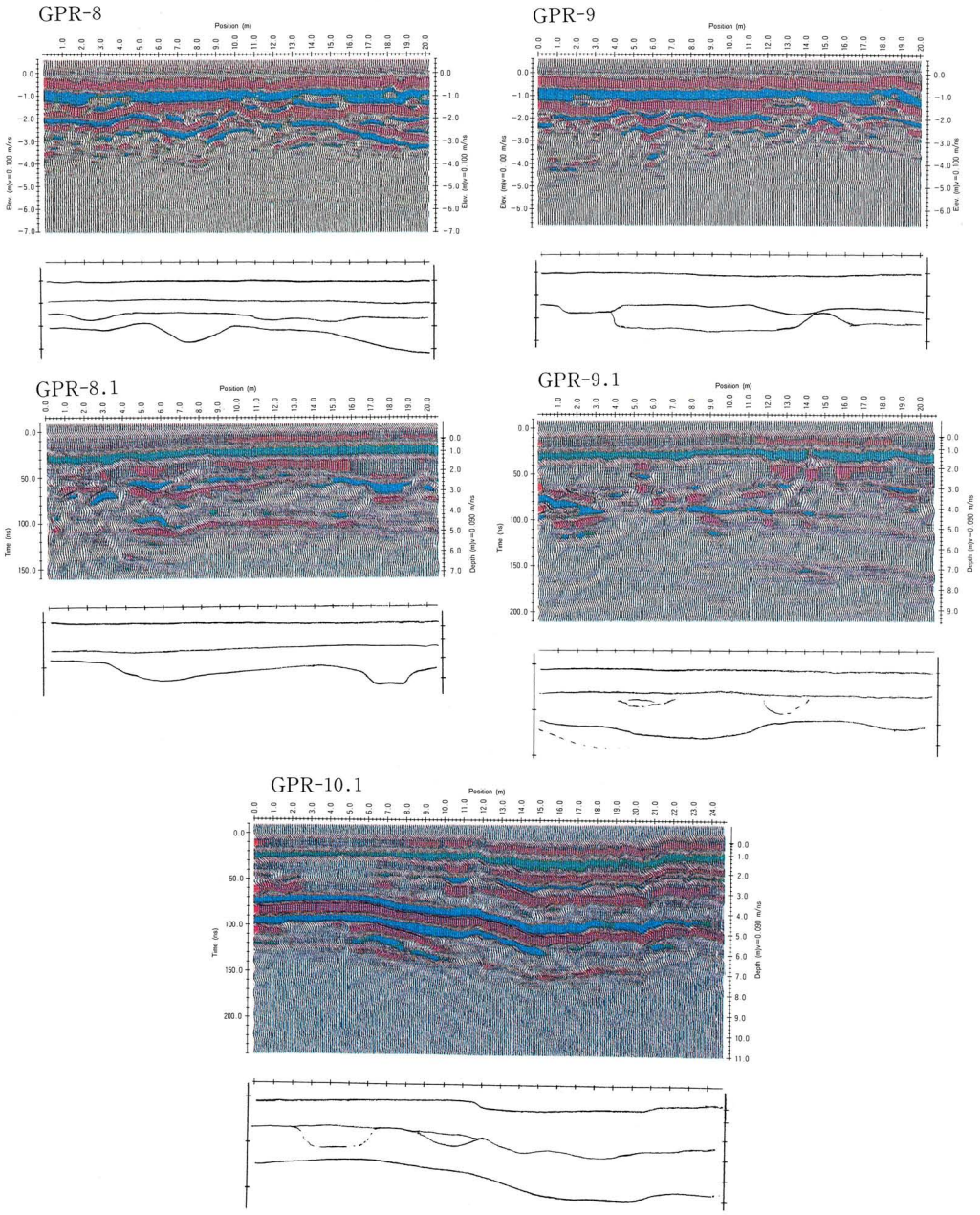


第11図　上：江馬氏下館跡西堀での電気探査の結果
中：西堀の探査測線での模式断面図
下：西堀の土層断面図(南から)

4-3. 南堀の探査

5本の測線(GPR 8，8.1，9，9.1，10.1)でレーダー探査を行った。

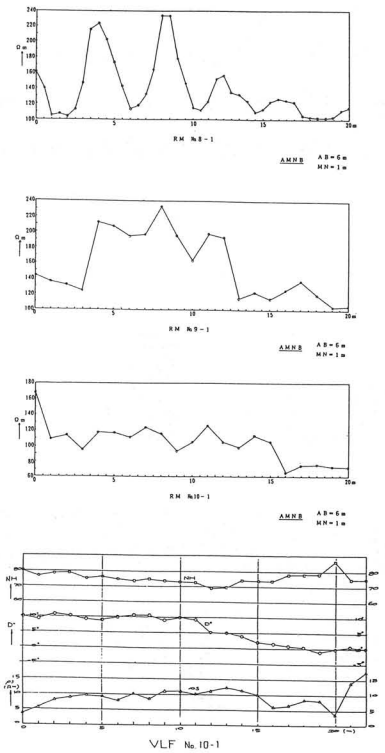
第12図に示す探査結果の，GPR 8 測線では 6 ～13mの地域に凹形の反射面が認められ，また16m付近より南傾斜の反射面が記録されている。GPR8.1測線には，5 m付近と17～19mに明瞭な台形反射面がある。GPR 9 測線には，4 ～15mの地域に浅い凹形反射面が認められ，GPR10.1測線では，北から南にかける斜めの地層境界が認められる。



第12図　江馬氏下館跡南堀での地下レーダー探査の結果

南堀ではVLF-EM法探査と電気探査(二極法)も実施した(第13図)。電気探査の３測線(RM8.1，9.1，10.1)には，４～15mの地域に高比抵抗値が認められた。その両側の低比抵抗域は含水量の多い土質の堀と想定される。VLF-EM法探査の測線(VLF10.1)で得られた電気比抵抗(ρ)も同様なパターンを示し，レーダー探査で示唆された地層境界とも矛盾は無い。

レーダー探査のGPR8.1測線の15m地点から南で見られる台形反射面は，高比抵抗層と対応し，含水量の多い細粒土の堆積層および遺構の存在を示唆すると考える。



第13図　江馬氏下館跡南堀でのVLP-EM法探査と電気探査の成果
測線番号は第８図のGPR8.1，GPR9.1，GPR10.1に対応する。

5．発掘調査の結果とまとめ

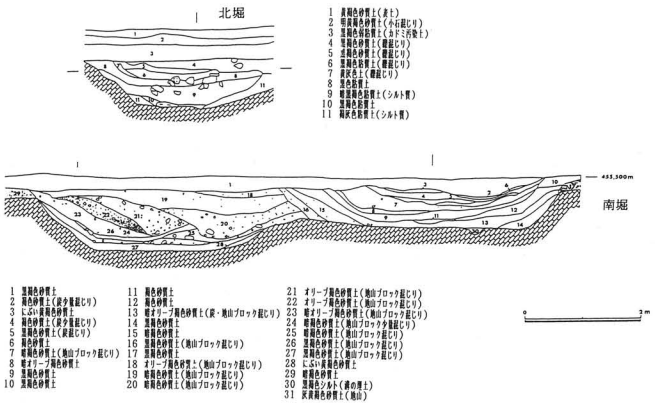
各堀の発掘調査の概要は第11図(西堀)および第14図に示している。

北堀では，断面が箱の形をした箱堀(はこぼり)を検出した。幅は約3.0m，深さは1.1mを測り，水堀ではなく空堀であった。

西堀では，箱堀と推定門の両側から断面の形が薬を刷る薬研の形をした，薬研堀を検出した。箱堀は幅が約3.5m，深さが約1.3mであり，薬研堀は幅が約4.1m，深さが約2.8mであった。これも水堀ではなく空堀であったと想定される。

南堀では箱堀が二つ平行して切り合った形で見つかった。古い箱堀は幅が約3.8m，深さが約0.6mであり，新しいものは，幅が約5.0m，深さが約0.5mであった。いずれも，水堀ではなく空堀であったと想定される。

探査結果の図との対応で示すように江馬氏館の探査結果は，発掘調査結果と良く対応している。レーダー探査は解釈が難しい地域も認められたが，解析法を変えて更に検討したい。また子持村遺構と同様に，土壌の比抵抗等の物性計測も今後の課題と考える。



第14図　江馬氏下館北堀および南堀における発掘断面図

謝辞

神岡町教育委員会には，探査の便宜を図って頂き，また発掘調査結果との比較において議論を頂いた。子持村の調査にあたっては，子持村教育委員会の石井克己氏および元早稲田大学遠藤源助博士にお世話になった。レーダー探査において田中保士氏の協力を得た。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

調査に文部省科学研究費”重点領域・遺跡探査”および，田村科学技術振興財団・研究助成金を使用した。

参考文献

Clark A.（1990）：Seeing beneath the soil - prospecting methods in archaeology -, B.T. Blatsford Ltd, London, pp176.

石井克巳（1991）：黒井峯遺跡における地下レーダー探査の役割，物理探査，44，419-425.

神岡町教育委員会（1977）：江馬氏城跡発掘調査概報，P.P.60.

楠建一郎（1993）：空洞調査の手法，地質と調査，2，2-11.

Nagata, T., Akimoto, S. and Uyeda, S.（1952）：Self-reversal of thermo remanent magnetism of ignerous rocks, J. Geomag. Geoelectr., 4, 22-38.

酒井英男，小林剛，山田剛士，田中保士（1993）：石川県珠洲市大畠遺跡における登り窯の磁気探査，『珠洲大畠窯』，富山大学考古学研究，6，真陽社，67-75.

田村晃一，長田正樹，坂山利彦，石井克己（1989）：地下レーダー探査を利用した軽石下の古墳調査例-群馬県子持村田尻遺跡，文化財学会第6回大会発表予稿集，8-9.

Electromagnetic prospectig study at the medieval castle site "Emasi-shimoyakata", Kamioka town, Gifu Japan

Hideo SAKAI1, Masaaki TAKEDA2, Kaname MAEKAWA2

1 : Faculty of Science, Toyama University

2 : Faculty of Humanities, Toyama University

ABSTRACT :

An electromagnetic prospecting study was made at the medieval castle site "Emshi-shimoyakata"in Kamioka town. central Japan. The prospecting was made before the excavation by Toyama University. The methods used were ground radar. electric-resistivity and electromagnetic (EM). The survey was mainly around the buried ditches of the castle. The analyzed result of prospecting was compared with the excavated result. The regions of low resistivity and/or those with clear ground rader correlate well with excavated ditches. Especially, at the western dithes, where the electric resistivity pattern clearly indicates both the ditch structure (low resistivity) and the firmly stepped area (high resistivity).

The same prospecting methods were applied to the Komochi archaeological site in Gumma Prefecture. The Komochi site was buried by the pumice flow of Haruna-Ikaho tephra during the 6th century. The survey by both the ground radar method and the electric resistivity method clearly detected the buried tumuluses. The rockmagnetic study reveals the magnetic self-reversal feature of the pumice, that is, the remanent magnetization of the pumice directs anti-parallel with the geomagnetic field. It becomes an interesting subject to know whether this rockmagnetic feature of the pumice effects the surveyed data or not.

The electromagnetic property of the soil covering the archaeological site is usually not investigated during the prospectig study, however the results here indicate that it is necessary information when we are interpreting the buried structure from the prospecting data.

2　江馬氏下館の薬研堀内堆積物から得られた古環境資料

大阪市立大学理学部　　辻　誠一郎・植田　弥生

1．はじめに

江馬氏下館の発掘調査で見出された土橋２両側の薬研堀は基盤と同質の砂礫によってかなりの深さまで埋積されていたが，この中には２層ばかりの有機質な堆積物からなる薄層の挟在が認められた。また，薬研堀基底部には炭化した杭が１本見出された。有機質な堆積物は薬研堀の堆積当初の周辺環境を知る上で注目され，炭化杭もただ１本ではあるが人間と自然の交渉を探る手掛かりを与えるものとして注目された。ここでは，当時の植生環境を探る若干の資料が室内での分析と組織解剖によって得られたので記載し，これからの見通しを立てておきたい。

2．薬研堀内の有機質堆積物

砂礫は館側から外側に向かって滑り落ちるように館側で厚く堆積しており，相対的に下部で細粒，上部で粗粒な砕屑物からなっている。有機質な堆積物は下部と上部を境するように挟在し，層厚は５～10cm，褐灰色砂質シルトあるいはシルト質砂からなる。多少の粗砂あるいは細礫が混じるものの砂からシルトへの粒度は連続的で，堆積物の淘汰がよいこと，および細かな葉理が認められることから，水の営力によって堆積したものと判断される。顕微鏡下ではおびただしい微細な炭片が観察される。これらは木材の組織をもたないため，草本類の茎などに由来するとみられる。

通常のアルカリ・酸溶液処理と傾斜法による花粉の抽出を行った結果，次のような花粉群が得られた。木本類・草本類・シダ類の割合は28.8，51.2，20.0％で，木本類が30％にも満たない。木本類では出現率の高い順からクリ属，トチノキ属，マツ属複維管束亜属，スギ，ハンノキ属，コナラ亜属，クワ科，コウヤマキ属，ニレ属－ケヤキ属，ツガ属，ヤナギ属，オニグルミ属，カバノキ属，クマシデ属，ブナ，エノキ属－ムクノキ属，フサザクラ属，モチノキ属，カエデ属，クサギ属，トネリコ属が同定された。木本類のみでの出現率はクリ属が28.2％，トチノキ属が15.3％，マツ属複維管束亜属が14.1％，これら３者で約58％を占める。草本類ではイネ科，アリノトウグサ属，ヨモギ属，他のキク亜科，タンポポ亜科，アブラナ科，アカザ科，ナデシコ科，アカネ属，オミナエシ属，メロン仲間が記録された。草本類の中でイネ科は54.5％，アリノトウグサ属は17.9％，ヨモギ属は9.9％，他のキク亜科とタンポポ亜科はともに4.0％を占めた。

得られた花粉群は次のような特異性をもつ。第１は，花粉・胞子総数に占める木本類の

割合が著しく低く，かつクリ属やトチノキ属といった虫媒性のものが高いのに対して風媒性の花粉が乏しいことである。マツ属複維管束亜属やスギは花粉生産量が大きいので過大に示されているとみなせば，クリ属とトチノキ属は館の近くに存在したことを示唆するだろう。第2はアリノトウグサ属やヨモギ属，他のキク亜科，タンポポ亜科のような日当たりのよい草地に卓越する草本類が高い出現率を占めることである。アリノトウグサ属がこれほど高率でみられることは稀である。この植物は人間の干渉の強いススキやシバの草地にしばしば優勢に認められ，牛馬の蹄に土とともに付着するか糞によって拡散する場合が多いと考えられている。オセアニアから東南アジアの温帯を経て日本にまで分布を広げた特異な植物で，日本へはツバメが媒介となったのではないかとも考えられている。滋賀県北部の低地縁辺でも中・近世におびただしい産出を記録したことがある。これらのことを総合してみると，薬研堀周辺には比較的日当たりのよい草地があり，人間や動物の関わりが色濃く反映された景観であったといえるだろう。現時点では多産するイネ科を属まで絞り込むことはできないがススキやシバといった草地優占種の可能性も多分にあり，人間と植物の交渉のありさまを探る上で検討の余地があるだろう。

花粉群がもつ周辺域の森林に関する情報はあまりに少ないが，風媒性の針葉樹の花粉さえ優占するほどではないので，森林植生が乏しい状態であった可能性はあるであろう。マツ属複維管束亜属が高率であることをあわせ考えると，広葉樹林が乏しくなり，マツ二次林が拡大しつつあった可能性はあるであろう。

3．薬研堀基底部の杭（図版27の2）

土橋2すぐ北側の最下層には基盤の礫層に打ち込まれたと判断される焼けて炭化した杭が1本検出された。炭化した木材はもろく壊れやすいが，中心部の保存性の高い部分を採取し，室内での組織解剖に供した。剃刀で木口面・柾目面・板目面の3方向の切片を作成し，ガムクロラールを封入剤とするプレパラートを作成した。光学顕微鏡下での組織観察の結果，以下のようにマツ属複維管束亜属に同定されたが，日本に自生するアカマツとクロマツのいずれであるかを区別する形質上の差異は見出せなかった。

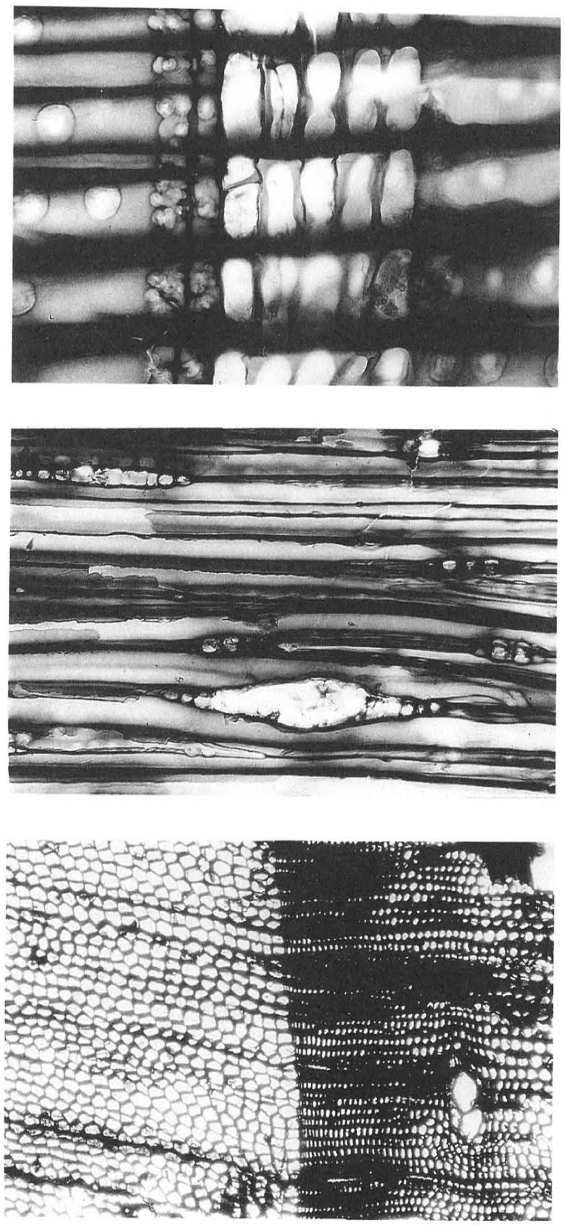
同定樹種：マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科　（第1図）

標本：YW-1709

同定の根拠：垂直および水平の樹脂道がある針葉樹材。柾目面において軸方向要素の仮道管と水平方向要素の放射柔細胞が交わる部分つまり分野の壁孔は孔口が非常に広い窓状。放射柔細胞の列の上下には丸い有縁壁孔をもつ放射仮道管があり，その内壁には鋸歯状の突起がある。

遺跡出土の杭材はスギ・ヒノキ・マツ（いわゆる二葉松類）などの針葉樹やシイ類・ク

リ・カシ類・コナラ類・ヤナギ類・ユズリハ類など広葉樹類に同定されたものが多いが，その他のさまざまな樹種にも同定されている。これは，杭材には遺跡周辺にある樹種を何でも利用したことによると考えられる。それでも中世以降になると複維管束亜属すなわちいわゆる二葉松類を建築材や土木工事の杭に利用することが多くなり，このことは遺跡周辺の植生が複維管束亜属をふつうに含むものへと変化していたことを示唆している。



1．木口面（40倍）　2．板目面（100倍）　3．柾目面（200倍）

第1図　薬研堀基底部の炭化杭の顕微鏡写真

参　考　文　献

1　『岐阜県史』通史編　中世　岐阜県

2　『岐阜県史』通史編　近世　上　岐阜県

3　『岐阜県史』史料編　古代・中世四　岐阜県

4　『神岡町史』特集編(飛騨国野史国説集成)　神岡町

5　浅野晴樹　1991「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集　国立歴史民俗博物館

6　石川考古学研究会　1973　『普正寺』

7　石川県立埋蔵文化財センター　1984　『普正寺遺跡』

8　伊野近富　1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集　京都府埋蔵文化財調査研究センター

9　上野章　1990ａ「Ⅳ．出土遺物　土師質土器の分類」『井口城跡発掘調査概要』富山県井口村教育委員会

10　上野章　1990ｂ「Ⅴ．まとめ」『井口城跡発掘調査概要』富山県井口村教育委員会

11　内堀信雄　1993「発掘出土陶磁器からみた加納城の変遷」『郷土研究 岐阜』第64号　岐阜県郷土資料研究協議会

12　宇野隆夫　1981「考察　遺物」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　京都大学埋蔵文化財センター

13　宇野隆夫　1986「越中弓庄城の土師器－中世の北陸と畿内」『大境』第10号　富山考古学会

14　宇野隆夫　1992「食器計量の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

15　宇野隆夫　1994「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』国立歴史民俗博物館

16　宇野隆夫・宮田進一ほか　1991「富山県の状況」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』北陸中世土器研究会

17　大江侖　1965　『飛騨の考古学』Ⅰ

18　岡崎譲治　1982　『仏具大事典』　鎌倉新書

19　小野正敏　1984「第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」『貿易陶磁研究』第4号　日本貿易陶磁研究会

20　小野正敏　1994「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』531号　信濃

史学会
21　小野正敏　1984「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』第4号　日本貿易陶磁研究会
22　小野正敏　1985「出土陶磁よりみた15,16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No416　東京国立博物館
23　小野正敏　1988「第3章 小谷城より出土した遺物について」『史跡小谷城跡』湖北町教育委員会
24　小野正敏　1991ａ「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』　新人物往来社
25　小野正敏　1991ｂ「中世陶磁器研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』　名著出版
26　勝沼氏館跡発掘調査団　1975　『勝沼氏館跡発掘調査概報』　山梨県教育委員会
27　勝沼氏館跡発掘調査団　1977　『勝沼氏館跡発掘調査概報』Ⅱ　勝沼町教育委員会
28　勝沼氏館跡発掘調査団　1978　『勝沼氏館跡発掘調査概報』Ⅲ　勝沼町教育委員会
29　金子拓男・前川 要編　1994　『守護所から戦国城下町へ－地方政治都市論の試み－』名著出版
30　神岡町教育委員会　1979　『江馬氏城館跡発掘調査概報』
31　神岡町教育委員会　1981　『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
32　神岡町教育委員会　1994　『1994年度江馬氏館跡発掘調査現地説明会資料』
33　岐阜県郡上郡大和村教育委員会　1984　『東氏館跡発掘調査報告書』
34　岐阜県文化財保護センター　1993　『荒城神社遺跡』
35　岐阜市教育委員会　1990　『城之内遺跡』
36　国立歴史民俗博物館　1993　『日本出土の貿易陶磁』
37　国立歴史民俗博物館　1994　『中世都市十三湊と安藤氏』
38　小島俊彰　1988「上山田･天神山式土器様式」『縄文土器大観』3中期Ⅱ
39　小島道裕・前川 要・千田嘉博　1993　『城館調査ハンドブック』　新人物往来社
40　小島幸雄　1994「春日山と越後府内の発掘成果」『守護所から戦国城下へ』　名著出版
41　齊藤慎一　1991「本拠の展開－14・15世紀の居館と「城郭」・「要害」－」『中世の城と考古学』　新人物往来社
42　坂井秀弥　1988「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第1号　新潟考古学談話会

43　酒井重洋　1990「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯』　北陸中世土器研究会
44　坂井秀弥　1991「絵画にみる城館と町」『中世の城と考古学』　新人物往来社
45　坂井秀弥　1993「3.第4回北陸中世土器研究会 城館遺跡出土の土器・陶磁器」『中世土器研究』　中世土器研究会
46　柴田龍司　1991「中世城館の画期－館と城から城館へ－」『中世の城と考古学』　新人物往来社
47　鈴木二郎　1983「打製石斧」『縄文文化の研究』7　道具と技術　雄山閣
48　鈴木道之助　1991『図録石器入門辞典　縄文』　柏書房
49　鈴木保彦·山本暉久　1988「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2中期Ⅰ
50　珠洲市立珠洲焼資料館　1989『珠洲の名陶』
51　瀬戸市史編纂委員会　1981『瀬戸市史』　陶磁器篇二
52　瀬戸市史編纂委員会　1994『瀬戸市史』　陶磁器篇四
53　千田嘉博　1989「中世城郭から近世城郭へ」『月刊文化財』第305号　文化庁文化財保護部
54　千田嘉博　1994ａ「古城探検隊」『歴史読本』第39巻　新人物往来社
55　千田嘉博　1994ｂ「守護所から戦国期拠点城郭へ」『文化財学論集』
56　高田　徹　1994「飛騨の中世城郭４題」『越中の中世城郭』第４号
57　高田徹・内堀信雄　1994「美濃における十五・十六世紀代の守護所の変遷」『守護所から戦国城下へ』　名著出版
58　中世都市研究会　1994『中世都市研究』Ⅰ
59　鶴巻康史　1991「越後における中世城館出土の土器・陶磁器をめぐる諸問題」『城館遺跡出土の土器陶磁器』　北陸中世土器研究会
60　鶴巻康史　1992「越後における中世土師器の動向」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会
61　富山県教育委員会　1990「境A遺跡石器編」『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編5
62　富山県井口村教育委員会　1990『井口城跡発掘調査概報』
63　中井　均　1987「中世城館の発生と展開」『物質文化』　物質文化研究会
64　中井　均　1991「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』　新人物往来社
65　中条町教育委員会　1993『江上館跡』Ⅰ
66　中条町教育委員会　1994『江上館跡』Ⅱ

67　長野県中野市教育委員会　1993　『高梨氏館跡発掘調査報告書』
68　楢崎彰一　1976「美濃古陶の流れ」　『美濃古陶』　光琳社
69　楢崎彰一　1980「日本出土の宋玄陶磁と日本陶磁」　『東洋陶磁』第10・11号　東洋陶磁学会
70　西田泰民「堀之内·加曾利B式土器様式」　『縄文土器大観』4後期·晩期·続縄文
71　日本中世土器研究会　1990　『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
72　丹生川村教育委員会　1983　『尾崎城跡発掘調査概報』
73　野々市町教育委員会　1994　『冨樫館跡発掘調査現地説明会資料』
74　萩原町教育委員会　1974　『飛騨桜洞·沖田遺跡発掘調査報告書』
75　橋口定志　1986「絵巻物に見る居館」　『生活と文化』2号　豊島区立郷土資料館
76　橋口定志　1987「中世居館の再検討」　『東京考古』5　東京考古学談話会
77　橋口定志　1990「中世東国の居館とその周辺－南関東におけるいくつかの発掘調査事例から－」　『日本史研究』330号　日本史研究会
78　橋口定志　1991ａ「中世居館研究の現状と問題点」　『考古学と中世史研究』　名著出版
79　橋口定志　1991ｂ「方形館はいかに成立するのか」　『争点日本の歴史』4　新人物往来社
80　橋本久和　1987「中世土器の製作技法ノート(1)」　『中近世土器の基礎研究』Ⅲ　日本中世土器研究会
81　春成秀爾他　1992「縄文時代」　『図解·日本の人類遺跡』　東京大学出版会
82　福井県教育委員会　1979　『朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ
83　藤沢良祐　1986「瀬戸大窯発掘調査報告」　『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館
84　藤沢良祐　1987「瀬戸・美濃窯における中世の施釉陶器について」　『考古学ジャーナル』280　ニューサイエンス社
85　藤沢良祐　1991ａ「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」　『研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館
86　藤沢良祐　1991ｂ「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」　『中世の城と考古学』　新人物往来社
87　古川町教育委員会　1993　『中野山越遺跡発掘調査報告書』
88　北陸中世土器研究会　1988　『北陸の中世土器・陶磁器・漆器』
89　北陸中世土器研究会　1990　『中世北陸の在地窯』
90　北陸中世土器研究会　1991　『城跡遺跡出土の土器・陶磁器』
91　北陸中世土器研究会　1992　『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

92　前川要・千田嘉博・小島道裕　1991「戦国城下町研究ノート」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集　国立歴史民俗博物館

93　前川要　1994「守護所から戦国大名城下町への展開－都市空間構造論からみた視点－」『守護所から戦国城下へ』　名著出版

94　益田市教育委員会　1992　『三宅御土居跡』Ⅱ

95　宮田進一　1984「2．土師質土器について」『弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』上市町教育委員会

96　宮田進一　1990「＜地域＞北陸」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

97　宮田進一　1992ａ「越中における中世土師器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会

98　宮田進一　1992ｂ「9．射水丘陵における中近世遺跡の食器組成について」『大境』第14号　富山考古学会

99　宮田進一　1993「Ⅰ　第5回北陸中世土器研究会の記録」『中世土器研究』第69号　中世土器研究会

100　村瀬一郎　1979　「岐阜県・概説」『日本城郭大系』9　静岡・愛知・岐阜　新人物往来社

101　山岸常人　1994「研究ノート　文化財「復原」無用論－歴史学研究の視点から－」『建築史学』第23号

102　吉岡　勲　1979　『日本城郭大系』9　静岡・愛知・岐阜　新人物往来社

103　吉岡康暢　1989ａ　『日本海域の土器・陶磁器』中世編　六興出版

104　吉岡康暢　1989ｂ「Ⅵ　15・16世紀の窯業生産」『東日本における中世窯業の基礎的研究』国立歴史民俗博物館

105　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

106　四柳嘉章　1987「研究編Ⅰ　陶磁器・漆器の組成」『西川島』　穴水町教育委員会

別　　表

別表１　南堀地区土壙・柱穴計測表　　（単位：m）

遺構 No.	直径	深さ	底径	検出レベル	埋土	備考
ＳＫ01	1.35	0.475	1.05	455.22	7.5YR2/2黒褐色 シルト中に細砂が混じる	SP08を切る
ＳＫ02	1.35	0.351	1.1	454.61	10YR2/2黒褐色 中粒砂質	
ＳＫ03	0.75		0.7		10YR2/1黒色 砂質（微妙の長石含む）	
ＳＫ04	0.95		0.75		10YR2/1黒色 砂質	
ＳＫ05	1.2		0.9		①10YR3/3暗褐色 礫混砂質（地山ブロックあり）②10YR2/3黒褐色 砂質（地山ブロックあり）③7.5YR2/2黒褐色 砂質（微妙の長石含む）	３層
ＳＫ06	1.17		1.05		①10YR2/2黒褐色 礫混砂質（地山ブロックややあり）②7.5YR2/2黒褐色 砂質（微妙の長石含む）③10YR2/3黒褐色 細砂（鉄分含む）	３層
ＳＰ01	0.39		0.16		10YR3.5/4褐色 細粒砂中に粗粒砂が混じる	
ＳＰ02	0.32		0.14		10YR3/3暗褐色 極細砂中に粗粒砂が混じる	
ＳＰ03	0.48		0.14		10YR3.5/3にぶい黄褐色 細粒砂中に中粒砂から粗砂を含む	
ＳＰ04	0.32		0.07		10YR4/4褐色 極細砂中に粗粒砂が混じる	
ＳＰ05	0.67		0.46		7.5YR3/2黒褐色 極細砂中に粗粒砂が混じる	
ＳＰ06	0.21		0.11		10YR3/3.5暗褐色 細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ07	0.18		0.14		10YR4/4褐色 細粒砂中に中粒砂が混じる	
ＳＰ08	0.36	0.075	0.21	455.26	10YR3/4暗褐色 極細砂中に中粒砂を含む	SK01に切られる
ＳＰ09	0.18		0.11		10YR2/3黒褐色 細粒砂中に中粒砂から粗砂を含む	
ＳＰ10	0.36		0.07		10YR3/3暗褐色 細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ11	0.25		0.14		10YR4.5/4にぶい黄褐色 細粒砂中に中粒砂から粗砂を含む	
ＳＰ12	0.28		0.07		2.5Y4/6オリーブ褐色 細粒砂中に粗粒砂を含む	
ＳＰ13	0.21		0.11		10YR4/3にぶい黄褐色 極細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ14	0.35		0.25		2.5Y4/3オリーブ褐色 極細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ15	0.35		0.25		10YR3/4暗褐色 極細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ16	0.3		0.1		10YR2/3黒褐色 細粒砂中に粗粒砂を含む	
ＳＰ17	0.25		0.15		10YR5/2灰黄褐色 細粒砂に粗粒砂が混じる	
ＳＰ18	0.2		0.15		10YR4/3にぶい黄褐色 細粒砂中に中粒砂から粗粒砂を含む	
ＳＰ19	0.25		0.15		10YR5/2灰黄褐色 細粒砂中に中粒砂から粗粒砂を含む	
ＳＰ20	0.4		0.3		10YR3/3暗褐色 極細粒砂中に中粒砂を含む	
ＳＰ21	0.65		0.5		10YR5/4にぶい黄褐色 細粒砂中に粗粒砂が混入	
ＳＰ22	0.15		0.05		10YR6/4にぶい黄褐色 粗粒砂	
ＳＰ23	0.2		0.15		10YR4/4褐色 極細粒砂中に中粒砂から粗粒砂が混じる	
ＳＰ24	0.2		0.15		2.5Y4/3オリーブ褐色 細粒砂中に粗粒砂を含む	
ＳＰ25	0.45	0.105	0.3	454.55	2.5Y3/1黒褐色 砂質（褐色のブロック混じり）	
ＳＰ26	0.15		0.1		2.5Y3/1黒褐色 礫混砂質（鉄分含む）	
ＳＰ27	0.45		0.4		2.5Y3/1黒褐色 砂質	
ＳＰ28	0.55	0.342	0.35	454.6	①7,5YR3/2黒褐色 砂質（鉄分やや含む）②7.5YR3/3暗褐色 礫混砂質（鉄分多く含む）③7.5YR2/2黒褐色 砂質（地山ブロックあり）	３層
ＳＰ29	0.35	0.166	0.25	454.64	10YR3/3暗褐色 砂質（褐色のブロック混じり）	
ＳＰ30	0.2	0.058	0.1	454.61	10YR2/3黒褐色 砂質	
ＳＰ31	0.4	0.187	0.25	454.86	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
ＳＰ32	0.25		0.15		7.5YR2/1黒色 砂質（褐色ブロック混じり）	
ＳＰ33	0.2		0.05		7.5YR3/2黒褐色 砂質	
ＳＰ34	0.25	0.251	0.15	454.85	2.5Y3/1黒褐色 礫混粘質（鉄分含む）	
ＳＰ35	0.3	0.313	0.2	455.1	2.5Y2/1黒色 礫混（鉄分含む）	

別表２　南堀地区溝計測表

（単位：m）

遺構 No.	幅	深さ	検出長	検出レベル	主方向	埋土	備考
SD01	0.8	0.172	7.95	455.2	N－35° －W	10YR2/2黒褐色 粗粒砂から礫砂中に中粒砂が混じる	X=-7.3 Y=0
SD01	1.15	0.262	7.95	455.25	N－35° －W	10YR2/3黒褐色 極細砂中に中粒砂が混じる＋2.5Y6/4にぶい黄色 粗粒砂から中粒砂（１割未満）	X=-7.8 Y=0
SD01	1.05	0.349	7.95	455.25	N－35° －W	7.5YR3/1黒褐色 粘質に近いシルト	X=-8.6 Y=0.2
SD02	0.2	0.075	50.22	454.63	N－65° －E	2.5Y4/3褐色 中粒砂に粗砂から礫砂が混じる	X=-7.1 Y=3.3
SD02	0.25	0.033	50.22	454.61	N－65° －E	10YR2/3黒褐色 極細粒砂に中粒砂が混じる	X=-7.1 Y=3.9
SD02	0.25	0.052	50.22	454.6	N－65° －E	10YR3/2黒褐色 細粒砂中に粗粒砂が混じる＋2.5Y7/3.5浅黄色 粗砂から礫砂（１割未満）	X=-7.1 Y=4.1
SD02	0.38	0.112	50.22	454.61	N－65° －E	10YR2/3黒褐色 細粒砂中に中粒砂が混じる	X=-7.1 Y=4.4
SD02	0.3	0.105	50.22	454.84	N－65° －E	①10YR4/3にぶい黄褐色 砂質（鉄分多く含む）②10YR3/3暗褐色 礫混砂質（地山ブロックあり）③2.5YR3/3暗オリーブ褐色 砂質（鉄分含む）	X=-7.3 Y=8.5 ３層
SD02	0.25	0.114	50.22	454.89	N－65° －E	①10YR2/2黒褐色 礫混（鉄分多く含む）②10YR2/2黒褐色 微砂混粘質（鉄分多く含む）③7.5YR2/1黒色 礫混粘質（鉄分多く含む）④7.5YR2/1黒色 微砂混粘質（鉄分多く含む）	X=-7.3 Y=9.5 ４層
SD02	0.25	0.103	50.22	454.85	N－65° －E	①10YR2/2黒褐色 礫混粘質（地山ブロックあり）②10YR2/2黒褐色 礫混粘質（鉄分多く含む）③10YR2/1黒色 粘質（鉄分含む）	X=-7.3 Y=10 ３層
SD03	0.55	0.029	1.55	455.2	N－36° －W	10YR2/3黒褐色 極細粒砂中に中粒砂が混じる	
SD04	0.35	0.093	3.35	455.13	N－74° －W	10YR3/3暗褐色 礫混砂質（石多く含む）	
SD05	2.25	0.134	3.22	455.12	N－64° －W	10YR2/3黒褐色 礫混砂質（石多く含む）	

別表３　西堀地区柱穴計測表

（単位：m）

遺構 No.	直径	深さ	底径	検出レベル	埋土	備考
SP01	0.15		0.07		10YR3/3暗褐色 砂質	
SP02	0.65		0.6		2.5Y5/1黄灰色 砂質	SP4を切る
SP03	0.25		0.12		7.5YR5/6明褐色 砂質	
SP04	0.45		0.4		7.5YR4/2灰褐色 砂質	SP2に切られる
SP05	0.2		0.15		7.5YR3/4暗褐色 砂質	
SP06	0.17		0.15		10YR3/3暗褐色 砂質	
SP07	0.17		0.12		5YR2/1黒褐色 砂質	

別表４　館内部地区土壙・柱穴計測表(1)

（単位：m）

遺構 No.	直径	深さ	底径	検出レベル	埋土	備考
SK01	0.66	0.182	0.22	455.24	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP13･SP74に切られる
SK02	1.02	0.046	1.01	455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP18･SP20を切る
SK03	1.31	0.111	0.26	455.26	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP01	0.28	0.155	0.04	455.31	2.5Y2/1黒色 砂質	SP11･SD06に切られる
SP02	0.58	0.068	0.51	455.31	2.5Y2/1黒色 砂質	SD01を切る
SP03	0.54	0.043	0.44	455.3	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP04を切る
SP04	0.52	0.053	0.46	455.31	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP03に切られる
SP05	0.36	0.022	0.26	455.25	2.5Y2/1黒色 砂質	SD01を切る
SP06	0.36	0.051	0.29	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP21を切る
SP07	0.49	0.061	0.06	455.33	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP08	0.42	0.357	0.18	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP09	0.38	0.154	0.22	455.34	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP14を切る
SP10	0.24	0.338	0.16	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP11	0.26	0.126	0.09	455.31	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP01を切る
SP12	0.26	0.21	0.14	455.22	2.5Y2/1黒色 砂質	
SP13	0.27	0.338	0.14	455.23	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SK01を切る
SP14	0.22	0.858	0.12	455.33	2.5Y2/1黒色 砂質	SP09を切る
SP15	0.36	0.328	0.14	455.24	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP16	0.22	0.108	0.14	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP73に切られる
SP17	0.5	0.069	0.24	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP18	0.22	0.008	0.18	455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SK02に切られる
SP19	0.48	0.058	0.38	455.22	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP20	0.2	0.03	0.12	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SK02に切られる
SP21	0.28	0.003	0.26	455.22	2.5Y2/1黒色 砂質	SP06に切られる
SP22	0.35	0.182	0.12	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP23	0.2	0.148	0.11	455.32	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP24	0.3	0.236	0.06	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP25	0.16	0.225	0.06	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP26	0.15	0.208	0.07	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP27	0.28	0.238	0.15	455.26	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP28						欠番
SP29	0.49	0.044	0.38	455.3	2.5Y2/1黒色 砂質	
SP30	0.3	0.121	0.24	455.32	2.5Y3/1黒色 砂質	
SP31	0.24	0.083	0.12	455.22	2.5Y3/2黒褐色 砂質	
SP32	0.58			455.25	2.5Y3/2黒褐色 砂質	礎石掘形
SP33	0.15	0.142	0.06	455.36	2.5Y3/2黒褐色 砂質	SP46に切られる
SP34	0.2	0.233	0.15	455.31	2.5Y3/2黒褐色 砂質	SP35を切る
SP35	0.51	0.084	0.24	455.31	2.5Y3/1黒褐色 砂質（鉄分含む）	SP34に切られる
SP36	0.38	0.013	0.26	455.29	2.5Y2/1黒色 砂質（鉄分含む）	SD01を切る
SP37	0.36	0.064	0.18	455.31	2.5Y2/1黒色 砂質（鉄分含む）	SD01を切る
SP38	0.46			455.35	2.5Y2/1黒色 砂質（鉄分含む）	礎石掘形
SP39	0.5	0.011	0.22	455.31	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP40	0.52			455.33	2.5Y3/1黒褐色 砂質	礎石掘形
SP41	0.32	0.139	0.17	455.29	2.5Y3/1黒褐色 粘質（鉄分含む）	
SP42	0.34			455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	礎石の掘形
SP43	0.26	0.037	0.16	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP44	0.22	0.142	0.1	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP45	0.18	0.135	0.09	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP33を切る
SP46	0.28	0.186	0.11	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP47	0.14	0.105	0.08	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP48	0.62	0.102	0.18	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP49	0.3	0.042	0.2	455.31	2.5Y3/2黒褐色 砂質	
SP50	0.29	0.059	0.15	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP51	0.38	0.078	0.26	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP52	0.32	0.088	0.2	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP53	0.7	0.09	0.6	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	礎石掘形
SP54	0.32	0.122	0.04	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP55を切る

別表５　館内部地区土壙・柱穴計測表(2)

（単位：m）

遺構 No.	直径	深さ	底径	検出レベル	埋土	備考
SP55	0.38	0.043	0.3	455.24	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP54を切る
SP56	0.31	0.174	0.24	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP57	0.33	0.049	0.13	455.33	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP58	0.26	0.022	0.18	455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP59	0.28	0.023	0.1	455.27	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP60	0.32	0.077	0.04	455.25	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP61	0.53	0.176	0.27	455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP62	0.33	0.17	0.06	455.36	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP63	0.5	0.134	0.18	455.38	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP64	0.4	0.247	0.12	455.34	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP65	0.49	0.123	0.16	455.33	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP66	0.34	0.049	0.14	455.32	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP67	0.3	0.187	0.14	455.32	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP68を切る
SP68	0.58	0.132	0.08	455.35	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP67に切られる
SP69	0.34	0.094	0.18	455.34	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP70	0.27	0.151	0.1	455.29	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP71に切られる
SP71	0.34	0.094	0.17	455.28	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP70を切る
SP72	0.24	0.08	0.13	455.35	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SP73	0.16	0.263	0.08	455.25	2.5Y2/1黒色 砂質	SP16を切る
SP74	0.32	0.368	0.08	455.23	2.5Y3/2黒褐色 砂質	SK01を切る
SP75	0.39	0.121	0.3	455.27	2.5Y3/2黒褐色 砂質	
SP76	0.12	0.122	0.02	455.18	2.5Y3/2黒褐色 砂質	

別表６　館内部地区溝計測表

遺構 No.	幅	深さ	検出長	検出レベル	主方向	埋土	備考
SD01	0.34	0.083	9.62	455.3	N－26°－W	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SP02・SP05・SP36・SP37・SP63に切られる
SD02	0.22	0.049	1.24	455.32	N－10°－W	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SD03を切る
SD03	0.29	0.062	1.99	455.33	N－12°－W	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SD04・SD05を切る SD02に切られる
SD04	0.46	0.039	0.78	455.36	N－68°－E	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SD03に切られる
SD05	0.38	0.067	0.9	455.33	N－65°－E	2.5Y3/1黒褐色 砂質	SD03に切られる
SD06	0.45	0.087	1.66	455.28	N－63°－E	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SD07	0.86	0.044	2.78	455.22	N－75°－E	2.5Y3/1黒褐色 砂質	
SD08	0.56	0.034	1.96	455.28	N－65°－E	2.5Y3/1黒褐色 砂質	

別表７　北堀地区出土遺物計測表

（法量単位：cm）

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
49 -1	8.5	3.5	北堀	埋土	453.379	土師器	皿	8.2			0.29	1	T-4類か	灰白色
-2	8.5	2.0	北堀	埋土	453.738	土師器	皿	10.1			0.15	1	T-4類	黄橙色
-3	8.5	2.0	北堀	埋土	453.810	土師器	皿	11.0			0.16	1	T-6類	黄橙色
-4	9.0	3.5	北堀	埋土	453.626	土師器	皿	12.0			0.02	1	T-6類かT-7類	淡黄色
-5	9.0	3.0	北堀	埋土	454.142	土師器	皿	13.0			0.05	1	T-2類	淡黄色
-6	9.0	7.0	北堀	埋土	455.523	土師器	皿	15.5			0.08	1	T-6類かT-7類	淡黄色
-7	8.5	2.0	北堀	埋土	453.700	土師器	皿			6.0	0.00	1	R-5類	淡黄色 篦削り痕
-8	8.5	2.5	北堀	埋土	453.406	土師器	皿	9.5	2.3		0.58	1	T-6類	灰白色 タール付着
-9	8.5	1.0	北堀	埋土	453.989	土師器	皿	12.0			0.05	1	T-6類かT-7類	黄褐色 鉄釘付着
-10	9.0	2.5	北堀	埋土	453.191	土師器	皿	12.8			0.20	1	T-6類	黄白色
-11	9.0	2.5	北堀	埋土	453.692	青磁	碗				0.00	1		龍泉碗C2類かD類 見込みに印花文
-12	8.5	1.5	北堀	埋土	453.718	青磁	碗	15.0			0.05	1		龍泉碗C2類 口縁部内外面に雷文 体部内面に篦描文様
-13	8.5	3.5	北堀	埋土	453.369	青磁	碗	16.0			0.08	1		龍泉碗C2類 口縁部外面に雷文
-14	8.5	3.0	北堀	埋土	453.406	瀬戸美濃	直縁大皿	28.0			0.02	1		古瀬戸後Ⅱ期 灰釉
-15	9.0	3.0	北堀	埋土	453.391	瀬戸美濃	折縁中皿	14.5			0.05	1		古瀬戸後Ⅳ期(新) 灰釉
-16	8.5	5.5	北堀	埋土		瀬戸美濃	卸皿	14.0			0.05	1		古瀬戸後Ⅱ期～後Ⅲ期 灰釉 二次被熱
-17	8.5	2.0	北堀	埋土	453.340	瀬戸美濃	折縁深皿	38.0			0.02	1		古瀬戸後Ⅳ期(古) 灰釉
-18	8.5	4.0	北堀	埋土		瀬戸美濃	すり鉢型小鉢	20.0			0.08	1		古瀬戸後Ⅳ期(古) 錆釉 二次被熱
-19	8.5	3.5	北堀	埋土	453.532	瀬戸美濃	平碗	17.8			0.00	1		古瀬戸後Ⅳ期 灰釉 二次被熱
-20	8.5	3.5	北堀	埋土	453.568	瀬戸美濃	直縁大皿	32.0			0.13	1		古瀬戸後Ⅳ期(古) 鉄釉
-21	8.5	2.0	北堀	埋土	453.558	瀬戸美濃	端反皿	9.0	2.0	4.5	0.25	1		大窯第1小期 灰釉
-22	9.0	7.0	北堀	埋土	454.537	瀬戸美濃	端反皿			6.2	0.00	1		大窯第2小期 灰釉
50 -23	9.0	2.0	北堀	埋土	453.225	珠洲	すり鉢	28.0			0.05	1		珠洲Ⅳ期 卸目有
-24	9.0	6.5	北堀	埋土	454.905	珠洲	研磨壺	9.0			0.33	2		珠洲Ⅳ期 「五」刻印
-25	9.0	3.5	北堀	埋土	453.539	石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長6.5cm 最大幅7cm 厚2.1cm
-26	9.0	3.0	北堀	埋土	453.435	石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長7.7cm 最大幅7.5cm 厚2.8cm

出土遺物計測表の作成に関して、年代観については以下の分類及び編年にもとづいた。

土師器皿：第20図　土師器皿分類図

貿易陶磁：国立歴史民俗博物館集成の分類（国立歴史民俗博物館1993）

瀬戸美濃：藤澤編年（藤澤1986，1991a）

珠　　洲：吉岡編年

瓦　　器：第26図　瓦器分類図

別表８　南堀地区出土遺物計測表(1)

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
50-27	-6.0	6.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec20		土師器	皿	7.5			0.07	1	T-2類	灰白色
-28	-6.0	6.5	南堀(旧堀)	SFトレンチ		土師器	皿	7.2			0.03	1	T-5類	灰白色
-29	-6.5	4.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec20		土師器	皿	8.0			0.15	1	R類か	淡黄色
-30	-6.5	2.0	南堀(旧堀)	埋土 C-C'sec4		土師器	皿	12.0			0.03	1	T-6類かT-7類	明黄褐色
-31	-6.0	4.0	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec22		土師器	皿	11.0			0.07	1	T-1類かT-2類	淡黄色
-32	-6.0	8.0	南堀(旧堀)	SIトレンチ		土師器	皿	11.5			0.02	1	T類	明黄褐色　煤付着
-33	-6.0	3.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec24		土師器	皿	10.0			0.01	1	不明	淡黄色
-34	-6.0	4.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec24		土師器	皿			5.5	0.00	1	R類	浅黄色 回転糸切痕
-35	-6.5	4.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec20		土師器	皿	9.0			0.12	1	T-5類か	外面灰白色 内面淡黄色 煤付着
-36	-6.0	7.0	南堀(旧堀)	埋土	458.932	土師器	皿	10.2			0.02	1	T-2類	淡黄色
-37	-6.0	6.5	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	9.7			0.02	1	T-2類か	明褐色
-38	-6.0	5.5	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	13.6			0.02	1	T-1類	灰白色
-39	-5.5	6.5	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	15.3			0.01	1	T-2類	灰白色
-40	-6.0	7.0	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	15.8			0.02	1	T-1類か	淡黄色
-41	-6.5	3.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec25		土師器	皿	9.8			0.09	1	T-2類か	黒褐色
-42	-5.5	7.5	南堀(旧堀)	埋土	454.233	土師器	皿	11.2			0.03	1	T-2類か	明黄褐色 タール付着
-43	-6.0	6.5	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	12.7			0.05	1	T類	淡黄色
-44	-5.5	7.5	南堀(旧堀)	埋土		土師器	皿	12.4			0.05	1	T類	灰白色
-45	-6.0	2.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec26		須恵器	杯			6.0	0.00	1		回転糸切痕 二次被熱
-46	-6.5	0.5	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec25		青磁	碗			6.0	0.00	1		龍泉碗C類かD類 見込みに文様
-47	-6.0	8.0	南堀(旧堀)	SIトレンチ		瀬戸美濃	折縁深皿			11.0	0.00	1		古瀬戸 灰釉
-48	-6.0	7.0	南堀(旧堀)	埋土 D-D'sec24	454.853	瓦器	火鉢				0.00	1		菊花文 タール付着
-49	-6.0	6.5	南堀(旧堀)	埋土		瓦器	火鉢	29.0			0.02	1		Ⅰ類 菊花文
51-50	-6.5	11.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec14		土師器	皿	9.3			0.06	1	T-4類	灰白色 タール付着
-51	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	11.5			0.02	1	T-6類	淡黄色 タール付着
-52	-6.5	1.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.867	土師器	皿	12.0			0.06	1	T-6類かT-7類	橙色
-53	-7.0	9.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	11.8			0.03	1	T-4類	黄褐色
-54	-6.5	3.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.0			0.06	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色
-55	-7.0	5.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.720	土師器	皿	11.8			0.05	1	T-6類かT-7類	灰白色 タール付着
-56	-6.5	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	13.2			0.05	1	T-2類	灰黄色
-57	-7.0	5.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.743	土師器	皿	12.9			0.06	1	T-6類かT-7類	灰白色 煤・タール付着
-58	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.846	土師器	皿	14.0			0.16	1	T-6類かT-7類	灰白色 タール付着
-59	-6.5	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.679	土師器	皿	9.0	1.6		0.85	1	T-6類	橙色 タール付着
-60	-6.5	11.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	7.7			0.04	1	T-4類か	灰黄色
-61	-9.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.775	土師器	皿	9.1			0.06	1	T-6類	灰白色
-62	-7.0	7.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	452.541	土師器	皿	9.8			0.05	1	T-4類	赤褐色 タール付着
-63	-7.0	7.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	10.0			0.02	1	T-6類かT-7類	橙色
-64	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.729	土師器	皿	11.2			0.05	1	T-6類かT-7類	淡黄色
-65	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.0			0.20	1	T-7類	淡褐色
-66	-6.5	7.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	11.9			0.03	1	T-6類かT-7類	灰黄色
-67	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	14.3			0.01	1	T-3類	浅黄橙色

別表９　南堀地区出土遺物計測表(2)

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
51-68	-6.5	2.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	14.0			0.07	1	T-6類	灰黄色
-69	-6.5	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.781	土師器	皿	14.4			0.01	1	T-8類	浅黄橙色
-70	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	14.3			0.03	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色
-71	-6.5	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.676	土師器	皿	14.3			0.02	1	T類	灰白色
-72	-6.5	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.711	土師器	皿	8.0	1.9		0.75	1	T-4類	灰黄色 タール付着
-73	-7.0	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	8.0			0.16	1	T-6類かT-7類	橙色 タール付着
-74	-6.5	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	8.0			0.24	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色
-75	-7.0	9.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	10.1	2.0		0.28	1	T-7類	灰褐色 タール付着
-76	-6.5	1.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	11.0			0.01	1	T-2類	灰白色
-77	-7.0	3.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	10.5			0.22	1	T-6類かT-7類	浅黄色 タール付着
-78	-6.5	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.753	土師器	皿	10.5			0.20	1	T-7類	橙色 タール付着
-79	-6.5	3.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.0	2.3		0.13	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色
-80	-6.5	0.5	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec10		土師器	皿	11.7			0.10	1	T-6類	浅黄橙色
-81	-7.0	7.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.7			0.02	1	T-6類かT-7類	灰黄色
-82	-6.5	11.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	11.8			0.03	1	T-6類かT-7類	白色 タール付着
-83	-7.0	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.0			0.16	1	T-6類かT-7類	橙色 タール付着
-84	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.846	土師器	皿	15.2			0.01	1	R-4類	黄白色
52-85	-6.5	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.203	土師器	皿	15.0			0.05	1	T-3類	淡黄色
-86	-7.0	5.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.769	土師器	皿	15.5			0.10	1	T-6類かT-7類	黄橙色 煤・タール付着
-87	-7.0	5.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.796	土師器	皿	17.9			0.12	1	R-4類	淡黄色 煤・タール付着
-88	-6.5	4.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	12.0			0.07	1	T-6類かT-7類	明褐色
-89	-6.5	11.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿			6.0	0.00	1	R-5類か	灰白色
-90	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.842	土師器	皿	15.1			0.03	1	T-6類かT-7類	淡黄色 タール付着
-91	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		土師器	皿	15.0			0.08	1	R-4類	黄橙色 煤付着
-92	-7.0	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		青磁	碗	14.0			0.04	1		龍泉碗E類
-93	-7.0	11.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		青磁	碗	11.0			0.06	1		龍泉碗C2類 口縁部外面に雷文 二次被熱
-94	-6.5	1.5	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec10		青磁	碗	13.0			0.05	1		龍泉碗D類
-95	-6.5	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		青磁	碗			4.4	0.00	1		龍泉碗C類かD類 二次被熱
-96	-7.0	2.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		青花	端反皿	12.0			0.03	1		染付皿B1群 口縁部内外面に界線 体部外面に牡丹唐草文
-97	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	天目茶碗	13.0			0.10	1		大窯 鉄釉
-98	-7.0	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	天目茶碗	12.0			0.19	1		古瀬戸後Ⅳ期(新) 鉄釉
-99	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.846	瀬戸美濃	天目茶碗	12.0	5.8	4.5	0.12	2		古瀬戸後Ⅳ期(新) 鉄釉
-100	-6.5	3.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	天目茶碗	12.1			0.12	1		大窯第1小期 鉄釉
-101	-7.0	6.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.697	瀬戸美濃	天目茶碗			4.2	0.00	1		古瀬戸後Ⅲ期 鉄釉
-102	-6.5	7.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	卸皿	16.0			0.03	1		古瀬戸後Ⅱ期 灰釉
-103	-7.0	7.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	重圏皿			3.0	0.00	1		大窯第1小期
-104	-6.5	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	小壺			5.0	0.00	1		古瀬戸後Ⅳ期(古) 灰釉 回転糸切痕
-105	-7.0	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.696	瀬戸美濃	すり鉢			10.0	0.00	3		大窯第1小期 錆釉 回転糸切痕 卸目有
-106	-6.5	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瀬戸美濃	直縁大皿	32.0	6.2	18.6	0.04	1		古瀬戸後Ⅲ期 灰釉
-107	-7.0	4.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.621	瀬戸美濃	すり鉢	38.0			0.05	1		大窯第2小期 錆釉 卸目有

別表10　南堀地区出土遺物計測表(3)

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
53-108	-7.0	3.5	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瓦器	火鉢	27.0			0.03	1		Ⅰ類 煤付着
-109	-6.5	3.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		瓦器	風炉			27.0	0.00	1		獣足有
-110	-7.0	5.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.790	珠洲	すり鉢	26.0			0.05	1		珠洲Ⅳ期
-111	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		珠洲	壺	16.8			0.78	1		珠洲Ⅴ期
-112	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		珠洲	壺	23.0			0.12	1		珠洲Ⅴ期
-113	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		珠洲	甕	52.0			0.02	1		珠洲Ⅴ期
-114	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13		石製品	石臼				0.00	1		花崗岩 直径30cm
54-115	-6.5	6.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.789	石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長10.3cm 最大幅5.6cm 厚1.7cm
-116	-6.5	7.0	南堀(新堀)	埋土 D-D'sec13	454.327	石器	打製石斧				0.00	1		泥岩 長13cm 最大幅6.2cm 厚2.8cm
-117	-6.5	2.0	南堀(新堀)	埋土 SAﾄﾚﾝﾁ C-C'sec2		瀬戸美濃	天目茶碗			4.5	0.00	1		大窯第1小期 鉄釉 二次焼成
-118	-6.5	0.5	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec6		土師器	皿	10.0			0.08	1	T-6類かT-7類	黄橙色
-119	-6.5	1.0	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec6		土師器	皿	12.0			0.06	1	T-6類かT-7類	浅黄色
-120	-6.5	1.5	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec6		青磁	碗	13.4			0.05	1		龍泉碗E類 二次被熱
-121	-6.5	0.5	南堀(新堀)	埋土 B-B'sec6		瀬戸美濃	すり鉢	30.0			0.05	1		古瀬戸後Ⅳ期(新) 錆釉
-122	-6.5	7.5	南堀(新堀)	埋土 SJ1ﾄﾚﾝﾁ 層位不明		瓦器	火鉢				0.00	1		径3cmの菊花文
-123	-6.5	7.5	南堀(新堀)	埋土 SJ2ﾄﾚﾝﾁ 層位不明		土師器	皿	12.4			0.06	1	T-1類	明黄褐色
-124	-7.0	8.5	南堀(新堀)	埋土		白磁	皿			3.6	0.00	1		白磁Ⅲ17類
-125	-7.0	8.5	南堀(新堀)	埋土		青磁	碗			5.2	0.00	1		龍泉碗C2類
-126	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土		白磁	皿			6.0	0.00	1		白磁Ⅲ1類
-127	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土		白磁	口禿皿	12.0			0.03	1		白磁Ⅲ1類
-128	-7.0	8.0	南堀(新堀)	埋土		土師器	皿	17.9			0.02	1	R-4類	黄褐色 タール付着
-129	-7.0	7.5	南堀(新堀)	埋土		土師器	皿	14.8			0.02	1	T-7類	黄褐色
-130			南堀(新堀)	埋土		石器	打製石斧				0.00	1		砂岩 長12cm 最大幅5.3cm 厚1.4cm
-131	-6.0	5.5	SK02	埋土	454.360	土師器	皿	13.8			0.01	1	T-6類かT-7類	明黄褐色
-132			SK05	埋土	455.022	瀬戸美濃	志野丸皿			6.6	0.00	1		大窯第9小期 長珪石釉
-133	-7.0	11.5	SD02	埋土	454.842	瀬戸美濃	折縁深皿	38.0			0.09	1		古瀬戸後Ⅳ期(新) 灰釉
55-134	-5.5	6.0		表土		石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長16cm 最大幅6.6cm 厚3cm
-135	-7.0	11.5		表土		土師器	皿	9.1			0.06	1	T-6類かT-7類	淡褐色 タール付着
-136	-6.5	0.5		表土		土師器	皿	9.5	2.6		0.07	1	T-7類	灰白色 煤付着
-137	-8.0	0.5		表土		土師器	皿	8.2			0.08	1	T-1類	黄白色
-138	-6.5	7.5		表土		土師器	皿	10.0			0.05	1	T-6類かT-7類	橙黄色 タール付着
-139	-5.0	8.0		表土		土師器	皿	12.2			0.02	1	T-6類かT-7類	灰黄色 タール付着
-140	-6.5	11.5		表土		土師器	皿	15.2			0.02	1	R-5類	黄白色
-141	-6.5	11.5		表土		土師器	皿	15.1			0.03	1	R-5類	黄白色
-142	-6.5	0.5		表土		白磁	碗			5.5	0.00	1		白磁碗4類
-143	-7.0	11.5		表土		珠洲	すり鉢	30.0			0.14	1		珠洲Ⅴ期 卸目有
-144	-6.5	0.0		表土	454.931	珠洲	甕				0.00	1		珠洲Ⅳ期 叩き目
-145	-5.5	8.0		表土	455.338	瓦器	火鉢	28.0			0.12	1		Ⅲ類 菊花文
-146				表採		石製品	石臼				0.00	1		花崗岩 直径28cm

別表11　西堀地区出土遺物計測表

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
56-147	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	砂混灰褐色弱粘質土	453.073	土師器	皿	9.0			0.08	1	T-2類	内面暗灰黄色 外面灰白色 煤付着
-148	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	砂混灰褐色弱粘質土	453.206	土師器	皿	12.0			0.05	1	T-6類かT-7類	暗灰黄色 煤付着
-149	5.5	-1.5	西堀(箱堀)	砂混灰褐色弱粘質土	453.159	土師器	皿	14.0			0.07	1	T-6類かT-7類	内面浅黄橙色 外面灰黄褐色 煤付着
-150	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	褐色土混灰色砂層上面	452.696	瀬戸美濃	平碗	15.0			0.05	1		古瀬戸後Ⅱ期～後Ⅲ期 灰釉
-151	5.0	-1.5	西堀(箱堀)	埋土		瀬戸美濃	折縁深皿			16.0	0.00	1		古瀬戸後Ⅳ期 露胎 脚台有
-152	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	褐色砂質土	452.941	瓦器	火鉢				0.00	1		Ⅱ類 菊花文･花状文
-153	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	砂利混褐色砂質土	453.021	鉄製品	釘				0.00	1		長4.6cm 頭下の幅0.4cm
-154	5.5	-1.0	西堀(箱堀)	砂混灰褐色弱粘質土	452.846	石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長18.3cm 最大幅7.1cm 厚2.6cm
-155	4.0	-1.5	西堀(薬研堀)	埋土		土師器	皿	13.0			0.04	1	T-6類かT-7類	橙色
-156	4.0	-1.5	西堀(薬研堀)	埋土	453.354	土師器	皿	12.0			0.03	1	T-6類かT-7類	橙色
-157	3.5	-1.0	西堀(薬研堀)	砂利混灰色砂質土	452.252	珠洲	甕	46.0			0.04	1		珠洲Ⅴ期
-158	5.5	0.0		ﾜｲﾔﾄﾚﾝﾁ		瀬戸美濃	揺絵皿	14.0			0.10	2		灰釉 揺絵皿Ⅰ類
-159	5.5	0.5		ﾜｲﾔﾄﾚﾝﾁ		珠洲	すり鉢	30.0			0.01	1		珠洲Ⅳ期 自然釉
-160	4.5	-1.5	SP02	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長6.3cm 頭下の幅0.5cm
-161	4.5	-0.5		表土		瀬戸美濃	折縁深皿	28.4			0.04	1		古瀬戸後Ⅳ期(古) 灰釉
-162	1.0	-0.5		表土		石器	剝片				0.00	1		チャート 長8.5cm 最大幅5.5cm 厚1.9cm
-163	4.0	-0.5		表土		銅製品	飯食具	8.4	8.7	6.2	1.00	1		

別表12　館内部地区出土遺物計測表(1)

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
57-164	3.0	10.0	SD01	埋土	455.526	土師器	皿	8.0			0.18	1	T類	灰褐色 煤・タール付着
-165	3.0	10.0	SD01	埋土	455.389	土師器	皿	10.5			0.10	1	T類	乳白色
-166	3.0	10.0	SD01	埋土	455.378	土師器	皿	11.0	2.6		0.15	1	T-7類	黄橙色 煤付着
-167	3.0	10.0	SD01	埋土	455.389	土師器	皿	12.2			0.20	1	T-6類	浅黄橙色 鉄分付着
-168	3.0	10.0	SD01	埋土	455.345	土師器	皿	16.5			0.10	1	T-8類	浅黄橙色 煤付着
-169	2.5	10.0	SD01	埋土	455.336	土師器	皿	12.0	2.7		1.00	1	T-7類	浅黄橙色 煤・タール付着
-170	3.0	10.0	SD01	埋土	455.367	土師器	皿	17.8			0.06	1	T-8類	黄橙色 タール付着
-171	2.5	10.0	SD01	埋土	455.301	土師器	皿			6.0	0.00	1	R-4類	灰黄橙色
-172	2.5	10.0	SD01	埋土	455.320	土師器	皿	12.2			0.10	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色 タール付着
-173	3.0	10.0	SD01	埋土	455.379	土師器	皿	12.5	2.9		0.30	1	T-7類	橙色 煤・タール付着
-174	3.0	10.0	SD01	埋土	455.398	土師器	皿	13.2			0.05	1	T-8類	黄橙色 タール付着
-175	2.5	10.0	SD01	埋土	455.227	鉄製品	釘				0.00	1		長3.6cm 頭下の幅0.5cm
-176	2.0	10.0	SD01	埋土	455.304	瓦器	火鉢	42.0			0.04	1		Ⅲ類 菊花文
-177	1.5	10.0	SD02	埋土	455.285	土師器	皿	14.0			0.02	1	T-6類かT-7類	黄橙色
-178	1.5	10.5	SD06	埋土		土師器	皿	12.0			0.06	1	T-2類	浅黄橙色
-179	1.0	10.5	SD06	埋土	455.293	土師器	皿	17.2			0.05	1	T-2類か	黄橙色
-180	1.0	11.0	SP01	埋土		土師器	皿	9.8			0.08	1	T-5類か	灰白色
-181	2.0	10.0	SP02	埋土		土師器	皿	13.0			0.08	1	T-6類	淡黄色
-182	2.5	10.0	SP07	埋土		土師器	皿	10.0	2.0		0.19	1	T-6類	黄橙色 タール付着
-183	2.5	10.0	SP07	埋土	455.344	土師器	皿	12.0			0.06	1	R-5類	乳白色
-184	2.5	10.0	SP07	埋土	455.345	土師器	皿	12.0			0.15	1	T-6類	灰黄色
-185	2.5	10.0	SP07	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長4.4cm 頭下の幅0.5cm
-186	1.5	10.5	SP08	埋土		土師器	皿	11.2			0.10	1	T類	乳白色
-187	1.5	10.5	SP08	埋土		土師器	皿	16.2			0.13	1	T-6類かT-7類	黄橙色
-188	3.0	10.0	SP64	埋土		瓦器	火鉢	44.4			0.05	1		
58-189	1.0	11.0	SP09	埋土		土師器	皿	7.8	1.6		0.20	1	T-7類	灰白色
-190	1.0	11.0	SP09	埋土		土師器	皿	12.0			0.29	1	T-7類	黄橙色
-191	1.5	11.0	SP10	埋土		土師器	皿	7.0	1.5		0.21	1	T-6類かT-7類	灰褐色
-192	1.0	10.0	SP15	埋土		土師器	皿	10.0			0.10	1	T-2類	浅黄橙色 煤付着
-193	1.5	10.5	SP24	埋土		瀬戸美濃	天目茶碗	13.0			0.15	1		古瀬戸後Ⅲ期 鉄釉
-194	2.0	10.0	SP40	埋土	455.324	土師器	皿	10.4	1.6		0.20	1	T-4類	浅黄色 煤付着
-195	2.0	10.0	SP40	埋土		土師器	皿	12.0			0.06	1	T-4類	淡黄橙色
-196	2.0	10.5	SP43	埋土		土師器	皿	8.0			0.16	1	T-6類	浅黄色
-197	2.0	10.5	SP53	埋土		土師器	皿	11.6			0.10	1	T-7類	灰黄色 タール付着
-198	3.0	10.5	SP70	埋土		土師器	皿	10.0			0.06	1	T-3類	灰白色
-199	1.5	10.5	SP75	埋土		土師器	皿	9.5			0.14	1	T-6類かT-7類	灰黄色 煤付着
-200	1.5	10.5	SP75	埋土		土師器	皿	14.0			0.05	1	R-5類か	浅黄褐色
-201	1.5	10.5	SP75	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長3.4cm 頭下の幅0.6cm
-202	1.0	10.5	SK01	埋土		土師器	皿	14.5			0.05	1	T-8類	灰白色
-203	1.5	10.0	SK02	埋土		土師器	皿	7.3	1.5	4.7	0.21	1	R-1類	淡黄色 回転糸切痕
-204	1.5	10.0	SK02	埋土		土師器	皿	8.9			0.15	1	T-6類かT-7類	灰黄褐色 タール付着

別表13　館内部地区出土遺物計測表(2)

(法量単位：cm)

番号	X	Y	遺構	層位	レベル	種類	器種	口径	器高	底径	固体数	片	土師器分類	備考
58-205	1.5	10.0	SK02	埋土		土師器	皿	10.9	1.9		0.13	1	T-6類	灰黄色 タール付着
-206	1.5	10.0	SK02	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長2.8cm 頭下の幅0.5cm
-207	1.5	10.0	SK02	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長3cm 頭下の幅0.5cm
-208	1.5	10.0	SK02	埋土		鉄製品	釘				0.00	1		長2.8cm 頭下の幅0.6cm
-209	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	7.5			0.30	1	T-7類	浅黄褐色
-210	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	8.5			0.45	1	T-7類	灰黄色 煤付着
-211	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	8.9			0.13	1	R-1類	淡黄色
-212	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	10.5			0.20	1	T-4類	淡黄色 煤付着
-213	1.5	10.5	SK03	埋土	455.289	土師器	皿	10.0			0.07	1	R-4類	灰白色
-214	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	10.8			0.14	1	T-4類	灰黄色 煤付着
-215	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	10.8			0.18	1	T-4類	淡黄色 煤付着
-216	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	11.9			0.12	1	T-4類	淡黄色
-217	1.5	10.5	SK03	埋土	455.281	土師器	皿	13.0			0.05	1	T-3類	灰白色
-218	1.5	10.5	SK03	埋土	455.267	土師器	皿	13.0			0.05	1	T-8類	浅黄褐色
-219	1.5	10.5	SK03	埋土		土師器	皿	15.0			0.10	1	R-5類	黄褐色
-220	2.5	10.5		暗黒褐色砂質土	455.326	土師器	皿	11.0			0.12	1	T-6類	黄褐色 煤付着
-221	2.5	10.0		暗黒褐色砂質土	455.337	土師器	皿	11.0			0.08	1	T-4類	灰白色 煤付着
-222	3.0	10.0		暗黒褐色砂質土	455.362	土師器	皿	12.0			0.23	1	T-4類	浅黄橙色 タール付着
-223	3.0	10.5		暗黒褐色砂質土	455.326	土師器	皿	15.0			0.02	1	R-5類	淡黄褐色
-224	3.0	10.0		暗黒褐色砂質土	455.409	青磁	碗	17.2	7.2	5.7	0.16	1		龍泉碗D類
-225	3.0	10.0		暗黒褐色砂質土	455.371	瓦器	火鉢				0.00	1		Ⅱ類 菊花文
59-226	2.5	10.0		暗黒褐色砂質土	455.303	青磁	盤	19.5			0.05	1		
-227	2.5	10.0		暗黒褐色砂質土	455.312	瀬戸美濃	直縁大皿			25.0	0.00	1		古瀬戸後Ⅱ期～後Ⅲ期 灰釉
-228	2.5	10.0		暗黒褐色砂質土	455.239	珠洲	すり鉢	25.0			0.09	1		珠洲Ⅲ期 卸目有
-229	1.5	11.0		暗褐色砂質土	455.370	土師器	皿	10.0			0.18	1	T-6類	淡黄色
-230	1.5	10.0		暗褐色砂質土	455.353	土師器	皿	10.0			0.12	1	T-6類かT-7類	黄橙色
-231	1.0	11.0		暗褐色砂質土	455.284	土師器	皿	10.0			0.12	1	T-6類	灰黄色
-232				表土		土師器	皿	8.8			0.04	1	T-6類かT-7類	灰白色
-233				表土		土師器	皿	11.0	2.4		0.12	1	T-7類	淡黄色
-234	2.5	10.5		表土		土師器	皿	10.8			0.05	1	T-6類かT-7類	橙色 タール付着
-235	1.5	10.5		表土		土師器	皿	11.4			0.10	1	T-6類か	橙色 タール付着
-236				表土		土師器	皿	12.0			0.15	1	T-6類	浅黄色
-237				表土		土師器	皿	12.0			0.12	1	T-6類かT-7類	浅黄橙色 タール付着
-238				表土		土師器	皿	12.0			0.11	1	T-6類	浅黄色
-239				表土		土師器	皿	12.0			0.12	1	R-5類	浅黄橙色
-240				表土		瀬戸美濃	天目茶碗	12.0			0.12	1		古瀬戸後Ⅳ期(新) 鉄釉
-241				表土		珠洲	すり鉢	22.0			0.07	1		珠洲Ⅳ期
-242				表土		縄紋土器	深鉢				0.00	1		
-243				表土		縄紋土器	深鉢				0.00	1		
-244				表土		石器	打製石斧				0.00	1		安山岩 長13.4cm 最大幅6.5cm 厚2.8cm
-245	4.0	6.5		表土		伊万里	碗	9.0			0.06	1		

EMA CASTLE SITE

A REPORT OF THE EXCAVATION OF
FIFTEENTH CENTURY SQUERE CASTLE SITE
IN NORTHERN GIFU, JAPAN

BY

KANAME MAEKAWA
MICHIHIRO KOJIMA
YOSHIHIRO SENDA
KAKUYA NAKATA
AIKO ÔHIRA

CONTENTS

CHAPTER I Progress of researtch work
II Geographical and historical environment
III Excavation of Ema Castle site
IV Discussion and Conclusion
V Natural scientific study

THE BOARD OF EDUCATION OF KAMIOKA TOWN
FACULTY OF HUMANITIES, TOYAMA UNIVERSITY
MARCH, 1995

English Summary

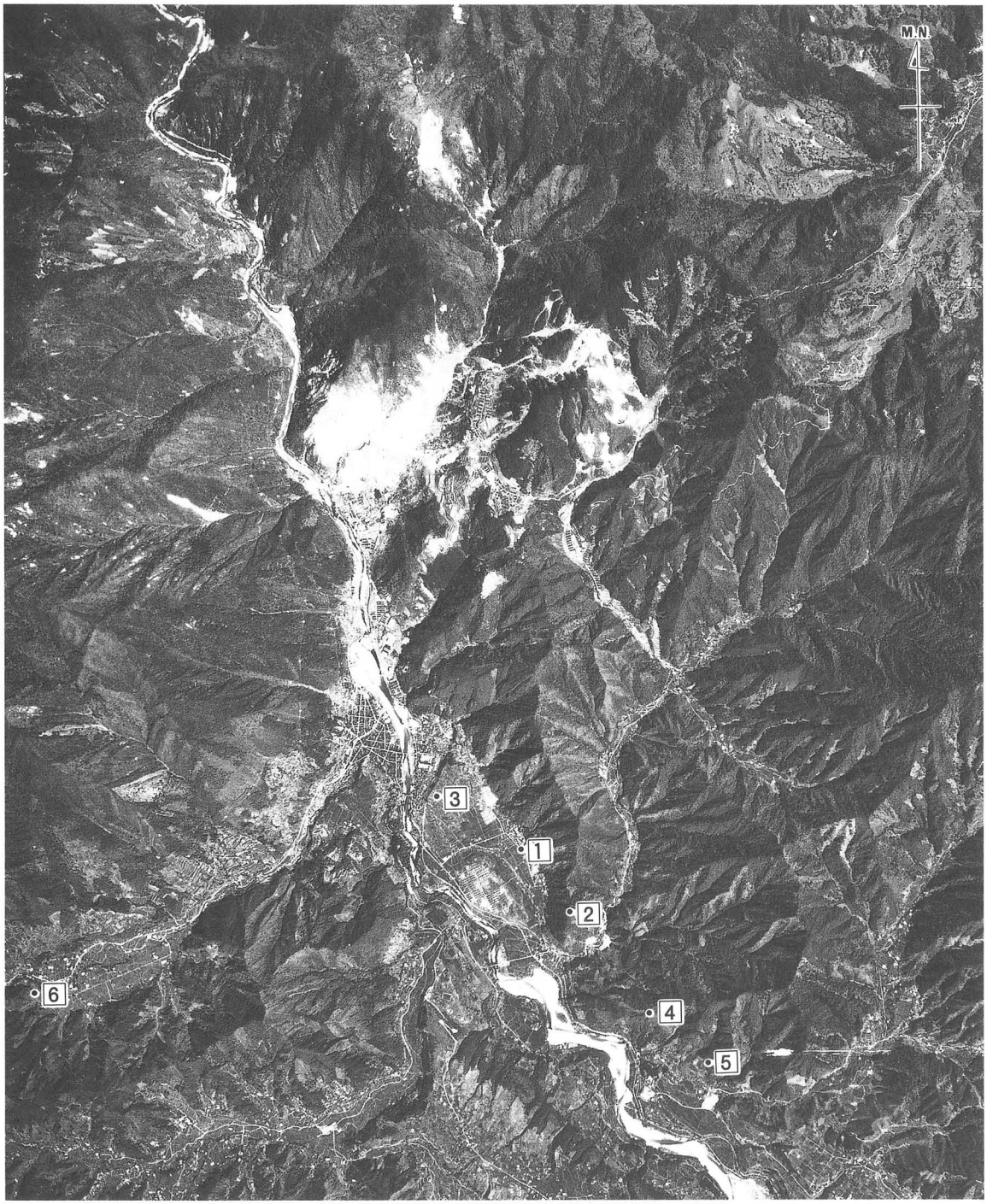
This is a report of archaeological investigations into the Ema Castle site in Nothern Gifu Prefecture, Japan. The primary site is fifteenth century square castle on the side of the Takahara River. One summer of archaeological fieldwork has been carried out jointly by the staff of the Kamioka Town Board of Education and the department of archaeology at Toyama University since a reconstruction of Ema Castle planed. This report covers not only the major results which took place in July and August of 1994 ,but also the essence of the excavation carried out in 1977. The five weeks of fieldwork enabled us to distinguish the structure of the moat and partially distinguish the earthwork which surrounds the square castle. This resulted in the discovery of one of the biggest ditch amongst castles found in plain fields. According to the documented materials, Ema Castle was built by one of the famous Lords who governed the northern part of Gifu prefecture. In order to make clear the social structure of the Ema family in the fifiteenth century, nothing else but archaeology can be used due to the scarcity of documented materials.

The Ema Castle was a square castle of 106m from West to East and 96m from North to South. During the summer, the moats which surround and shape the castle were discovered. Along the Northen moat, there seemed to be a 'HAKOBORI' which shaped in the form of a trapezium. To contrast this , the Western moat, a 'YAGENBORI' , takes the form of a triangle, and on the Southern Line, two 'HAKOBORI"s. As for these, the no thern moat was cut by the southern one, which was clearly identified by the cross section.

The discovery of 'YAGENBORI' on both sides of the gate might have indicated the rank and diginity of the eord in those days. The second major discovery of this season was the reconfirmation of the layer which is said to belong to the fifteenth century in the veport from the last excavation. During this phase, many archaeological artifacts were found,including Chinese blue porcelain, Seto-Mino ware, and ea then ware. The study of these kinds of ware would dates to the medieval chronology in this area. The exacavation will continue for more than five years in order to reconstruct the castle.

図　　版

図版一　調査地域航空写真一（一九四七年撮影）

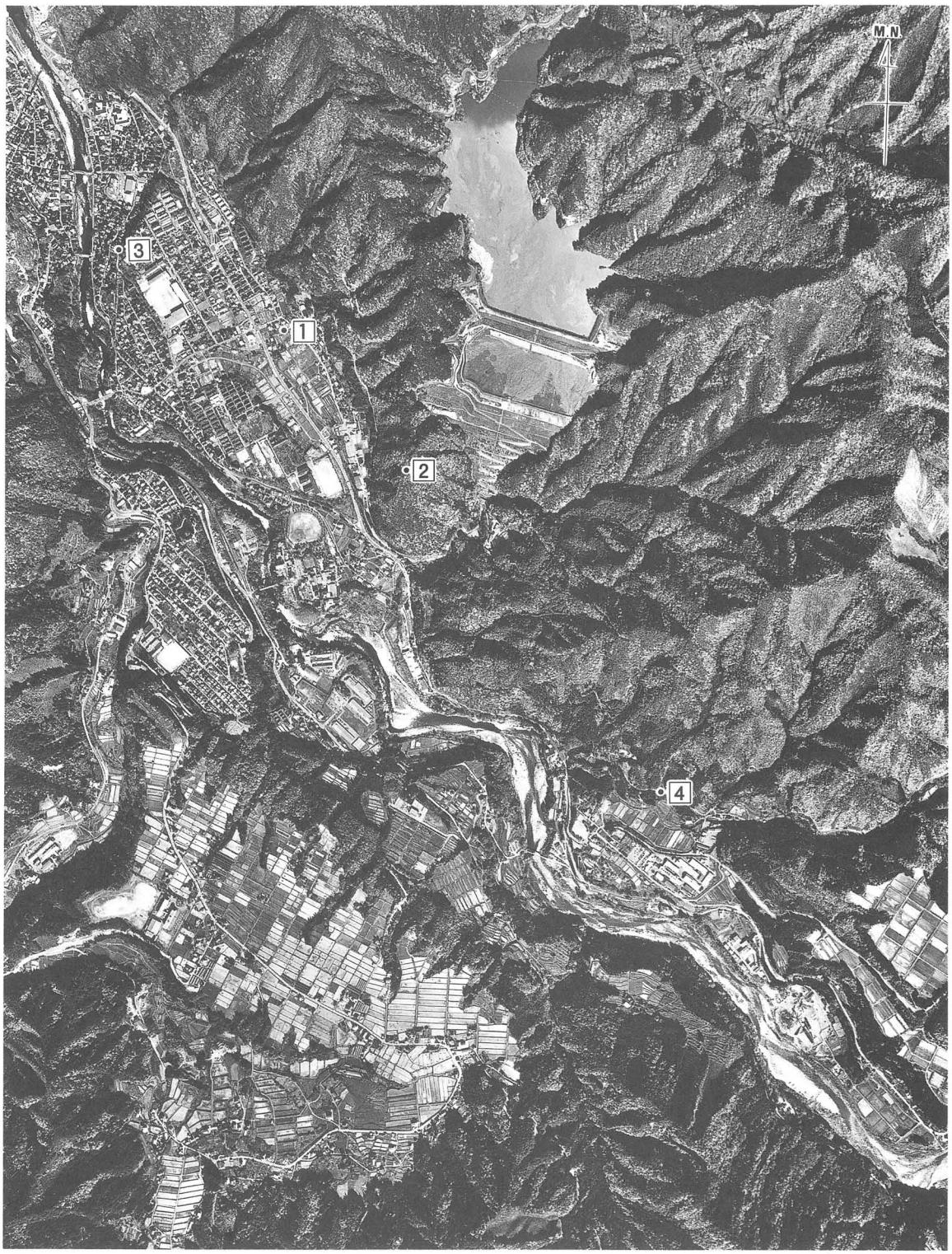


1 江馬氏下館跡　2 高原諏訪城跡　3 東町城跡　4 洞城跡　5 石神城跡　6 寺林城跡

（縮尺：約1/90,000）

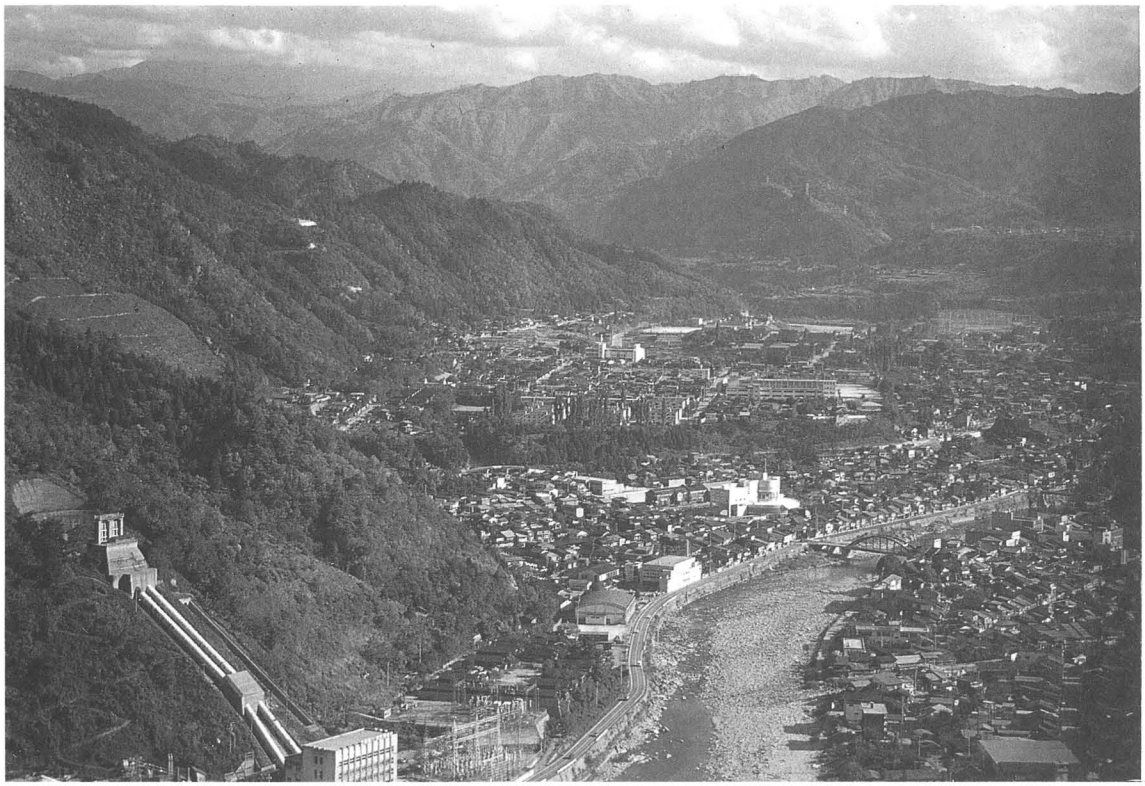
（国土地理院掲載許可済）

図版二　調査地域航空写真二（一九九三年撮影）



1　江馬氏下館跡　2　高原諏訪城跡　3　東町城跡　4　洞城跡　（縮尺：約1/35,000）

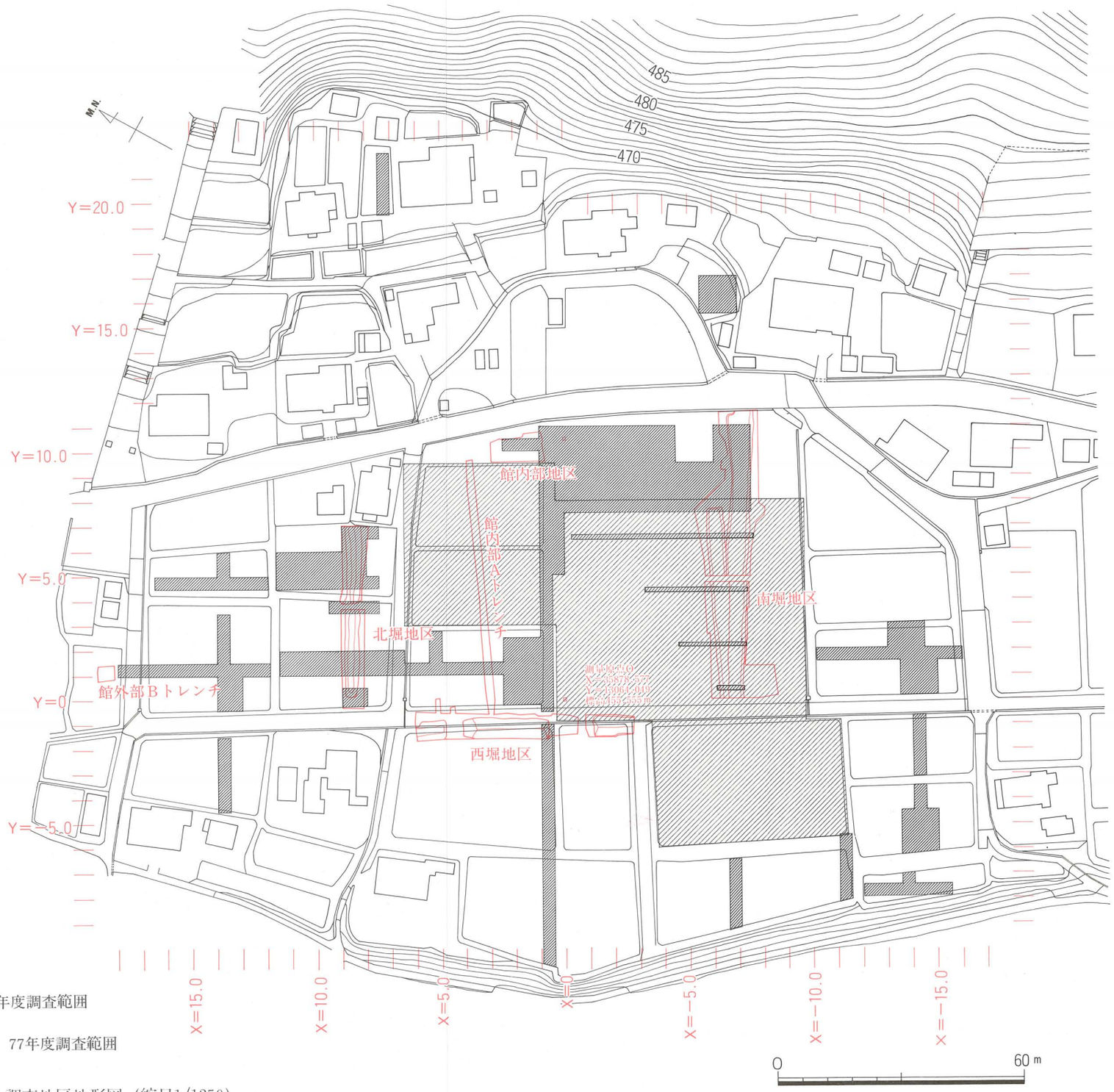
（国土地理院掲載許可済）



1　神岡町遠景写真（北から）

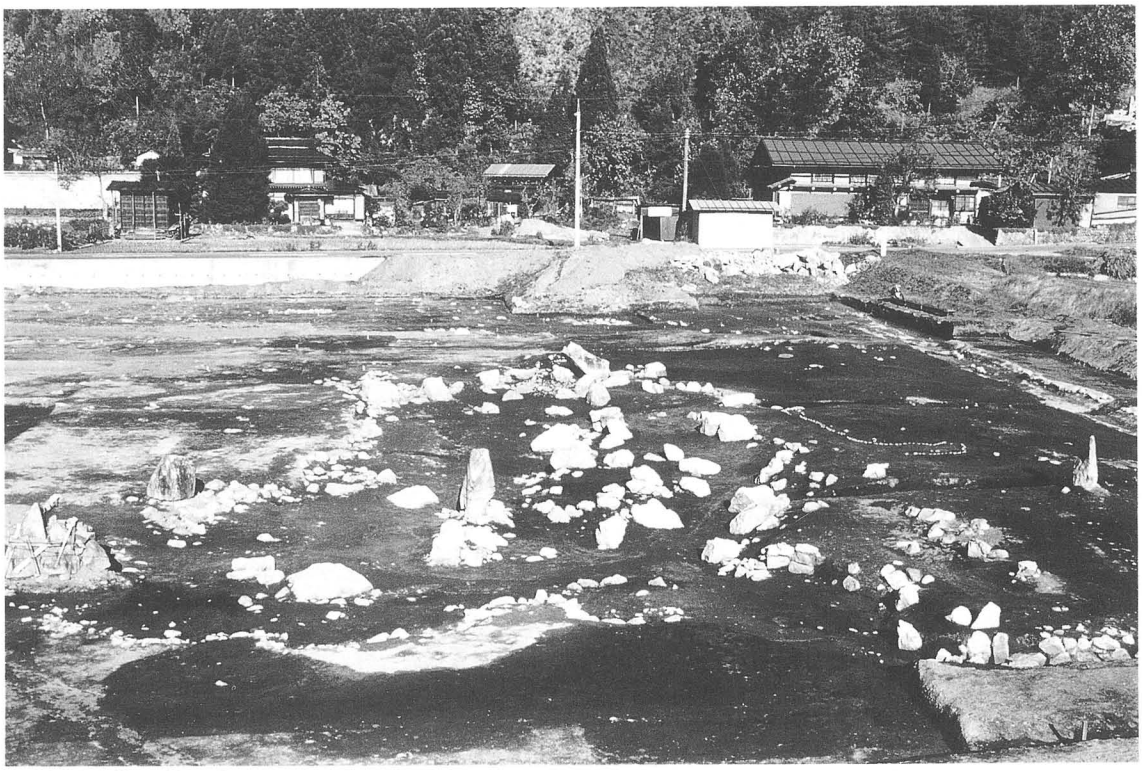
2　調査地区遠景写真：78年度調査時（西から）

図版四　調査地区周辺の地形と発掘区位置図



1　調査地区地形図（縮尺1/1250）

1　調査地区全景写真（東から）



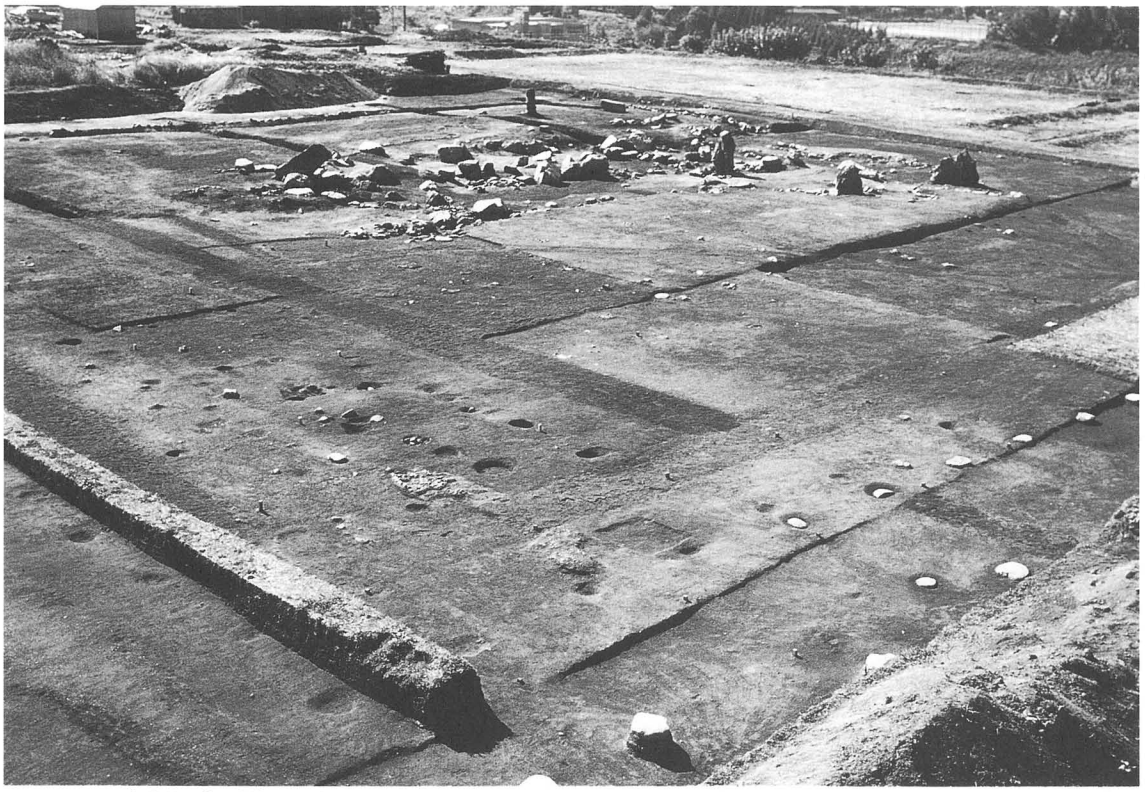
2　庭園遺構全景写真１（西から）

1　庭園遺構全景写真２（南から）

2　南堀トレンチ完掘写真（南から）

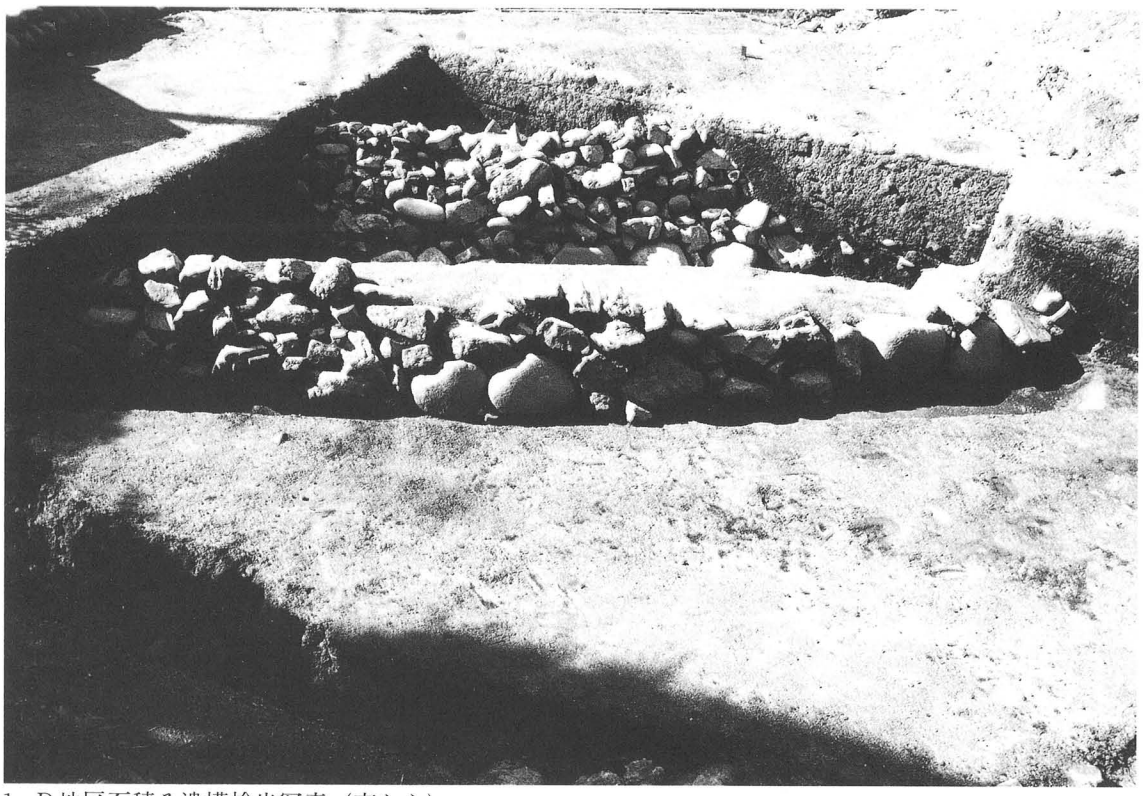
1　ＳＢ03 完掘写真（西から）

2　ＳＢ04 完掘写真（北から）



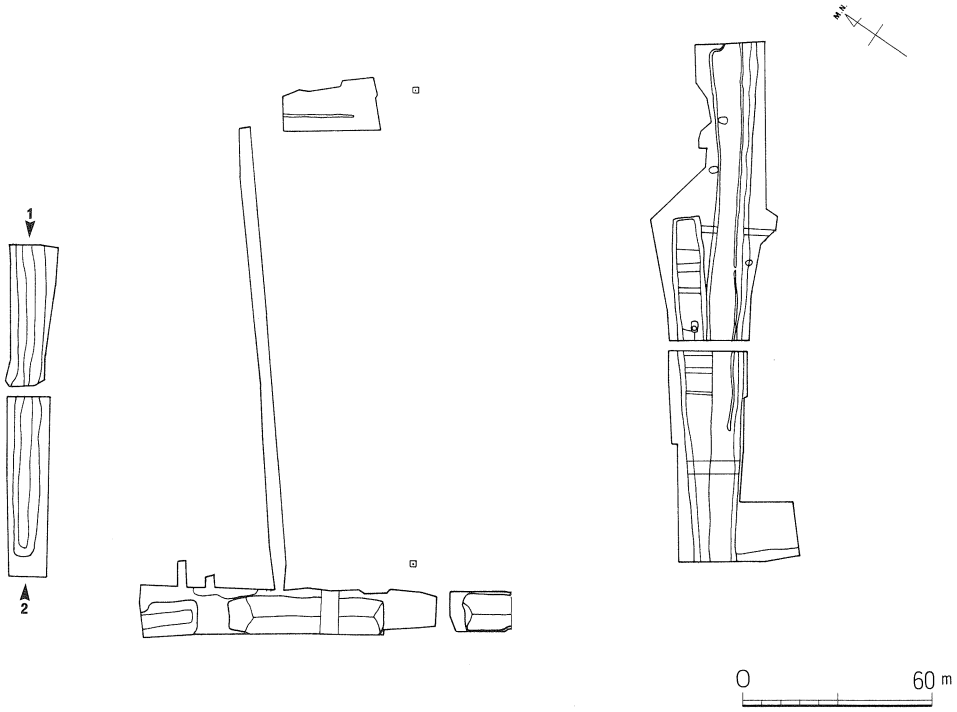
1　ＳＢ06 完掘写真（北から）

2　炉跡検出写真（西から）



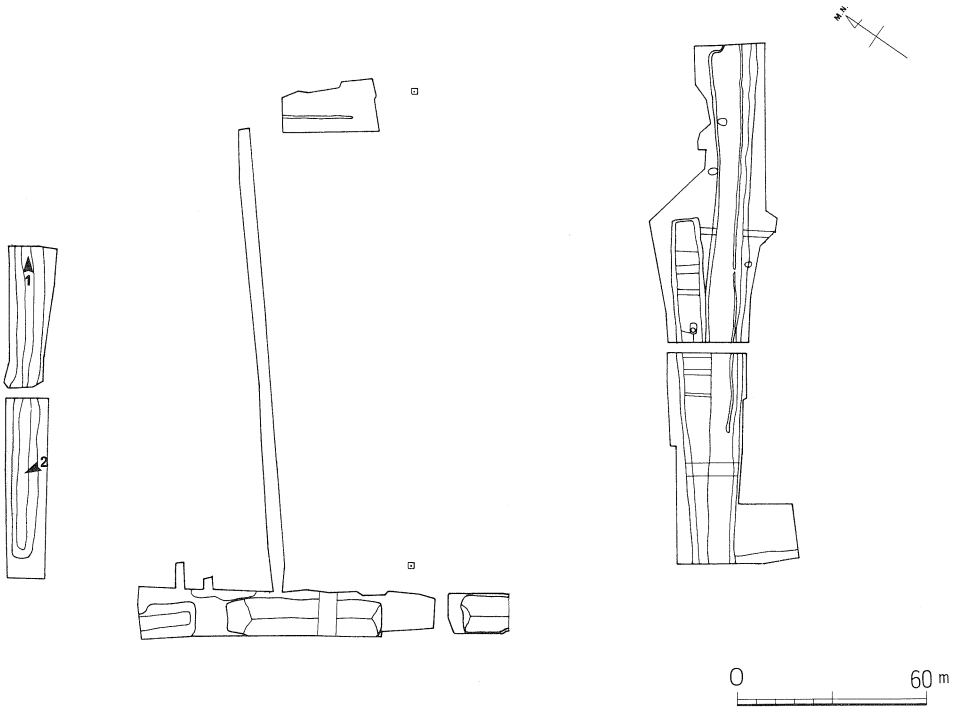
1　D地区石積み遺構検出写真（南から）

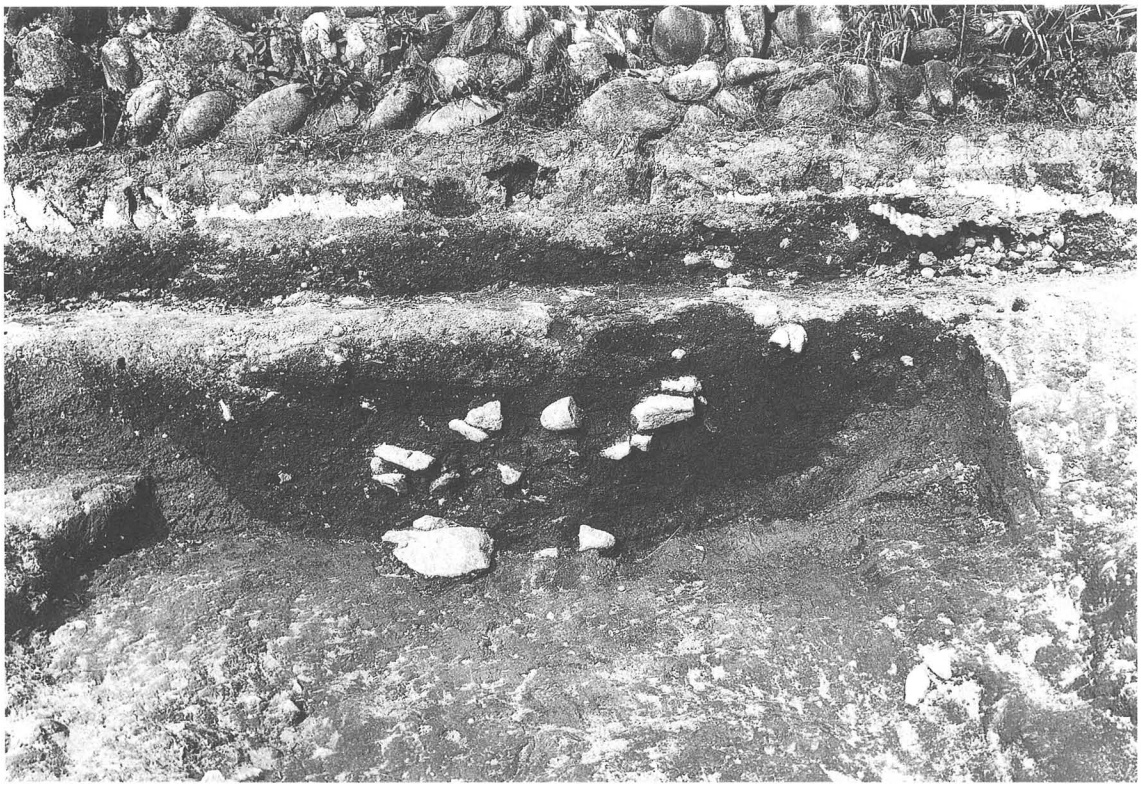
2　C地区竪穴住居跡完掘写真（東から）


1
2
N
0
60 m

1　北堀地区全景写真１（北東から）

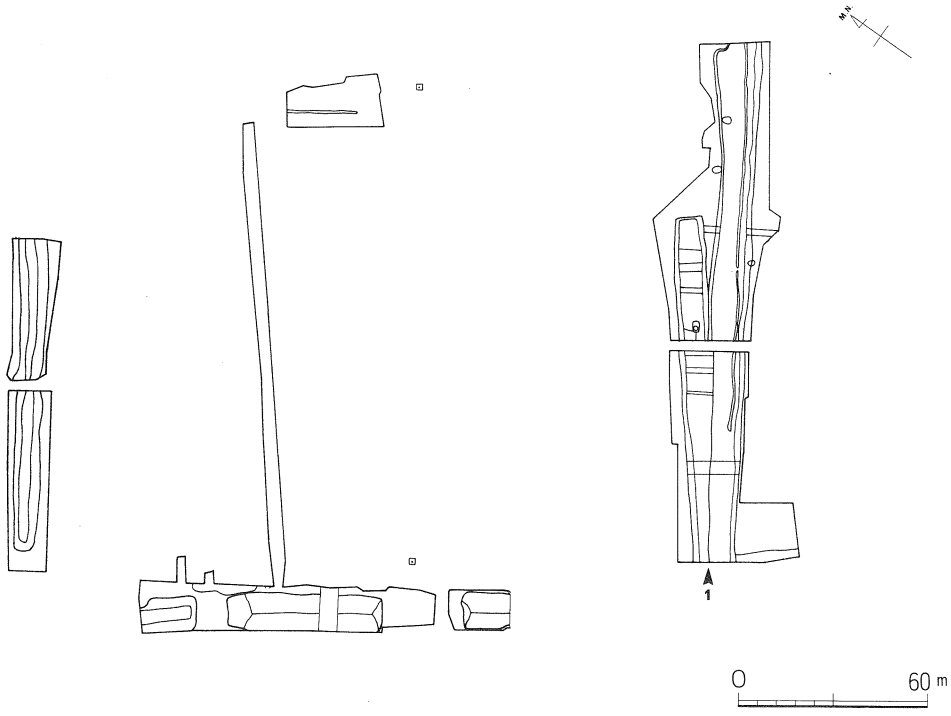
2　北堀地区全景写真２（南西から）


1
2
0
60 m

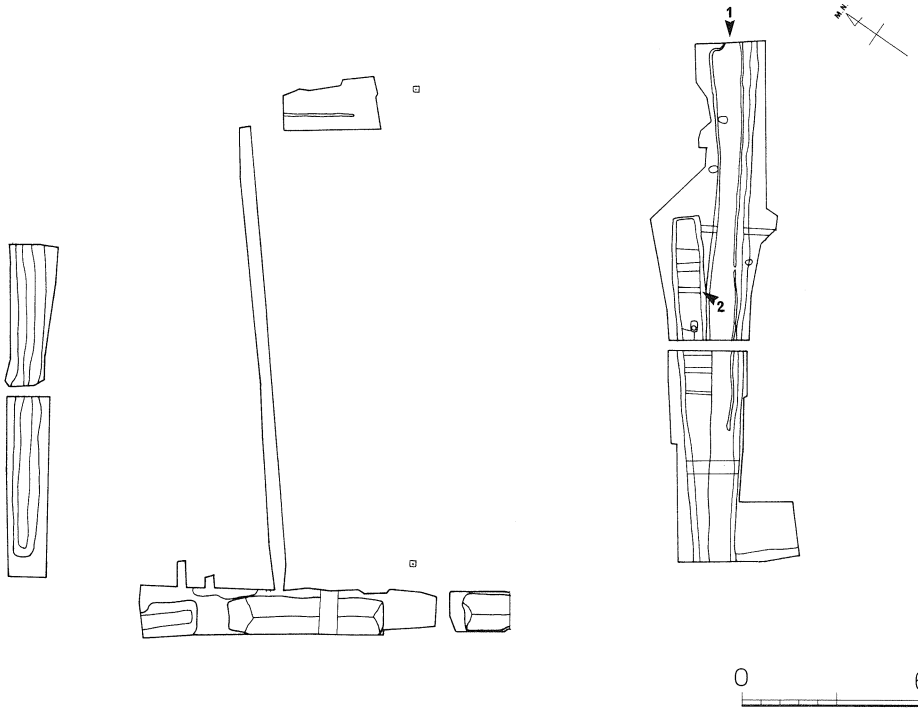


1　北堀埋土Ａ－Ａ′断面層位写真（南西から）

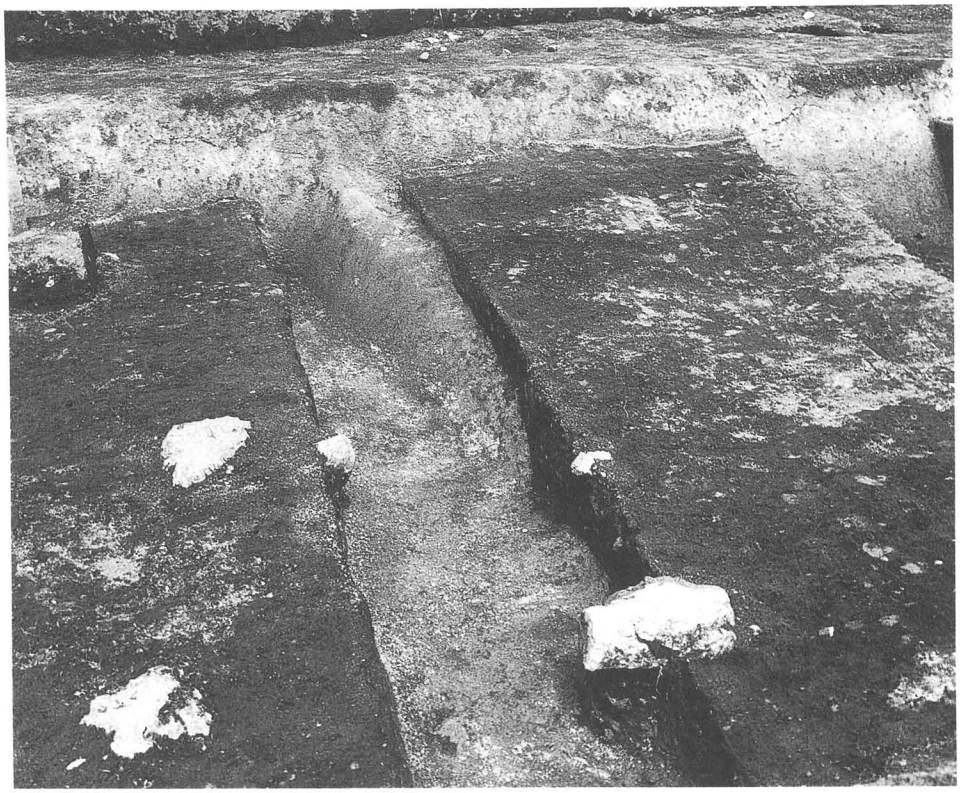
2　北堀堀形礎石流れ込み状況検出写真（南東から）


N
1
0
60 m

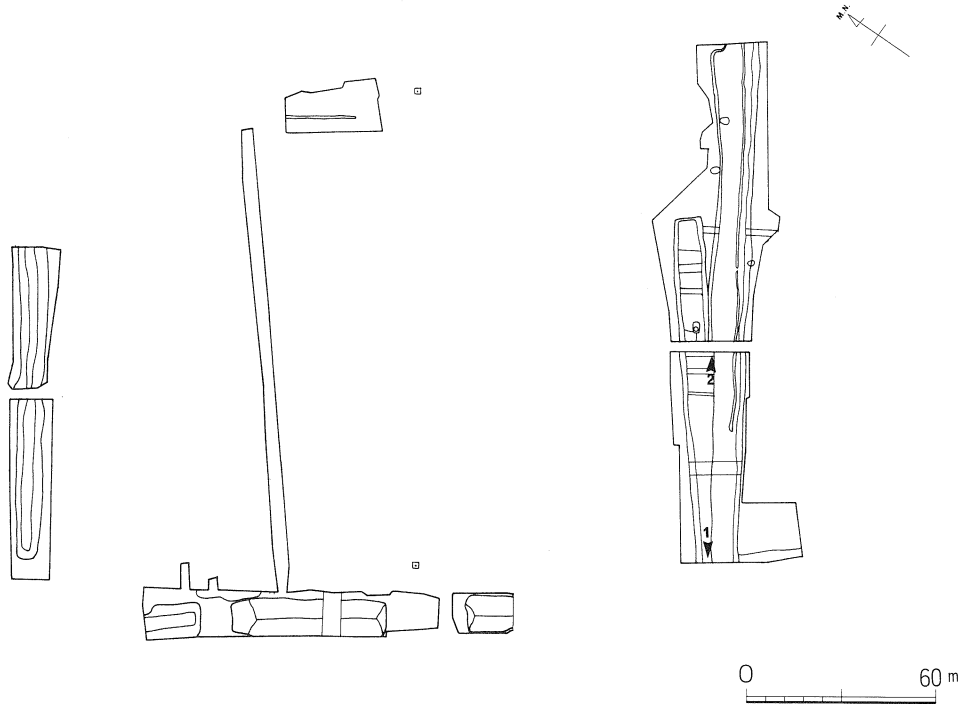
1　南堀地区全景写真１（南西から）


1
2
0
60 m

1　南堀地区全景写真２（北東から）

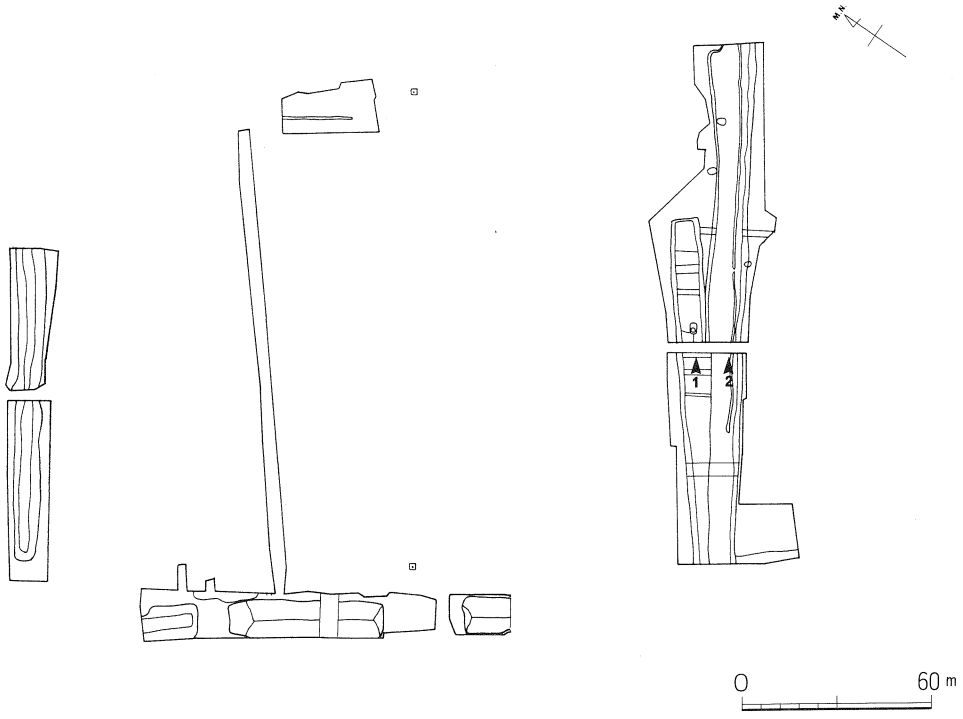


2　南堀旧堀ＳＦトレンチ完掘写真（南から）


M N
2
1
0
60 m

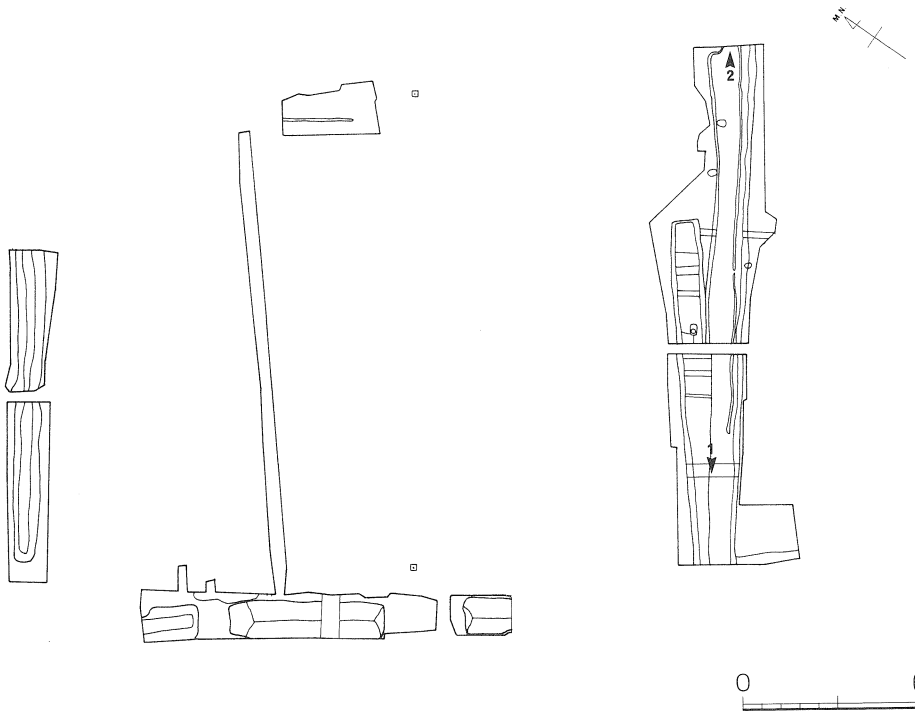
1　南堀埋土Ｂ－Ｂ′断面層位写真（北東から）

2　南堀埋土Ｄ－Ｄ′断面層位写真（南西から）


A
1
A
2
0
60 m

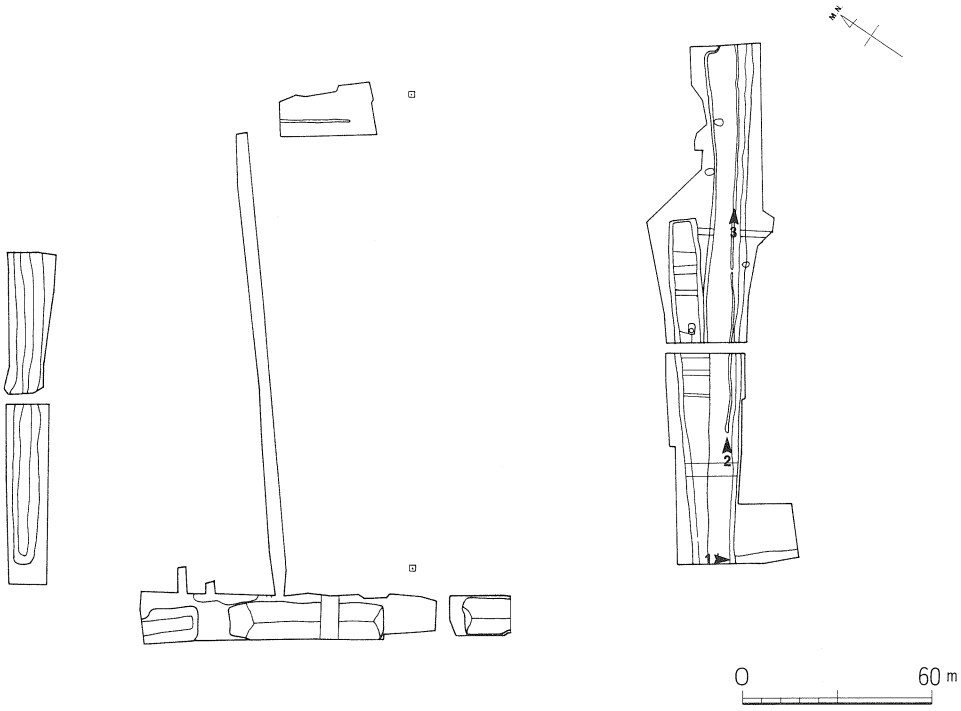
1　南堀埋土Ｄ－Ｄ′旧堀部分断面層位写真（南西から）

2　南堀埋土Ｄ－Ｄ′新堀部分断面層位写真（南西から）


N
2
1
0
60 m

1　南堀埋土Ｃ－Ｃ′断面層位写真（北東から）

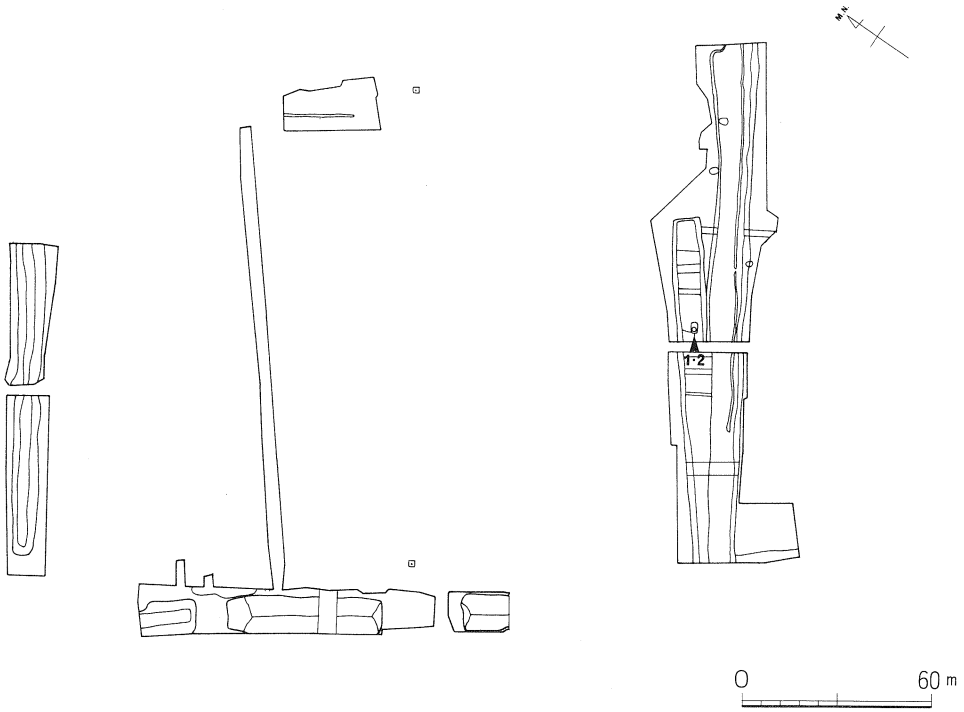
2　南堀埋土Ｇ－Ｇ′断面層位写真（南西から）


N
3
2
1
0
60 m

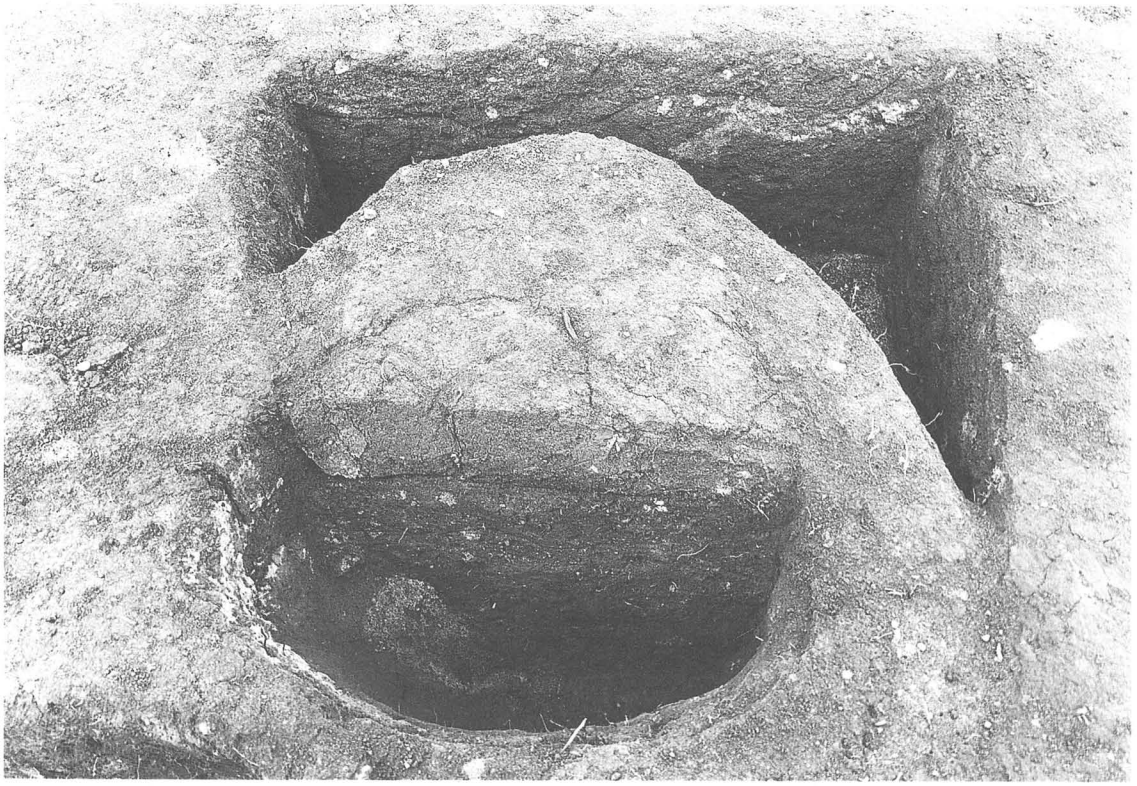
1　ＳＤ01 完掘状況写真（北西から）

2　ＳＤ02 完掘状況写真１（南西から）

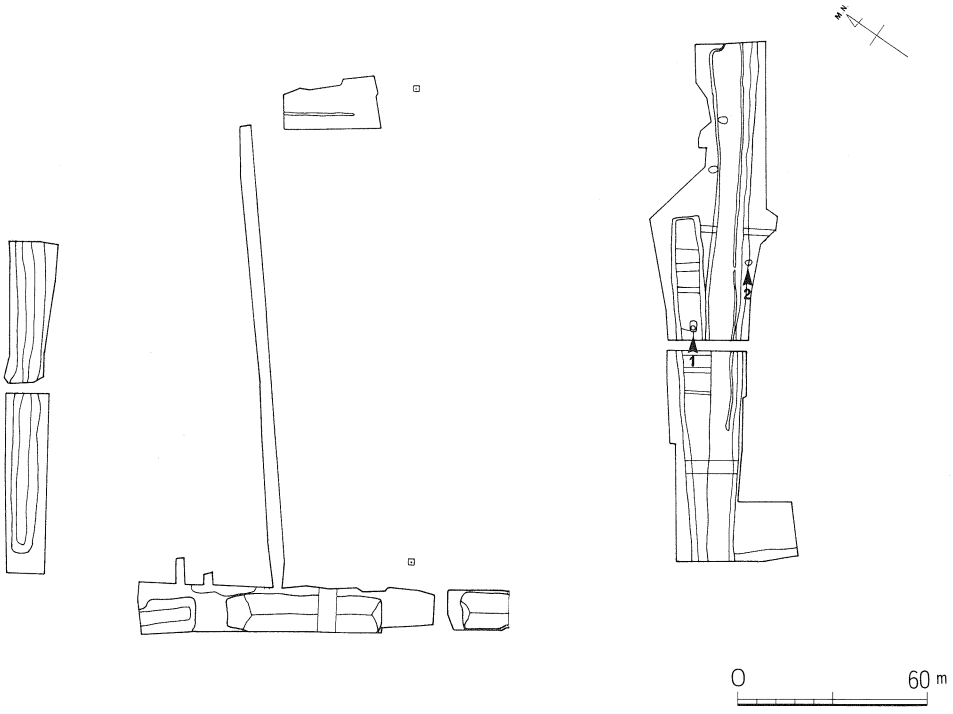
3　ＳＤ02 完掘状況写真２（南西から）


M
1:2
0
60 m

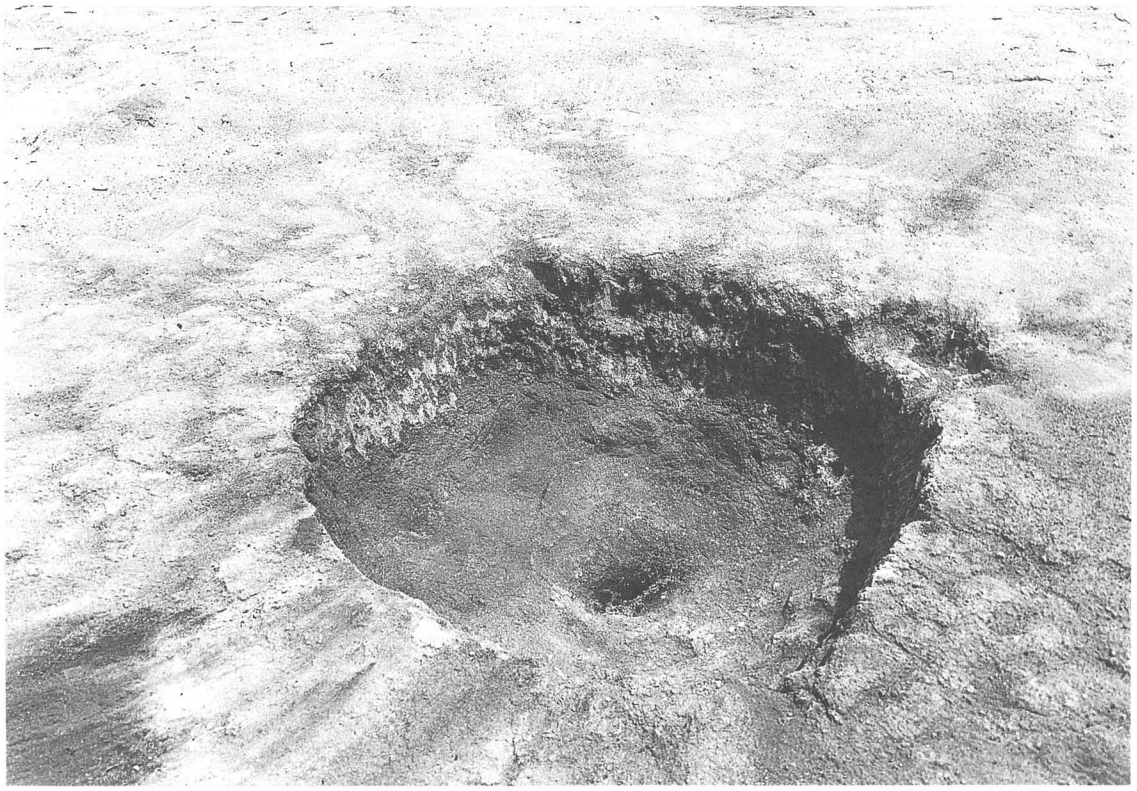
1　ＳＰ28 完掘状況写真（南西から）



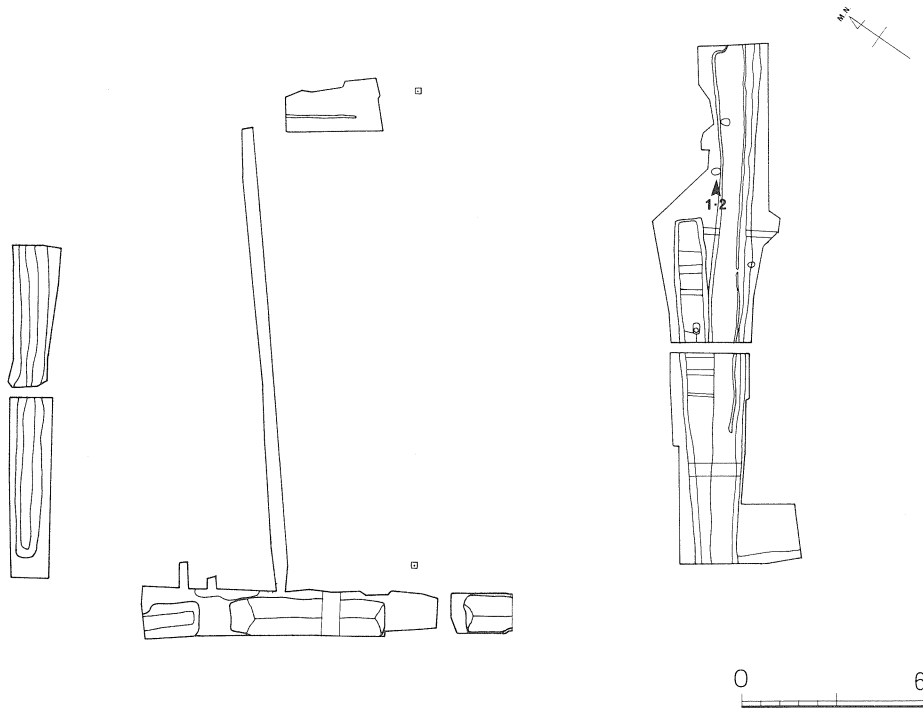
2　ＳＫ02・ＳＰ28 断面層位写真（南西から）


N
1
2
0
60 m

1　ＳＫ02 完掘状況写真（南西から）

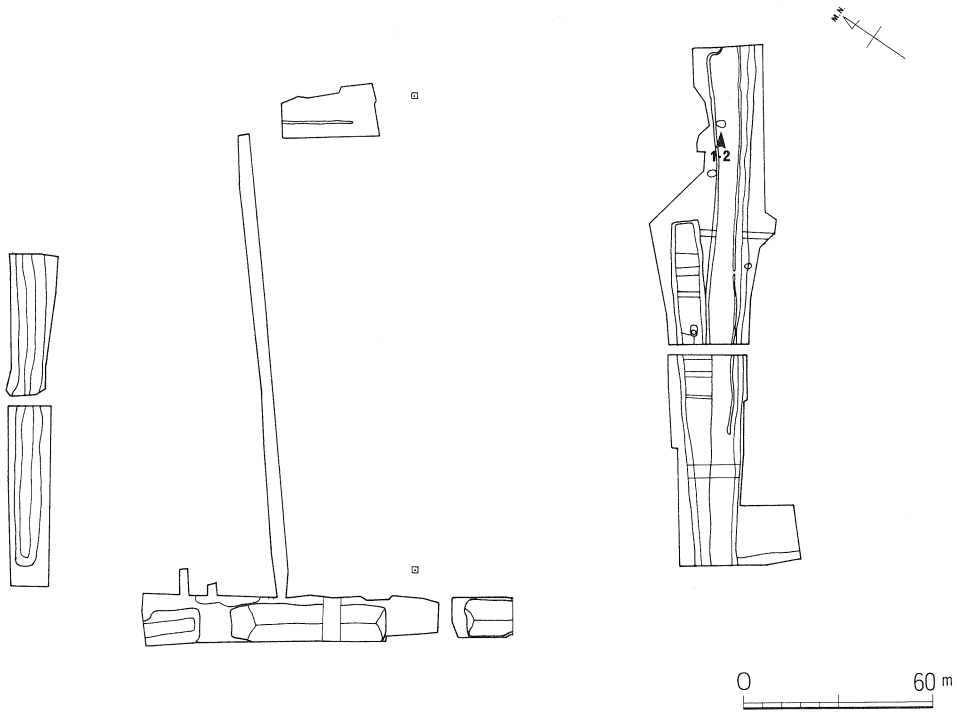


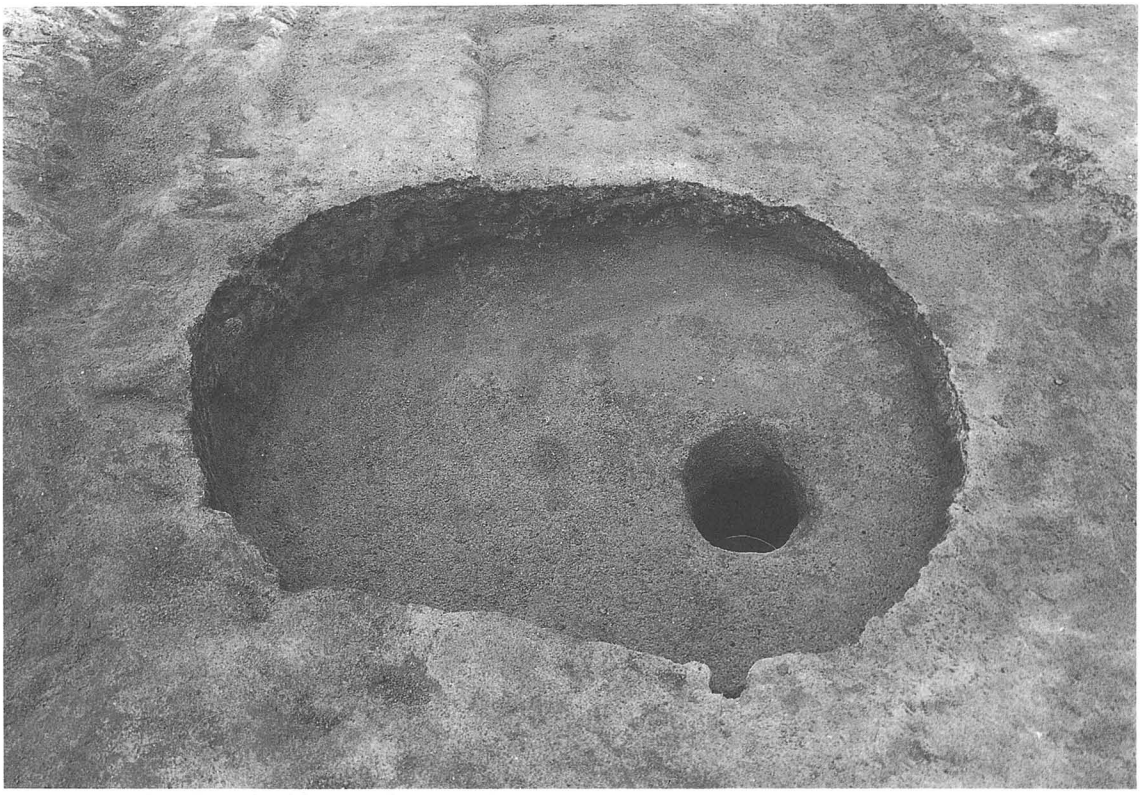
2　ＳＫ04 完掘状況写真（南西から）


MN
1-2
0
60 m

1　ＳＫ05 完掘状況写真（南西から）

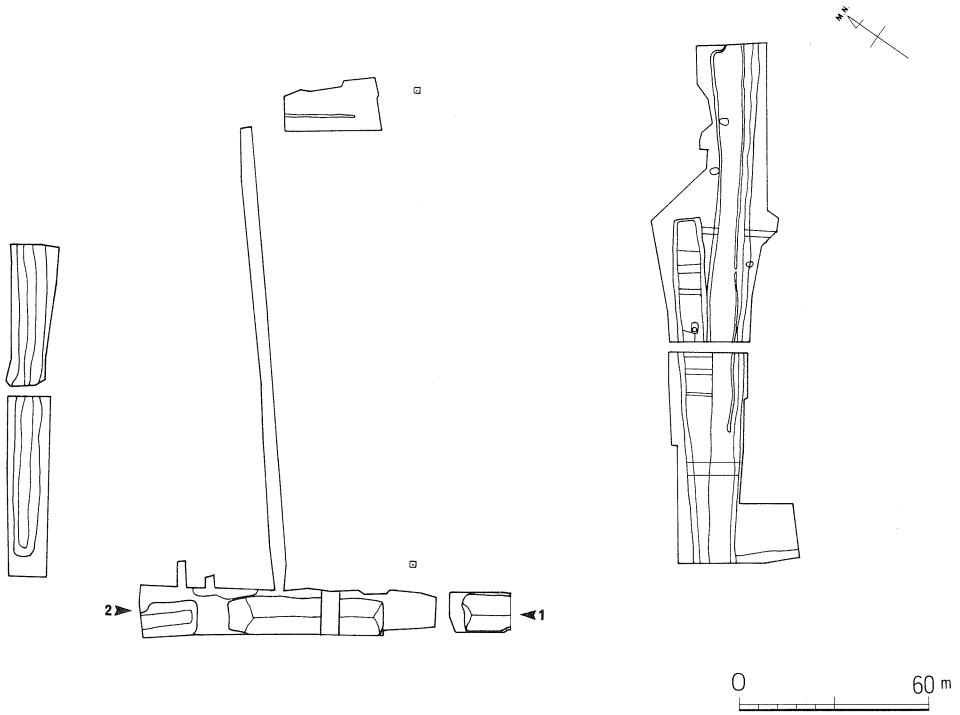
2　ＳＫ05 断面層位写真（南西から）


1·2
0
60 m



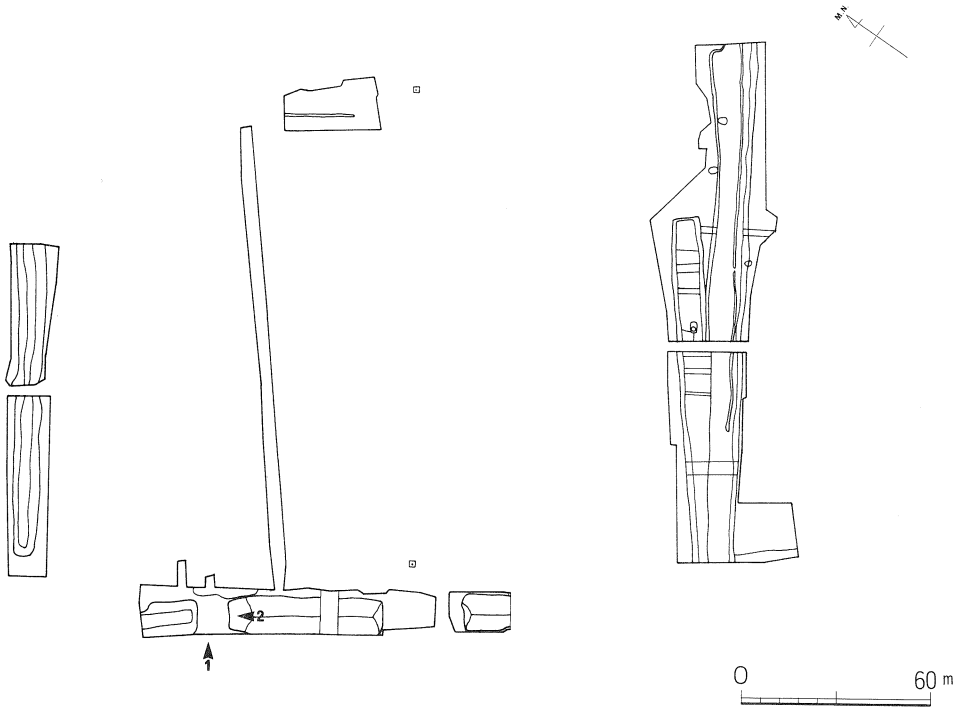
1　ＳＫ06 完掘状況写真（南西から）

2　ＳＫ06 断面層位写真（南西から）


2
1
0
60 m

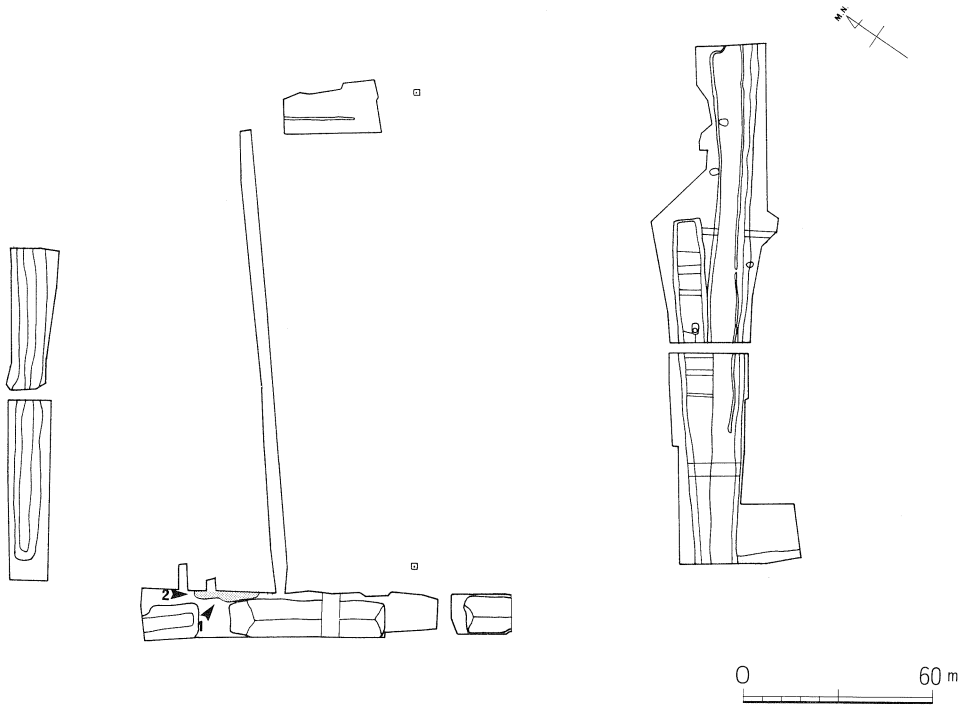
1　西堀地区全景写真１（南東から）

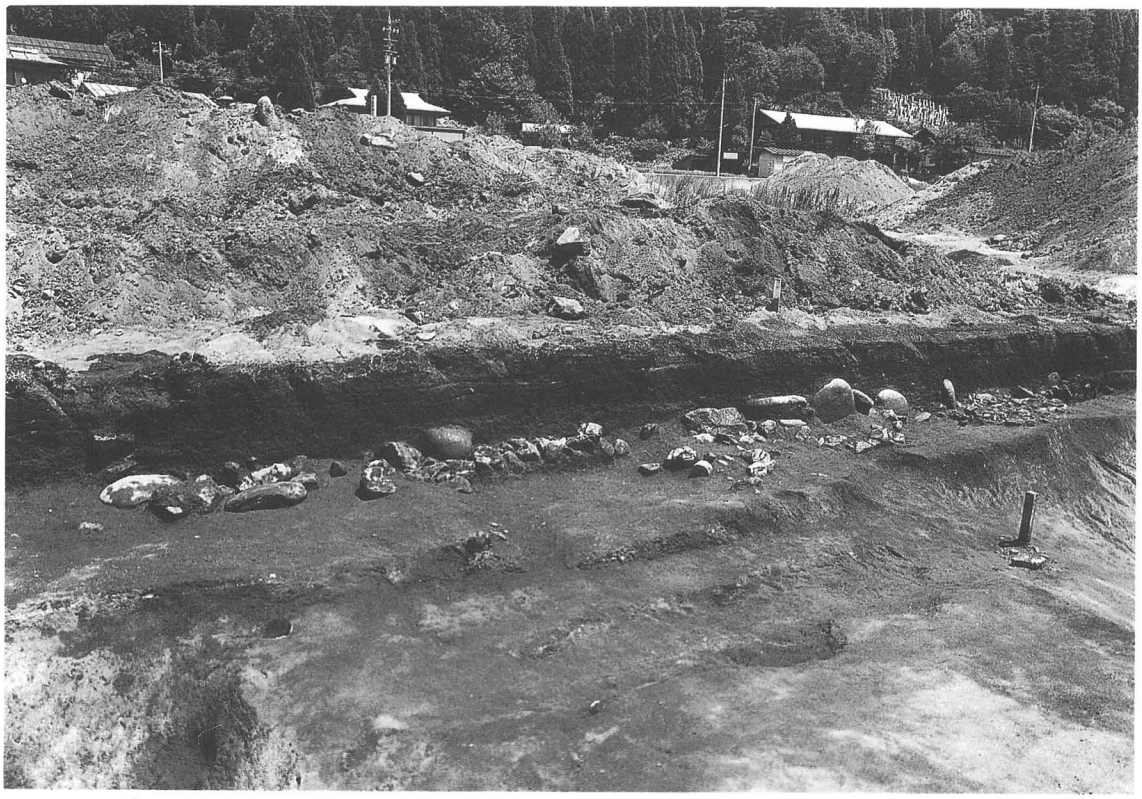
2　西堀地区全景写真２（北西から）


N
2
1
0
60 m

1　土橋１検出写真１（南西から）

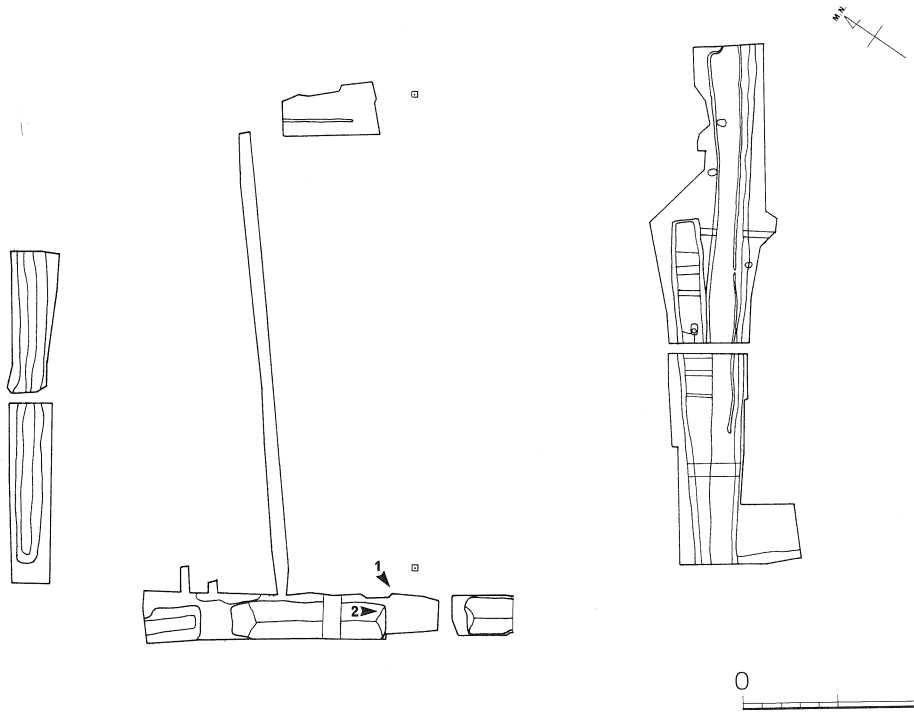
2　土橋１検出写真２（南東から）

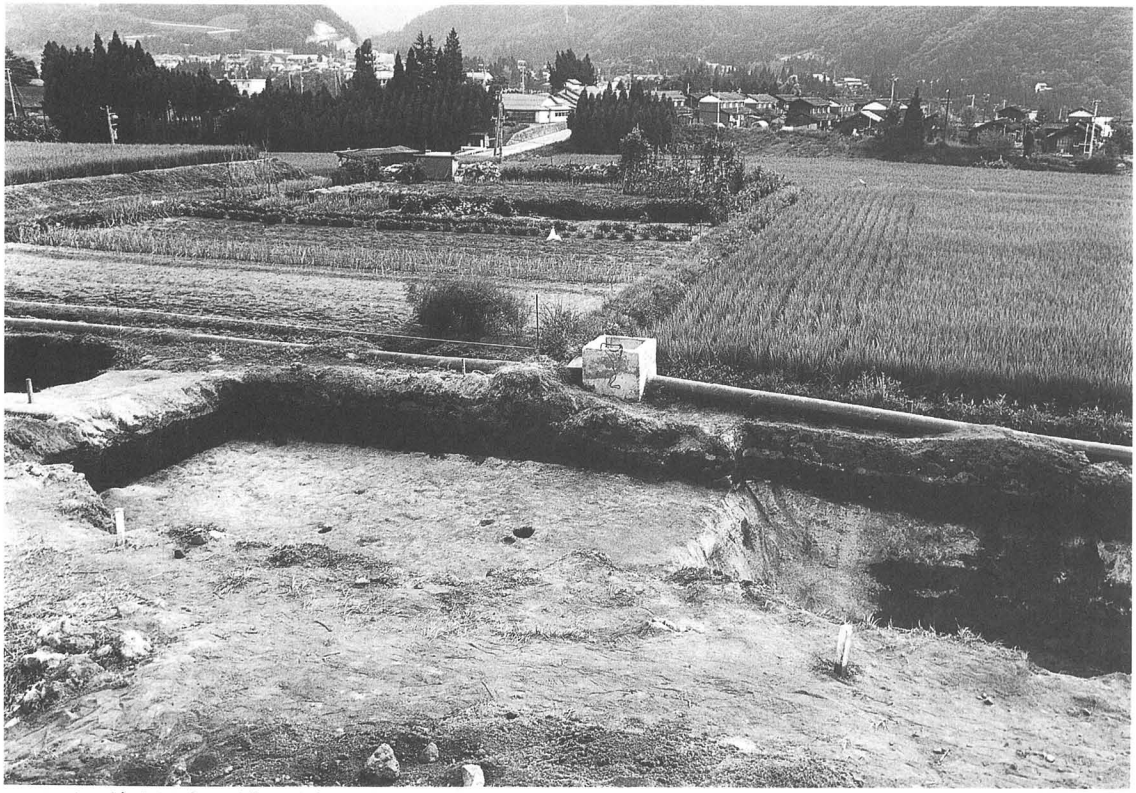

M.N.
2
1
0
60 m



1　ＳＸ01 検出写真１（西から）

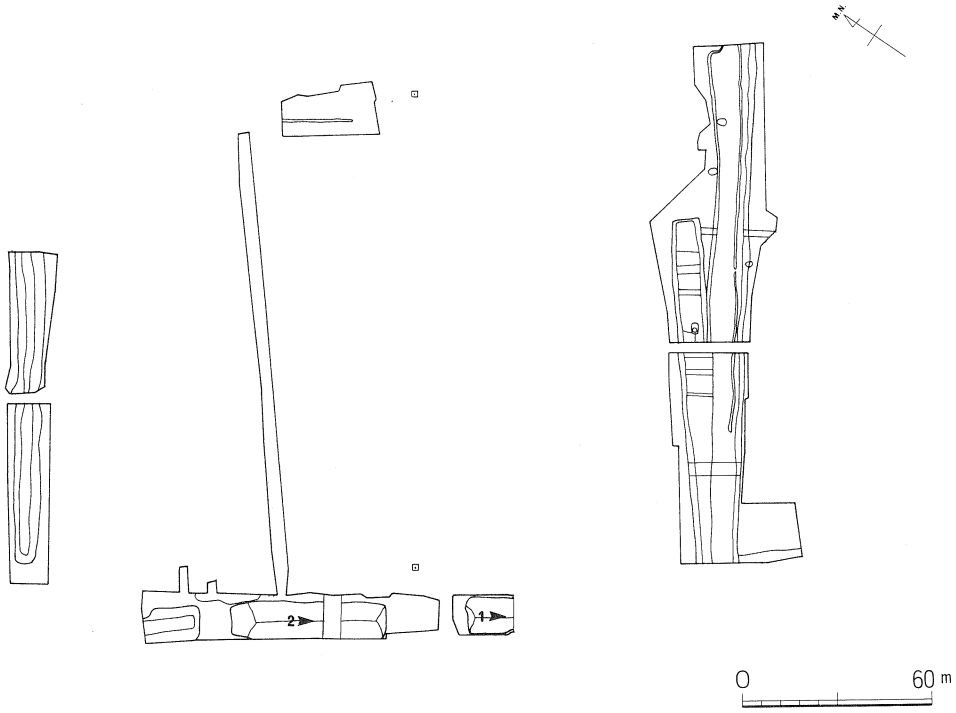
2　ＳＸ01 検出写真２（北西から）


M.N.
1
2
0
60 m



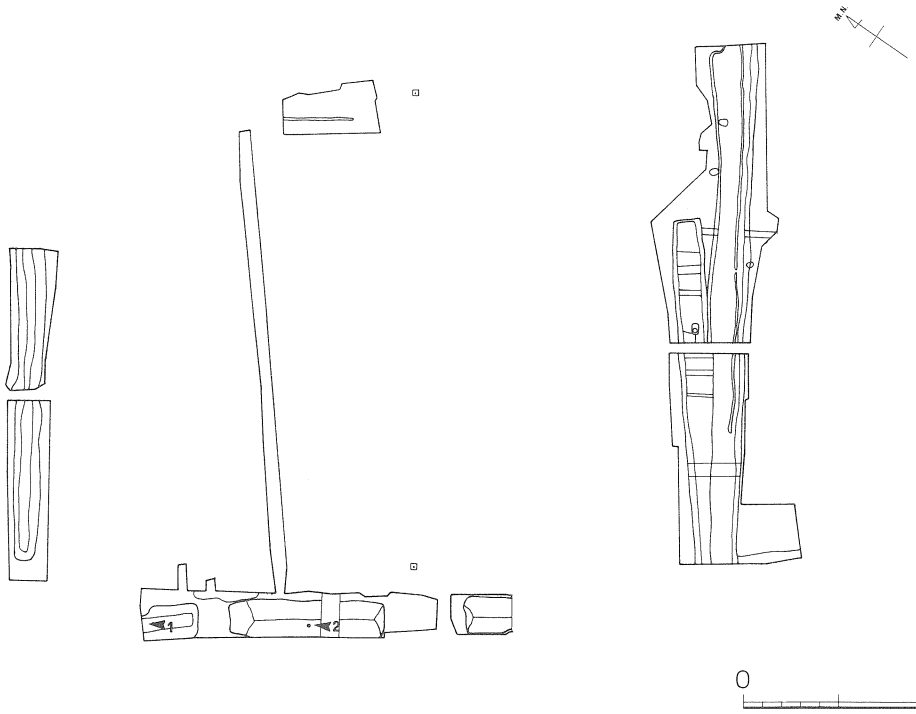
1　土橋２検出写真１（北から）

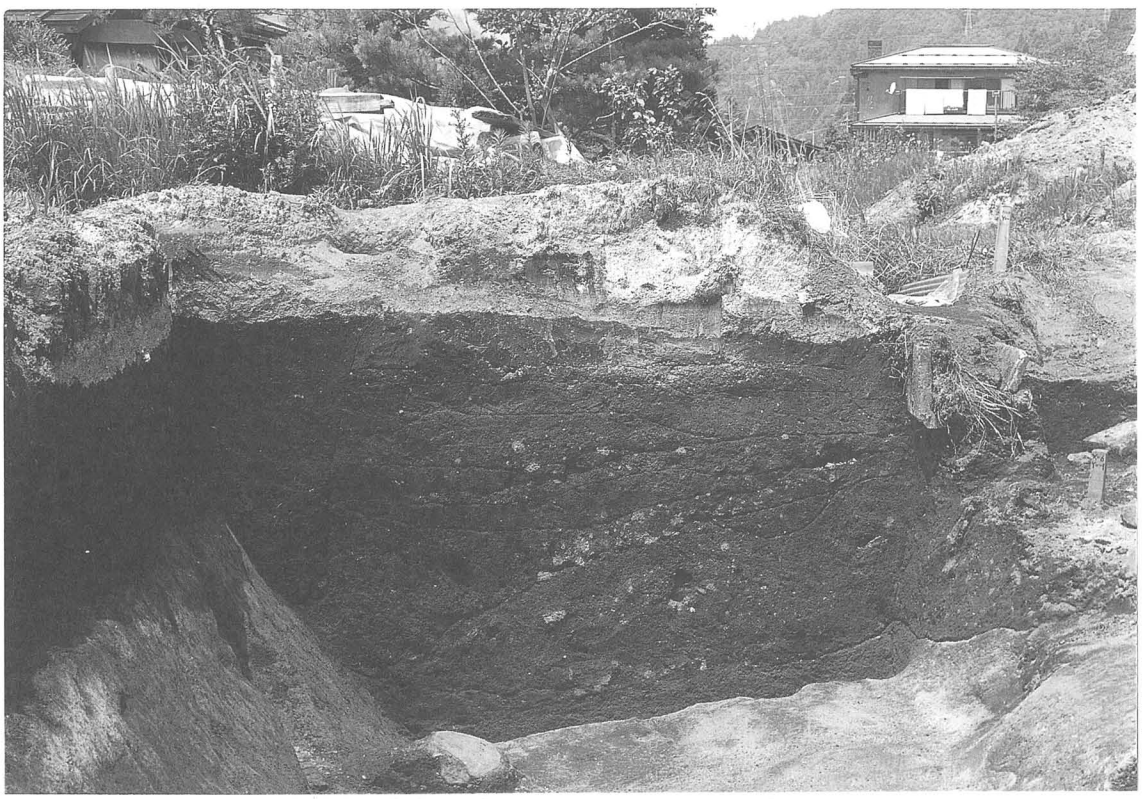
2　土橋２検出写真２（北西から）


N
2
1
0
60 m

1　西堀埋土Ｈ－Ｈ′断面層位写真（北西から）

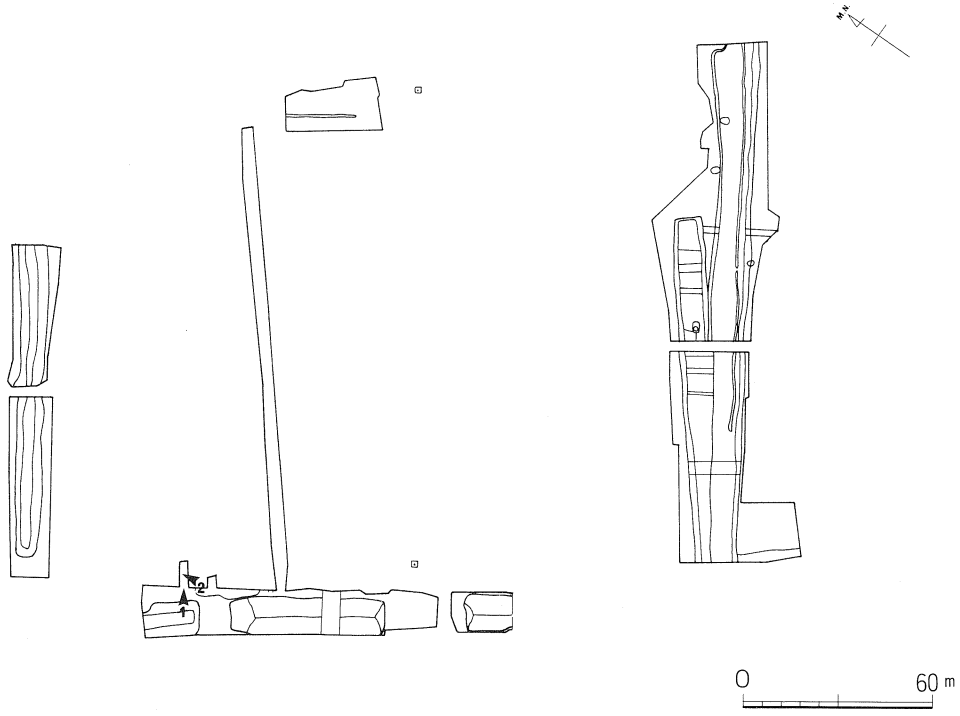
2　西堀埋土Ｉ－Ｉ′断面層位写真（北西から）

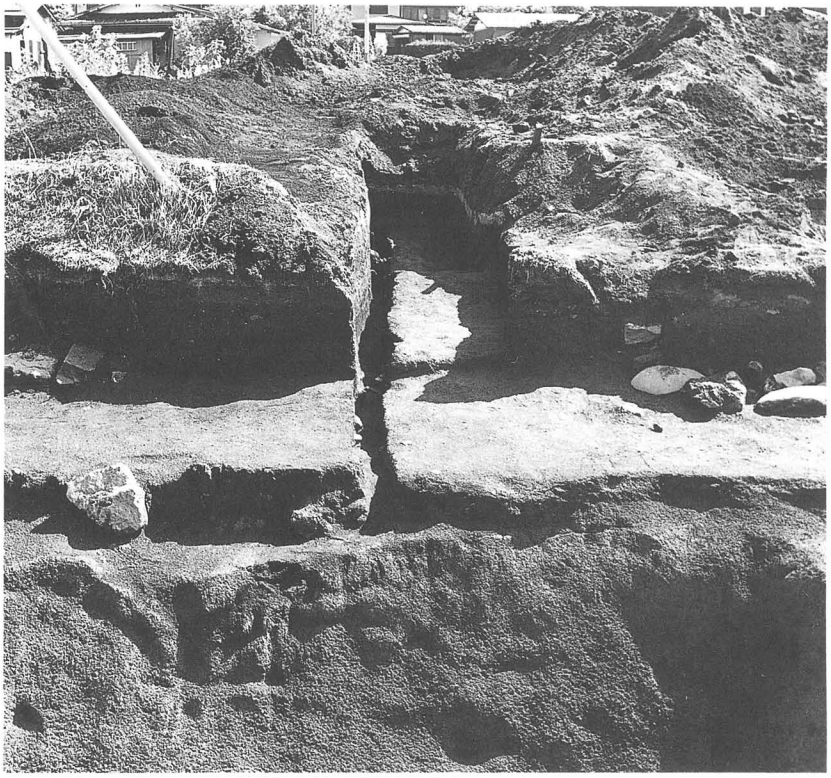

M.N.
1
2
0
60 m



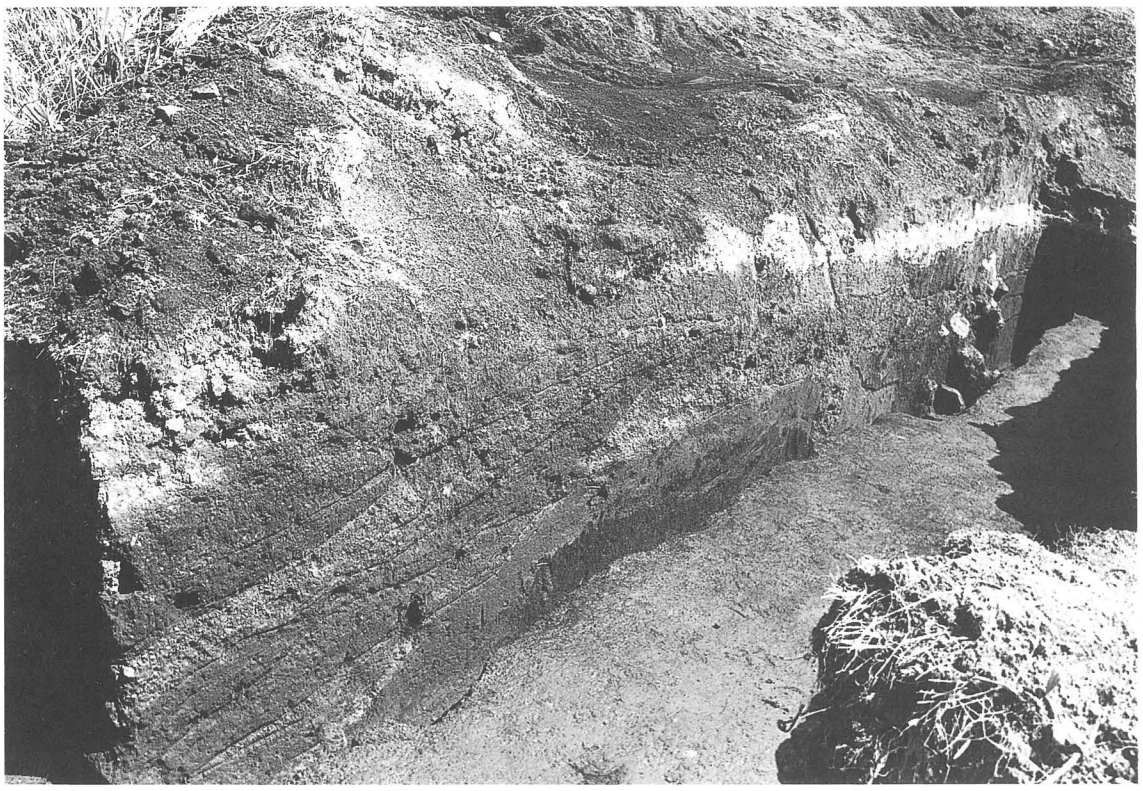
1　西堀埋土Ｊ－Ｊ′断面層位写真（南東から）

2　西堀堀底炭化杭出土状態写真（南東から）

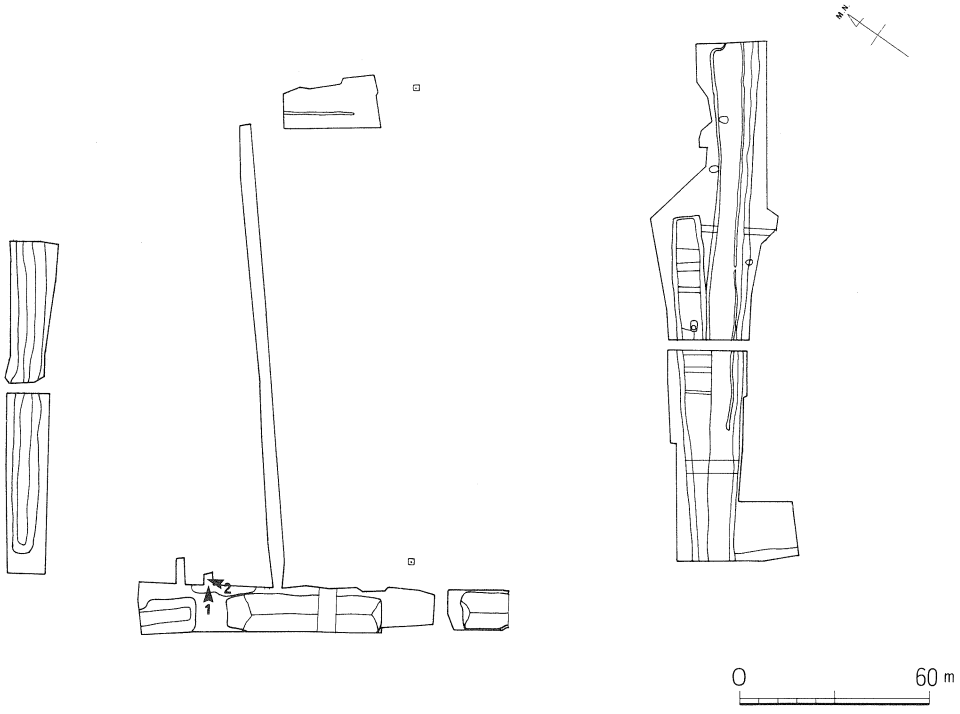

1
2
0
60 m



1　西堀ＷＡトレンチ完掘写真（南西から）

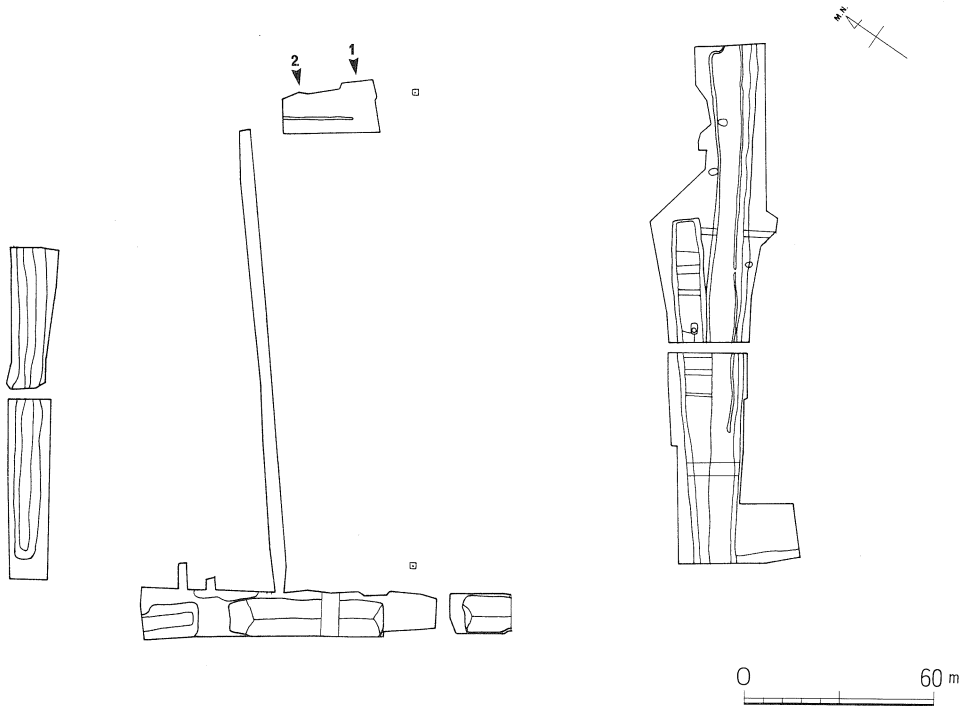


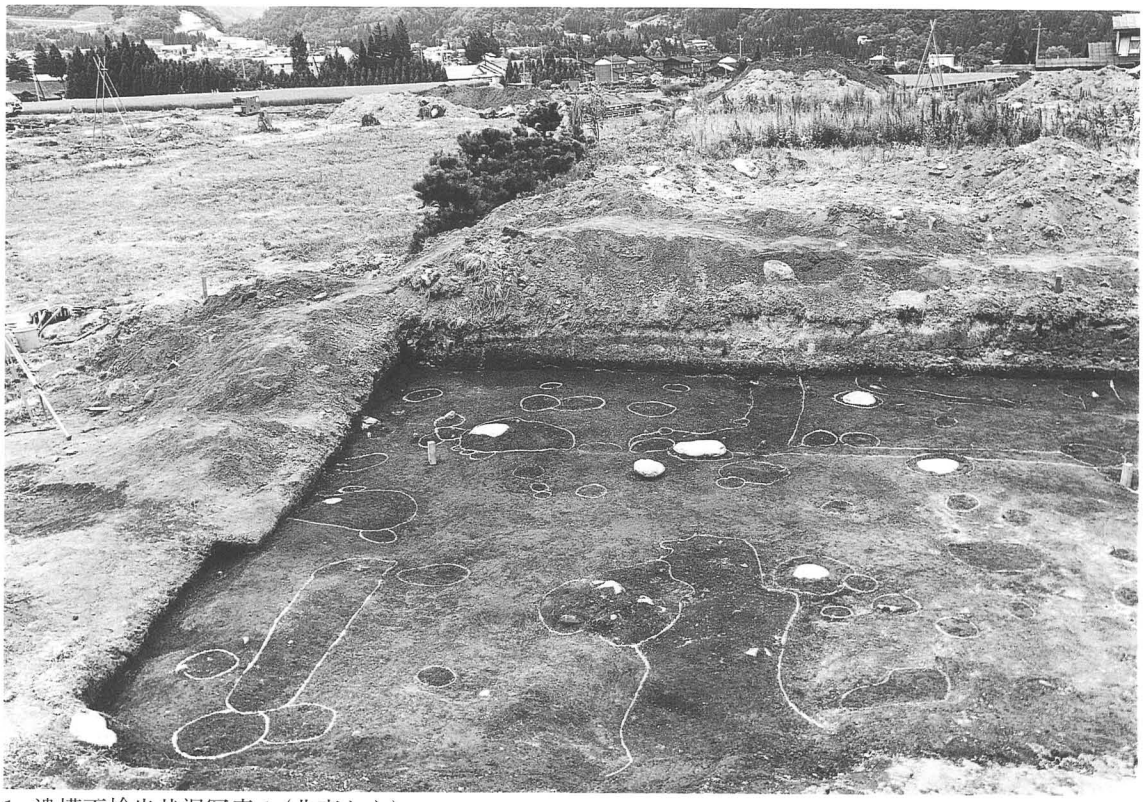
2　西堀ＷＡトレンチＫ－Ｋ′断面層位写真（南から）


N
1
2
0
60 m

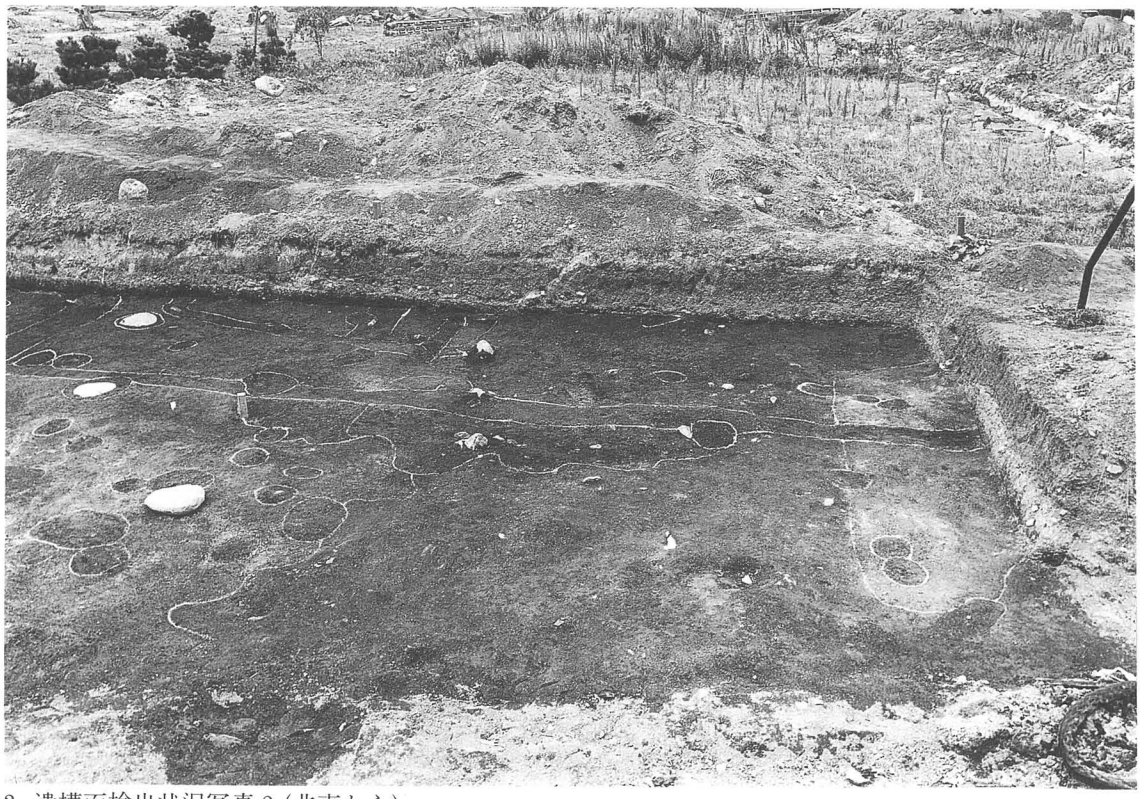
1　西堀ＷＢトレンチ完掘写真（南西から）

2　西堀ＷＢトレンチＬ－Ｌ′断面層位写真（南から）

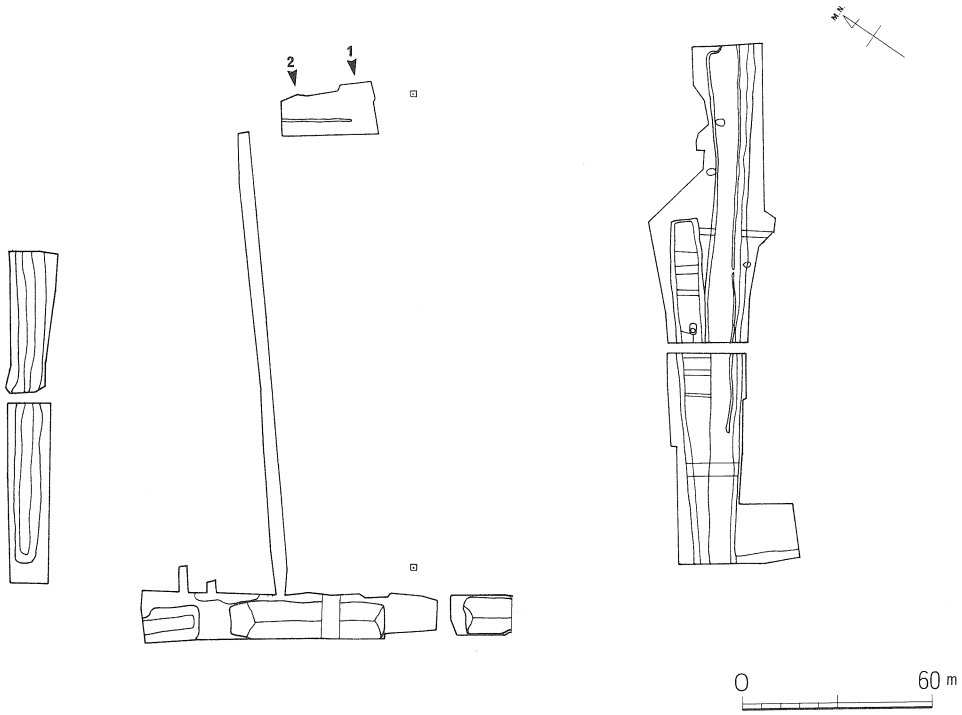

2
1
N
0
60 m



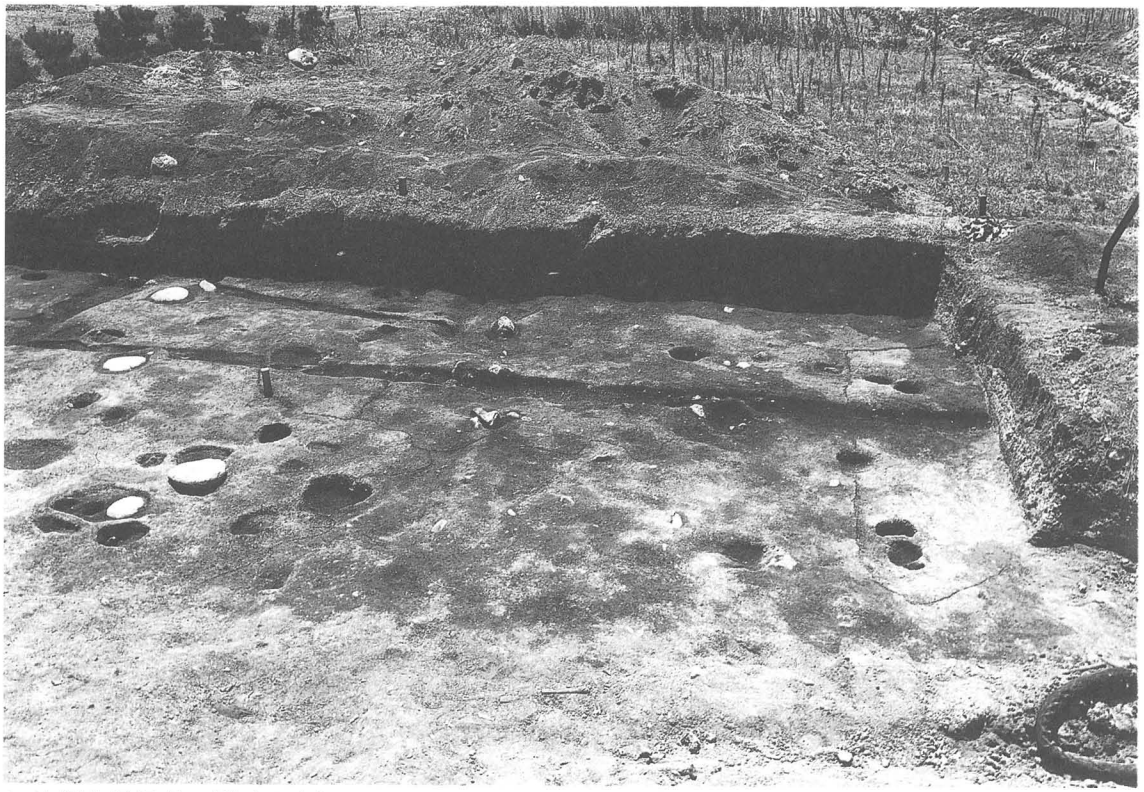
1　遺構面検出状況写真１（北東から）



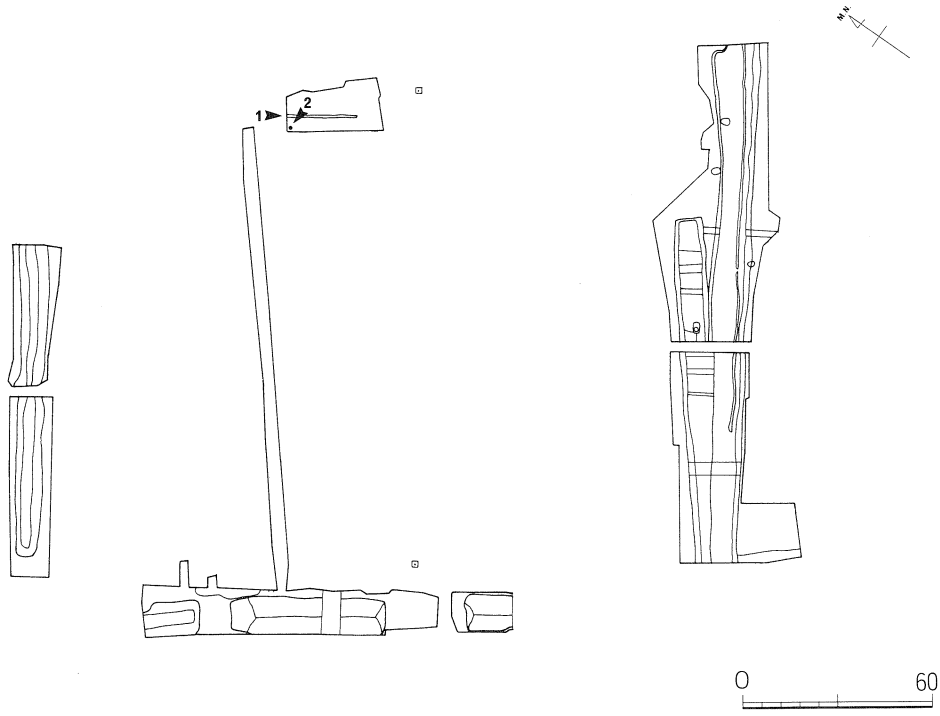
2　遺構面検出状況写真２（北東から）


2
1
N
0
60 m

1　完掘全景写真１（北東から）

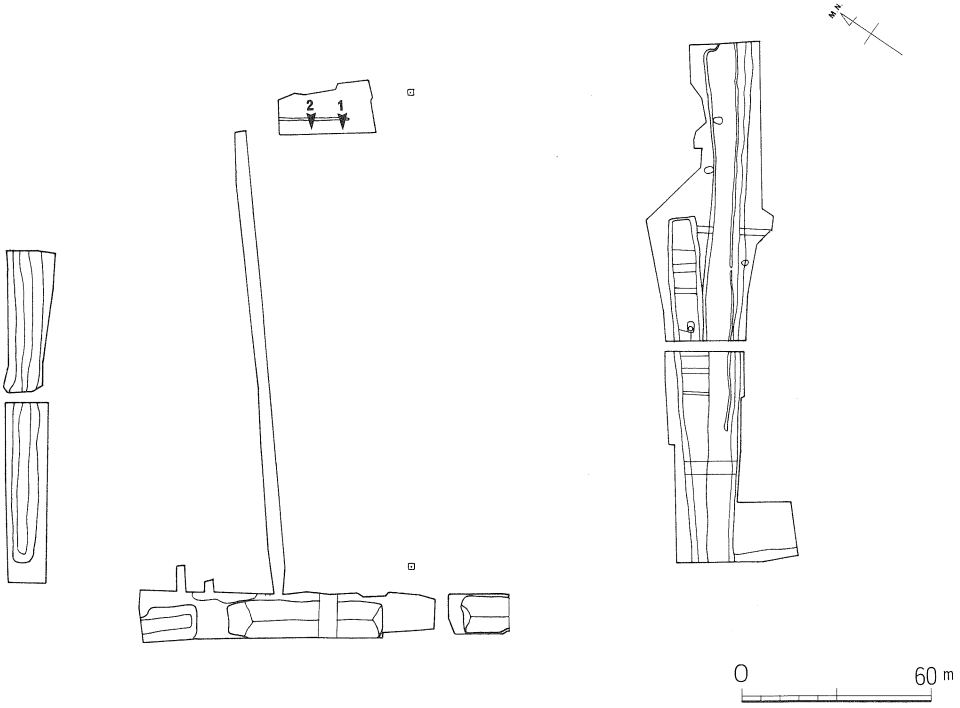


2　完掘全景写真２（北東から）


1
2
N
0
60 m

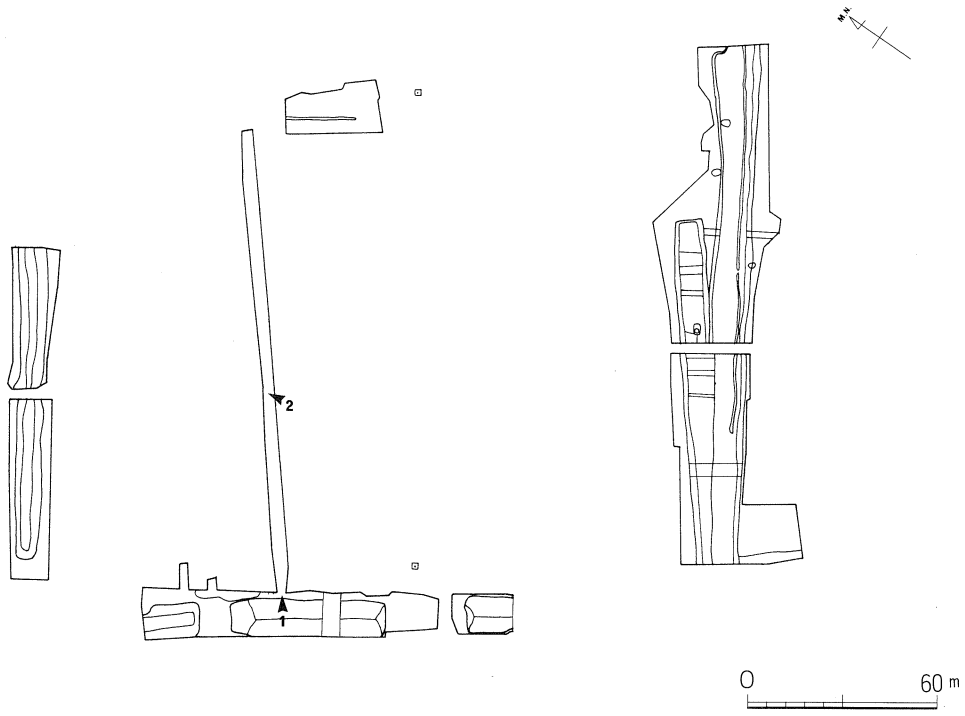
1　ＳＤ01 完掘状況写真（北西から）

2　青磁碗出土状態写真（東から）


2
1
0
60 m

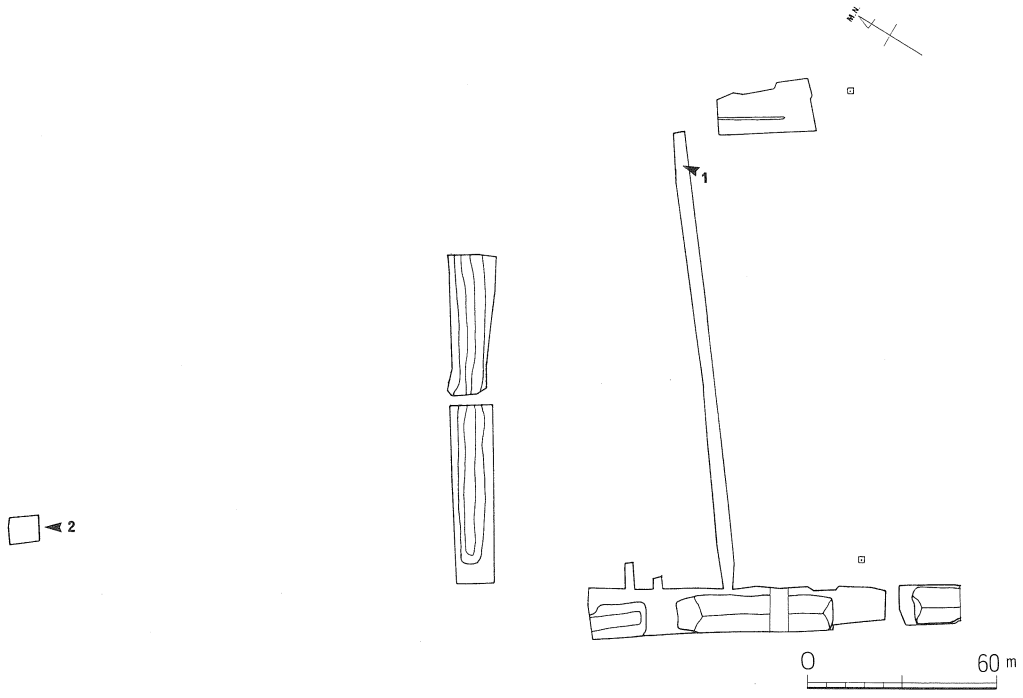
1　西壁層位写真１（Ｘ＝1.5付近，北東から）

2　西壁層位写真２（Ｘ＝2.0付近，北東から）


2
1
0
60 m

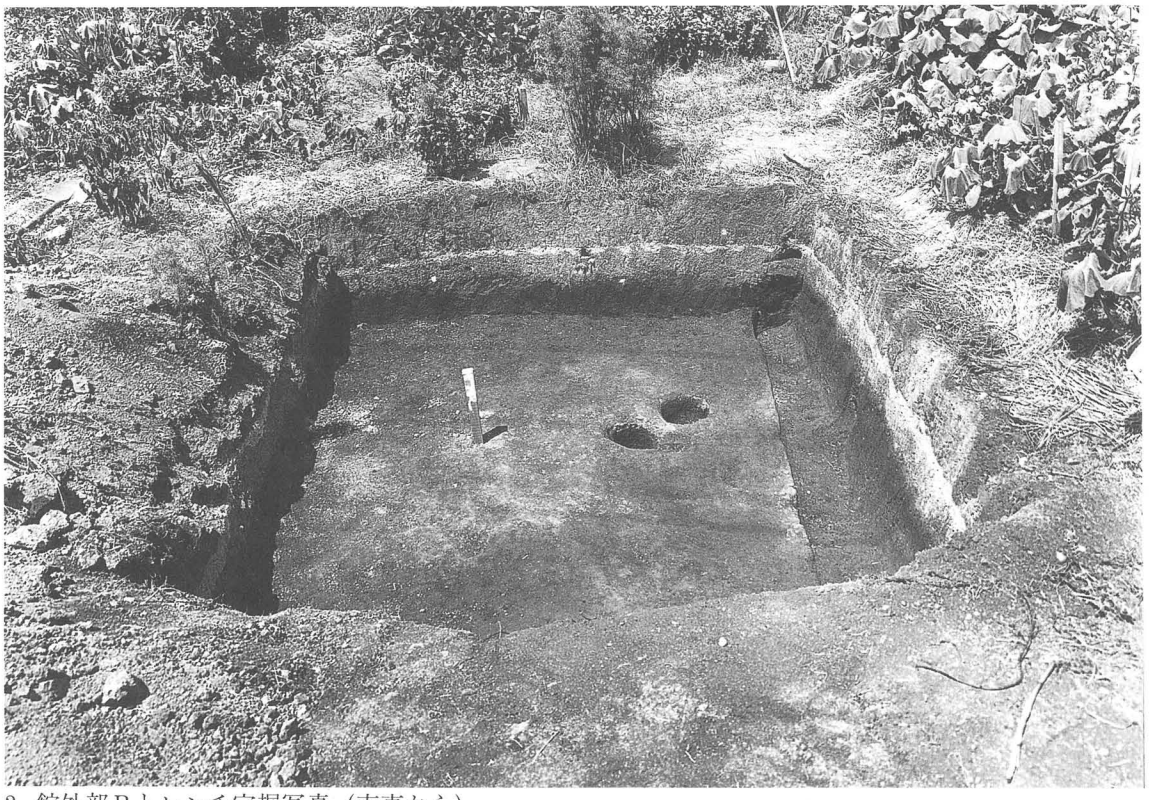
1　館内部Aトレンチ完掘写真（南西から）

2　館内部Aトレンチ層位写真1（南西から）

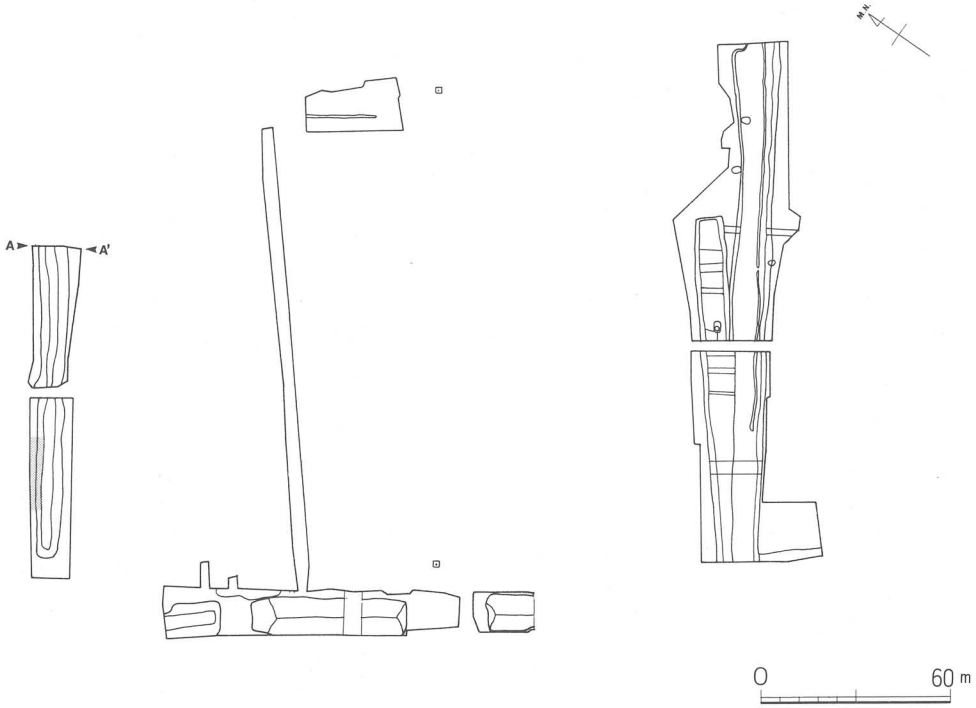

M.N.
1
2
0
60 m

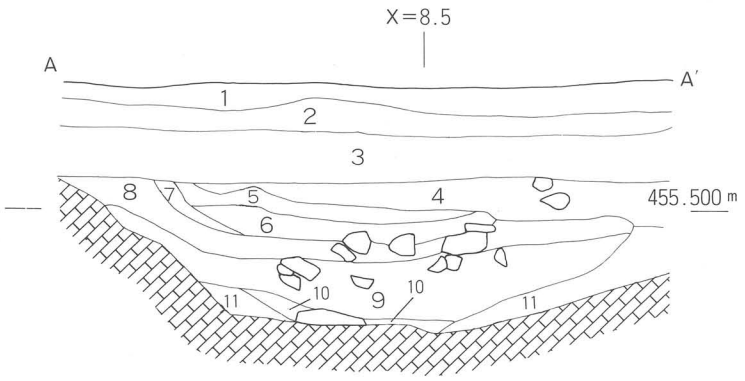
図版三五　江馬氏下館跡館内部Aトレンチ・館外部Bトレンチ

1　館内部Aトレンチ層位写真2（南西から）



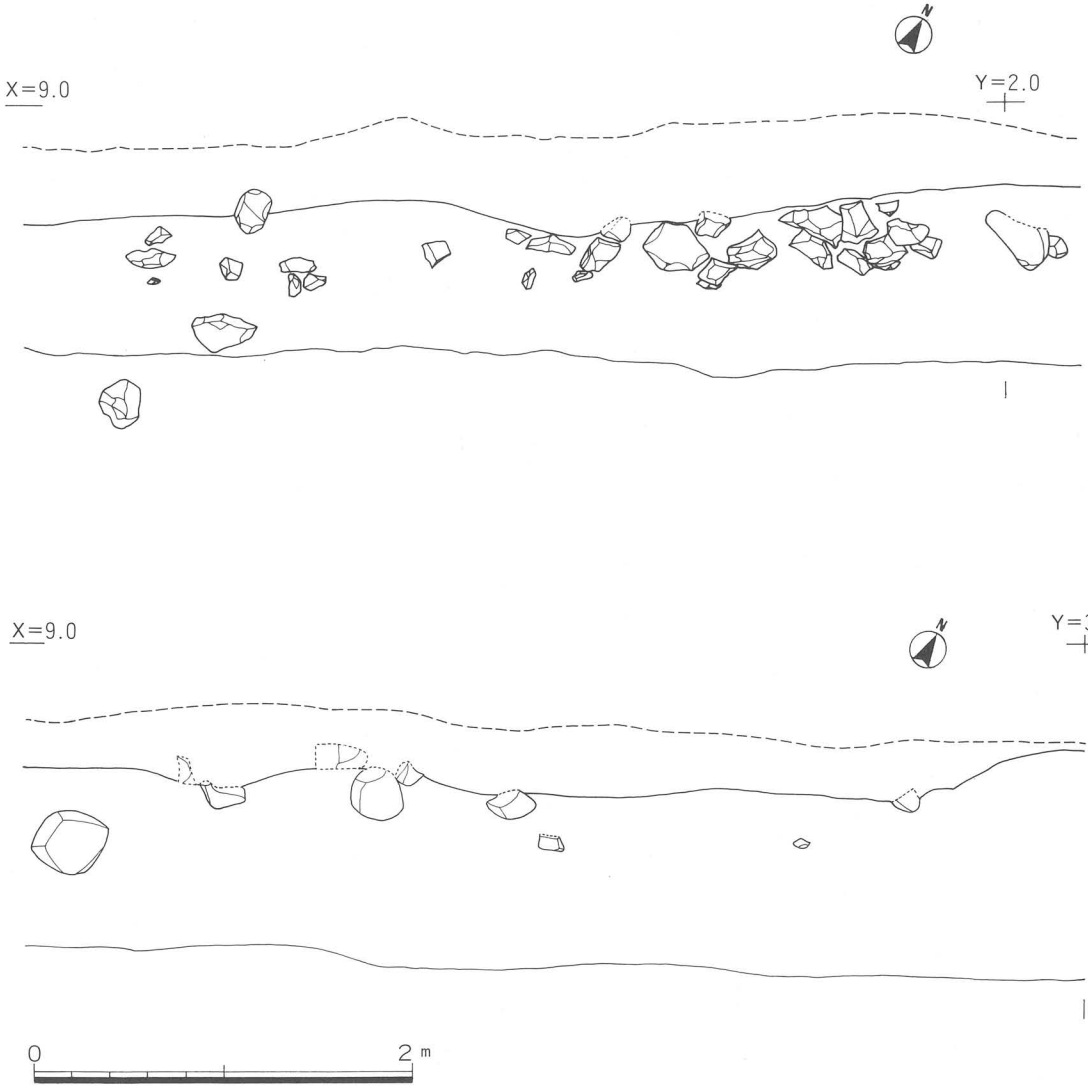
2　館外部Bトレンチ完掘写真（南東から）


A
A'
0
60 m

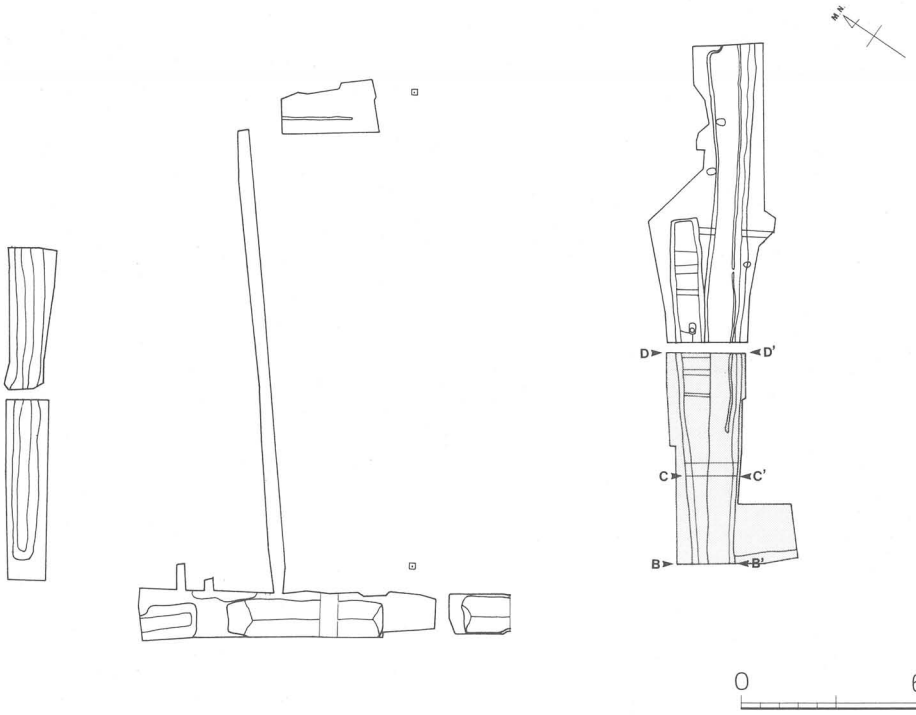


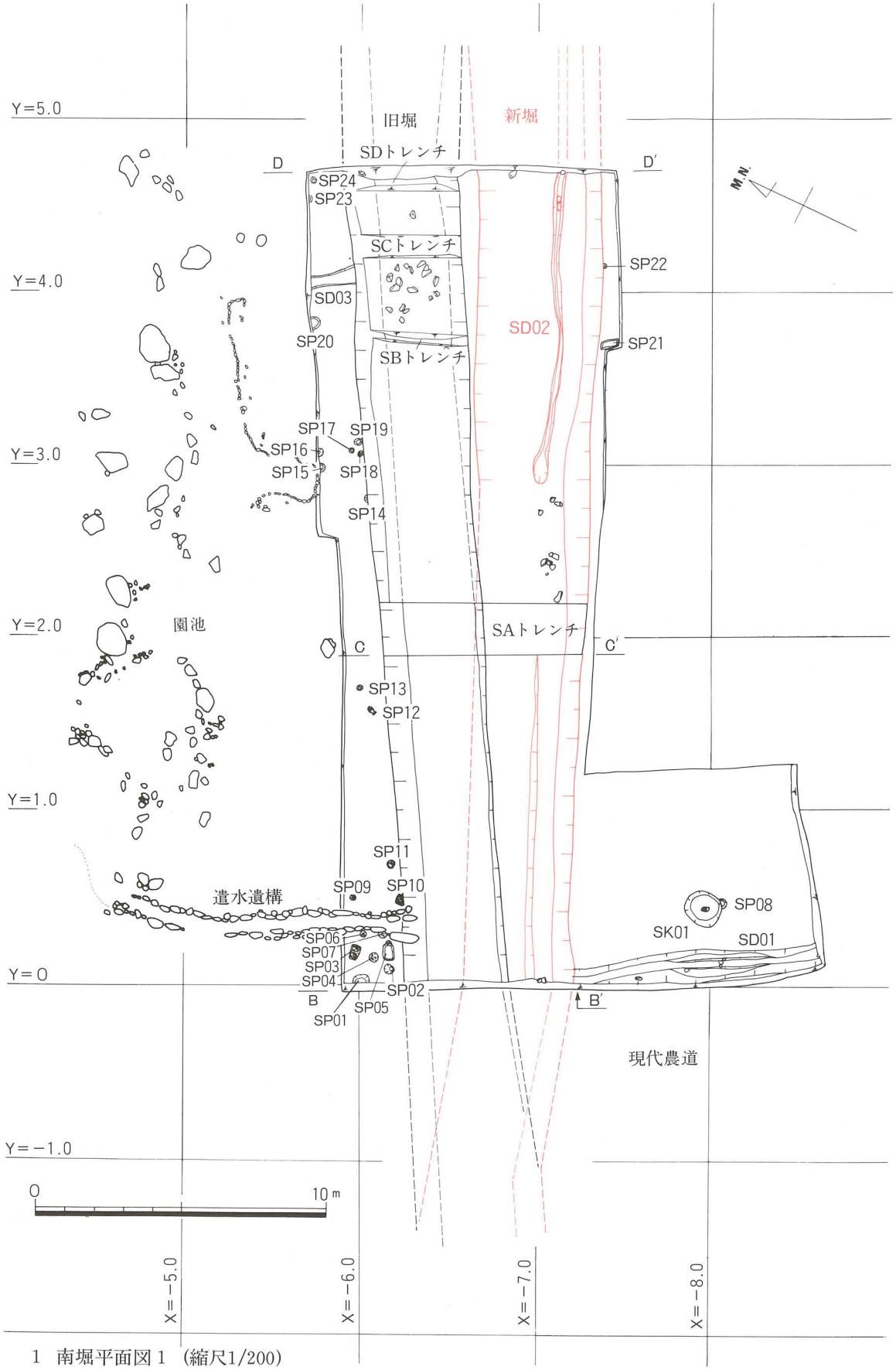
A-A'
1　Hue 10Y5/3 黄褐色砂質土
2　Hue 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（小石混）
3　Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土
（カドミ汚染土）
4　Hue 7.5YR3/1 黒褐色砂質土（礫混）
5　Hue 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（礫混）
＋ Hue 2.5Y5/6 黄褐色土
6　Hue 5Y2/1 黒色粘質土（礫混）
7　Hue 2.5Y4/1 黄灰色土（礫混）
8　Hue 2.5GY2/1 黒色粘質土
9　Hue 5YR2/1 暗黒褐色粘質土(シルト質)
10　Hue 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
11　Hue 10YR4/1 褐灰色粘質土（シルト質）

1　北堀土層断面図（縮尺1/40）

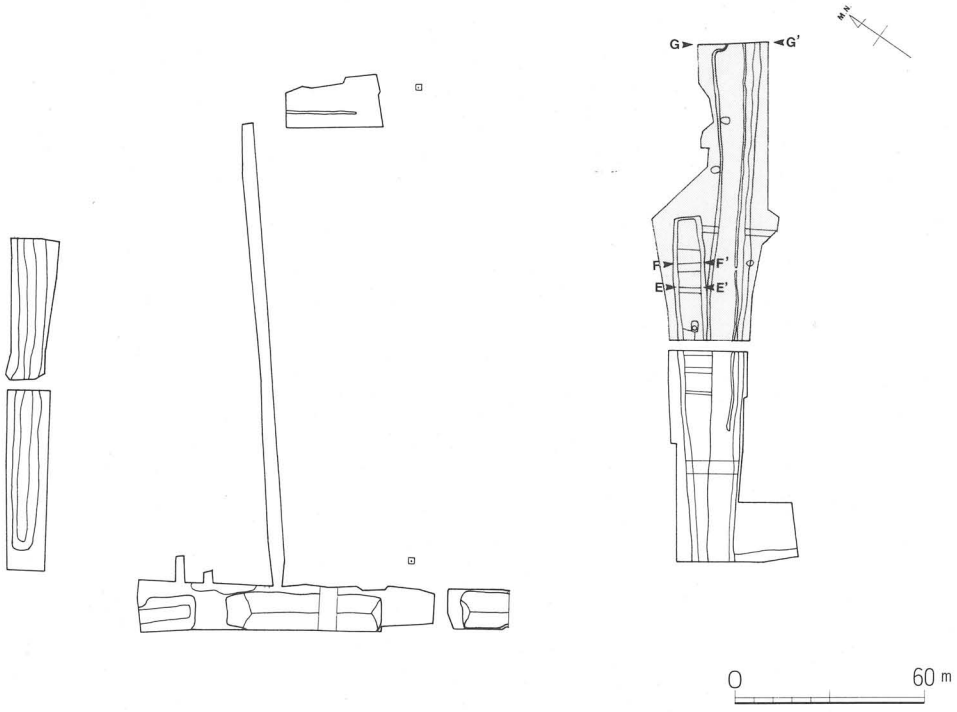


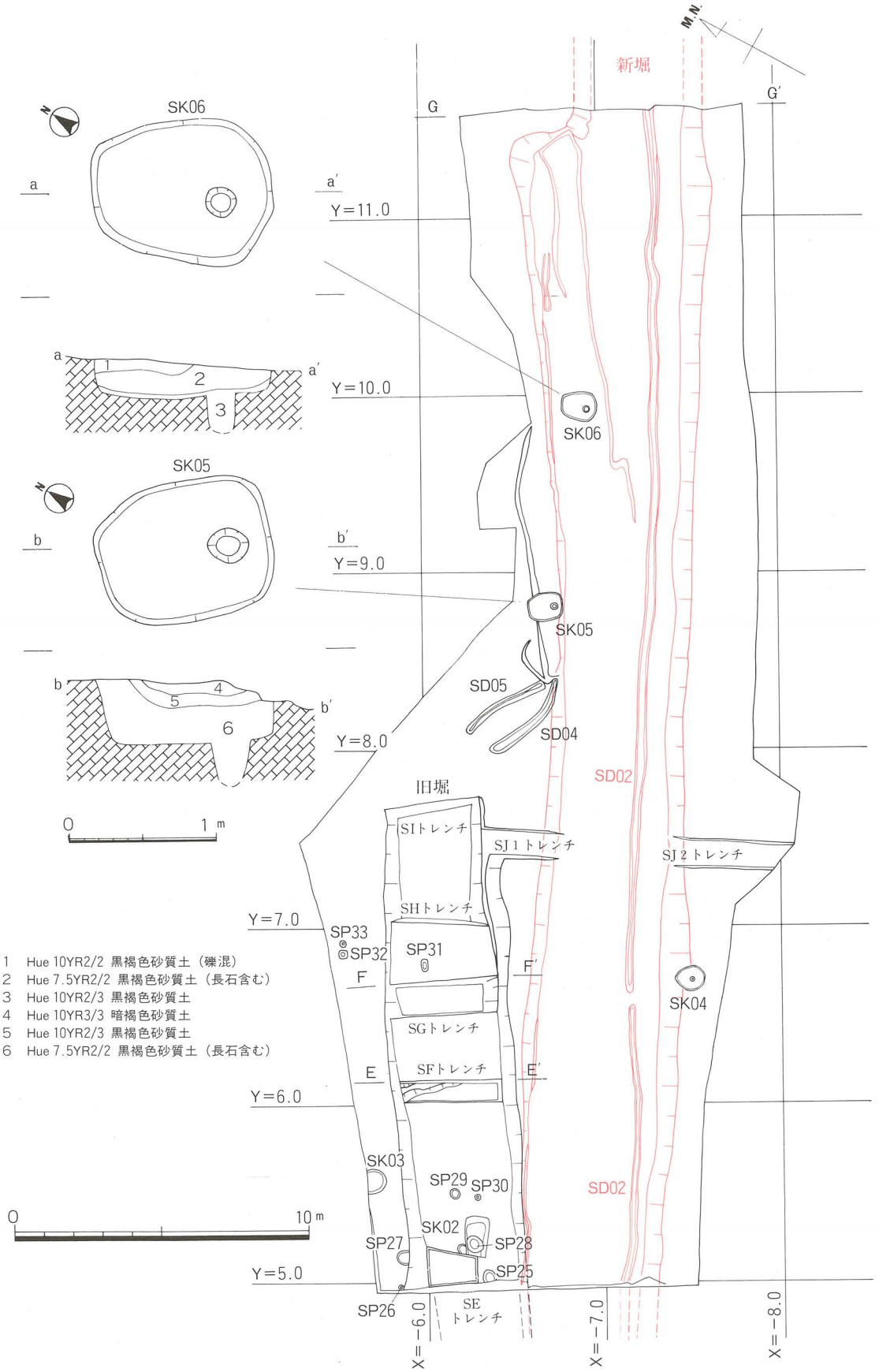
2　北堀堀形平面図（縮尺1/40）


N
D
D'
C
C'
B
B'
0
60 m



1　南堀平面図１（縮尺1/200）


G
G'
F
F'
E
E'
N
0
60 m



1　南堀地区平面図２（縮尺1/200，但し拡大図のみ縮尺1/40）

B-B′
1 Hue 10YR2/2 黒褐色砂質土＋Hue 2.5Y4/6 オリーブ褐色土（シルト質）
2 Hue 7.5YR3/2 黒褐色砂質土
3 Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
4 Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土＋Hue 5YR3/6 暗赤褐色土
5 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山ブロック少量混）
6 Hue 5Y3/2 オリーブ黒色砂質土（地山ブロック混）
7 Hue 2.5Y3/1 黒褐色シルト
8 Hue 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
9 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
10 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（炭含む，地山ブロック混）
11 Hue 2.5Y3.5/3 オリーブ褐色砂質土
12 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土＋Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
13 Hue 10YR2/2 黒褐色粘質土（シルト質，地山ブロック混）
14 Hue 10YR2.5/3 暗褐色砂質土
15 Hue 10YR2/3 黒褐色粘質土（シルト多く含む）
16 Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
17 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
18 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）

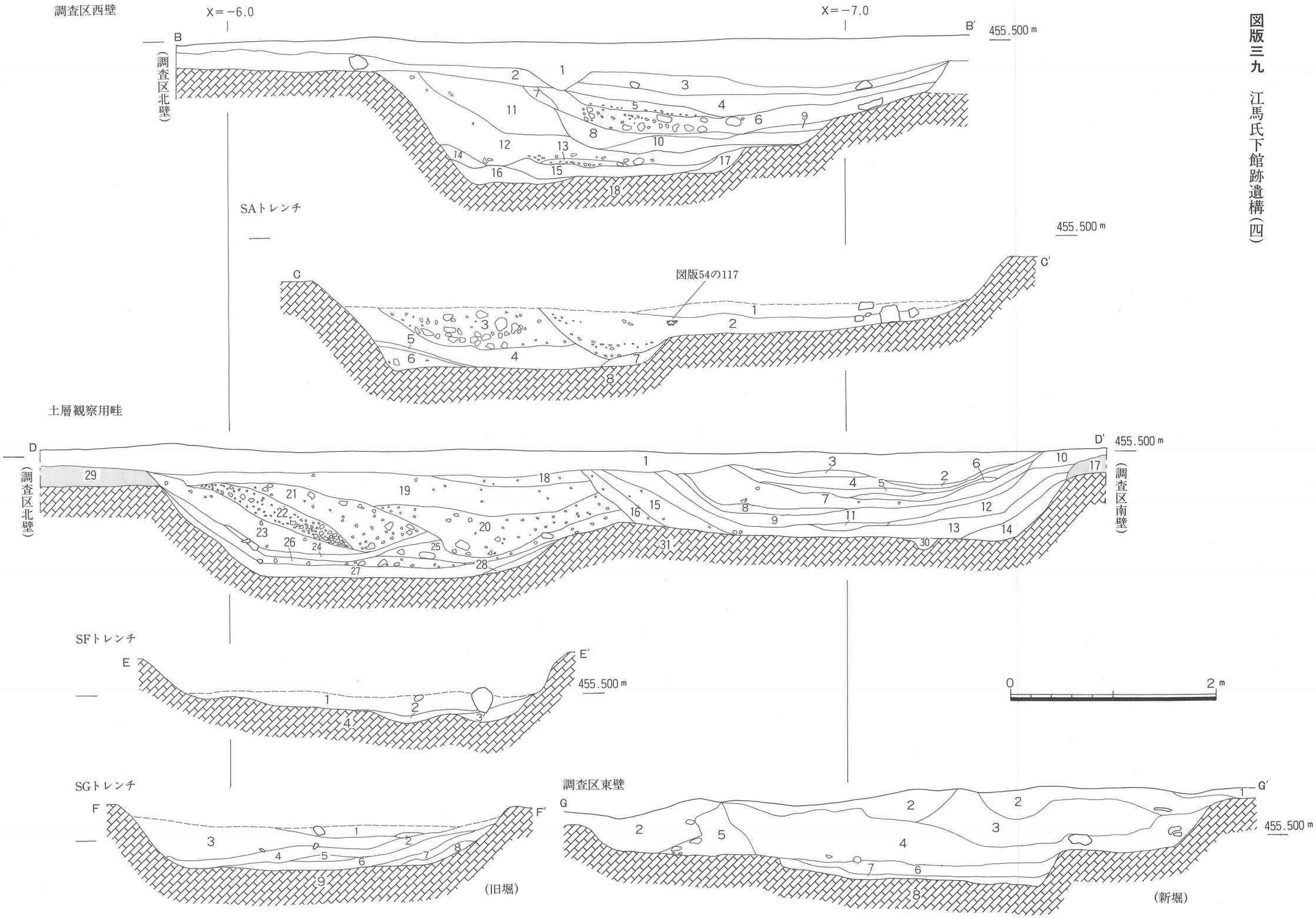
C-C′
1 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土
2 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（炭含む，地山ブロック混）
3 Hue 2.5Y3.5/3 オリーブ褐色砂質土（地山ブロック混）
4 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土＋Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（シルト質）
5 Hue 10YR3/4 暗褐色砂質土
6 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
7 Hue 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
8 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）

D-D′
1 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土＋Hue 10YR4/6 褐色砂質土＋Hue 10YR4/4 褐色砂質土
2 Hue 10YR4/4 褐色砂質土（炭少量混）
3 Hue 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
4 Hue 10YR4/4 褐色砂質土＋Hue 10YR5/6 黄褐色土（炭少量混）
5 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土＋10YR4/6 褐色砂質土（炭混）
6 Hue 10YR4/4 褐色砂質土
7 Hue 10YR3/4 暗褐色砂質土（地山ブロック混）
8 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
9 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土
10 Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土
11 Hue 10YR4/4 褐色砂質土１
12 Hue 10YR4/4 褐色砂質土２
13 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（炭・地山ブロック混）
14 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土＋Hue 10YR6/6 明黄褐色砂質土
15 Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土
16 Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
17 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山１）
18 Hue 2.5Y3.5/4 オリーブ褐色砂質土（地山ブロック混）
19 Hue 10YR3/4 暗褐色砂質土（地山ブロック混）
20 Hue 10YR3/3.5 暗褐色砂質土（地山ブロック混）
21 Hue 2.5Y3.5/3 オリーブ褐色砂質土１（地山ブロック混）
22 Hue 2.5Y3.5/3 オリーブ褐色砂質土２（地山ブロック混）
23 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土＋Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
24 Hue 10YR3/4 暗褐色砂質土（地山ブロック少量混）
25 Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土（地山ブロック混）
26 Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
27 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
28 Hue 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
29 Hue 10YR3/4 暗褐色砂質土（地山１）
30 Hue 7.5YR3/1 黒褐色シルト（SD01埋土）
31 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）

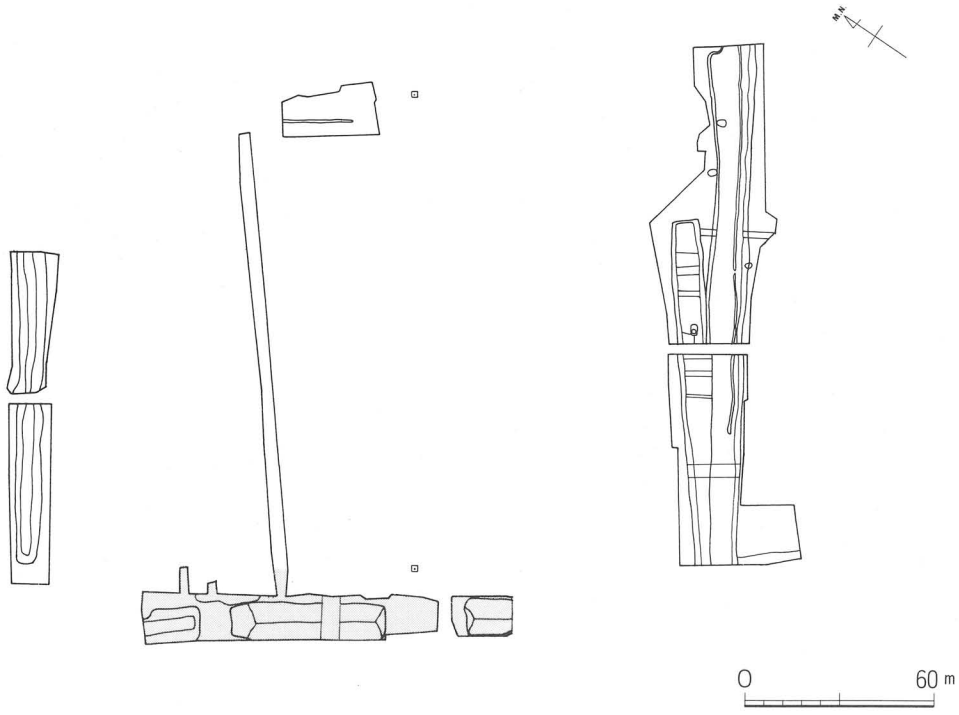
E-E′
1 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
2 Hue 7.5YR2/2 黒褐色砂質土（礫多く含む）
3 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（地山ブロック混）
4 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）

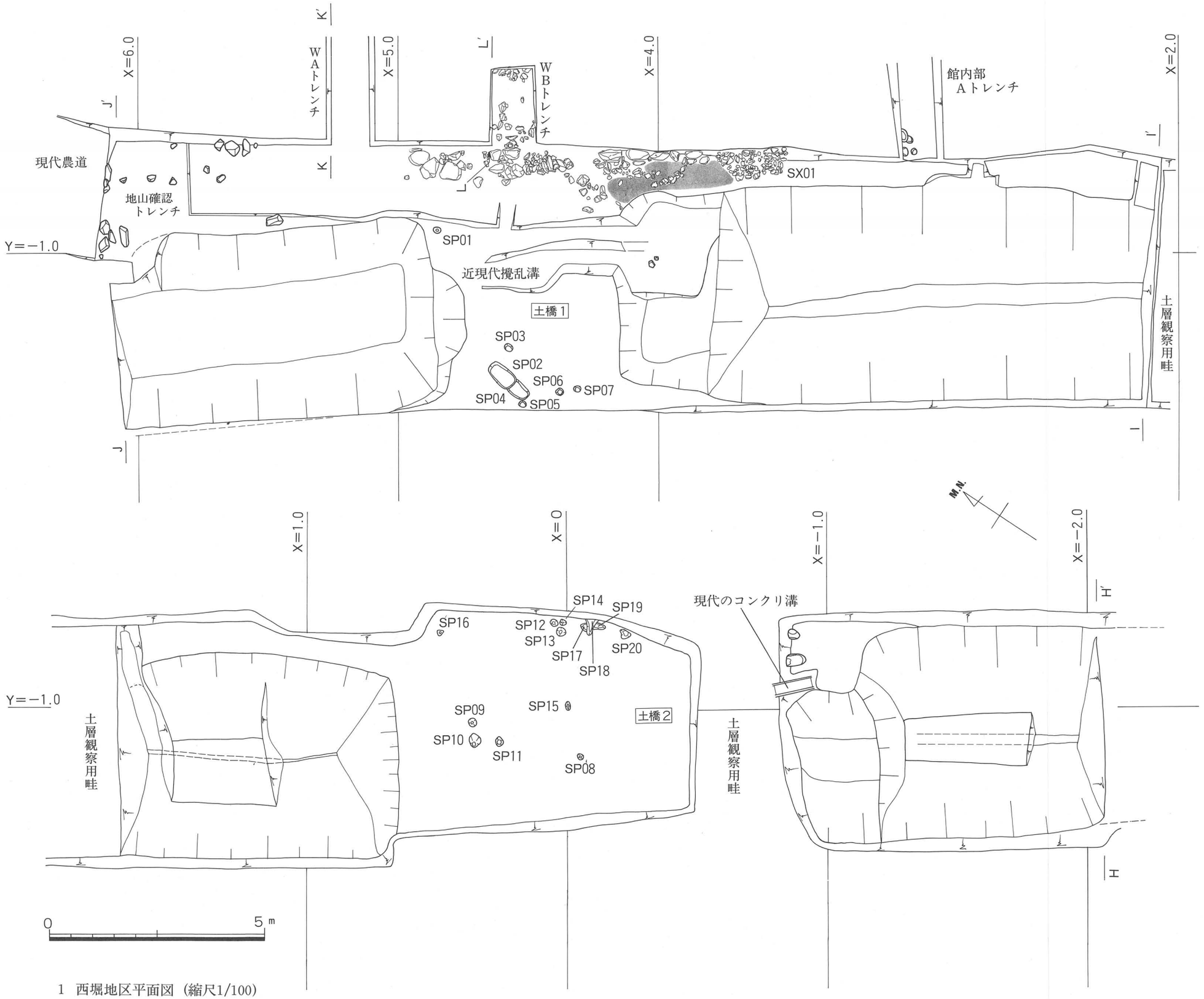
F-F′
1 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土
2 Hue 10YR2/2 黒褐色砂質土
3 Hue 10YR2/2 黒褐色砂質土（礫多く含む，地山ブロック混）
4 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（地山ブロック混）
5 Hue7.5YR2/2 黒褐色砂質土
6 Hue 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土（礫多く含む）
7 Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土（地山ブロック混）
8 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土（地山ブロック混）
9 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）

G-G′
1 Hue 7.5YR3/1 黒褐色土（小石混）
2 Hue 10YR2/3 黒褐色粘質土
3 Hue 2.5Y3/2 黒褐色土（礫含む）
4 Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土＋Hue 10YR6/6 明黄褐色砂質土
5 Hue 10YR3/4 暗褐色土（礫・鉄分含む）
6 Hue 10YR4/4 褐色砂質土
7 Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（炭含む）
8 Hue 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（地山２）



1　南堀土層断面図（縮尺1/40）

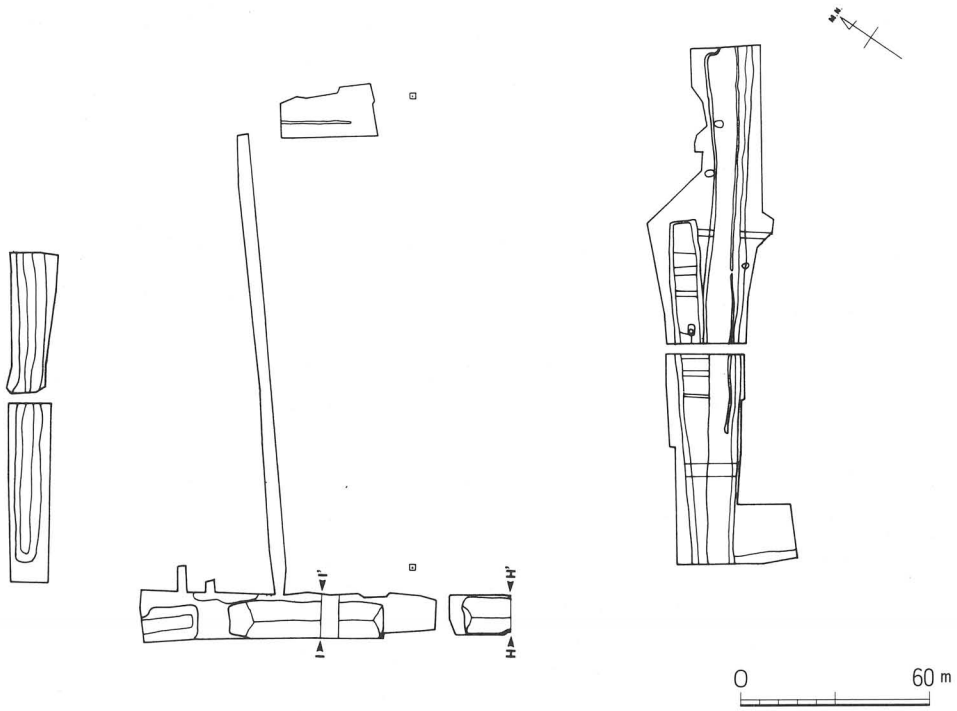

M.N.
0
60 m



1　西堀地区平面図（縮尺1/100）

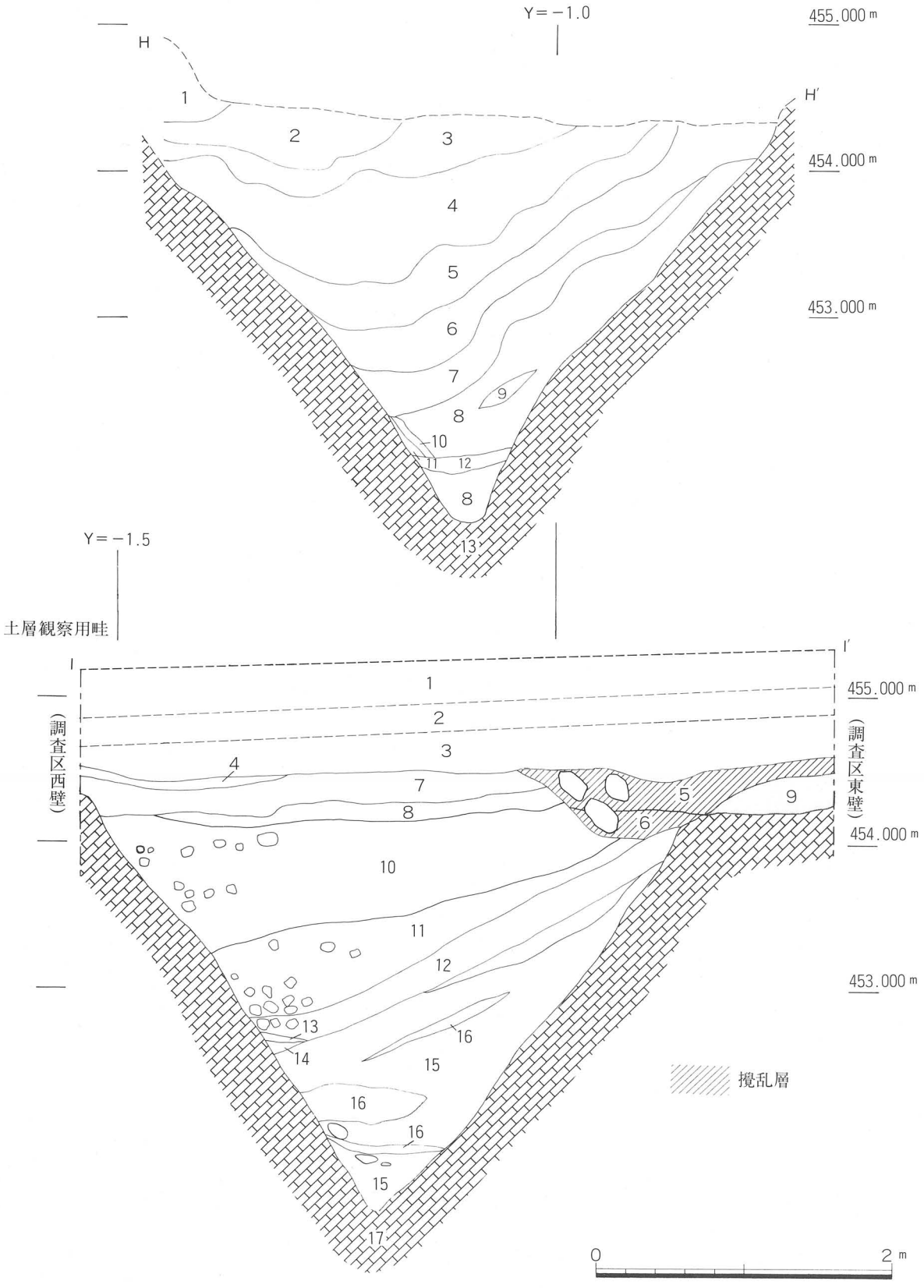
H-H′

1　Hue 10YR3/2 黒褐色粘質土
2　Hue 5YR2/1 黒褐色土（小石混）
3　Hue 5YR2/1 黒褐色粘質土1
4　Hue 2.5Y4/1 黄灰色砂質土（小石，地山ブロック混）
5　Hue 10YR2/1 黒褐色粘質土（小石，地山ブロック混）
6　Hue 5YR2/1 黒褐色粘質土2
7　Hue 10YR1.7/1 黒色粘質土（地山ブロック混）
8　Hue 10YR4/1 褐灰色砂質土（小石混）
9　Hue N5/0 灰色土（小石混）
10　Hue 5YR3/2 暗赤灰色粘質土
11　Hue 2.5GY6/1 オリーブ灰色砂質土
12　Hue 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土（小石混）
13　Hue 10BG4/1 暗青灰色砂質土（地山2）

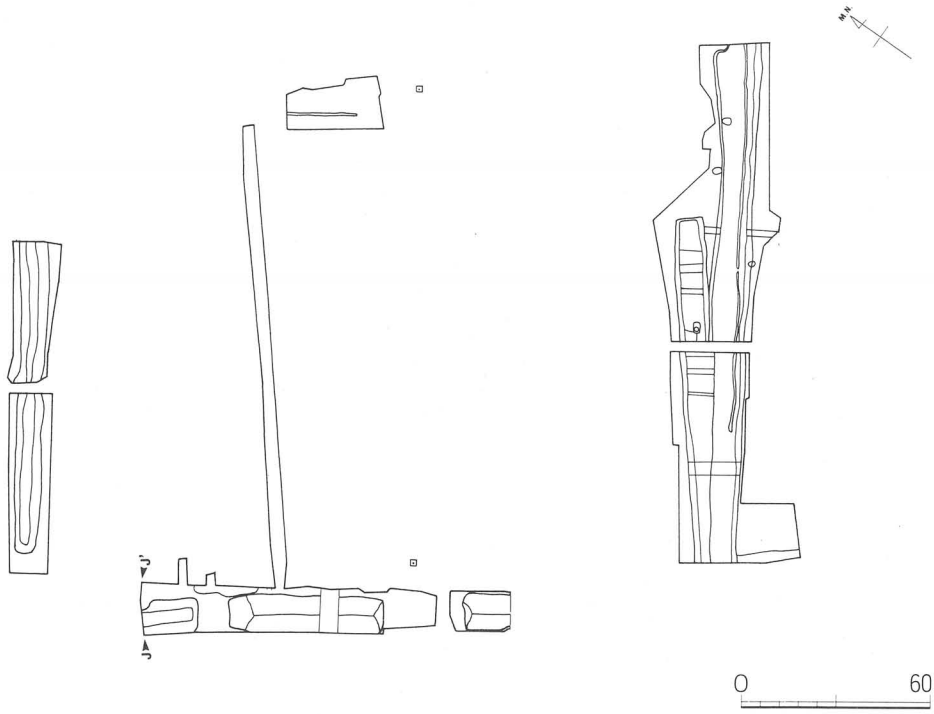


I-I′

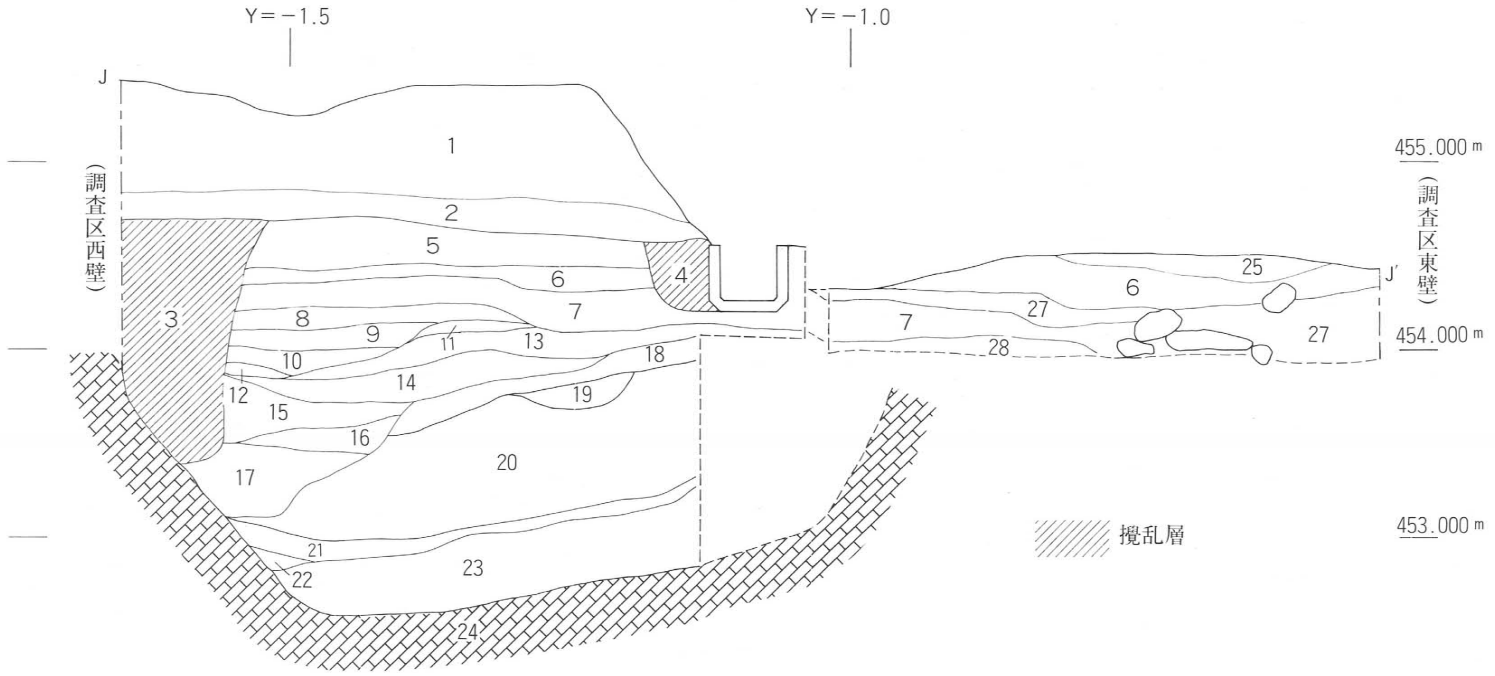
1　Hue 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
2　Hue 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（小石混）
3　Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土（カドミ汚染土）
4　Hue 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土（小石混）
5　Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土（礫，小石混）
6　Hue 10YR6/3 にぶい黄橙色土（礫，小石混）
7　Hue 5YR2/1 黒褐色土（小石混）
8　Hue 7.5YR3/1 黒褐色土（小石混）
9　Hue 10YR2/2 黒褐色土（地山1）
10　Hue 7.5YR2/1 黒色土（小石，地山ブロック混）
11　Hue 2.5Y4/1 黄灰色砂質土（小石，地山ブロック混）
12　Hue 10YR1.7/1 黒色粘質土（地山ブロック混）
13　Hue 5Y4/1 灰色砂質土
14　Hue 2.5YR1.7/1 赤黒色粘質土
15　Hue 10YR4/1 褐灰色砂質土（小石混）
16　Hue N4/0 灰色砂質土
17　Hue 10BG4/1 暗青灰色砂質土（地山2）



1　西堀土層断面図１（縮尺1/40）

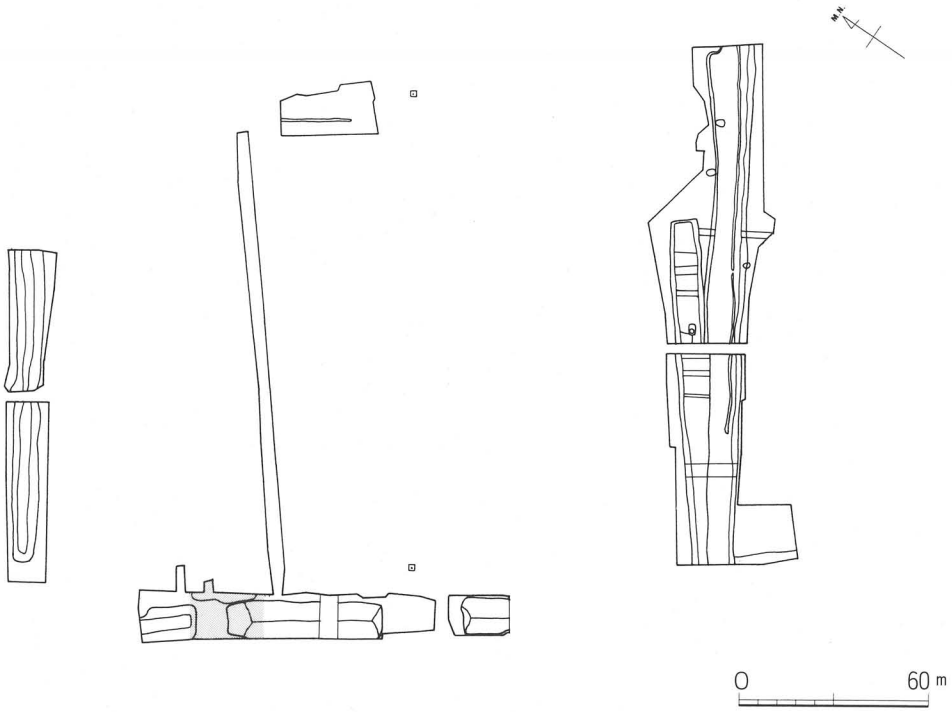

N
J
J'
0
60 m

1　西堀土層断面図2（縮尺1/40）

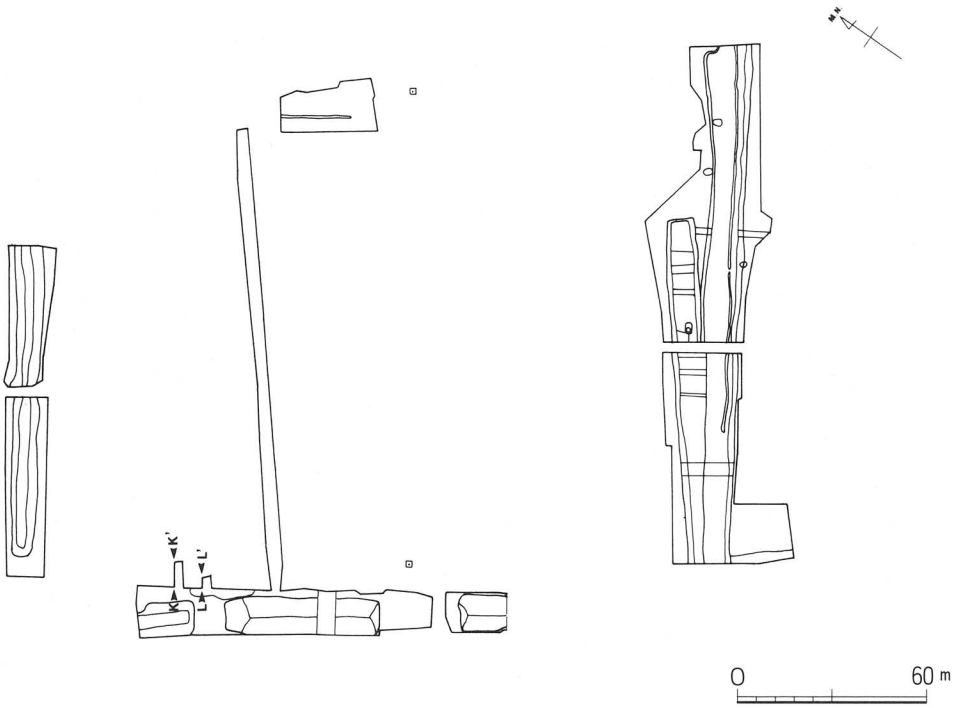


J-J′

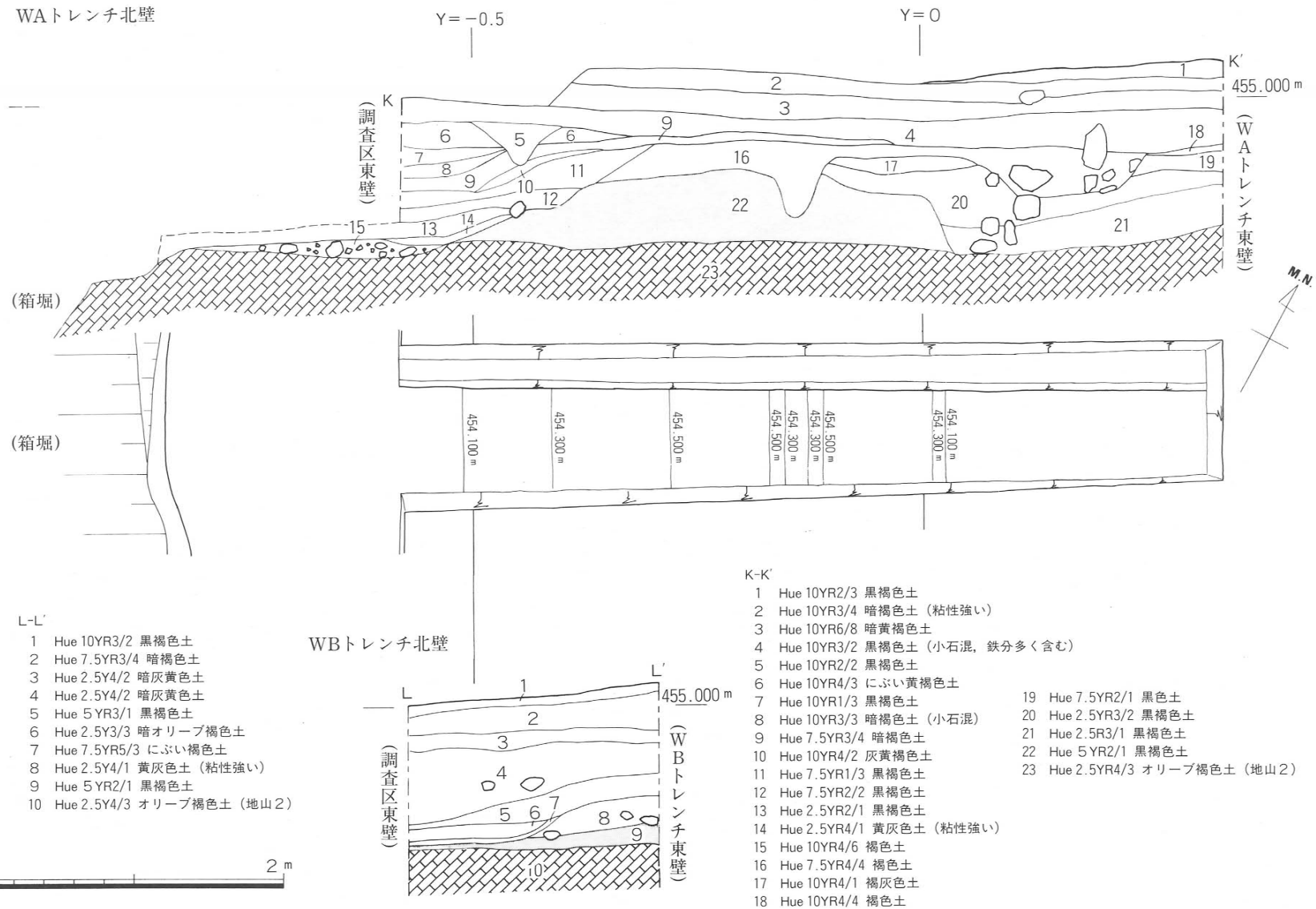
1　Hue 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
2　Hue 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（小石混）
3　Hue 10YR3/1 黒褐色土（小石混）
4　Hue 2 5Y3/2 黒褐色粘質土
5　Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土（カドミ汚染土）
6　Hue 10YR4/3 にぶい黄褐色土（小石混，鉄分多く含む）
7　Hue 10YR3/4 暗褐色土（小石混）
8　Hue 10YR2/1 黒色土
9　Hue 5Y3/2 オリーブ黒色土（小石，地山ブロック混）
10　Hue 2.5Y4/2 暗灰黄色弱粘質土
11　Hue 7.5YR2/1 黒色土（黄色砂ブロック混）
12　Hue 2.5Y2/1 黒色弱粘質土
13　Hue 10YR3/3 暗褐色弱粘質土（小石混）
14　Hue 5YR1.7/1 黒色弱粘質土（黄色砂，黒色土ブロック混）
15　Hue 10YR2/3 黒褐色弱粘質土（小石混）
16　Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土（黒色土ブロック混）
17　Hue 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（黒色土ブロック混）
18　Hue 7.5YR3/2 黒褐色砂質土
19　Hue 5YR4/1 褐灰色砂質土（小石，地山ブロック混）
20　Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土（小石，地山ブロック混）
21　Hue 5Y3/2 オリーブ黒色粘土
22　Hue 2.5Y3/1 黒褐色粘土
23　Hue 5Y4/1 灰色砂質土（褐色土混）
24　Hue 10Y4/1 灰色砂質土（地山2）
25　Hue 5YR3/1 黒褐色土（小石，地山ブロック混）
26　Hue 2.5YR3/1 暗赤灰色土（小石，地山ブロック混）
27　Hue 7.5YR3/1 黒褐色弱粘質土
28　Hue 5YR2/2 黒褐色弱粘質土（小石混）


N
0
60 m

1　西堀地区土橋1平面図（縮尺1/40）


K'
L'
0
60 m

1　西堀地区WAトレンチ平面図・土層断面図（縮尺1/40）

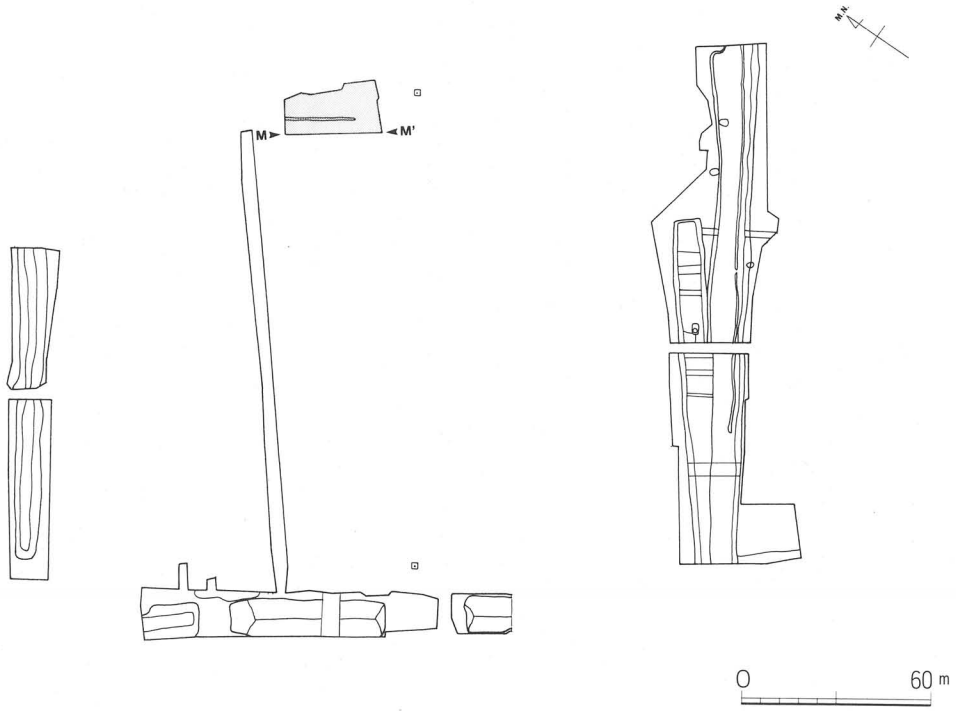


K-K′

1　Hue 10YR2/3 黒褐色土
2　Hue 10YR3/4 暗褐色土（粘性強い）
3　Hue 10YR6/8 暗黄褐色土
4　Hue 10YR3/2 黒褐色土（小石混，鉄分多く含む）
5　Hue 10YR2/2 黒褐色土
6　Hue 10YR4/3 にぶい黄褐色土
7　Hue 10YR1/3 黒褐色土
8　Hue 10YR3/3 暗褐色土（小石混）
9　Hue 7.5YR3/4 暗褐色土
10　Hue 10YR4/2 灰黄褐色土
11　Hue 7.5YR1/3 黒褐色土
12　Hue 7.5YR2/2 黒褐色土
13　Hue 2.5YR2/1 黒褐色土
14　Hue 2.5YR4/1 黄灰色土（粘性強い）
15　Hue 10YR4/6 褐色土
16　Hue 7.5YR4/4 褐色土
17　Hue 10YR4/1 褐灰色土
18　Hue 10YR4/4 褐色土
19　Hue 7.5YR2/1 黒色土
20　Hue 2.5YR3/2 黒褐色土
21　Hue 2.5R3/1 黒褐色土
22　Hue 5YR2/1 黒褐色土
23　Hue 2.5YR4/3 オリーブ褐色土（地山２）

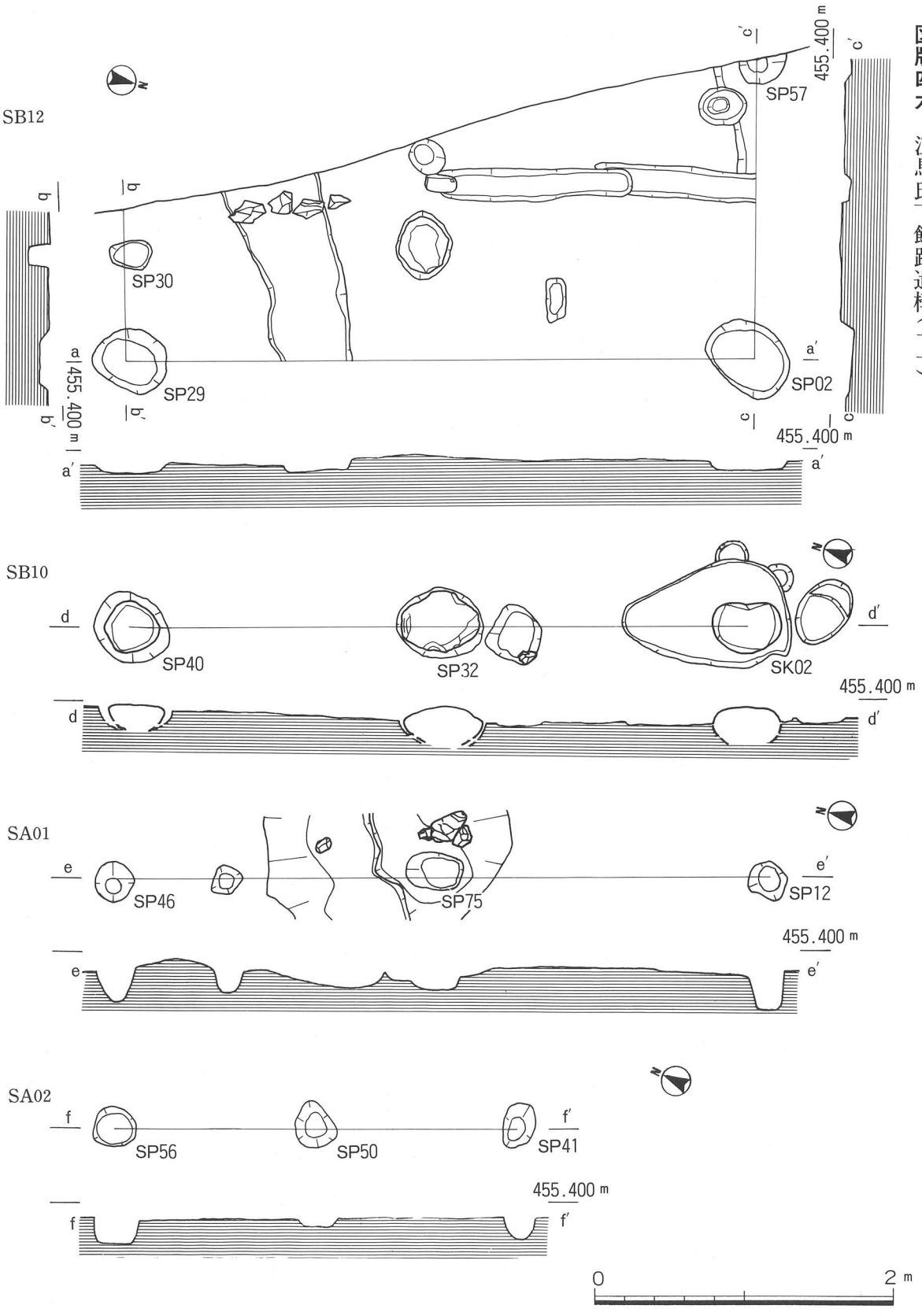
L-L′

1　Hue 10YR3/2 黒褐色土
2　Hue 7.5YR3/4 暗褐色土
3　Hue 2.5Y4/2 暗灰黄色土
4　Hue 2.5Y4/2 暗灰黄色土
5　Hue 5YR3/1 黒褐色土
6　Hue 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土
7　Hue 7.5YR5/3 にぶい褐色土
8　Hue 2.5Y4/1 黄灰色土（粘性強い）
9　Hue 5YR2/1 黒褐色土
10　Hue 2.5Y4/3 オリーブ褐色土（地山２）

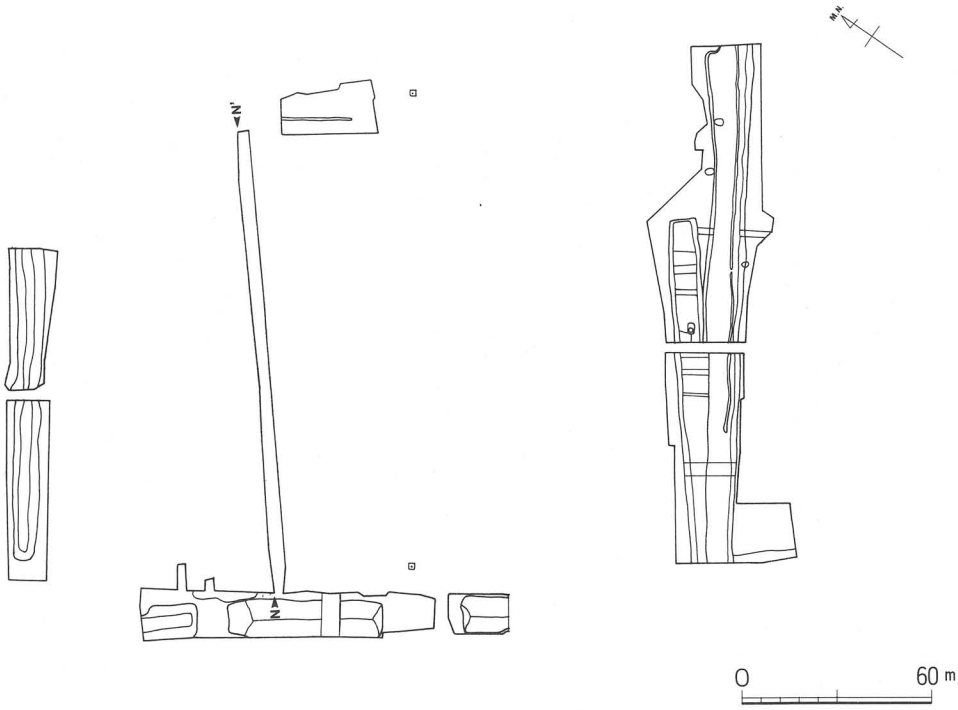

M
M'
M'
M
0
60 m

図版四五　江馬氏下館跡遺構(一〇)

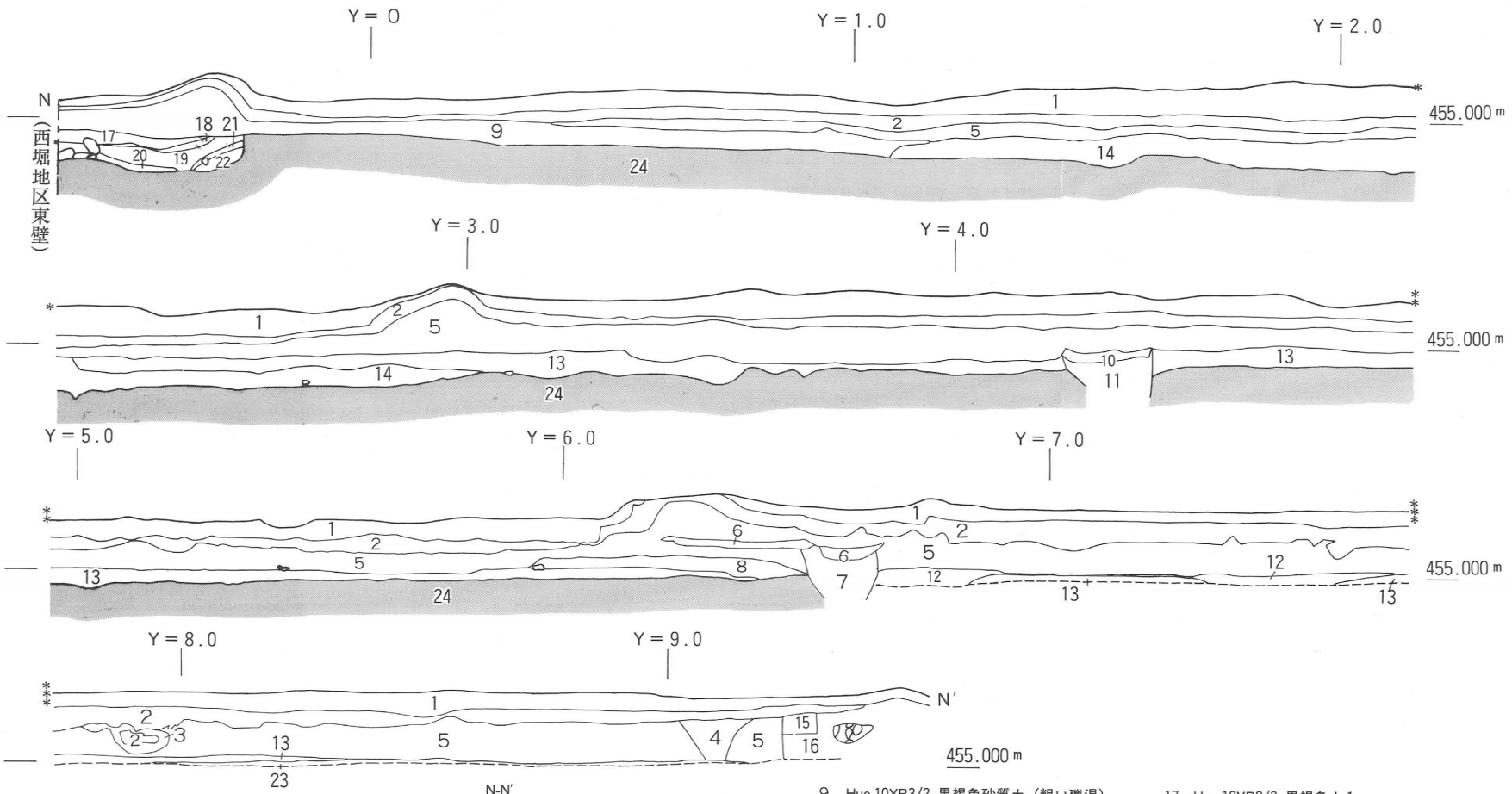
1　館内部地区平面図・土層断面図（縮尺1/50）



1　館内部地区礎石建物・柵列実測図（縮尺1/40）


N
N
N
0
60 m

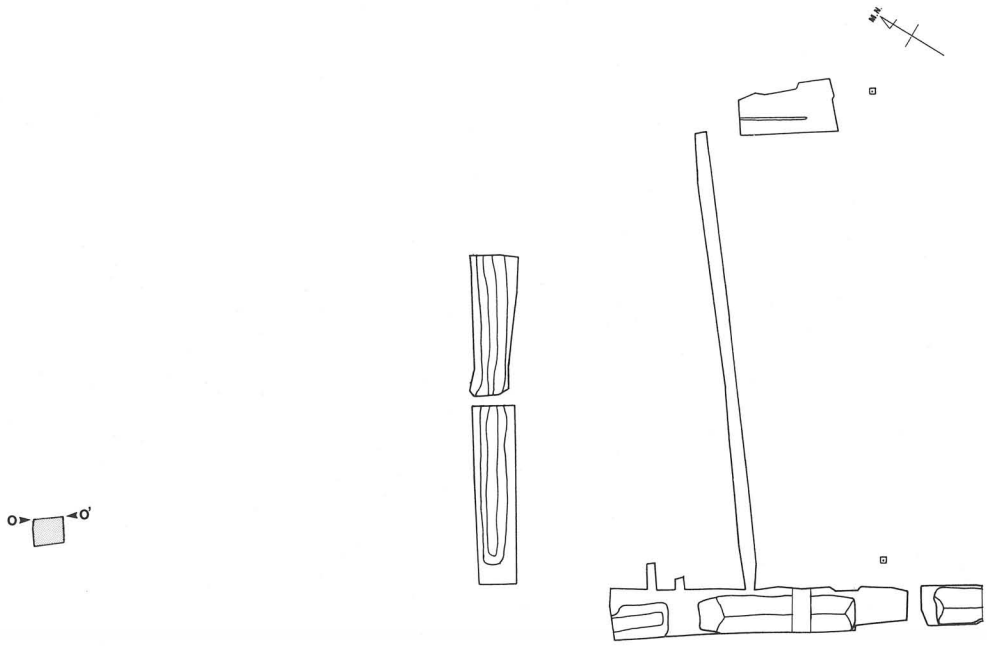
1　館内部Aトレンチ土層断面図（縮尺1/80）

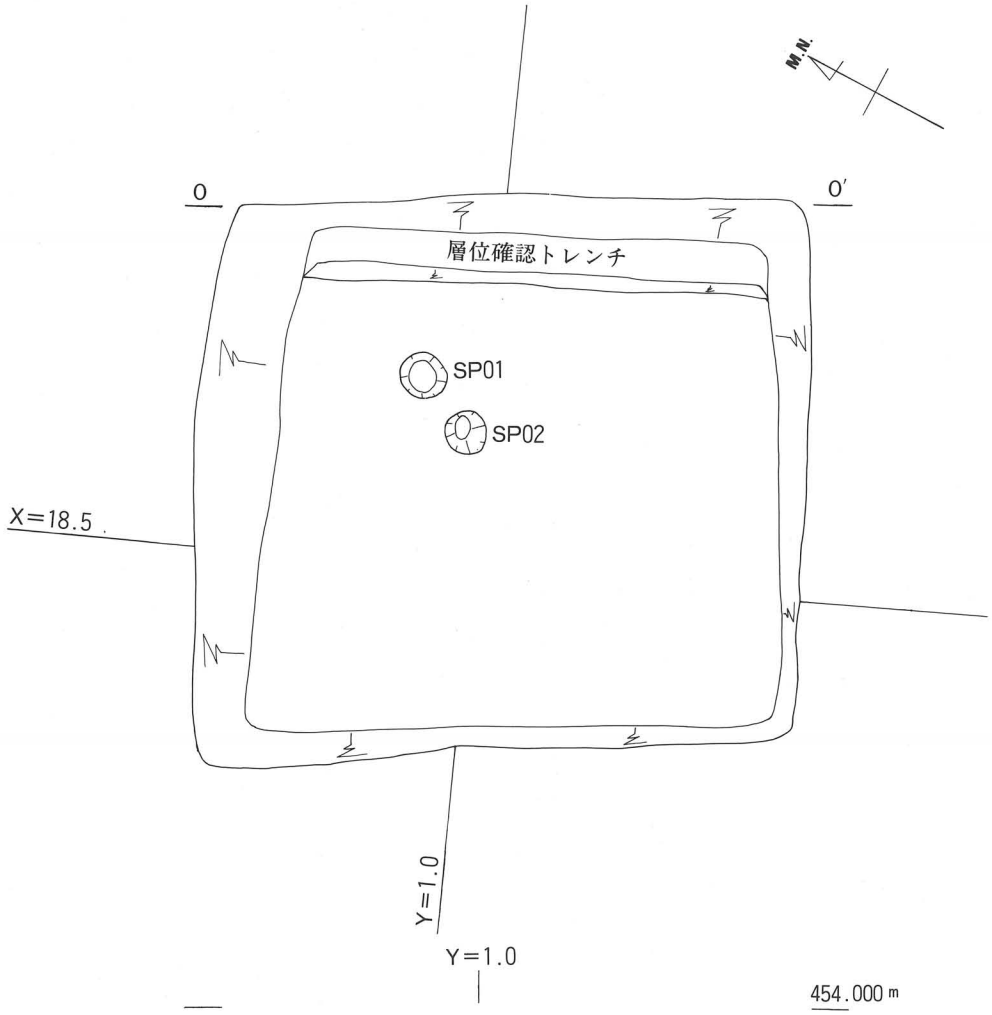


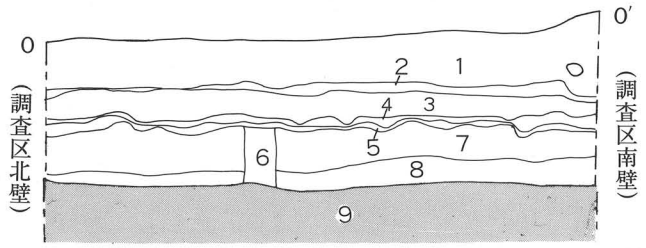
N-N′

1　Hue 2.5Y5/3 黄褐色砂質土（表土）
2　Hue 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（小石混）
3　Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土（礫混）
4　Hue 7.5YR3/2 黒褐色砂質土＋Hue 25YR4/6 赤褐色土
5　Hue 2.5Y5/1 黄灰色砂質土（粗い礫混）
6　Hue 10YR3/2 黒褐色弱粘質土（礫混）
7　Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土
8　Hue 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（礫混）
9　Hue 10YR3/2 黒褐色砂質土（粗い礫混）
10　Hue 2.5Y5/3 黄褐色土（礫混）
11　Hue 7.5YR4/1褐灰色砂質土（粗い礫混）
12　Hue 10YR1.7/1 黒色砂質土＋Hue2.5Y3/2 黒褐色土（礫混）
13　Hue 7.5YR2/2 暗黒褐色砂質土（粗い礫混）
14　Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土
15　Hue 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（礫混）
16　Hue 10YR1.7/1 黒色粘質土
17　Hue 10YR2/3 黒褐色土1
18　Hue 2.5Y2/1 黒色弱粘質土（微砂混）
19　Hue 10YR2/3 黒褐色土2
20　Hue 10YR3/1 黒褐色弱粘質土（微砂混）
21　Hue 7.5YR2/2 暗黒褐色弱粘質土
22　Hue 2.5Y3/2 黒褐色弱粘質土
23　Hue 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
24　Hue 2.5Y2/1 黒色弱粘質土（地山1）

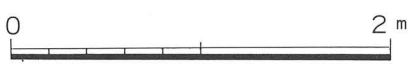
図版四十　江馬氏下館跡遺構（Ⅲ）


O
O'
N



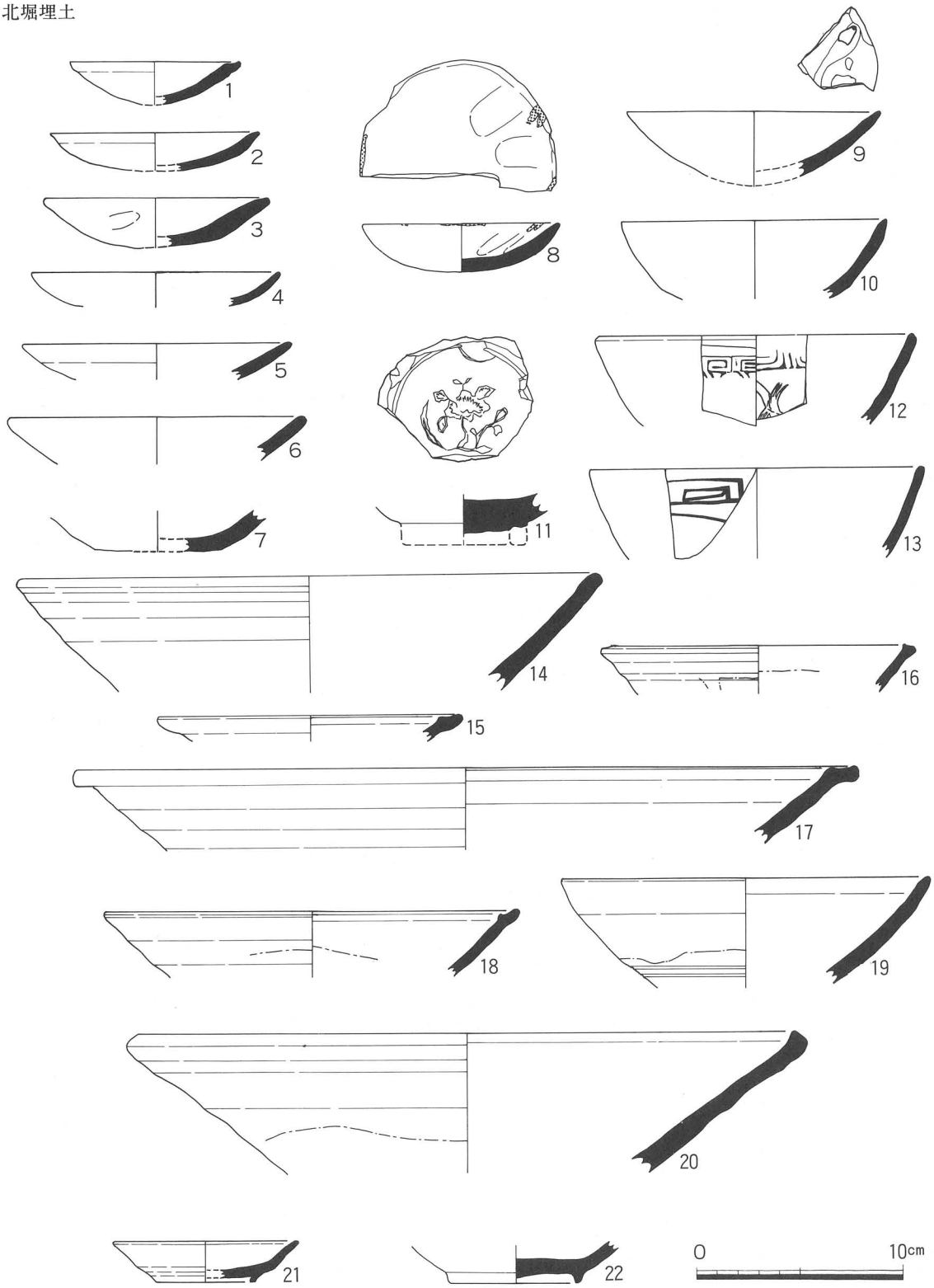


0-0′
1　Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土（粘土ブロック混）
2　Hue 10YR6/8 明黄褐色粘質土
3　Hue 10YR2/3 黒褐色砂質土（小石混，カドミ汚染土）
4　Hue 5YR4/2 灰褐色粘質土（鉄分堆積）
5　Hue 10YR2/3 黒褐色粘質土
6　Hue 7.5YR3/3 暗褐色粘質土（遺構埋土）
7　Hue 7.5YR2/2 黒褐色粘質土
8　Hue 10YR3/2 黒褐色粘質土（小石混）
9　Hue 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（小石混）

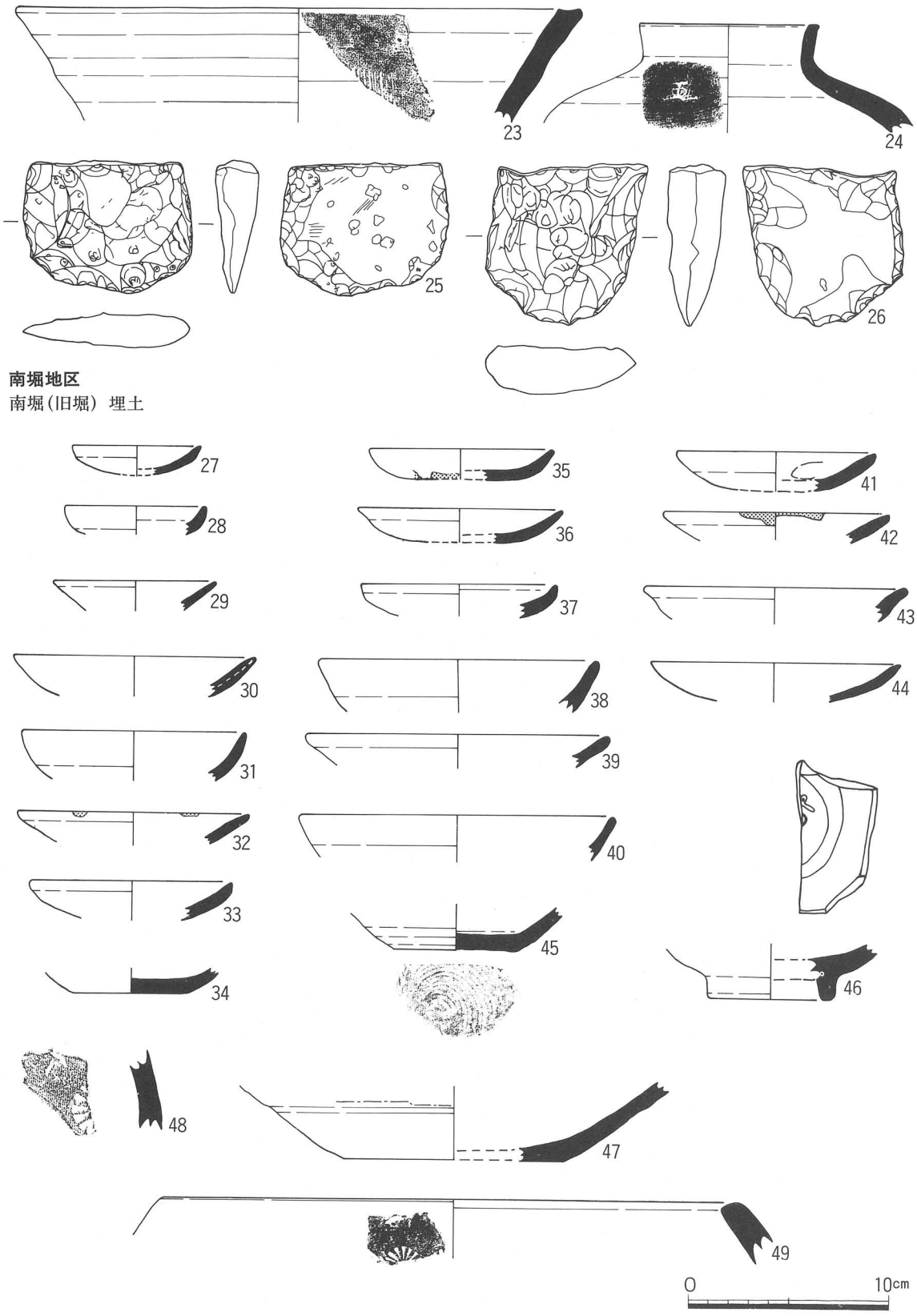


1　館外部Bトレンチ平面図・土層断面図（縮尺1/40）

北堀地区
北堀埋土



(縮尺1/3)



南堀地区
南堀(旧堀)　埋土

(縮尺1/3)

南堀(新堀)　埋土D－D′セクション14

50

南堀(新堀)　埋土　最下層粘質土層

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

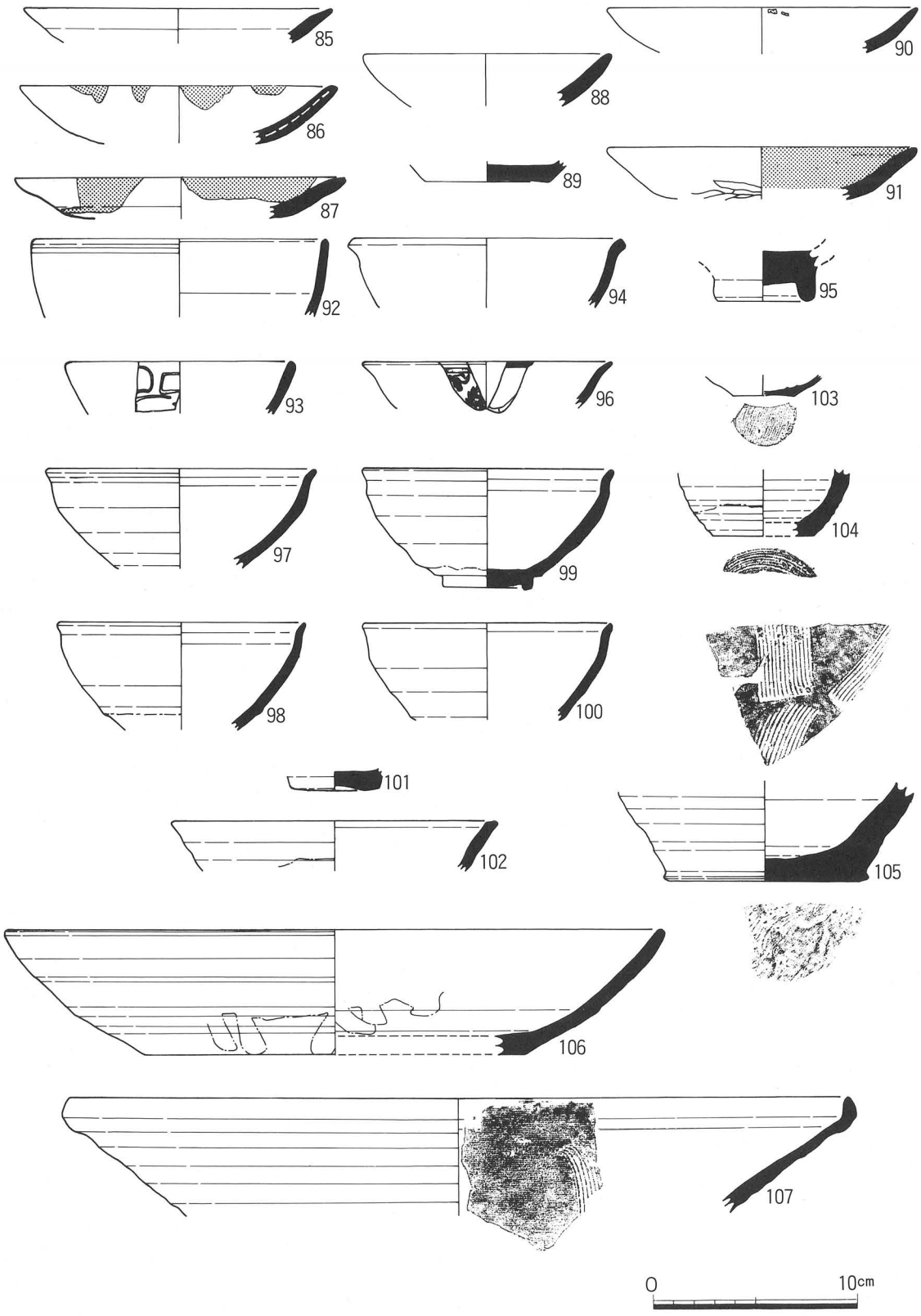
83

84

0　10cm

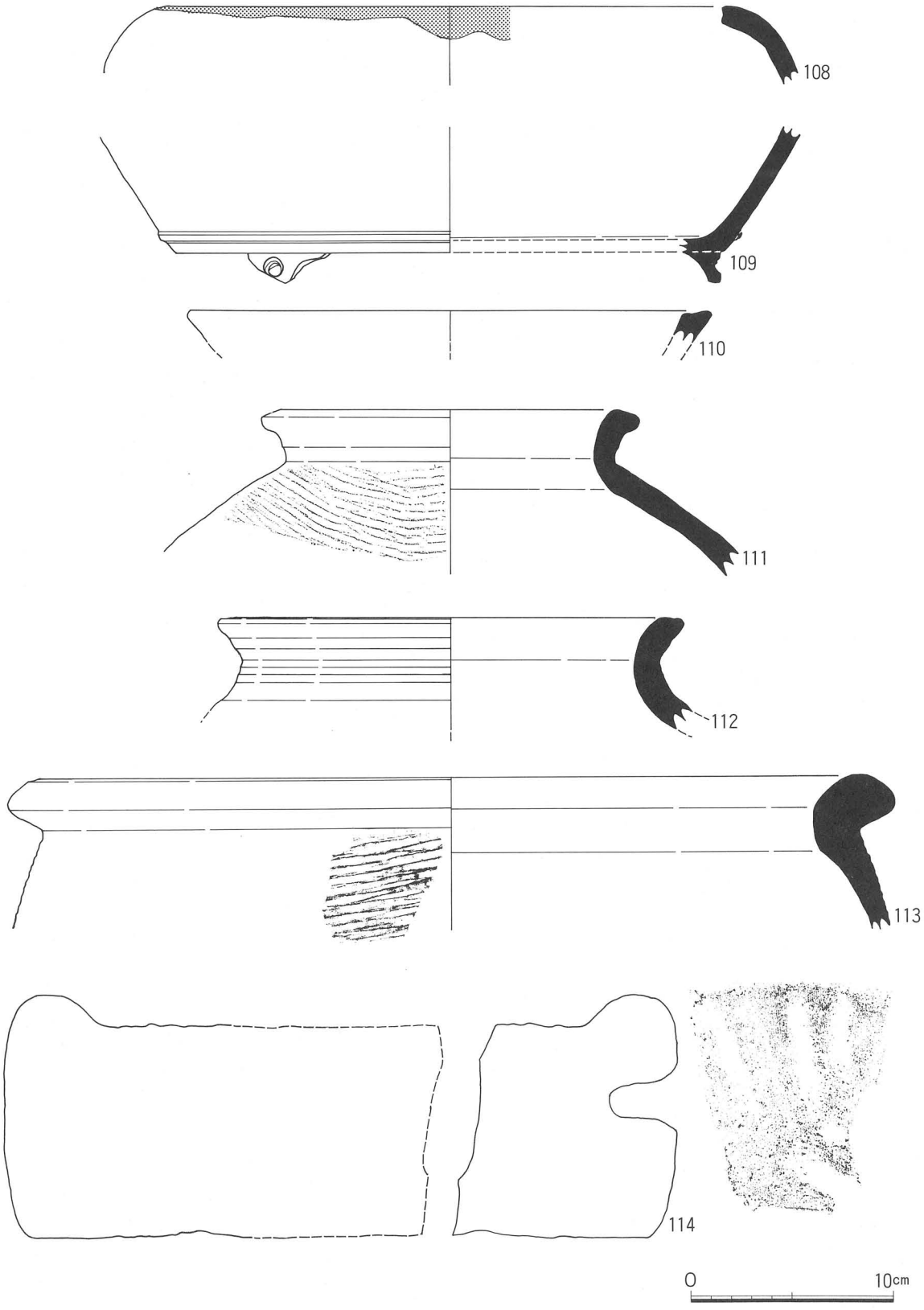
(縮尺1/3)

図版五二　江馬氏下館跡出土遺物実測図(四)

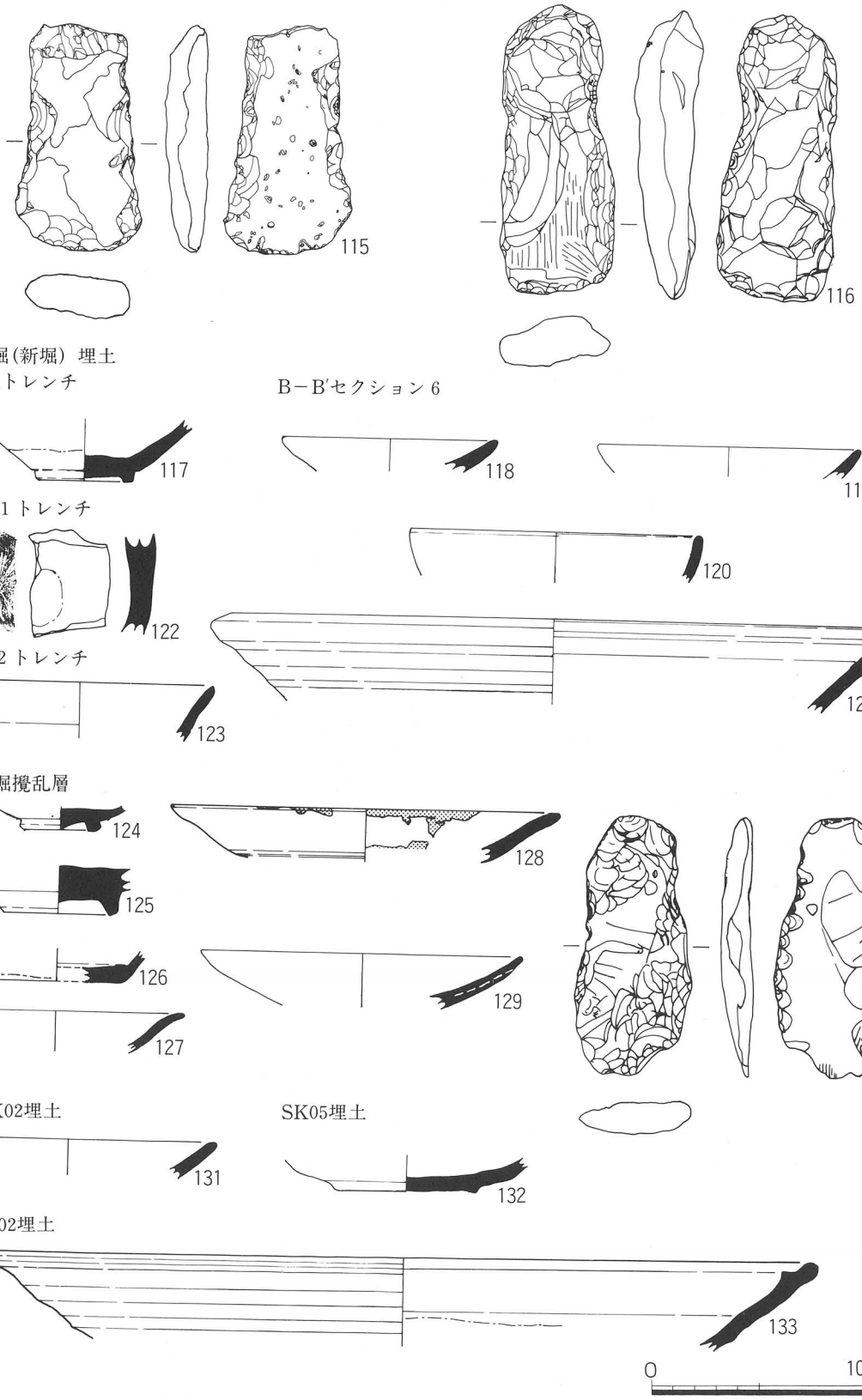


(縮尺1/3)

図版五三　江馬氏下館跡出土遺物実測図（五）



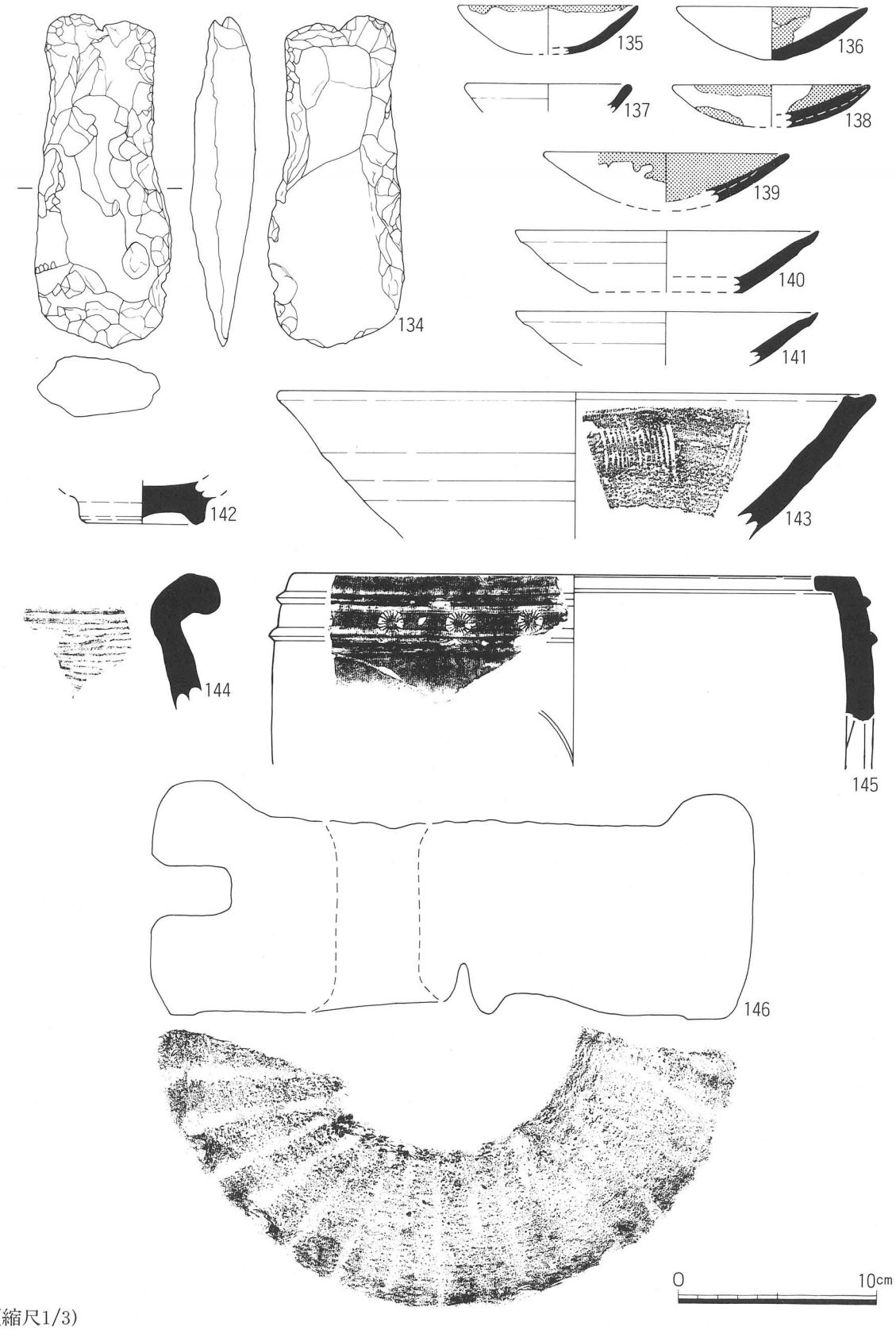
（縮尺1/3）


115
116
南堀(新堀) 埋土
SAトレンチ
B－B′セクション6
117
118
119
SJ1トレンチ
120
122
SJ2トレンチ
121
123
南堀攪乱層
124
128
125
126
129
127
130
SK02埋土
SK05埋土
131
132
SD02埋土
133
0
10cm

(縮尺1/3)

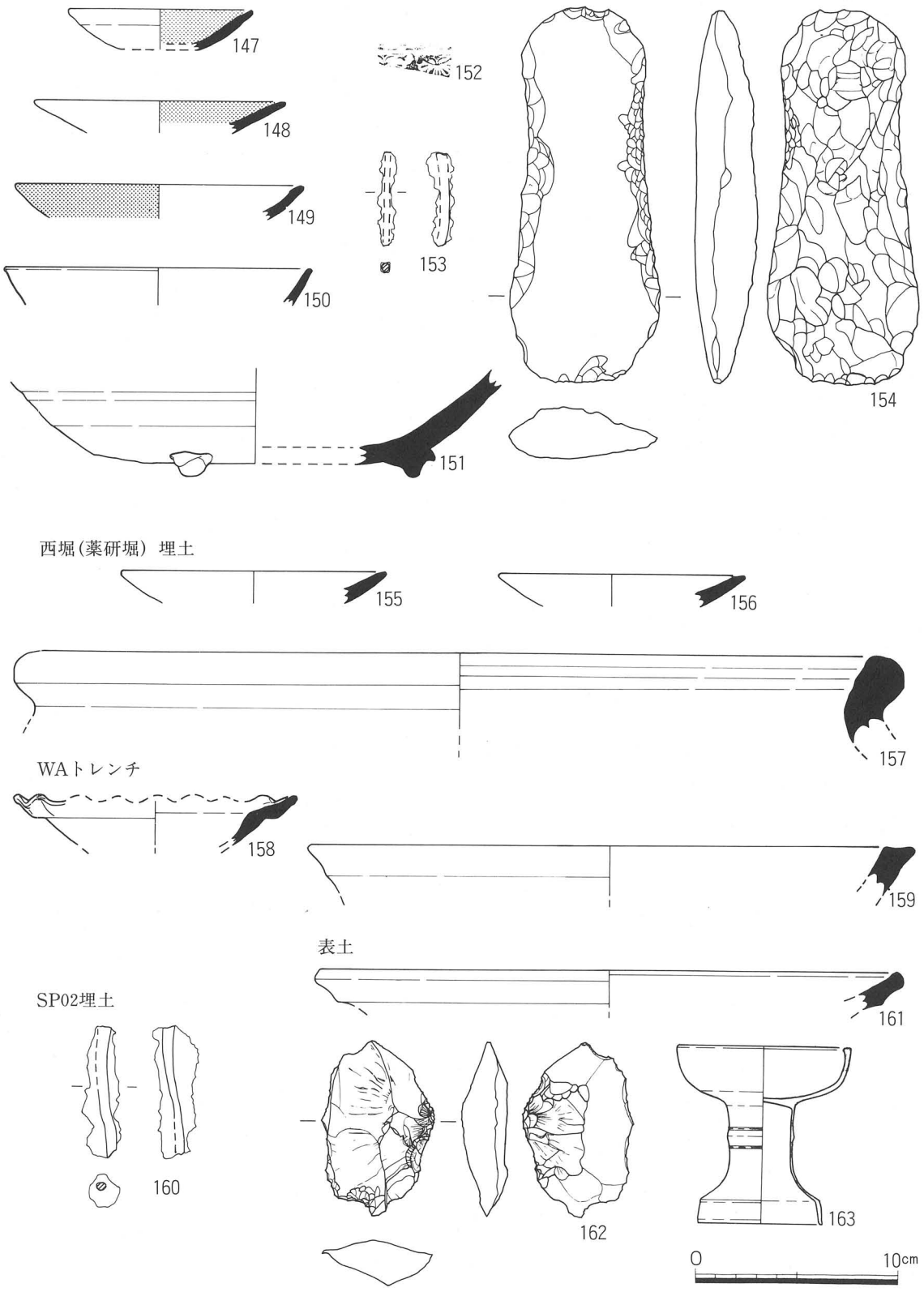
図版五五　江馬氏下館跡出土遺物実測図（七）

表土



（縮尺1/3）

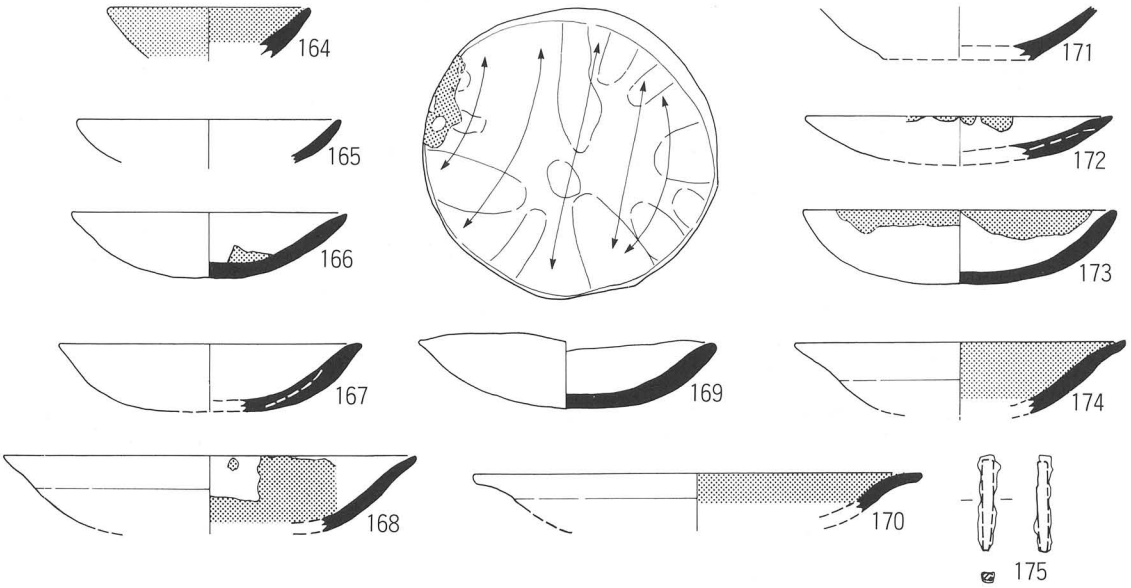
図版五六　江馬氏下館跡出土遺物実測図(八)

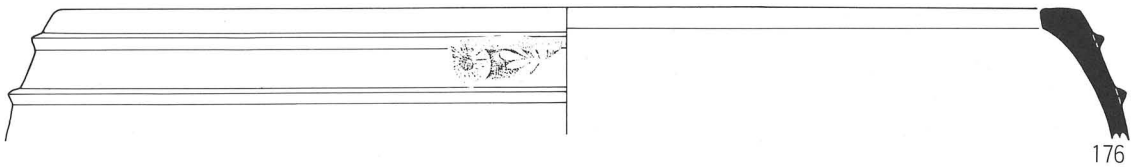


(縮尺1/3)

館内部地区

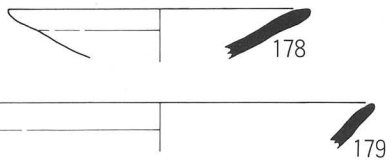
SD01埋土



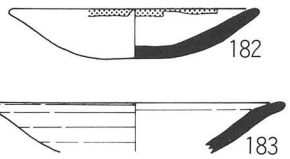


SD02埋土

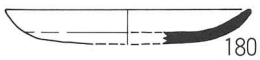
SD06埋土



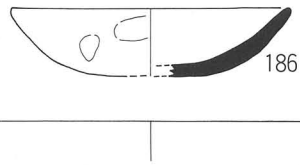
SP07埋土

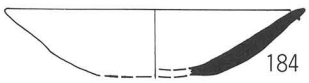


SP01埋土

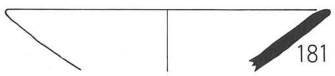


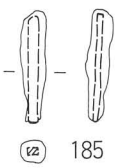
SP08埋土



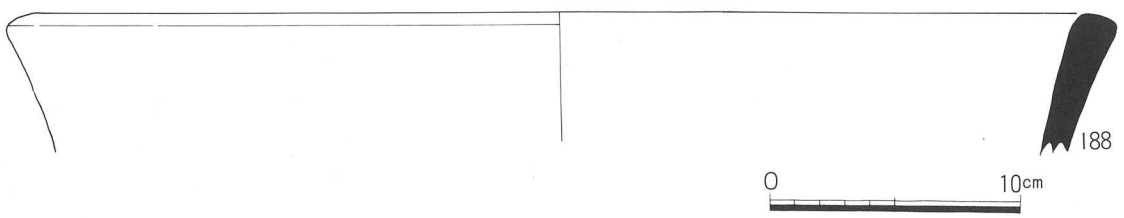


SP02埋土

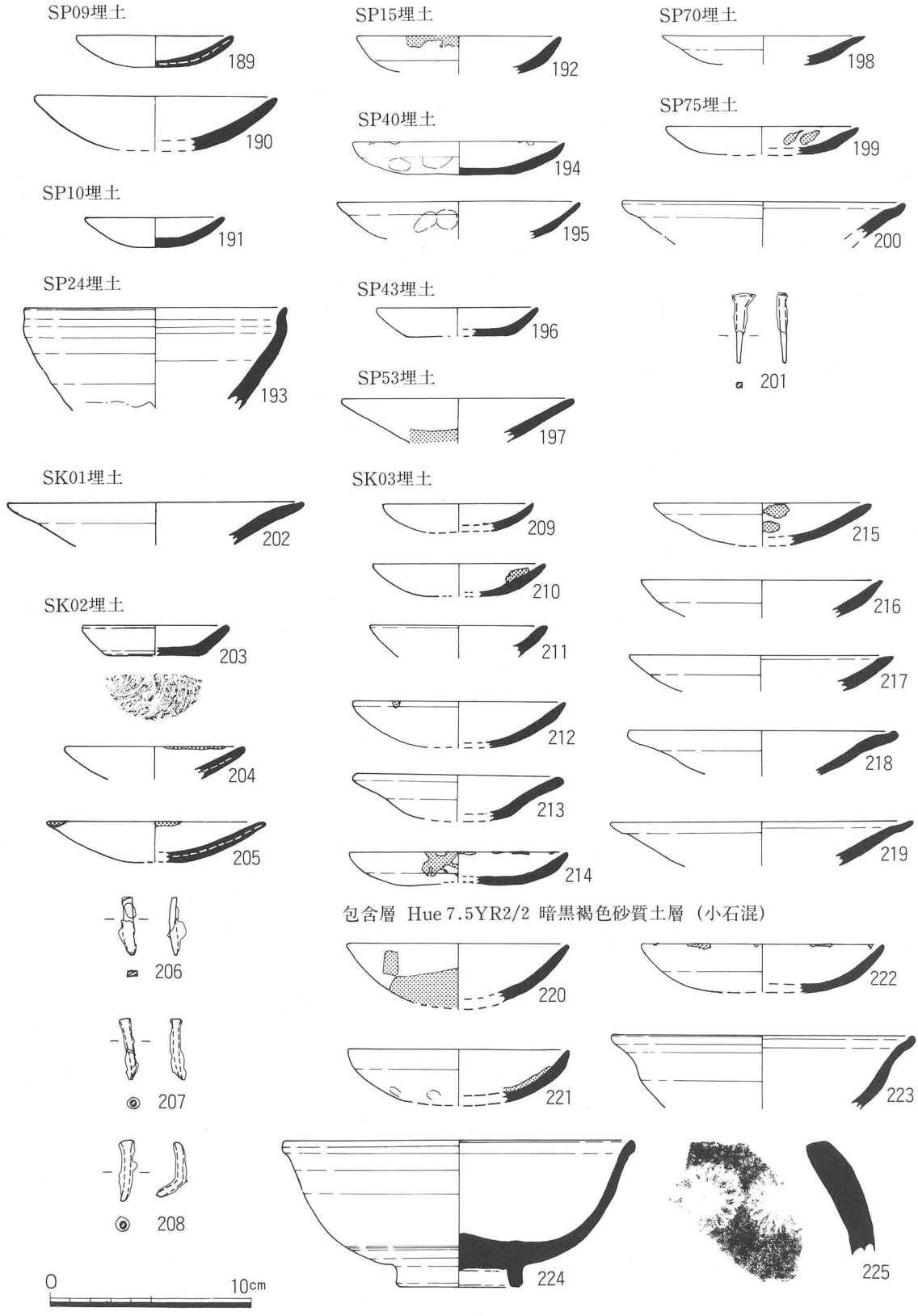




SP64埋土

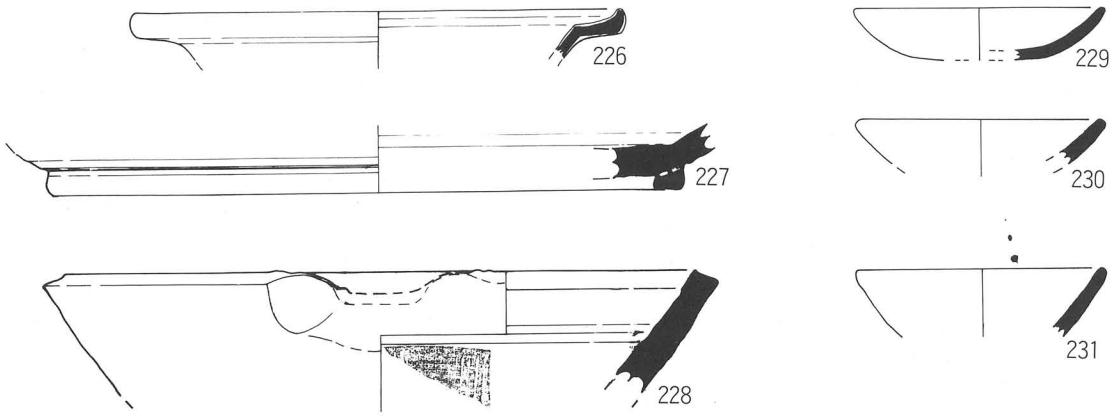


(縮尺1/3)

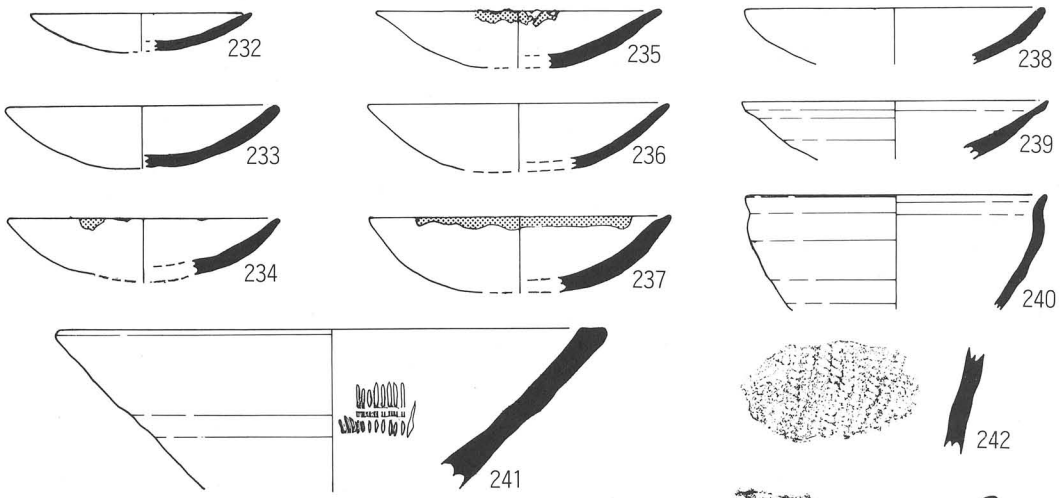

SP09埋土
189
190
SP10埋土
191
SP24埋土
193
SP15埋土
192
SP40埋土
194
195
SP43埋土
196
SP53埋土
197
SP70埋土
198
SP75埋土
199
200
201
SK01埋土
202
SK02埋土
203
204
205
206
207
208
SK03埋土
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
包含層　Hue 7.5YR2/2 暗黒褐色砂質土層（小石混）
220
221
222
223
224
225
0
10cm

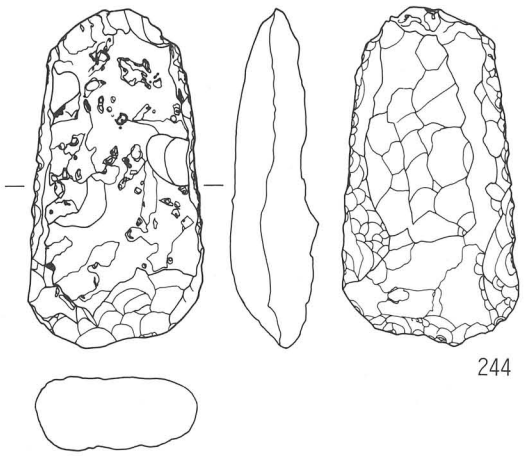
（縮尺1/3）

包含層　Hue 2.5Y3/1 黒褐色砂質土層



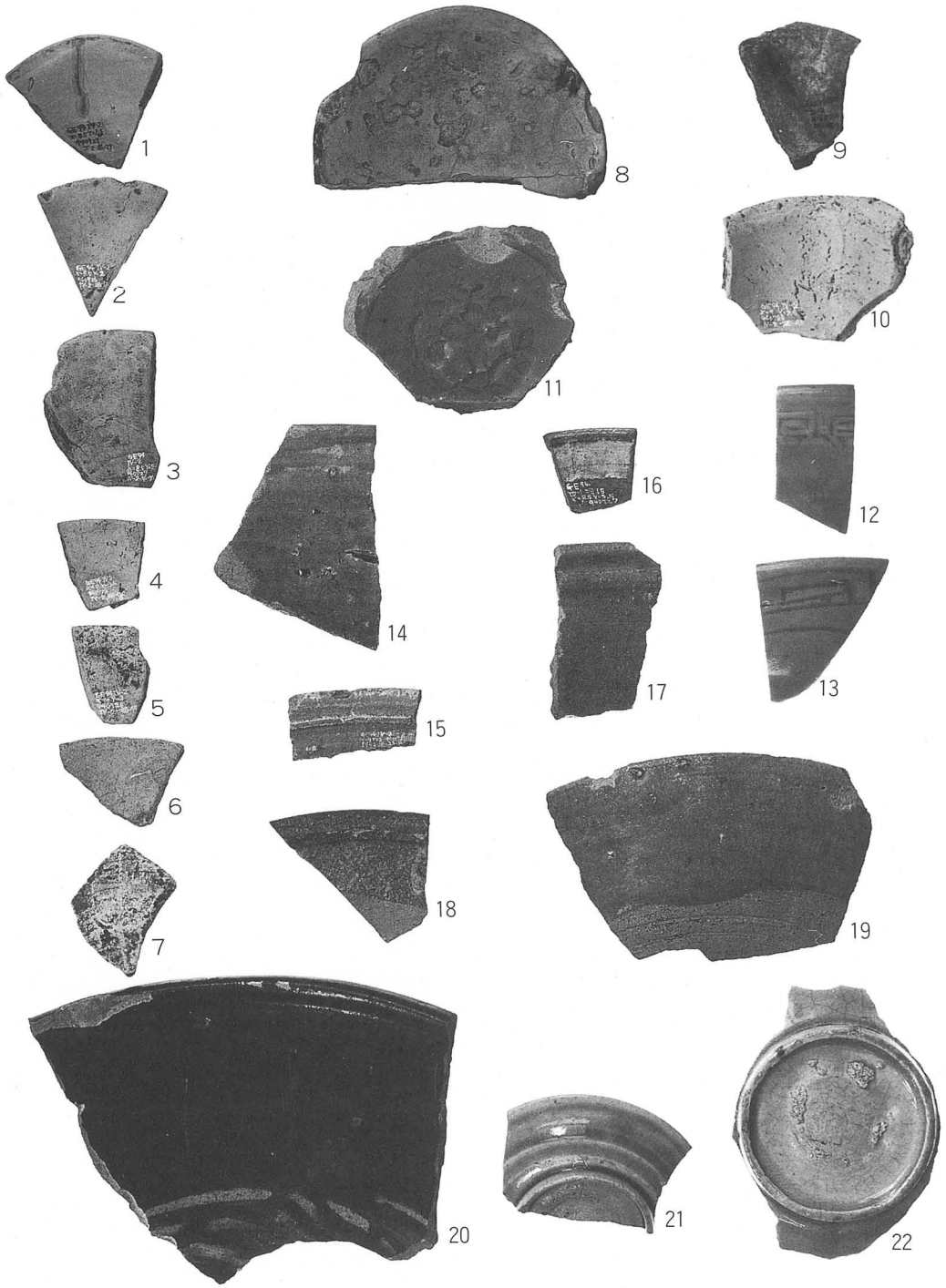
表土



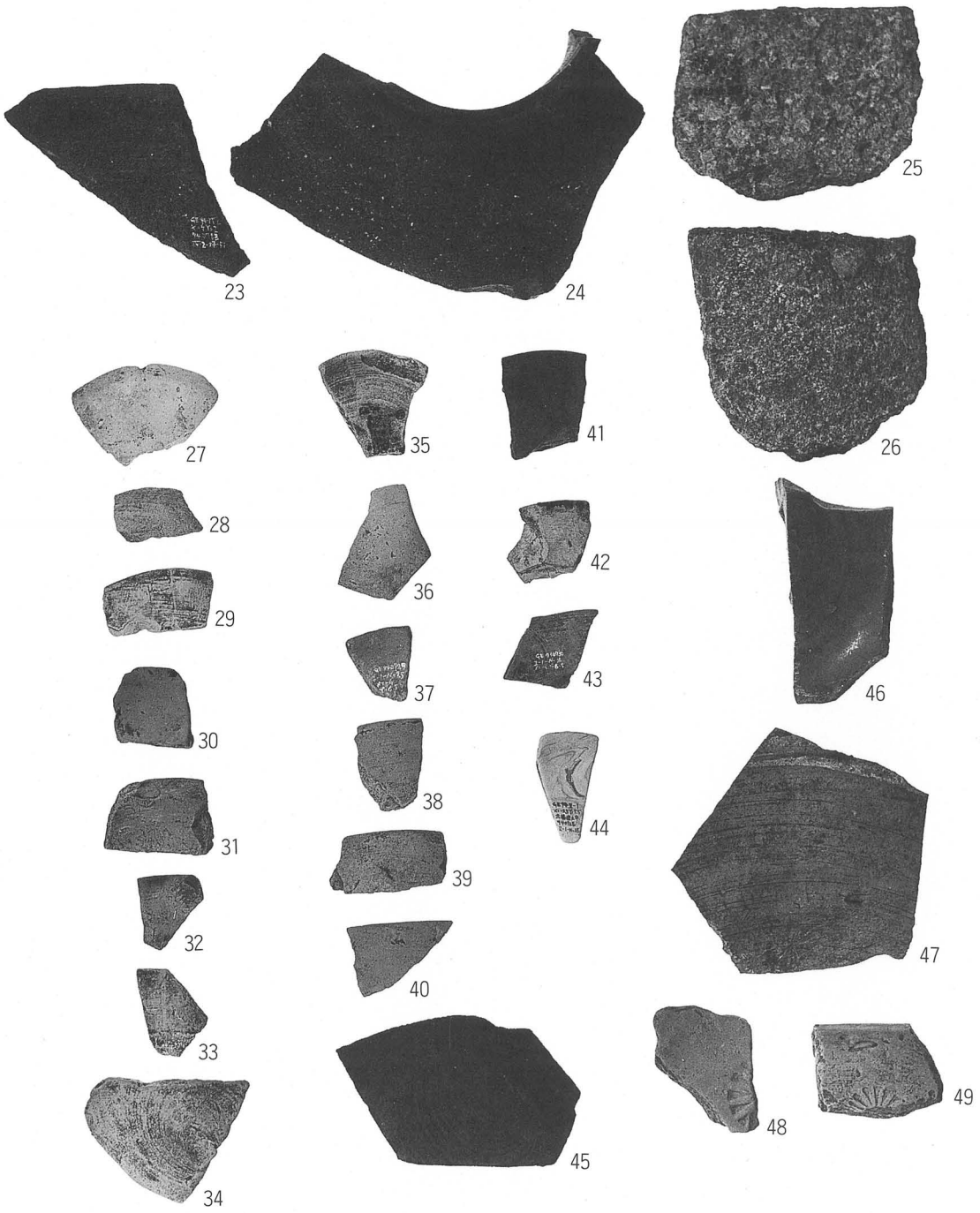


館内部Ａトレンチ

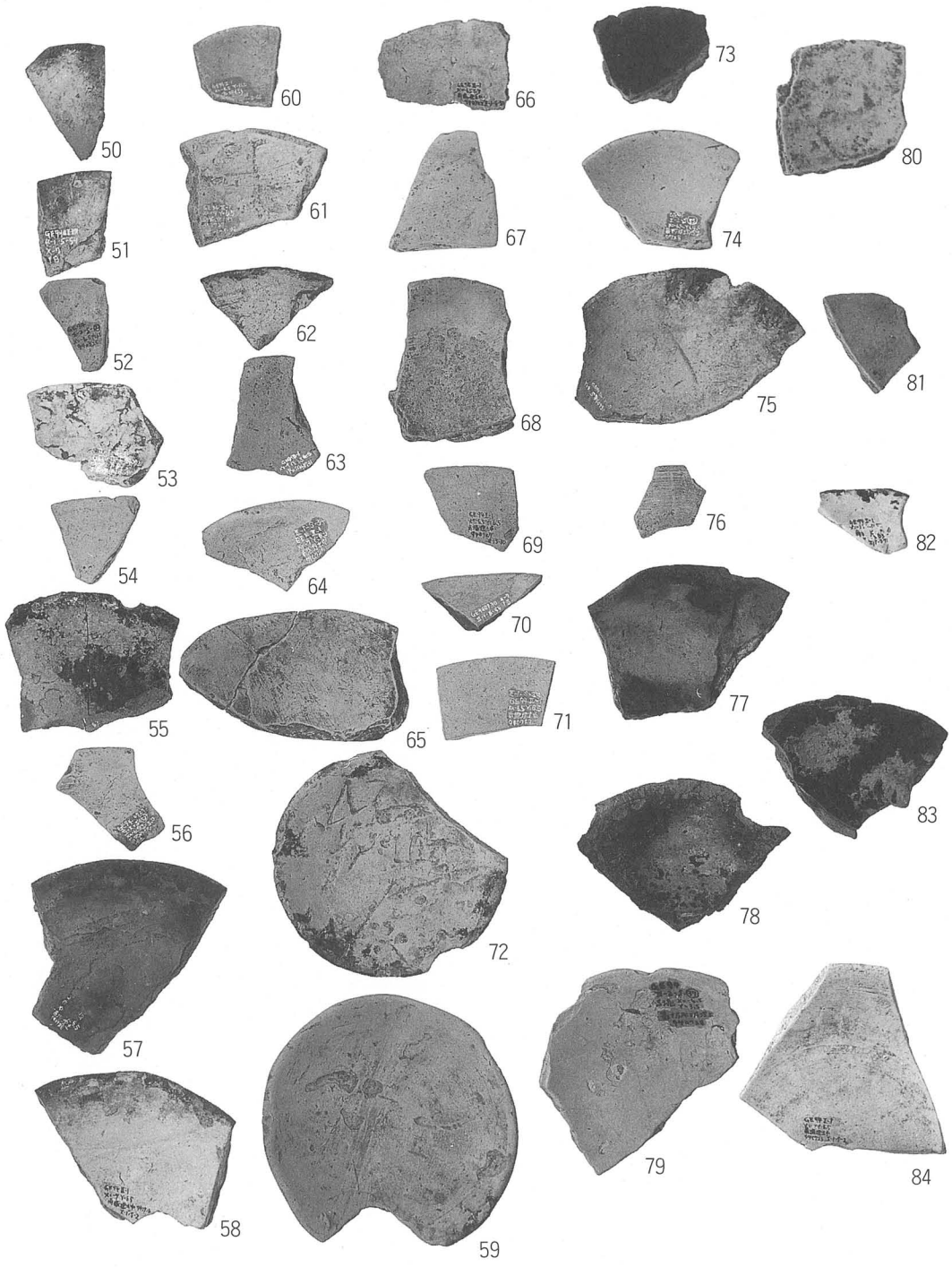
(縮尺1/3)



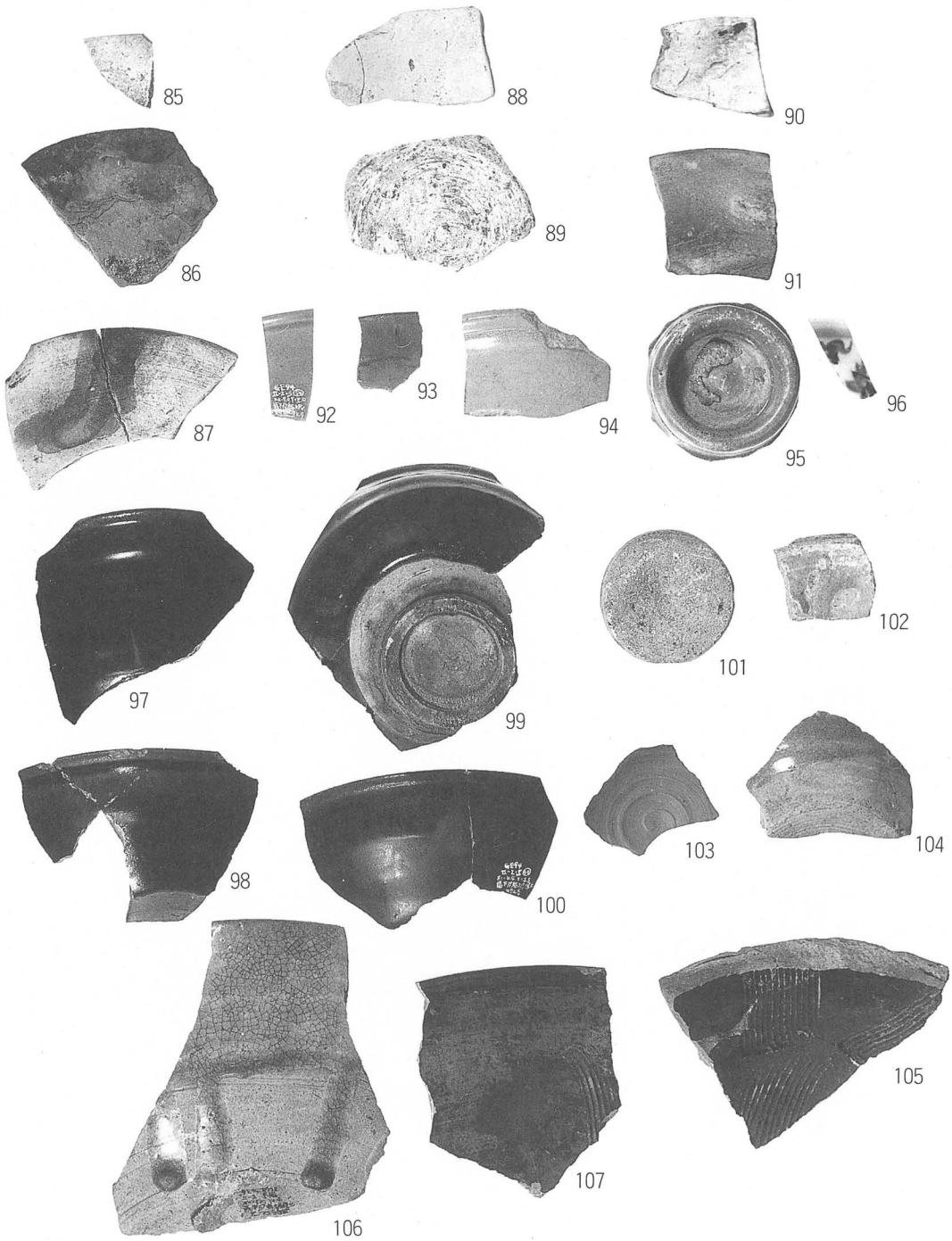
北堀地区：北堀埋土（1～10土師器，11～13青磁，14～22瀬戸美濃）



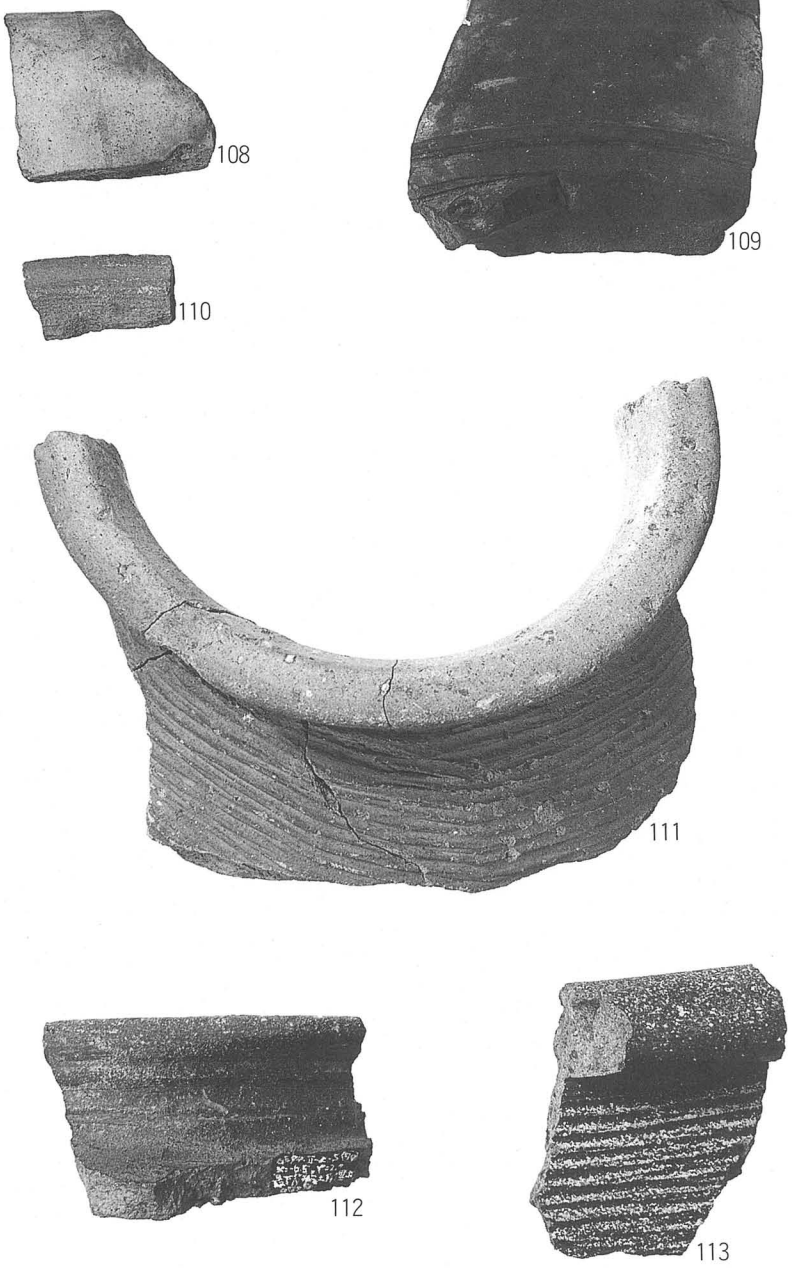
北堀地区：北堀埋土（23・24珠洲，25・26打製石斧）
南堀地区：旧堀埋土（27～44土師器，45須恵器，46青磁，47瀬戸美濃，48・49瓦器）



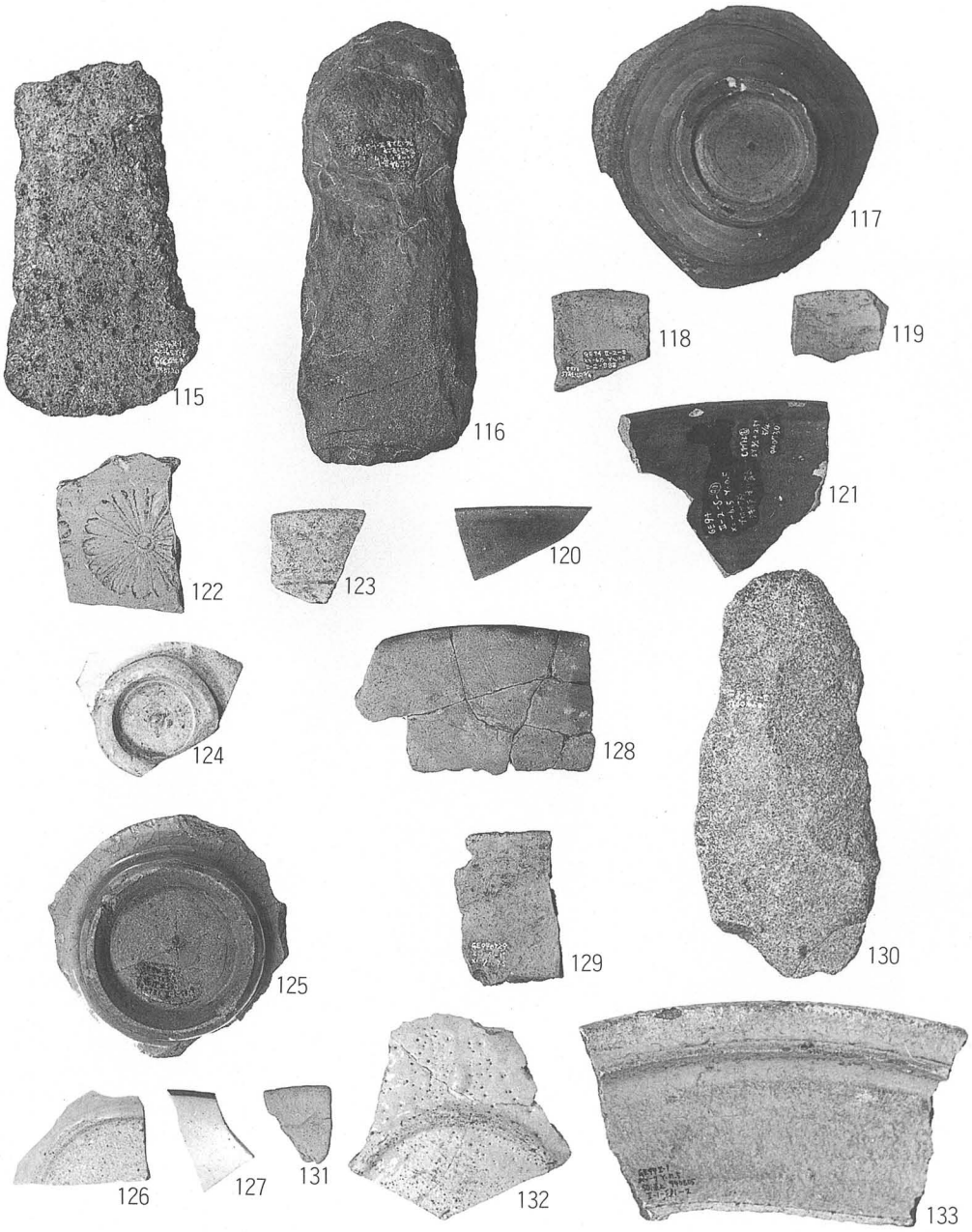
南堀地区：新堀埋土D-D'sec14（50土師器），新堀埋土 最下層粘質土層（51～84土師器）



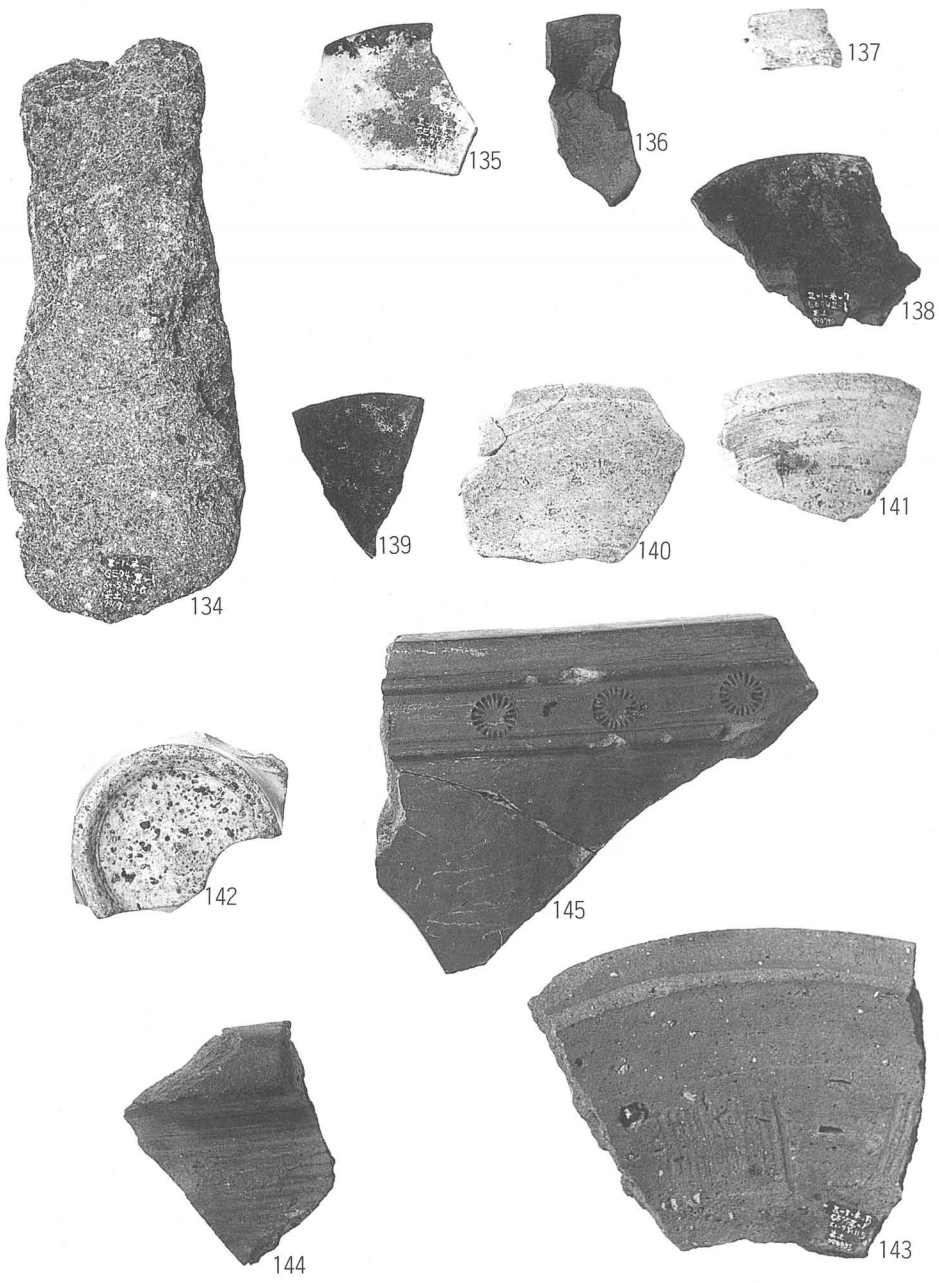
南堀地区：新堀埋土　最下層粘質土層（85～91土師器，92～95青磁，96青花，97～107瀬戸美濃）



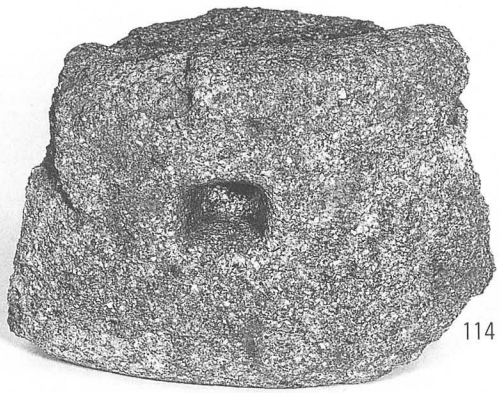
南堀地区：新堀埋土 最下層粘質土層（108・109瓦器，110～113珠洲）



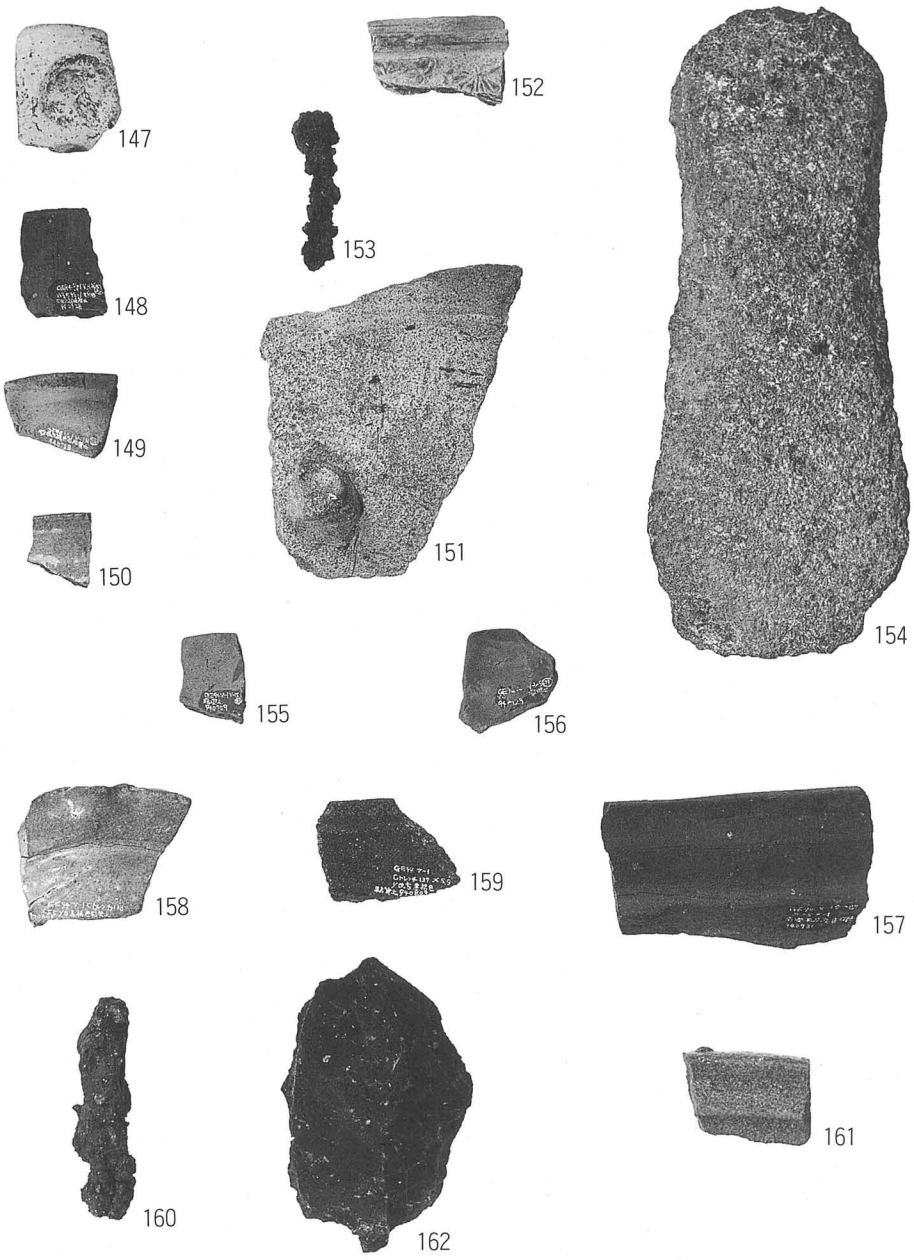
南堀地区：新堀埋土 最下層粘質土層（115・116打製石斧），新堀埋土C-C′sec2（117瀬戸美濃），
新堀埋土B-B′sec6（118・119土師器，120青磁，121瀬戸美濃），
SJ1トレンチ（122瓦器），SJ2トレンチ（123土師器），攪乱層（128・129土師器，124・126・127白磁，125青磁，130打製石斧），SK02埋土（131土師器），SK05埋土（132瀬戸美濃），SD02埋土（133瀬戸美濃）



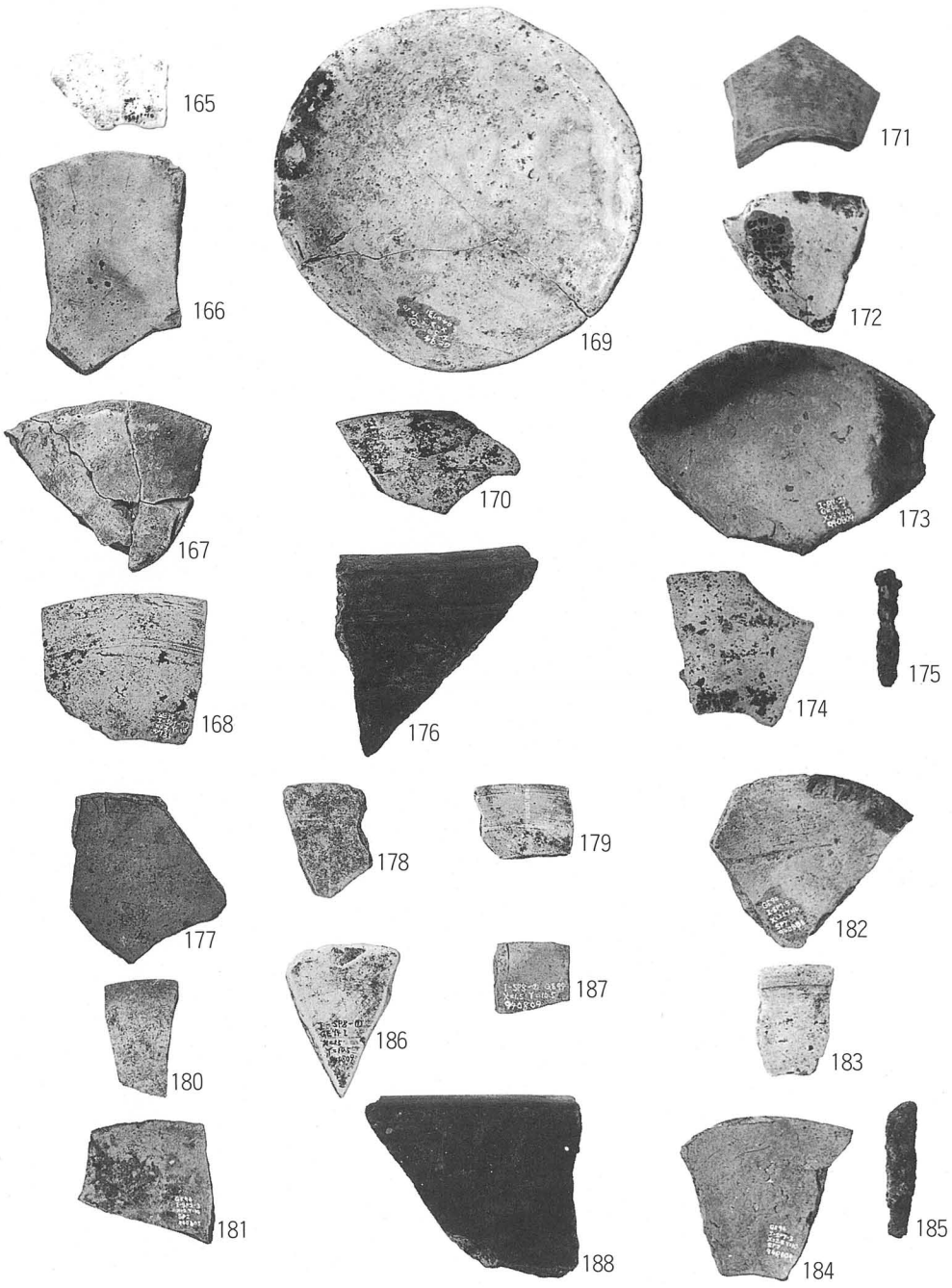
南堀地区：表土（134打製石斧，135～141土師器，142白磁，143・144珠洲，145瓦器）



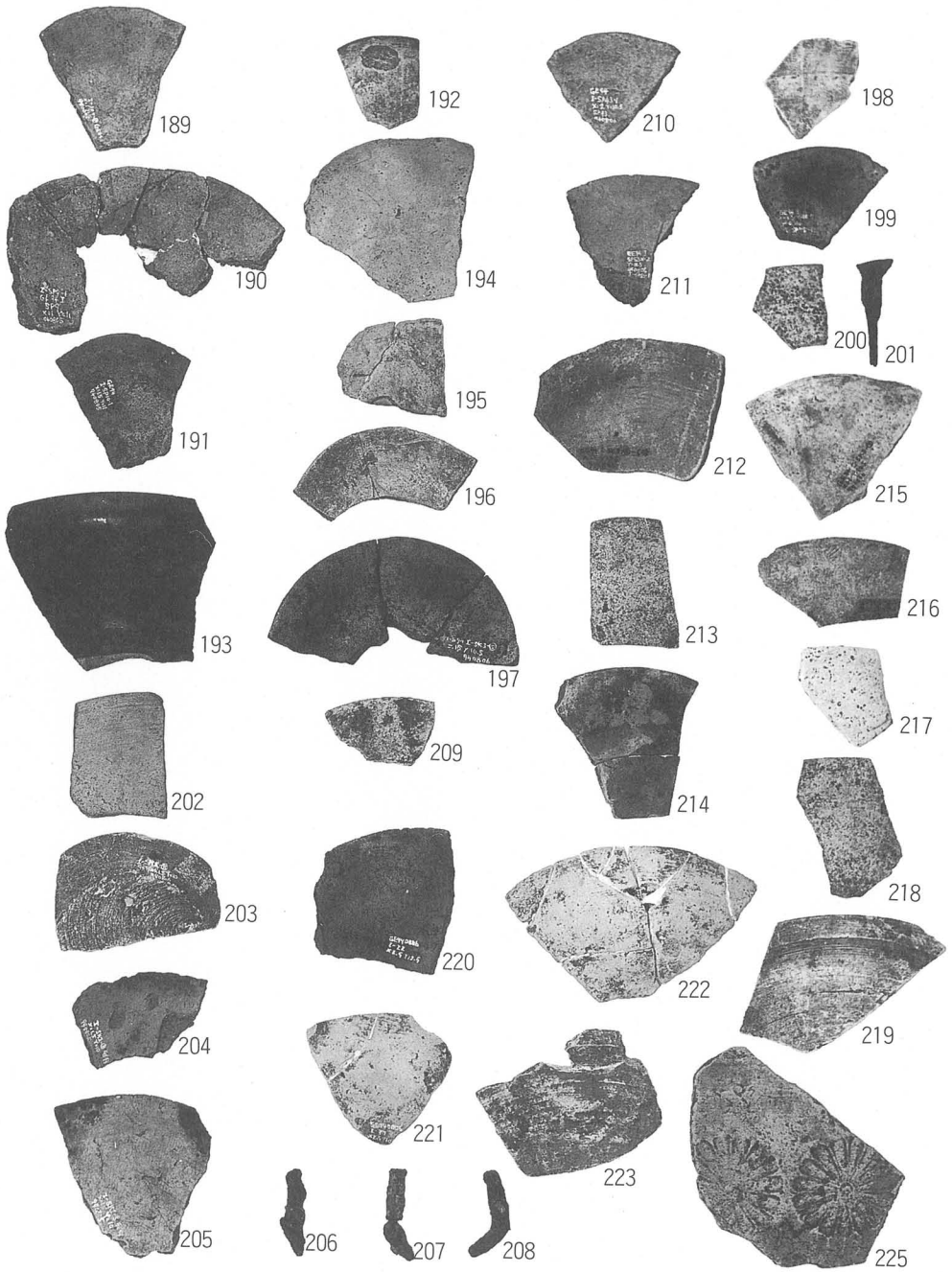
南堀地区：新堀埋土 最下層粘質土層（114石臼），表土（146石臼）



西堀地区：箱堀埋土（147～149土師器，150・151瀬戸美濃，152瓦器，153鉄製品，154打製石斧），
薬研堀埋土（155・156土師器，157珠洲），WAトレンチ（158瀬戸美濃，159珠洲），
SP02埋土（160鉄製品），表土（161瀬戸美濃，162石器）

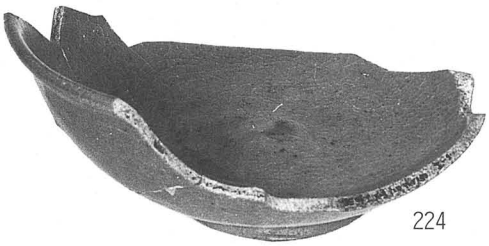


館内部地区：SD01埋土（165～174土師器，175鉄製品，176瓦器），SD02埋土（177土師器），
SD06埋土（178・179土師器），SP01埋土（180土師器），SP02埋土（181土師器），
SP07埋土（182～184土師器，185鉄製品），SP08埋土（186・187土師器），
SP64埋土（188瓦器）



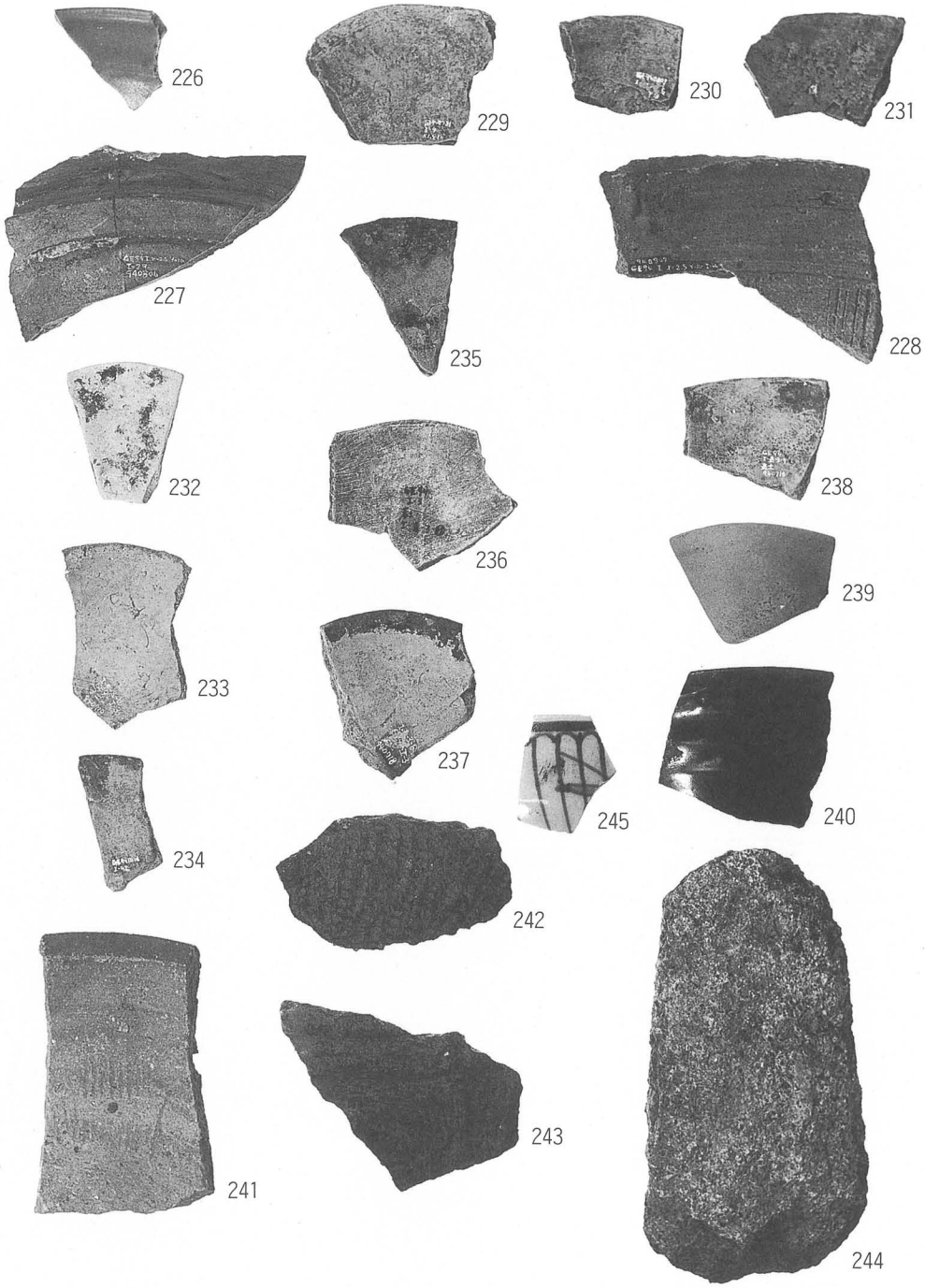
館内部地区：SP09埋土（189・190土師器），SP10埋土（191土師器），SP15埋土（192土師器），
SP24埋土（193瀬戸美濃），SP40埋土（194・195土師器），SP43埋土（196土師器），
SP53埋土（197土師器），SP70埋土（198土師器），SP75（199・200土師器，201鉄製品），
SK01埋土（202土師器），SK02埋土（203～205土師器，206～208鉄製品），
SK03埋土（209～219土師器），暗黒褐色砂質土（220～223土師器，225瓦器）

163



224

西堀地区：表土（163飯食具）
館内部地区：暗黒褐色砂質土（224青磁）



館内部地区：暗黒褐色砂質土（226青磁，227瀬戸美濃，228珠洲）
黒褐色砂質土（229～231土師器）
表土（232～239土師器，240瀬戸美濃，241珠洲，242・243縄紋土器，244打製石斧）
館内部Ａトレンチ：（245伊万里）

1995年３月25日　印刷
1995年３月31日　発行

江馬氏城館跡

―下館跡発掘調査報告書Ⅰ―

編集・発行　神岡町教育委員会
〒506-11 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378 ☎0578(2)1271
富山大学人文学部考古学研究室
〒930 富山県富山市五福3190 ☎0764(41)1271
印　刷　ヨシダ印刷株式会社
〒939 富山県富山市根塚町611 ☎0764(93)3321

江馬氏城館跡

— 下館跡発掘調査報告書Ⅰ —

付図１．江馬氏下館跡遺構平面図

付図一　江馬氏下館跡遺構平面図